鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 61

TAKASHINOZAKA
高篠坂遺跡

NAGAISO
永磯遺跡

東九州自動車道建設（末吉IC～国分IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

2003年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

Ⅶ層　縄文時代早期　深鉢土器

序　文

この報告書は，東九州自動車道（末吉ＩＣ～国分ＩＣ間）の建設に伴って発掘調査された，高篠坂遺跡・永磯遺跡の発掘調査報告書です。

高篠坂遺跡では縄文時代早期の土器が良好な状態で出土し，永磯遺跡では縄文時代早期の落し穴群が多く検出され，当時の狩猟生活の様子がうかがえます。

本書は，南九州に住んだ先人たちの歴史の一端を明らかにする貴重な手がかりを提供するものと考えております。文化財の保護や学術研究のための資料として活用していただければ幸いです。

終わりに，調査にあたりまして御協力いただいた日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所や関係者の方々ならびに地域の皆様に心から感謝申し上げます。

平成15年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　井　上　明　文

例　言

1　この報告書は，東九州自動車道建設（末吉ＩＣ～国分ＩＣ間）に伴う「高篠坂遺跡」，「永磯遺跡」の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所の受託事業として，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

3　本書で用いたレベル数値はすべて海抜高である。

4　本書の遺物番号は遺跡ごとの通し番号とし，挿図・表・図版の番号と一致する。

5　発掘調査については，高篠坂遺跡は財部町教育委員会，永磯遺跡は福山町教育委員会の協力を得た。

6　発掘調査における実測及び写真撮影はそれぞれの調査担当者が行った。

7　各遺跡の執筆分担は次のとおりである。

高篠坂遺跡	第１・２章	
	第５章第２節２－(1) ……	吉井秀一郎
	第３・４章	
	第５章第１節，第２節1，２－(2)	
	第６章 ……	山崎　克之
永磯遺跡	第１章 ……	宇都　俊一
	第５章第１・２節 ……	馬籠　亮道
	第２・３・４章	
	第５章３・４節，第７章 ……	岩戸　孝夫

8　本報告書に使用した出土遺物の写真撮影は鶴田靜彦・福永修一が行った。

9　各遺跡の石器の実測・製図については株式会社九州文化財研究所に委託した。

10　第６章永磯遺跡の自然科学分析については株式会社パリノ・サーヴェイに依頼し，その分析結果報告を掲載した。

11　各遺跡の出土遺物・図面・写真は県立埋蔵文化財センターで保管・活用し，一部は鹿児島県上野原縄文の森展示館に展示してある。

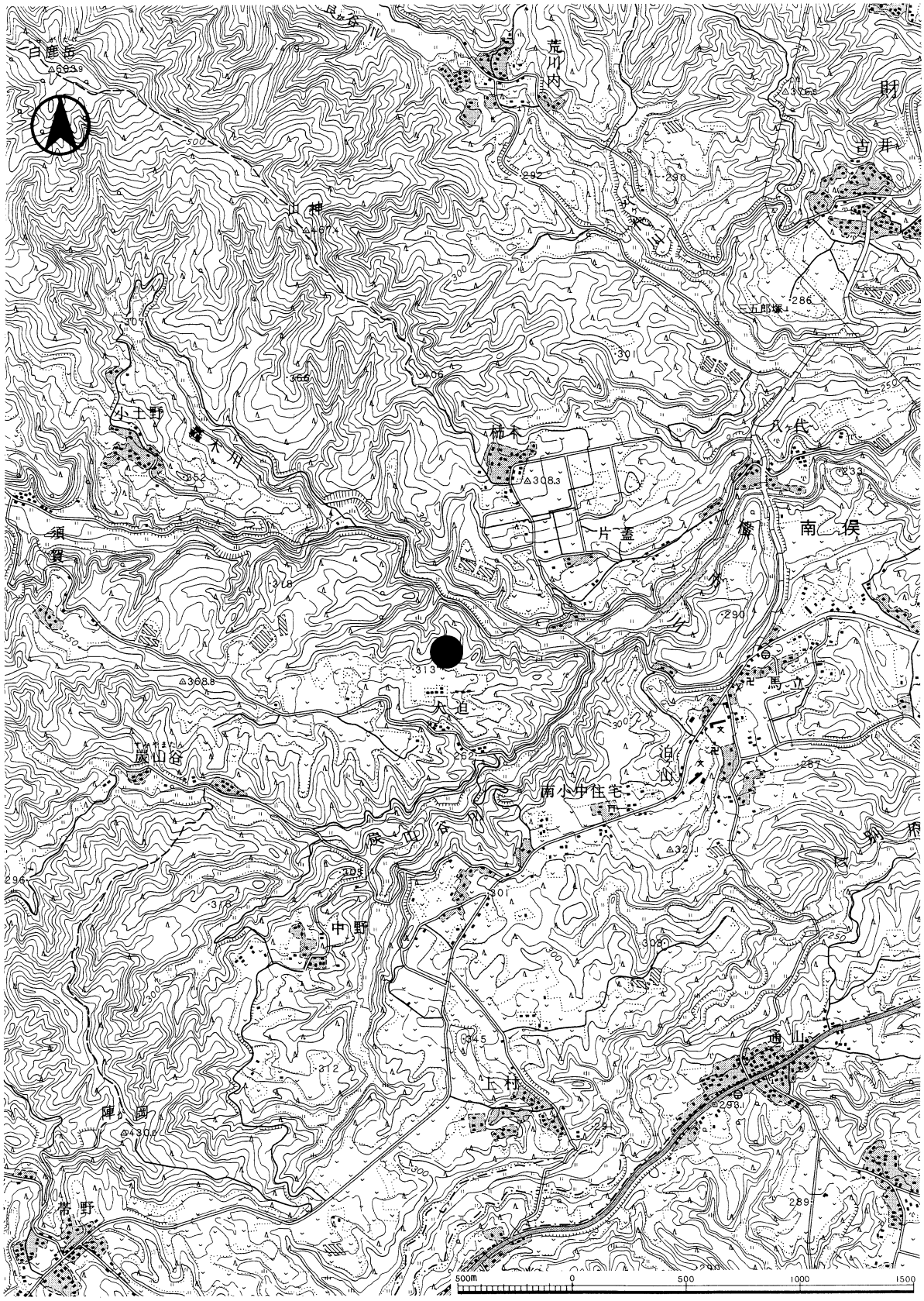
高 篠 坂 遺 跡

報告書抄録

ふりがな	たかしのざかいせき
書名	高篠坂遺跡
副書名	東九州自動車道（末吉ＩＣ～国分ＩＣ間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	Ⅲ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	61
編著者名	吉井秀一郎・山崎克之
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4461　国分市上之段1175番地１　TEL0995－48－5811
発行年月日	2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
たかしのざか 高篠坂	かごしまけんそおぐん 鹿児島県曽於郡 たからべちょう 財部町 みなみまたたかしのざか 南俣高篠坂	46443	65-100-0	31° 41' 52"	130° 55' 49"	確認調査 19960723～ 0823 本調査 19981005～ 1225 19990506～ 0831	5,520㎡	東九州自動車道建設（末吉ＩＣ～国分ＩＣ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高篠坂	包含地	縄文時代 早期	集石	岩本式土器 吉田式土器 石坂式土器 手向山式土器 石鏃 石匙 石斧 石核 敲石 磨石 石皿	


白鹿岳
荒川内
財
吉井
山神
五郎塚
小土野
森木川
柿木
八代
須賀
片壷
南俣
八道
馬立
炭山谷
迫山
南小中住宅
辰山谷
中野
通山
上村
陣岡
常野
500m
0
500
1000
1500

本　文　目　次

報告書抄録
遺跡位置図
目　　次
第１章　調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　調査の経過（日誌抄） …… 2
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　遺跡の層位 …… 11
第４章　確認調査 …… 16
第５章　本調査
　第１節　調査の概要 …… 17
　第２節　縄文時代早期の調査 …… 17
　　１　遺構
　　集石 …… 17
　　２　遺物
　　⑴　土器 …… 31
　　⑵　石器 …… 38
第６章　まとめ …… 47

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡地図 …… 8
第２図　遺跡と周辺の地形図 …… 9
第３図　調査区と周辺の地形図 …… 10
第４図　土層柱状図 …… 11
第５図　基本土層図⑴～⑷ …… 12～15
第６図　確認トレンチ土層断面図，確認トレンチ・下層確認トレンチ位置図 …… 16
第７図　Ⅶ層集石検出位置図，Ⅷ層上面地形図 …… 17
第８図　集石⑴ …… 20
第９図　集石⑵ …… 21
第10図　集石⑶ …… 22
第11図　集石⑷ …… 23

第12図　集石(5) …… 24
第13図　集石(6) …… 25
第14図　集石(7) …… 26
第15図　集石(8) …… 27
第16図　集石(9) …… 28
第17図　集石(10) …… 29
第18図　集石(11) …… 30
第19図　Ⅶ層出土　Ⅰ－Ａ類土器 …… 31
第20図　Ⅶ層出土　Ⅰ－Ｂ類土器 …… 31
第21図　Ⅶ層出土　Ⅱ－Ａ類土器 …… 33
第22図　Ⅶ層出土　Ⅱ－Ｂ類土器 …… 33
第23図　Ⅶ層出土　Ⅱ－Ｃ類土器 …… 34
第24図　Ⅶ層出土　Ⅲ類土器 …… 35
第25図　Ⅶ層出土　Ⅳ類土器 …… 36
第26図　Ⅵa・Ⅶ層出土石器 …… 40
第27図　Ⅵa・Ⅶ層出土石器 …… 41
第28図　Ⅵa・Ⅶ層出土石器 …… 42
第29図　Ⅵa・Ⅶ層出土石器 …… 43
第30図　Ⅵa層遺物出土状況図 …… 45
第31図　Ⅶ層遺物出土状況図 …… 46

表　目　次

表１　周辺遺跡一覧表 …… 6
表２　Ⅶ層検出集石観察表 …… 20
表３　Ⅵa・Ⅶ層出土土器観察表 …… 37
表４　Ⅵa・Ⅶ層出土石器観察表 …… 44
表５　Ⅶ層集石形状分類一覧表 …… 47

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景　調査風景　土層断面 …… 50
図版２　Ⅶ層出土遺物 …… 51
図版３　Ⅶ層出土遺構 …… 52
図版４　Ⅶ層出土遺構 …… 53
図版５　Ⅶ層出土土器 …… 54
図版６　Ⅶ層出土土器 …… 55
図版７　Ⅶ層出土土器 …… 56
図版８　Ⅵa・Ⅶ層出土石器 …… 57
図版９　Ⅵa・Ⅶ層出土石器 …… 58

第１章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道（末吉ＩＣ～国分ＩＣ間）の建設を計画し，事業区域内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育委員会に照会した。

これを受けて，鹿児島県教育委員会は日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所と協議を行い，鹿児島県立埋蔵文化財センターが工事予定区域内を対象にして，埋蔵文化財の分布調査を実施することとなった。分布調査は平成６年10月と平成７年５月に実施した。

この結果，工事予定区域内に13か所の遺物散布地や確認調査の必要な地点の所在することが判明した。そこで，再度協議を行い，平成８年４月から用地買収等の条件が整った区域を対象として順次確認調査を実施することとなった。

高篠坂遺跡は，工事施工区域内の2,600㎡を対象にして平成８年７月23日から８月22日にかけて確認調査を実施した。

確認調査の結果，本遺跡では第Ⅶ層（明茶褐色土層）を中心に縄文時代早期の遺物包含層が存在することが判明した。この結果をもとに，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所と鹿児島県教育委員会は協議を行い緊急発掘調査が必要な5,520㎡について，鹿児島県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成10年10月５日から平成10年12月25日までの間と平成11年５月６日から平成11年８月31日までの間に行った。

報告書作成は，平成14年に整理作業を行い，平成15年に刊行することとし，鹿児島県立埋蔵文化財センターで，平成14年４月１日から３月31日まで実施した。

第２節　調査の組織

平成10年度調査

事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

調査主体者　鹿児島県教育委員会

企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	吉永　和人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	尾﨑　　進
〃		主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
〃		課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
〃		主任文化財主事兼第二調査係長	立神　次郎
調査担当者	〃	文化財研究員	有馬　孝一
	〃	文化財研究員	西村　喜一
事務担当者	〃	主　　査	前屋敷裕徳
	〃	主　　査	政倉　孝弘
	〃	主　　事	溜池　佳子

平成11年度調査

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	吉永　和人

事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
調査主体者　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	吉永　和人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木　友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	立神　次郎
	〃	主任文化財主事	長野　眞一
調査担当者	〃	文化財主事	濵﨑　一富
	〃	文化財研究員	今村・敏照
事務担当者	〃	総務係長	有村　貢
	〃	主　　事	溜池　佳子

平成14年度報告書作成
事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
作成主体者　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	井上　明文
作成企画者	〃	次長兼総務課長	田中　文雄
	〃	調査課長	新東　晃一
	〃	課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事	長野　眞一
作成担当者	〃	文化財主事	吉井秀一郎
	〃	文化財研究員	山崎　克之
事務担当者	〃	総務係長	前田　昭信
	〃	主　　査	栗山　和己

第３節　調査の経過（日誌抄）

平成８年７月～８月

１トレンチから４トレンチ周辺の地形を実測。２トレンチと３トレンチのⅣ～Ⅷ層の遺物出土状況を実測。２トレンチのⅥa～Ⅷ層の遺物出土状況を実測。１トレンチの西側断面を実測。４トレンチの東側断面を実測。

平成10年10月

Ｋ－６区の北側土層断面を実測。Ｉ－６・７区の北側土層断面を実測。Ｉ・Ｊ－４区のⅧ層上面のコンタ図を作成し，Ⅻ層の遺物出土状況を実測。Ｉ・Ｊ－５・６区のⅧ層上面のコンタ図を作成。Ｉ・Ｊ－４区のⅧ層上面コンタ及び，調査範囲・先行トレンチ位置図を作成。

平成10年11月

Ｇ－７～９区のトレンチ北側土層断面図を作成。Ｉ－３・４区の北側土層断面図の作成。Ｉ－５区の北側土層断面図を作成。Ｉ－５，６区の北側土層断面図を作成。Ｉ・Ｊ－５区の西側土層断面図の作成。Ｇ・Ｈ－５～７区，Ⅷ層上面のコンタ図を作成。Ｈ－５・６・Ｇ－５・６区のⅧ層上面のコンタ図を作成。Ｇ－５区の西側土層断面図を作成。Ｈ－５区の西側土層断面図を作成。Ｇ・Ｈ－５・６区のⅦ層の遺物出土状況を実測。Ｇ－３・４区の北側土層断面図を作成。Ｇ－５区の北側土層断面図を作成。Ｇ－５・６区の北側土層断面図を作成。Ｇ－６・７区の北側土層断面図を作成。

平成10年12月

Ｇ・Ｈ－３・４区のⅧ層上面のコンタ図を作成。Ｇ・Ｈ－４区のⅦ層の遺物出土状況を実測。Ｇ－７区のⅦ層の３号集石を実測。Ｇ－５・６区のⅦ層の集石を実測。Ｇ－４区のⅦ層上面の２号集石を実測。Ｇ・Ｈ－５～７区の先行トレンチ内の遺物出土状況と，集石を実測。Ｇ・Ｈ－４区のⅩⅥ層の遺物出土状況を実測。

平成11年５月

Ｅ・Ｆ－５・６区のⅥ・Ⅶ層の遺物出土状況を実測。Ｅ－５区の６号集石を実測。Ｅ・Ｆ－５・６区の礫分布状況と，６号集石を実測。

平成11年６月

Ｅ・Ｆ－５・６区のⅧ層上面の20㎝コンタ図を作成。Ｅ・Ｆ－４区のⅥ層の礫と，Ⅶ層の遺物を実測。Ｄ－４区の東側土層断面図を作成。Ｄ・Ｅ・Ｆ－４区の20㎝コンタ図を作成し，Ⅶ層の礫を実測。Ｄ・Ｅ・Ｆ－４・５区の５号集石位置図と，20㎝コンタ図を作成し，遺物・礫の出土状況を実測。

平成11年７月

Ｅ・Ｆ－５・６区，Ｃ・Ｄ－５区のⅥ～Ⅶ層の遺物と，礫の出土状況を実測。Ｅ・Ｆ－６区，遺物の出土状況を実測。Ｃ・Ｄ－５・６区のⅥ～Ⅶ層の遺物及び礫の出土状況を実測。Ｃ・Ｄ・Ｅ－６・７区のⅥ～Ⅶ層の遺物及び礫の出土状況を実測。Ｃ・Ｄ－７・８区のⅧ層上面の20㎝コンタ図を作成。Ｃ・Ｄ－７・８区の遺物と，礫の出土状況を実測。14・15号集石の位置図を作成。Ｃ－８区の15号集石を実測。Ｄ－７区の14号集石の実測図を作成。Ｄ－６区の13号集石を実測。Ｅ・Ｆ－７・８区のⅥ～Ⅶ層の遺物と，礫の出土状況を実測。Ｅ・Ｆ－７・８区の20㎝コンタ図を作成。Ｃ・Ｄ－６区，Ｅ－６区の礫の出土状況を実測。Ｃ・Ｄ－６区の遺物の出土状況を実測。

平成11年８月

Ｃ－６区のⅦ層の16号集石を実測。Ｃ－６区のⅧ層上面の20㎝コンタ図，12・16号集石の位置図の作成と，礫の出土状況を実測。Ｅ・Ｆ－７・８区の８号集石と，Ⅷ層上面の礫を実測。Ｅ・Ｆ－５・６区とⅨ～ⅩⅥ層の確認トレンチ位置図を作成。Ｄ－９・10区の南壁土層断面を実測。Ｅ・Ｆ・Ｇ－４～７区の礫の出土状況を実測。Ｃ～Ｅ－９・10区の遺物，礫出土状況の実測図を作成し，17～21号集石の実測図と位置図を作成。Ｄ－10区の21号集石を実測。Ｄ－９・10区の19号集石を実測。Ｄ－９・10区の20号集石を実測。Ｅ・Ｆ－７・８区の８号集石を実測。Ｄ・Ｅ－９区の18号集石を実測。撤収し調査を終了。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

財部町は，鹿児島県北東部の曽於郡の北端にあり，宮崎県との県境に位置している。北と東は宮崎県都城市に，西は姶良郡霧島町・国分市・姶良郡福山町，南は曽於郡末吉町に面している。地勢的には鹿児島県と宮崎県に広がる霧島連山と，宮崎県日南地方の鰐塚山地に囲まれた都城盆地の西部に属している。

町の西部には，瓶臺山，白鹿岳，陣ヶ岡等の山地が南北に連なり，中央部や東部の台地は火山灰台地である。全体的に都城盆地中心部の東方へ向かい傾斜しており，それぞれの台地間を横市川や溝ノ口川が沖積低地を形成しつつ，都城盆地へ流れ込み，大淀川と合流する。

霧島火山群の東南麓に位置する高篠坂遺跡は，曽於郡財部町南俣字高篠坂の標高約310ｍの北に延びる幅約70ｍの台地上に立地している。東西は深い谷になっており，北と東の約１㎞の地点に小さな川が流れている。現況は山林である。

財部町には，町のやや北部にＪＲ九州日豊本線が通り，大隅大川原駅・北俣駅・財部駅の三駅がある。この鉄道とほぼ並行して，県道２号都城・隼人線が通り，南部で末吉町を通る国道10号線に接している。このように，国分市や霧島方面から都城方面へ向かう交通の要所となっている。

また，町の中心部から都城市街地まで約８㎞と非常に近い位置にある関係上，経済・文化・社会的な面において都城市の影響を受けている。

第２節　歴史的環境

「財部」の名の起源については，日光神社に関連する古代「財日奉部（たからのひまつりべ）」によるとする説がある。財日奉部は大和政権の勢力がおよぶ数箇所に，日祀りに適した処を選び，太陽信仰に基づく「日祀り」の祭祀や，日迎えを行っていた。財日奉部の「財部」に由来する地名は，国内に幾つかあったが，現在まで残っているのは財部だけで，最も古い地名の一つである。「日祀り」は，日光神社や白鹿岳辺りで行われたのではないかと考えられ，現在も日光神社に引き継がれている。

明治22年に町村制が実施され，従来の財部郷を財部村と改称し，従来の三つの村，南俣・北俣・下財部の名称は改められ大字となった。大正15年の町制施行にともない財部町となり，現在にいたっている。

財部町内では，昭和58年に鹿児島県教育委員会が実施した大隅地区埋蔵文化財分布調査により，多くの遺跡が確認された。その後も農政関係の分布調査などにより遺跡の数は増加しつつある。

昭和61年には長十塚遺跡（財部城ヶ尾遺跡）と石仏段遺跡の確認調査が行われ，縄文時代晩期や古代の遺物が出土している。長十塚遺跡は東九州自動車道建設にともなう調査も行われ，同様の時期の遺物・遺構が確認された。昭和62年には横尾遺跡・横尾山遺跡・中崎上遺跡の確認調査が行われている。横尾遺跡からは縄文時代早期の土器や石鏃等が出土し，中崎上遺跡からは縄文時代早期の押型文土器・撚糸文土器・完形に復元できる塞ノ神式土器，前期の曽畑式土器，中期の阿高式系土器，後期の岩崎上層式系土器等が出土している。昭和63年には中崎上遺跡の一部の全面調査が行われ，縄文時代早期の貝殻文系円筒土器の中でも西之表市の下剥峯遺跡出土のものに類似する土器が出土している。平成５年には宮原遺跡・霧島迫Ａ・Ｂ遺跡の確認調査が実施され，縄文時代早期や晩期の遺物が出土している。

平成９年には西栗栖遺跡の確認調査が実施され，縄文時代早期や後・晩期の遺物が出土している。平成12年には田平下遺跡の発掘調査が行われている。また，東九州自動車道建設にともなう発掘調査は平成８年から12年にかけて実施され，旧石器時代から古代までの各時期の遺物・遺構が確認されている。

《参考文献》

1　財部町教育委員会『財部町郷土史』

2　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書㊱『九日田遺跡』2002

3　財部町教育委員会『長十塚遺跡・石仏段遺跡』財部町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)　1988

4　財部町教育委員会『横尾遺跡・横尾山遺跡・中崎上遺跡』財部町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)　1988

5　財部町教育委員会『横尾遺跡』財部町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)　1989

6　財部町教育委員会『宮原遺跡・霧島迫Ａ・Ｂ遺跡』財部町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)　1994

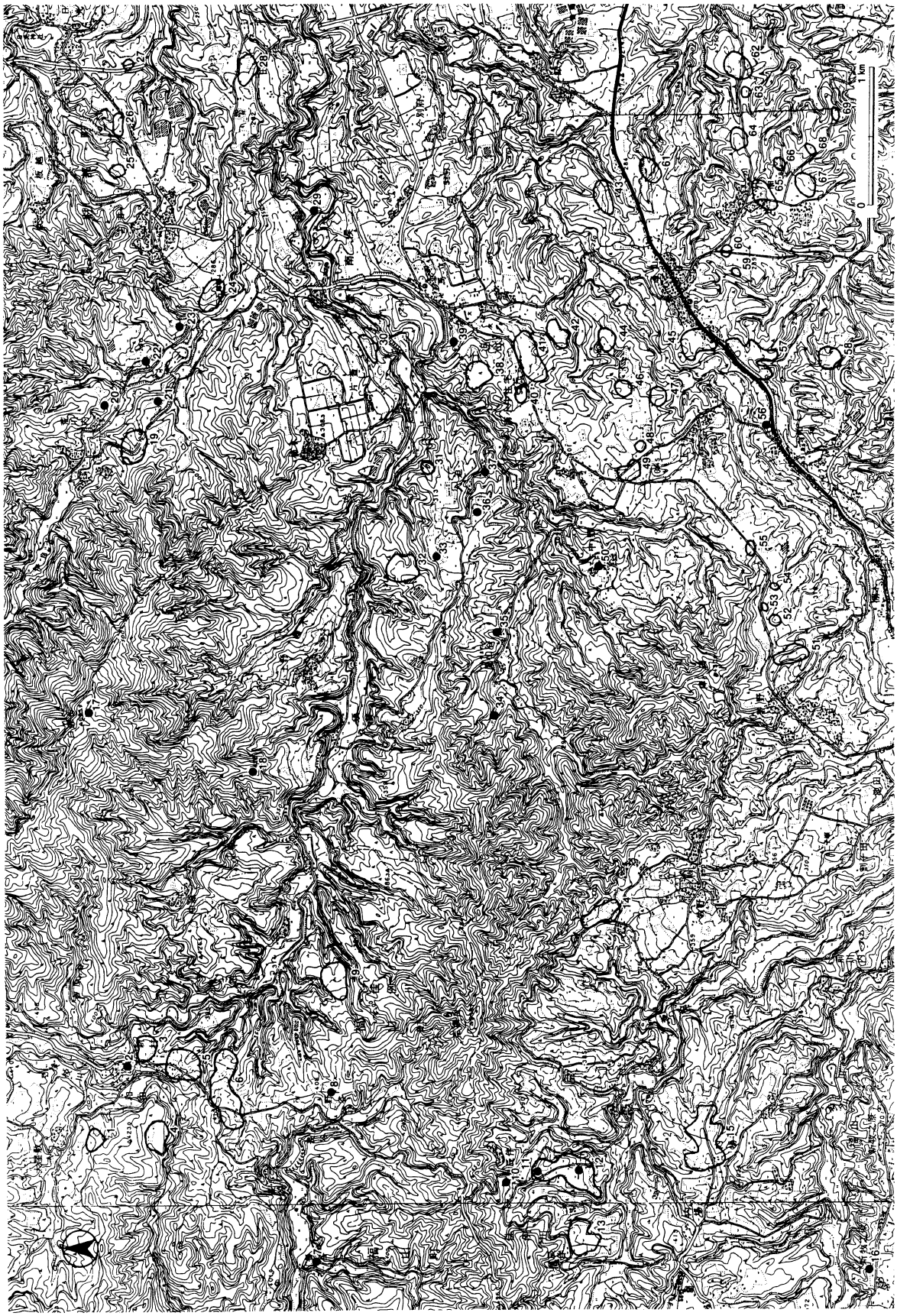
7　財部町教育委員会『西栗須遺跡』財部町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)　1998

表１　周辺遺跡一覧表(1)

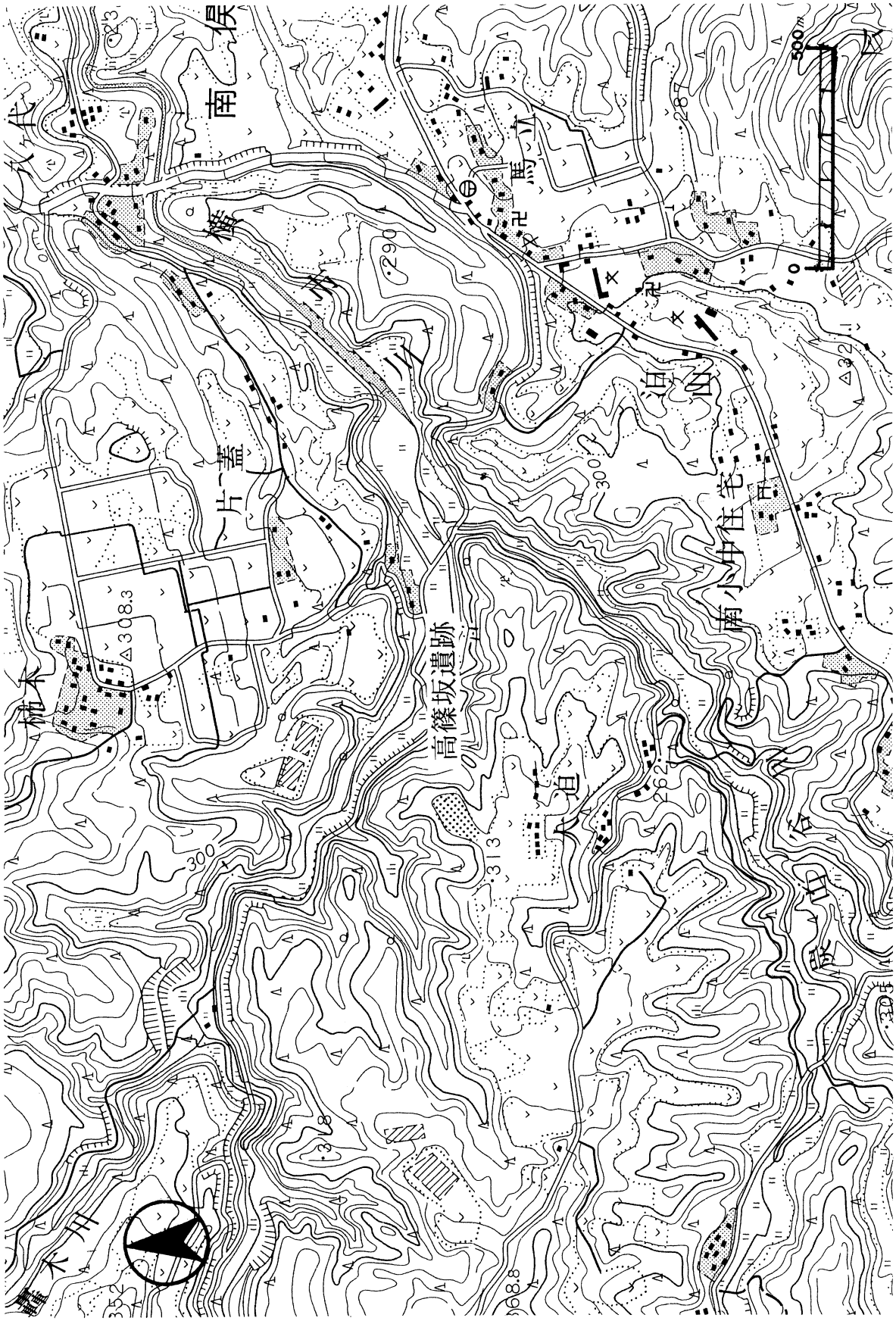
番号	遺跡名	所　在　地	地形	時　代	遺　物　等	備　考
1	小坂元Ａ	福山町比曽木野小坂元		縄・古・歴	土器・成川式・土師器	
2	新村	〃　〃　新村	台地	縄（中）	岩崎式	
3	前原	〃　〃　前原	台地	縄・古・歴	土器・成川式・土師器	
4	城ヶ尾	〃　〃　城ヶ尾	台地	旧・縄・古	ナイフ形石器・塞ノ神式・成川式	Ｈ10，11調査
5	前原和田	〃　〃　前原和田	台地	旧・縄（早）	ナイフ形石器・押型文	Ｈ13年報告書刊行
6	供養之元	〃　〃　供養之元	台地	縄・古	塞ノ神式・成川式	Ｈ13年報告書刊行
7	長谷	〃　〃　長谷	台地	弥	大型石斧	
8	野谷下	〃　〃　野谷下		古・歴	成川式・土師器	
9	永磯	〃　〃　永磯	台地	旧・縄・歴	細石器・手向山式・土師器	Ｈ9，10調査
10	辰伴	福山町佳例川辰伴	台地	弥	土器	
11	栗ノ脇	〃　〃　栗ノ脇		縄	土器	
12	芹牟田	〃　〃　芹牟田		縄	土器	
13	赤松段	〃　〃　赤松段		縄	土器	
14	山神段	〃　〃　山神段		歴	土師器	
15	一本松	〃　〃　一本松	台地	縄（中・後）	阿高式・岩崎上層式・指宿式	Ｈ10調査
16	花建原	〃　下牧之原花建原			須恵器	
17	黒棚城棚	財部町南俣天子馬場				
18	花平陣跡	〃　〃　丸鶴城ヶ原				
19	黒棚	〃　北俣黒棚	台地	縄（早）・歴	押型文・磨製石斧・土師器	
20	松峯	〃　〃　松峯	台地	歴	内黒土師器	
21	下戸越	〃　〃　下戸越	台地	歴	土師器	
22	柳ノ口	〃　〃　柳ノ口	台地	縄（前･中･後）	轟式・春日式・阿高式・指宿式・石鏃	
23	古井後ヶ谷	〃　〃　古井後ヶ谷	台地	縄		
24	西原	〃　〃　西原	台地	縄（早）・歴	押型文・土師器	
25	古井下原	〃　〃　古井下原	台地	歴	土師器	
26	宮後	〃　〃　宮後	台地	歴	土師器	
27	霧島迫Ｂ	〃　〃　霧島迫	台地	歴		
28	田代ノ上	〃　南俣田代ノ上	台地	縄・歴	土師器・須恵器	
29	久保谷	〃　〃　久保谷	台地	歴	土師器	
30	八ヶ代上	〃　〃　八ヶ代上	台地	縄（早･後）･歴	前平式・土師器	
31	高篠坂	〃　〃　高篠坂	台地	縄（早）	前平式・手向山式	本報告書
32	高篠	〃　〃　高篠	台地	古代	土師器・須恵器	Ｈ11～12調査
33	大迫Ａ	〃　〃　大迫	台地	縄（早・前）	轟式・黒曜石	
34	炭山谷	〃　〃　井牧ヶ平俣迫	台地	縄・歴	石斧・土師器	
35	炭山	〃　〃　炭山	台地	縄（後）・歴	指宿式・土師器	

表１　周辺遺跡一覧表(2)

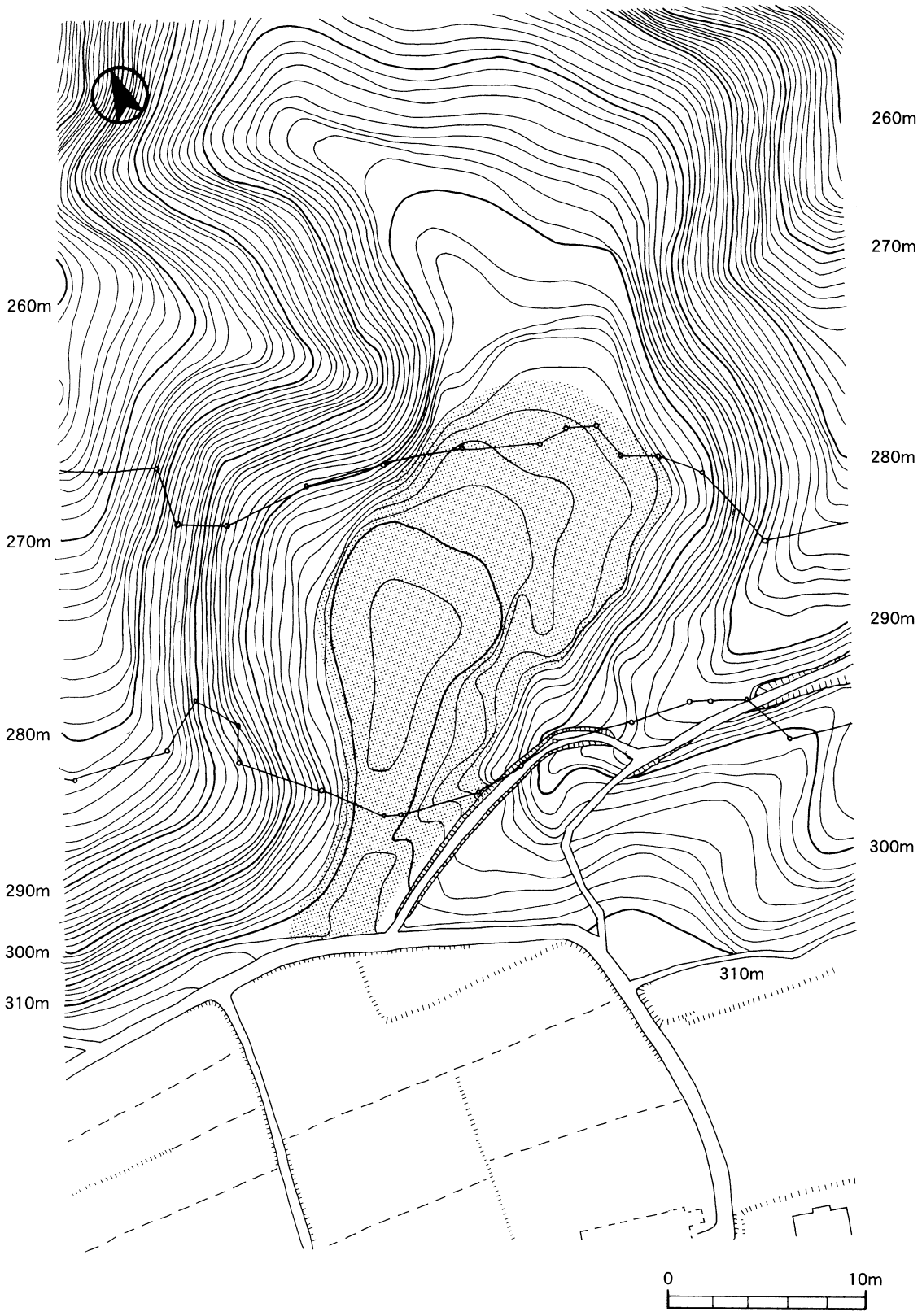
番号	遺跡名	所　在　地	地形	時　代	遺　物　等	備　考
36	大迫Ｂ	財部町南俣大迫	台地	歴	土師器	
37	片蓋前	〃　〃　片蓋前	台地	縄（早・前）	押型文・塞ノ神Ｂ式・チャート	
38	九養岡	〃　〃　九養岡	台地	旧・縄・歴	三稜尖頭器・手向山式・土師器	Ｈ11調査
39	馬立	〃　〃　馬立	台地	歴（奈良）	土師器・須恵器	
40	石仏段	〃　〃　石仏段	台地	縄（晩）・歴	黒色磨研土器・土師器	Ｓ61調査
41	長十塚(城ヶ尾)	〃　〃　長十塚	台地	縄・歴	土器・石鏃・土師器・須恵器・土錘	Ｓ61調査
42	踊場	〃　〃　踊場	台地	縄（早）・歴	塞ノ神式・土師器・須恵器	Ｈ12調査
43	王ヶ平	〃　〃　王ヶ平	台地	歴	土師器・須恵器	
44	九日田	〃　〃　九日田	台地	縄（早･後）･歴	石坂式・黒川式・土師器	Ｈ13年報告書刊行
45	耳取	〃　〃　耳取	台地	旧・縄・歴	ナイフ形石器・吉田式・土師器・礫群	Ｈ11，12調査
46	前山２	〃　〃　前山	台地	縄（晩）・歴	黒色磨研土器・土師器	
47	前山１	〃　〃　前山	台地	歴	土師器	
48	芭蕉ヶ迫２	〃　〃　芭蕉ヶ迫	台地	縄・歴	石皿・敲石・土師器	
49	芭蕉ヶ迫１	〃　〃　芭蕉ヶ迫	台地	縄・歴	土器・土師器	
50	中野	〃　〃　中野	台地	歴	土師器・須恵器	
51	長田	〃　〃　長田	台地	縄・歴	土器・土師器	
52	梅田	〃　〃　梅田	台地	縄・歴	土器・土師器	
53	荷床２	〃　〃　荷床	台地	歴	土師器	
54	八畝	〃　〃　八畝	台地	縄・歴	土器・土師器	
55	荷床１	〃　〃　荷床	台地	歴	土師器	
56	野方	〃　〃　野方	台地	縄・歴	土器・土師器・内黒土師器	
57	桐木	末吉町諏訪方桐木	台地	旧・縄・歴	ナイフ形石器・船元式・土師器	Ｈ９～11調査
58	桐木Ｂ	〃　〃　〃	台地	旧・縄・歴	塞ノ神式・深浦式・土師器・住居遺構	Ｈ12，13調査
59	関山西	〃　〃　関山西	台地	縄・弥・中世	土器・土師器・須恵器	Ｈ13調査
60	関山	〃　〃　関山	台地	縄	土器	Ｈ13調査
61	通山上川路	〃　深川五位塚通山上川路	台地	縄（晩）・中世	夜臼式	Ｓ59調査
62	真方入口	〃　〃　真方入口	台地	縄（前・晩）	轟式	Ｓ59調査
63	中牛牧	〃　〃　中牛牧	台地	縄（晩）・古代	土師器	Ｓ61調査
64	楠木岡Ｃ	〃　〃　楠木岡	台地	縄（晩）・古代	土師器	Ｓ61調査
65	楠木岡Ｂ	〃　〃　楠木岡	台地	縄（晩）・古代	土師器	Ｓ61調査
66	楠木岡Ａ	〃　〃　楠木岡	台地	縄（晩）・古代	土師器	Ｓ61調査
67	臼杵	〃　〃　臼杵	台地			
68	下ノ窪	〃　〃　五位塚下ノ窪	台地	縄（晩）・古代	入佐式・土師器	
69	四枝道	〃　〃　四枝道	台地	縄（晩）・古代	土師器	Ｓ61調査
70	仮牧	〃　〃　五位塚仮牧	台地	古代	土師器・須恵器	Ｓ60調査
71	五位塚渡り下	〃　〃　五位塚渡り下	台地	縄（早）	山形押型文	Ｓ60調査



第１図　周辺遺跡地図



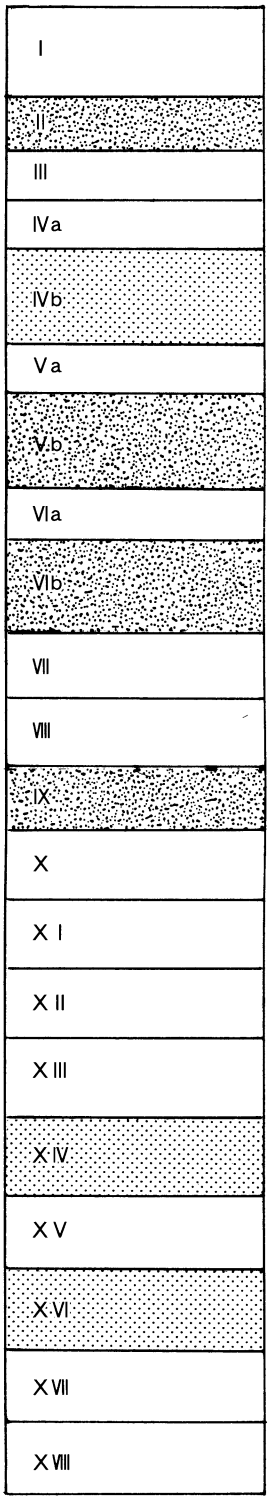
第２図　遺跡と周辺の地形図



第３図　調査区と周辺の地形図

第３章　遺跡の層位

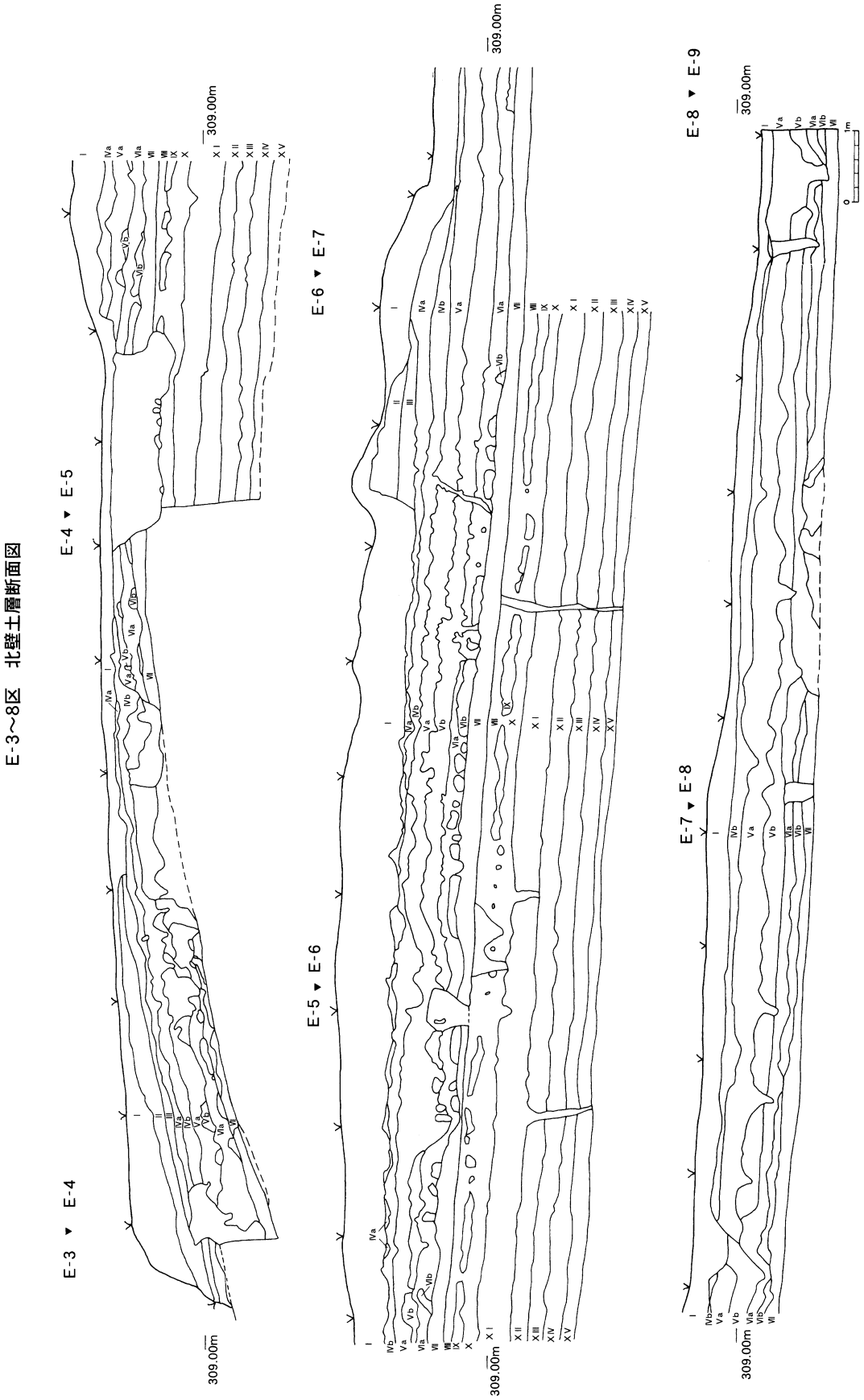
本遺跡の基本層序及び遺物包含層・年代・文化との関係は下図のとおりである。各層は，霧島山系を噴出源とする火山堆積物，喜界カルデラの火山堆積物，桜島の火山堆積物，シラス等をはじめ良好な状態で堆積している。遺跡の標準土層はＥ－６区の北側を基準とした。



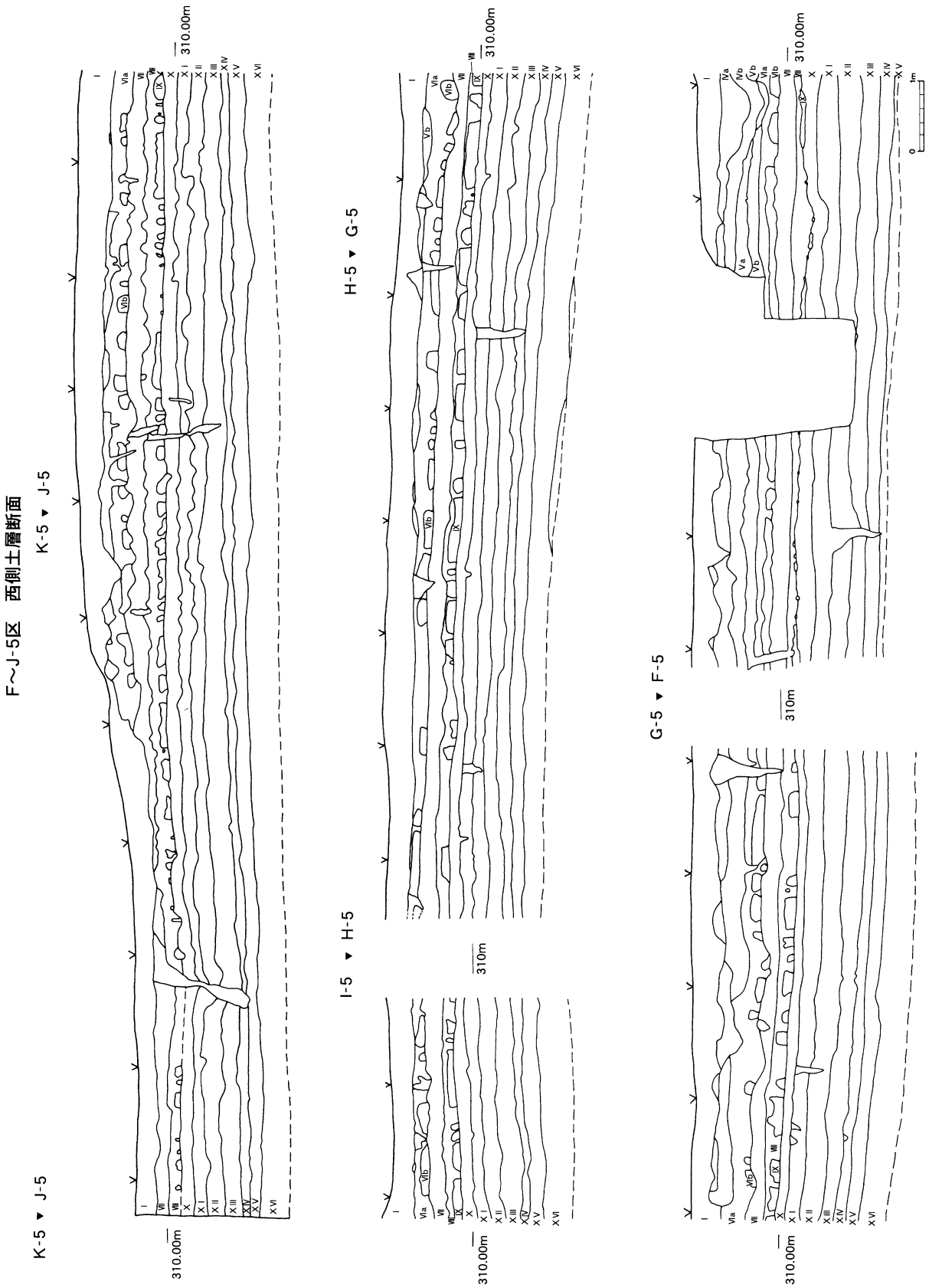
第４図　土層柱状図

Ⅰ層	暗褐色土	表土
Ⅱ層	黄白色軽石層	Ｐ－３，文明ボラ（1,471年頃の桜島の噴出物）
Ⅲ層	黒色土	
Ⅳa層	黄褐色土	Ⅳb層の腐植土
Ⅳb層	黄褐色細粒混硬質土	御池軽石（約4,200年前の霧島御池の噴出物）下部に軽石が多い。
Ⅴa層	暗橙色土	Ⅴb層の腐植土
Ⅴb層	橙色火山灰	約6,500年前の喜界カルデラ起源の火山灰
Ⅵa層	黄褐色軽石混淡茶褐色土層	縄文時代早期の包含層
Ⅵb層	黄褐色軽石層	Ｐ－11，約7,400年前の桜島起源の軽石
Ⅶ層	明茶褐色土	縄文時代早期の包含層
Ⅷ層	黒褐色土	
Ⅸ層	黄白色火山灰層	（薩摩火山灰）Ｐ－14と約11,000年前の軽石
Ⅹ層	黒褐色土	
ⅩⅠ層	黄褐色軟質ローム	
ⅩⅡ層	暗茶褐色軟質ローム	
ⅩⅢ層	褐色土	
ⅩⅣ層	暗茶褐色土	赤色のパミス（Ｐ－15）が点在する。
ⅩⅤ層	暗褐色硬質土	
ⅩⅥ層	暗褐色硬質土	赤色のパミス（Ｐ－17）が点在する。
ⅩⅦ層	濁黄白色砂質土	（二次シラス）
ⅩⅧ層	シラス	約22,000～24,000年前の姶良カルデラの噴出物

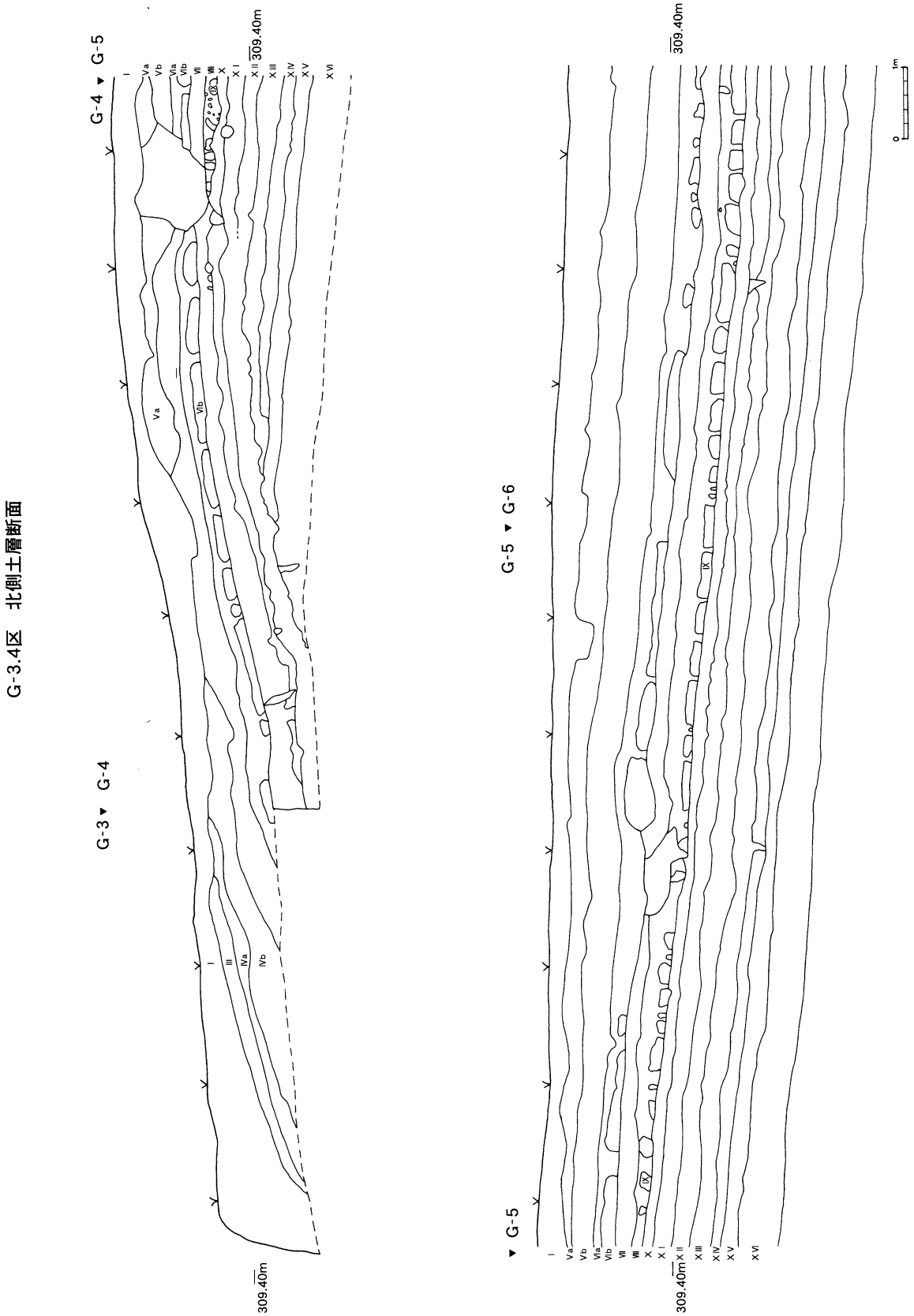
＊Ｐ＝パミス＝軽石（桜島の噴出物を新しい順に番号をつけてある）



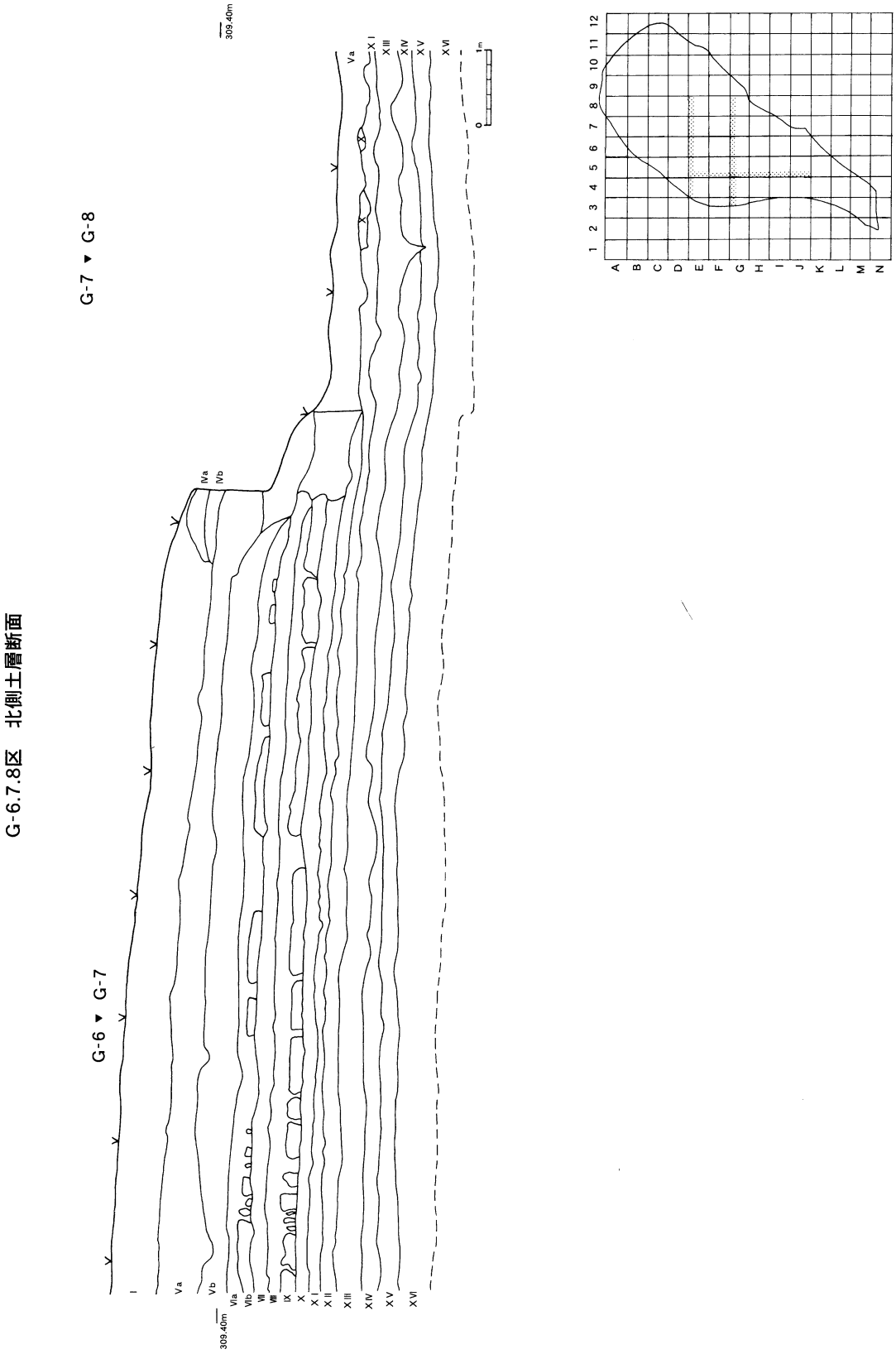
第５図　基本土層図(1)



第５図　基本土層図(2)


G-3.4区　北側土層断面
G-3 ▼ G-4
G-4 ▼ G-5
▼ G-5
G-5 ▼ G-6
309.40m
309.40m
309.40m
I
III
IVa
IVb
Va
Vb
Vla
Vlb
VII
VIII
X
XI
XII
XIII
XIV
XV
XVI
IX
0
1m

第５図　基本土層図(3)


G-6.7.8区　北側土層断面
G-6 ▼ G-7
G-7 ▼ G-8
309.40m
I
Va
Vb
Va
Vb
VII
VIII
IX
X
XI
XII
XIII
XIV
XV
XVI
IVa
IVb
0
1m
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
A B C D E F G H I J K L M N

第５図　基本土層図(4)

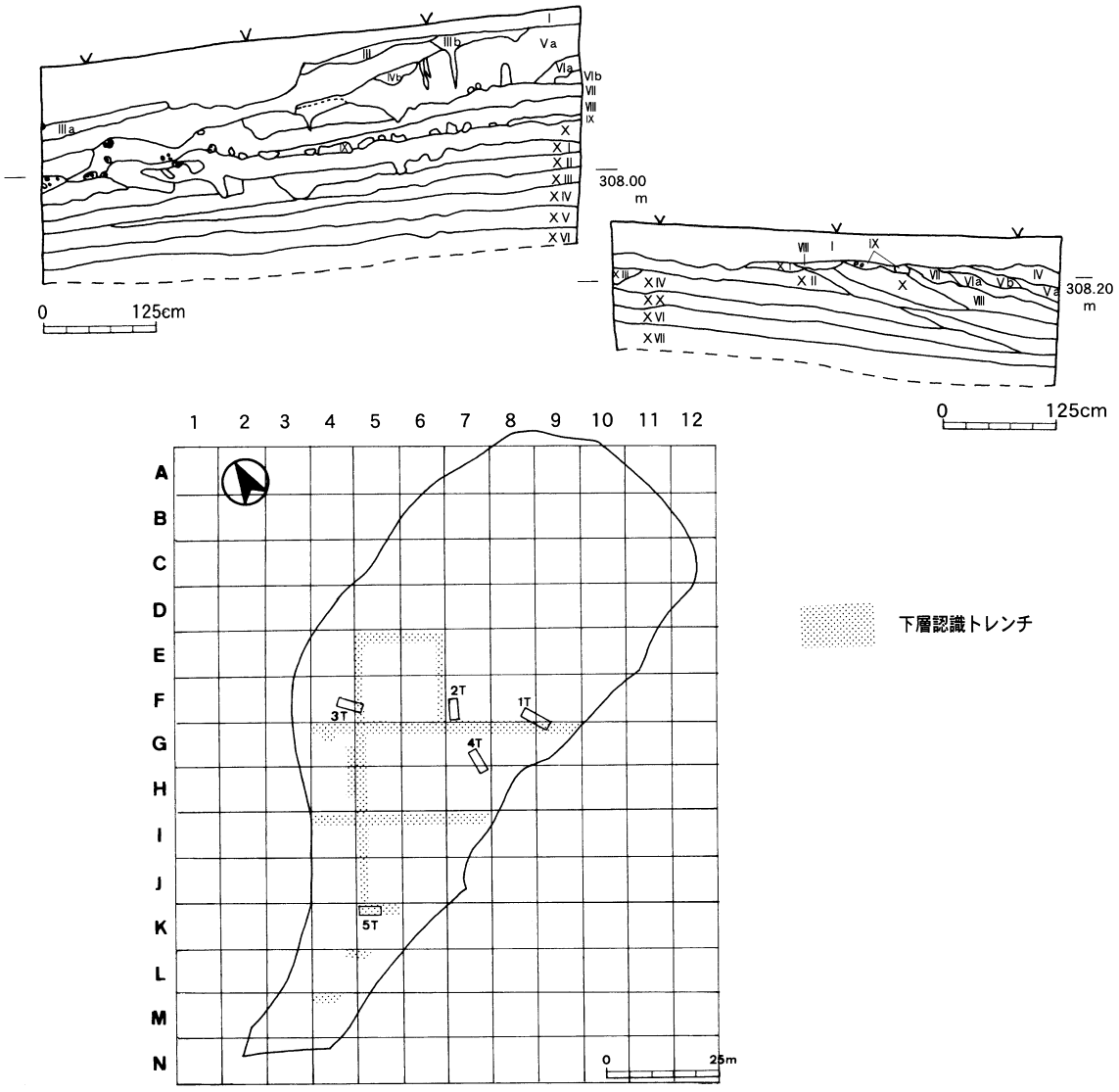
第４章　確認調査

遺跡の現状は山林であるが，植林された杉を伐採・除去すると転用前の畑地が復元された。確認調査はそれらの地形等を考慮して任意に幅2.5×長さ５～６ｍのトレンチを５か所設定し，約１か月間の調査を実施した（調査面積65㎡）。

土層の堆積状況は１トレンチから３トレンチについては各層とも良好である。ただし，Ⅻ，ⅩⅣ層は混在しており明確ではない。（このことは本調査時にも調査区全体において同様の傾向がみられた。）４トレンチを設定した地点は耕作のため低くなり，Ⅵ層から上部は削平されていた。５トレンチを設定した地点は表土直下がⅦ層となっており，以前は標高が高かったと思われる。

遺構・遺物の出土状況は，２トレンチでⅥa，Ⅶ層から石鏃や剥片，集石遺構（集石７号）が１基検出された。３トレンチでは，Ⅶ層から剥片・チップが出土している。

この調査結果をもとに，工事対象区域の5,520㎡を平成10・11年度に本調査（10ｍ×10ｍのグリッドを設定）を実施した。



第６図　確認トレンチ土層断面図，確認トレンチ・下層確認トレンチ位置図

第５章　本調査

第１節　調査の概要

平成10,11年度にわたり，確認調査により遺構・遺物が確認されたⅥa・Ⅶ層を中心に実施された。調査区の設定は，日本道路公団により設置されたセンター杭「ＳＴＡ36＋80」と「ＳＴＡ37」を結ぶ直線を基準とする10m×10mのグリットを設定し，北から南へＡ，Ｂ，Ｃ・・・とし，西から東へ１，２，３・・・とした。なお，平成10年度には下層確認トレンチ（16頁の第６図を参照）を設定し調査を行い，Ｇ－５区のＸ，XIII，XVI層で黒曜石やチャートのチップが数点出土したが，これらは流入物と判断し旧石器時代の文化層は存在しないと判断した。

また，確認調査では遺物包含層はⅦ層のみであったが，Ⅵa層からもかなりの遺物が出土しており包含層と判断した。よって，本遺跡の遺物包含層は縄文時代早期となる。

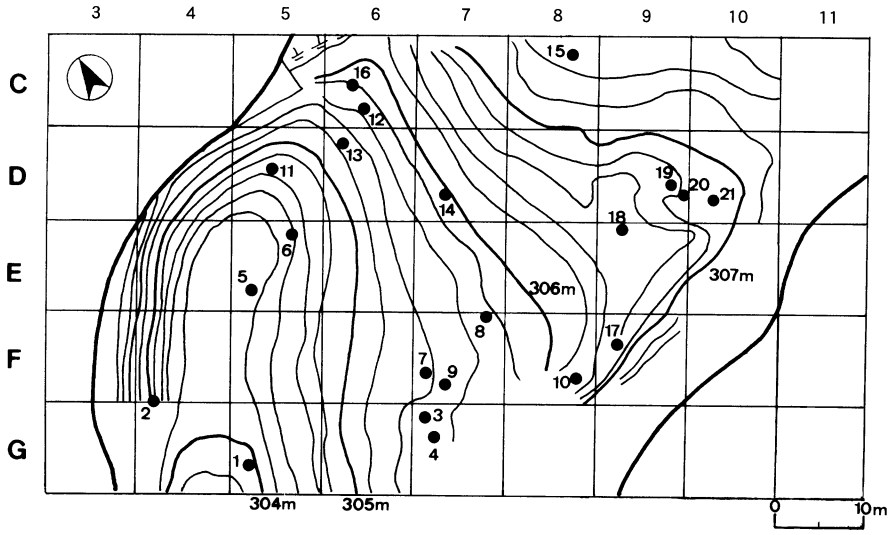
第２節　縄文時代早期の調査

平成８,10,11年度の調査においてⅥa・Ⅶ層を主体に縄文時代早期の遺構・遺物が発見された。Ⅶ層で集石遺構21基が検出され，Ⅵa・Ⅶ・Ⅷ層では土器140点，石鏃13点，石鏃未製品３点，石斧１点，石匙１点，石核３点，敲石９点，磨石４点，石皿２点が出土した。土器片の出土量は少量だが，接合可能で個体を構成するものが大部分を占めていることが特徴と言えよう。本遺跡の場合，遺構・遺物とも一定の範囲にまとまっている傾向がみられ，調査区全体には分布していない。

１　遺　構

(1)　**集石**（第８～18図）

縄文時代早期の層に相当するⅦ層で集石遺構が21基検出されている。全体的に礫数が少なく分散したものが多い。そのため，礫の散在とレベル差が著しい９，12号は図化をせず文章のみの記載とした。礫は大半が赤化しており，加熱されたことがうかがえるが，明確な焼土痕，炭化物はみられなかった。検出区は調査区域の北側，北東方向に伸びる舌状台地先端部にあたるＣ～Ｇ－４～10区の海抜306.50～310.20mの尾根から傾斜した地点である。遺物の出土量も最も多い地区である。



第７図　Ⅶ層集石検出位置図，Ⅷ層上面地形図

1号集石（第8図）

G－5区，Ⅶ層で検出された。10cm前後の礫が密集している。礫数は少ないが形状がしっかりとしている。砂岩・安山岩を使用しており，石皿片を含んでいる。

2号集石（第8図）

G－4区，Ⅶ層で検出された。10cm未満の礫が多く，絶対高の高い地点から低い地点へ流れたような状態で検出された。

3号集石（第9図）

G－7区，Ⅶ層で検出された。明確な密集部分は無いが，周辺に散在する礫に比較して集石としての形状がうかがえる。同じ散石内に4号が検出されている。

4号集石（第9図）

G－7区，Ⅶ層の3号集石から南に130cm離れた地点で検出された。最大径53cm，深さ8cm，皿状の掘り込みがみられるが礫自体は掘り込みの周縁部で検出されている。周辺には礫が散在しているが，検出地点より絶対高が低い地点により多くみられるため，3，4号集石のものが流れ込んだものと考えられる。

5号集石（第10図）

E－5区，Ⅶ層で検出された。中心部に大型の礫が集中し，これを取り囲むように中型の礫が配置されている。周辺には小型の礫が散在している。深さ7cm，最大径63cmの皿状の掘り込みがみられる。礫の集中部分及び周辺には，吉田式土器が共伴している。また，炭化物の集中もみられ，その度合いにより実測図上で範囲を明示した。

6号集石（第10図）

E－5区，Ⅶ層で検出された。礫数が少なくまとまりに欠ける。使用されている花崗岩，安山岩，凝灰岩はほぼ同じ大きさで10cm前後である。加熱によるものか，赤化しているものが目立つ。周辺に礫が散在しているが距離的にも離れている。斜面を流れたものと考えられる。

7号集石（第10図）

F－7区，Ⅶ層で検出された。礫は比較的多いが密集部分がくずれてしまい，散在した状態である。ほぼ全て焼成を受けており，破砕している礫も若干みられる。

8号集石（第11図）

E・F－7区，Ⅶ層で検出された。350個からの礫で構成される。礫間の密着が無く，散石した状態と考えられる。礫のレベルにもばらつきがみられる。明確な集中部は無いがある程度のまとまりとみなせる部分が3か所ある。

9号集石（実測図省略）

F－7区，Ⅶ層で検出された。礫のレベル差にばらつきがみられ，明確な集中がみられない散石状態であるため実測図の記載は省略した。

10号集石（第12図）

F－8区，Ⅶ層で検出された。数は少ないが比較的大きな礫で構成されている。中心部に礫が無く，それを囲むように礫が検出されている。焼成を受け赤色化した礫もみられる。

11号集石（第12図）

Ｄ－５区，Ⅶ層で検出された。礫数は少なく，密集部分がくずれた状態である。安山岩，凝灰岩の比較的大型の礫（鋭利な角の取れた角礫）で構成されている。赤化，黒色化している凝灰岩が多いが，付近に明確な炭化物は無い。

12号集石（実測図省略）

Ｃ－６区，Ⅶ層で検出された。比較的大きめの礫が使用されているが，まとまりがなく散石状態である。礫のレベル差にもばらつきがみられるため実測図の記載は省略した。

13号集石（第12図）

Ｄ－６区，Ⅶ層で検出された。礫数も少なく散在している。安山岩，凝灰岩，粘板岩の小型の円礫（角の取れた角礫を含む）が主体である。周辺に明確な炭化物の集中はみられない。

14号集石（第13図）

Ｄ－７区，Ⅶ層で検出された。礫数も少なく散在している。安山岩や凝灰岩の円礫（角の丸くなった角礫）が大半である。ほとんど火を受けているが，極端な赤化，黒色化はみられず，破砕礫も少ない。周辺に炭化物もほとんどみられない。

15号集石（第13図）

Ｃ－８区，Ⅶ層上面で検出された。安定した地面に設定されている。礫数はきわめて少ないがまとまった状態である。すべての礫が頁状に割れる凝灰岩で構成される。すべて火を受けているが，付近に明確な炭化物の痕跡がみられない。

16号集石（第14図）

Ｃ－６区，Ⅶ層で検出された。礫数は多いがまとまりがなく，広範囲（長軸４ｍ，短軸3.5ｍ）にわたり礫が散在している。焼成は受けているが破砕礫は２点のみである。緩やかな傾斜地にあるため礫のレベル差が50㎝ある。

17号集石（第13図）

Ｆ－９区，Ⅶ層で検出された。安定した地面に設定されている。礫数も少なく，まとまりに欠けている。

18号集石（第15図）

Ｅ－９区，Ⅶ層で検出された。礫数は多いが密集部がなく，こぶし大の礫が広い範囲に散在している。浮遊礫，焼成による破砕のためか小礫が多い。

19号集石（第16図）

Ｄ－９区，Ⅶ層で検出された。礫数は88個と多く，８㎝前後のこぶし大の礫が中心である。礫間の密着性は無いが，大別して２か所の散石部分が確認できる。

20号集石（第17図）

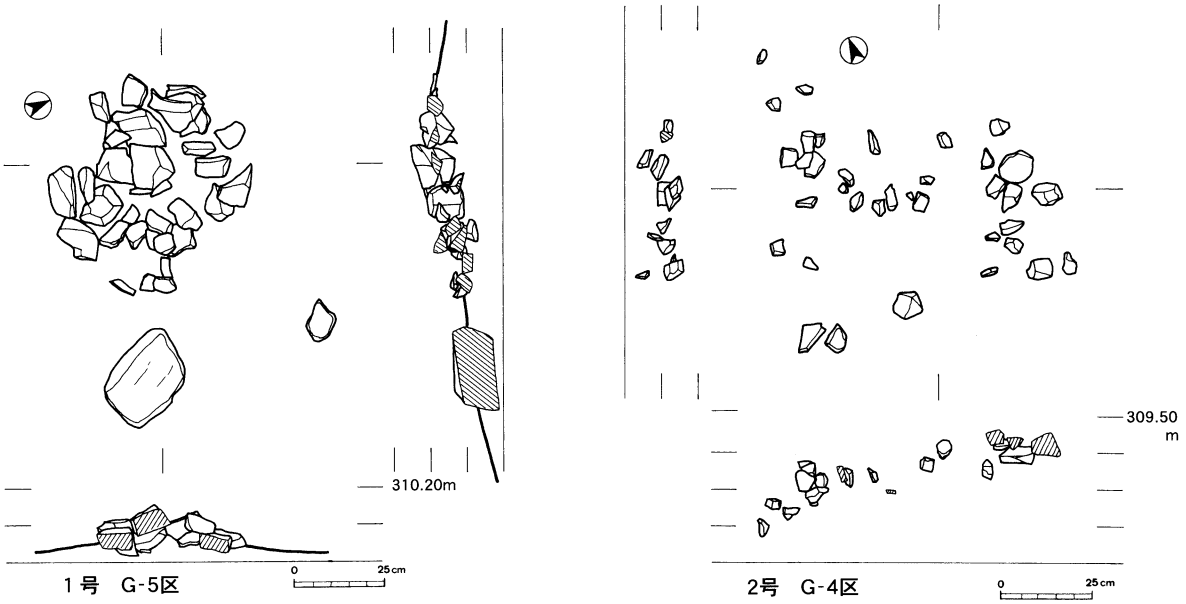
Ｄ－９･10区，Ⅶ層で検出された。礫数は123個と多いが，明確な集中部は無く散石状態である。

21号集石（第18図）

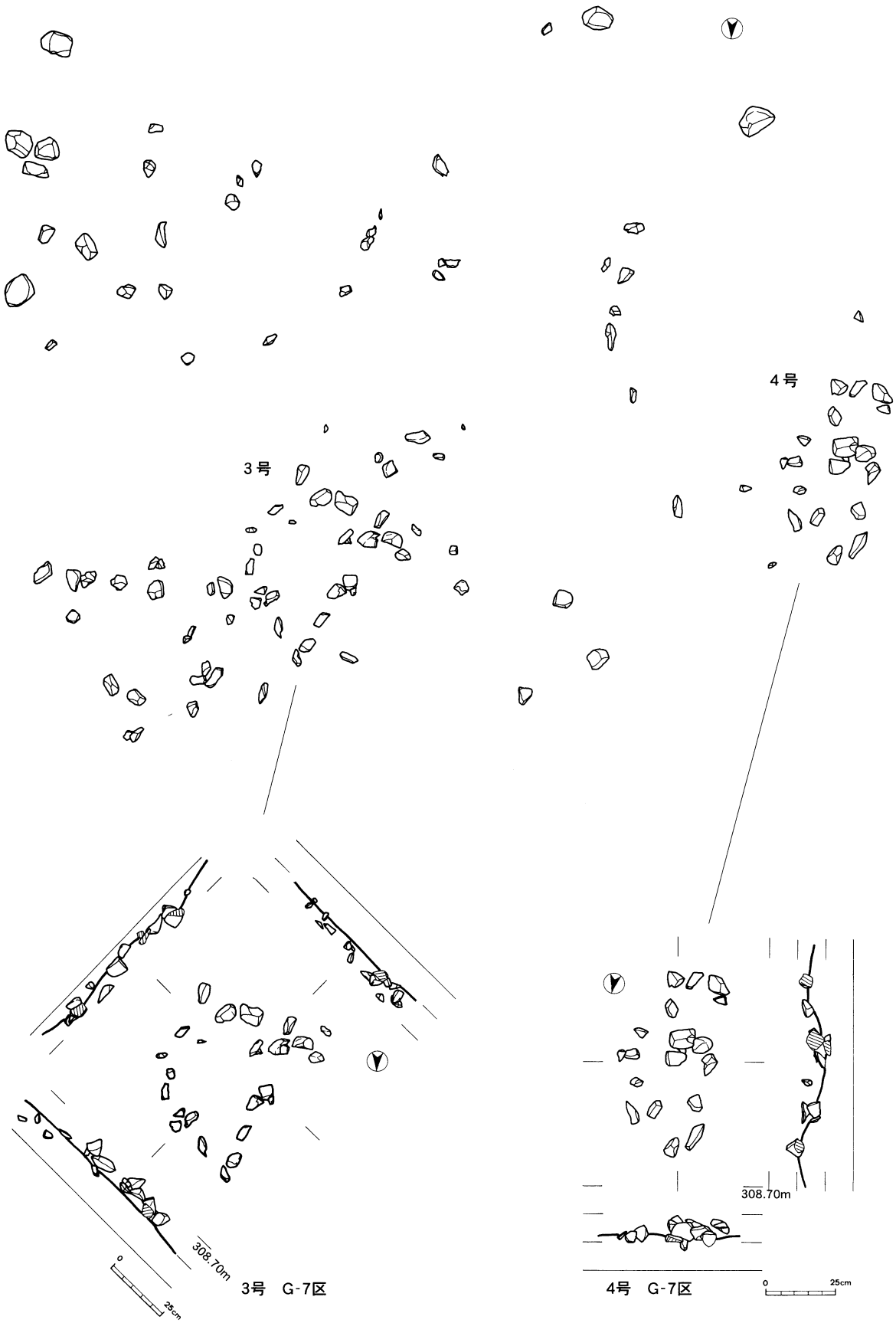
Ｄ－10区，Ⅶ層で検出された。こぶし大の礫が広い範囲に散在している。中心部から離れた地点で石皿もしくは台石と思われる大型礫が１点ある。

表２　Ⅶ層検出集石観察表

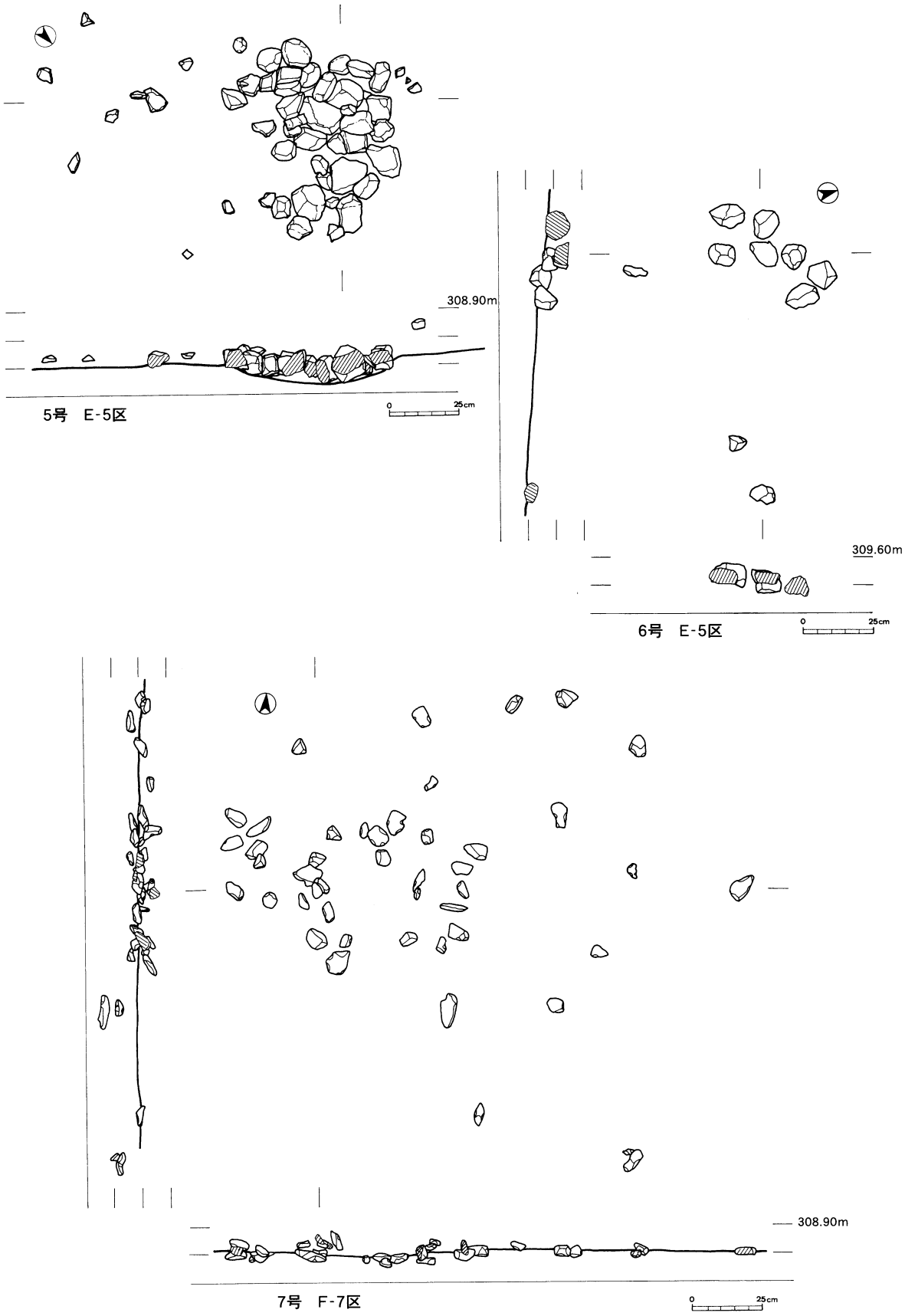
挿図番号	遺構名	検出区	長さ(m)	幅(m)	礫数	石　　材	備　　考
8	１号集石	G－5	0.97	0.80	16	砂岩，安山岩	石皿片を含んでいる。
	２号集石	G－4	0.87	0.88	36	砂岩，安山岩	礫数も少なくまとまりにかける。
9	３号集石	G－7	0.72	0.63	25	砂岩，安山岩	4号に隣接し，周辺に散石がある。
	４号集石	G－7	1.02	0.64	34	砂岩，安山岩	周辺に散石あり。深さ８㎝の掘り込みあり。炭化物あり。
10	５号集石	E－5	0.67	0.66	44	砂岩，安山岩	深さ７㎝の掘り込みあり。
	６号集石	E－5	1.08	0.86	10	花崗岩，砂岩，安山岩	礫数も少なくまとまりにかける。
	７号集石	F－7	1.90	1.72	46	花崗岩，砂岩，安山岩，凝灰岩	ほぼ全ての礫が焼成を受け，破砕している物もある。
11	８号集石	E,F－7	7.82	5.80	341	花崗岩，砂岩，安山岩，凝灰岩	礫数はきわめて多いがまとまりに欠ける。
	９号集石	F－7	3.09	2.21	92	砂岩，安山岩	礫数も少なくレベル差も一定しないため実測図は掲載せず。
12	10号集石	F－8	0.85	0.69	35	砂岩，安山岩	ある程度のまとまりがみられるが中心部に礫が無い。
	11号集石	D－5	0.52	0.37	11	安山岩，凝灰岩	焼成を受けているが周辺に明確な炭化物の集中は無い。
	12号集石	C－6	2.95	2.56	50	砂岩，安山岩	礫数も少なくレベル差も一定しないため実測図は掲載せず。
12	13号集石	D－6	1.22	0.60	10	安山岩，凝灰岩，粘板岩	周辺に明確な炭化物の集中は無い。
13	14号集石	D－7	2.03	1.44	13	安山岩，凝灰岩，粘板岩	周辺に明確な炭化物の集中は無い。
	15号集石	C－8	0.54	0.27	8	凝灰岩	周辺に明確な炭化物の集中は無い。
14	16号集石	C－6	4.00	3.44	68	砂岩，安山岩	焼成を受けているが，破砕礫は2点のみ。
13	17号集石	F－9	0.98	0.65	31	砂岩，安山岩	礫数も少なくまとまりに欠ける。
15	18号集石	E－9	2.82	2.03	54	砂岩，安山岩	浮遊礫，及び焼成による破砕礫が多い。
16	19号集石	D－9	3.74	2.94	88	砂岩，安山岩	礫間の密集性は無いが，2か所の散石部分が確認できる。
17	20号集石	D－9・10	3.68	3.70	123	砂岩，安山岩	明確な礫の密集が無い。
18	21号集石	D－10	3.20	2.47	43	砂岩，安山岩	明確な礫の密集が無い。



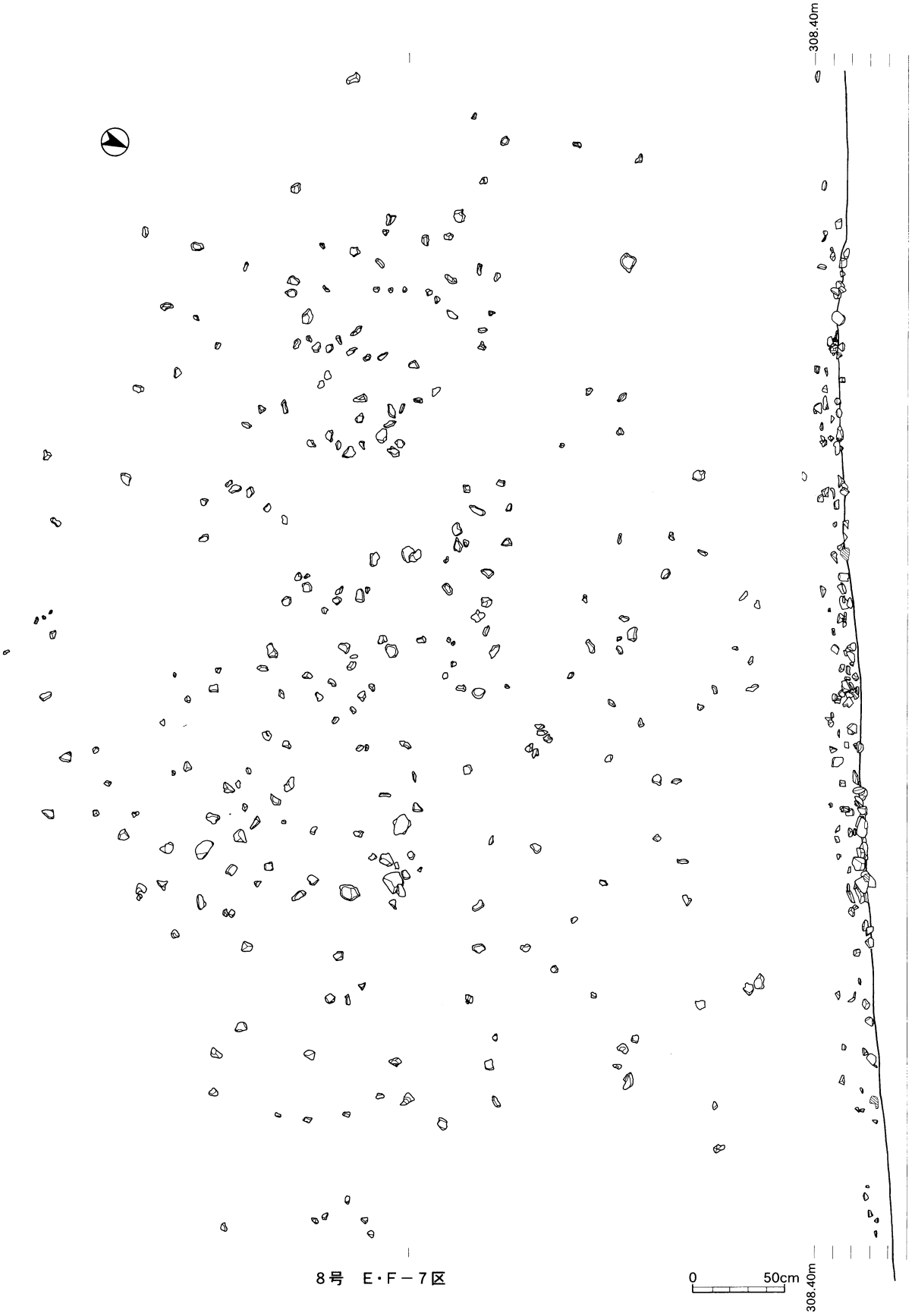
第８図　集石(1)



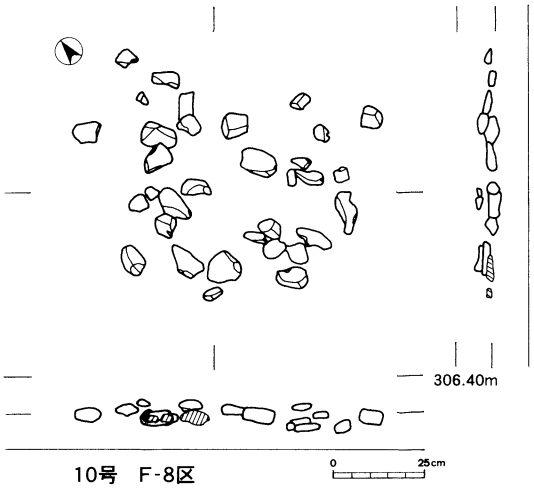
第９図　集石(2)

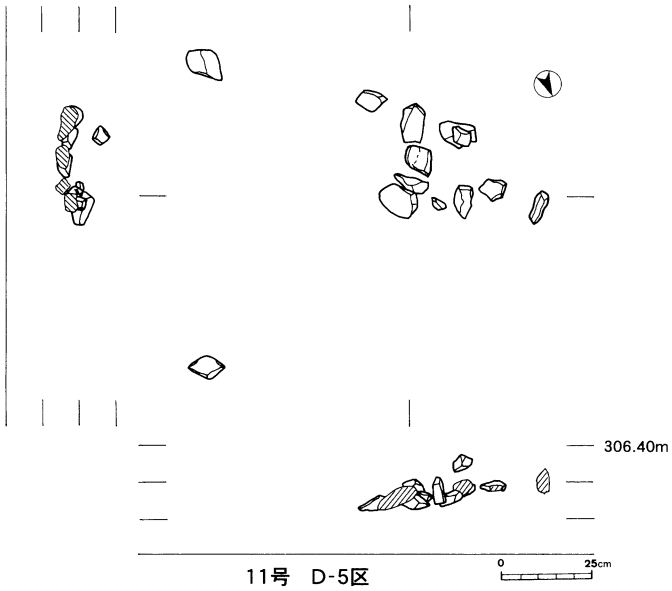


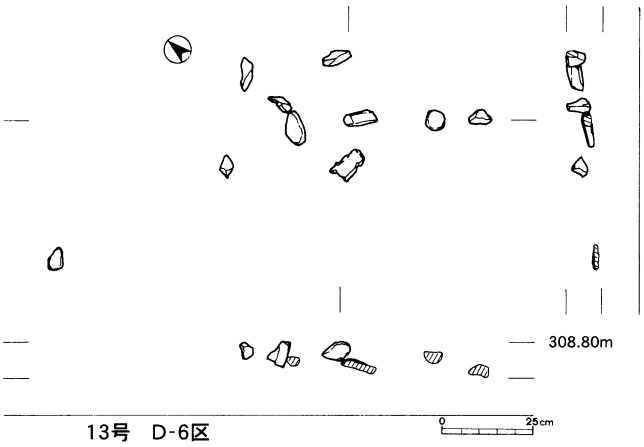
第10図　集石(3)



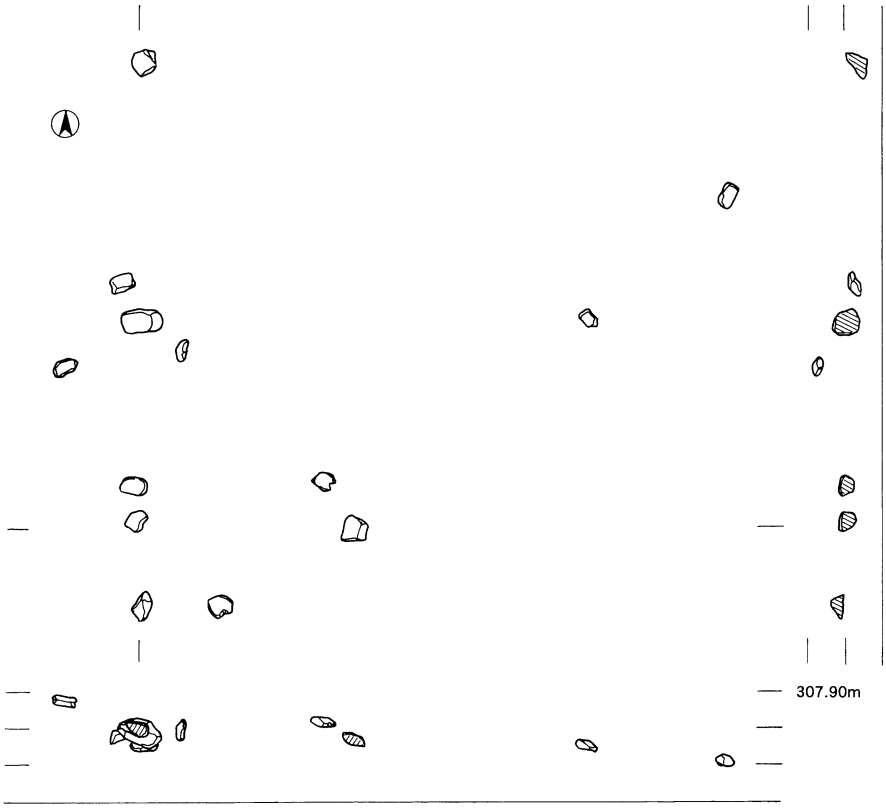
第11図　集石(4)


306.40m
10号　F-8区
0
25cm

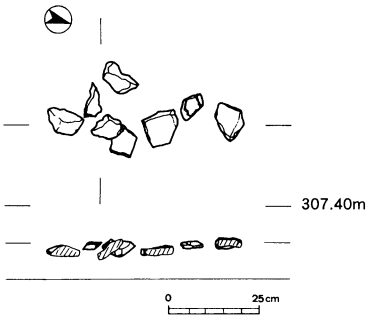

306.40m
11号　D-5区
0
25cm


308.80m
13号　D-6区
0
25cm

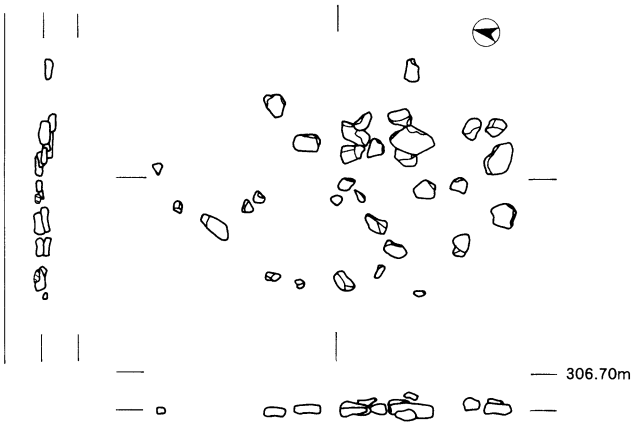
第12図　集石(5)



14号　D-7区

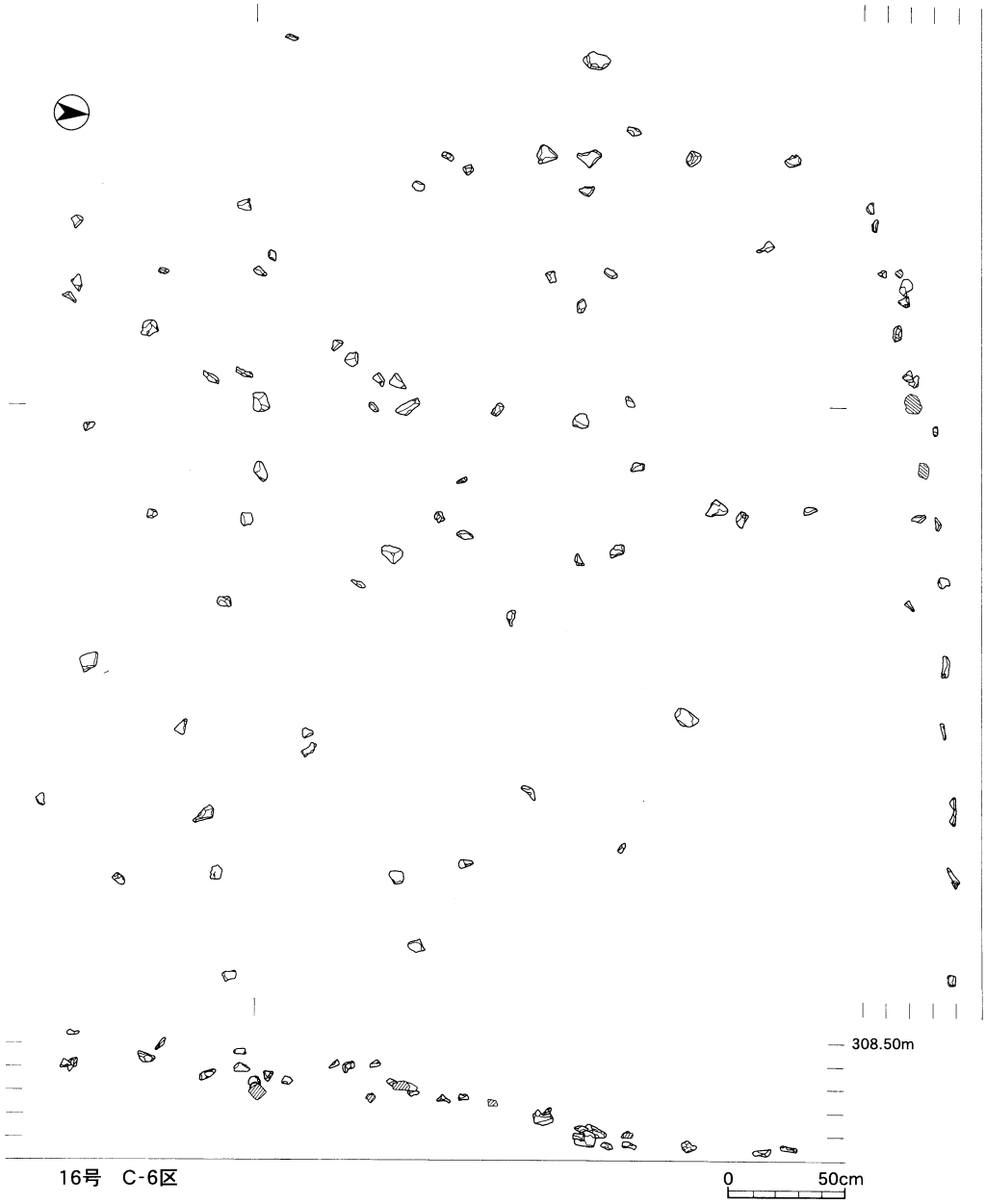


15号　C-8区

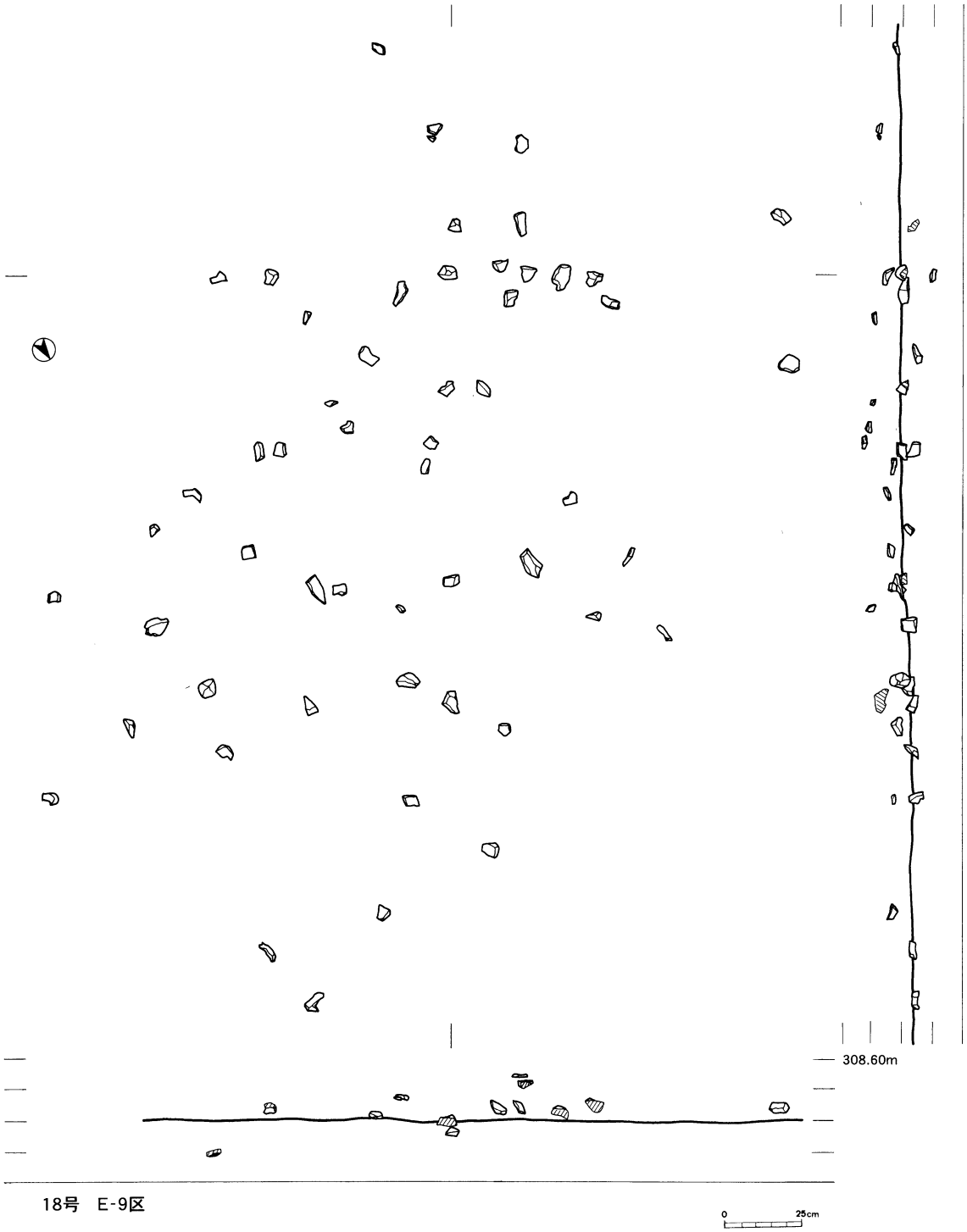


17号　F-9区

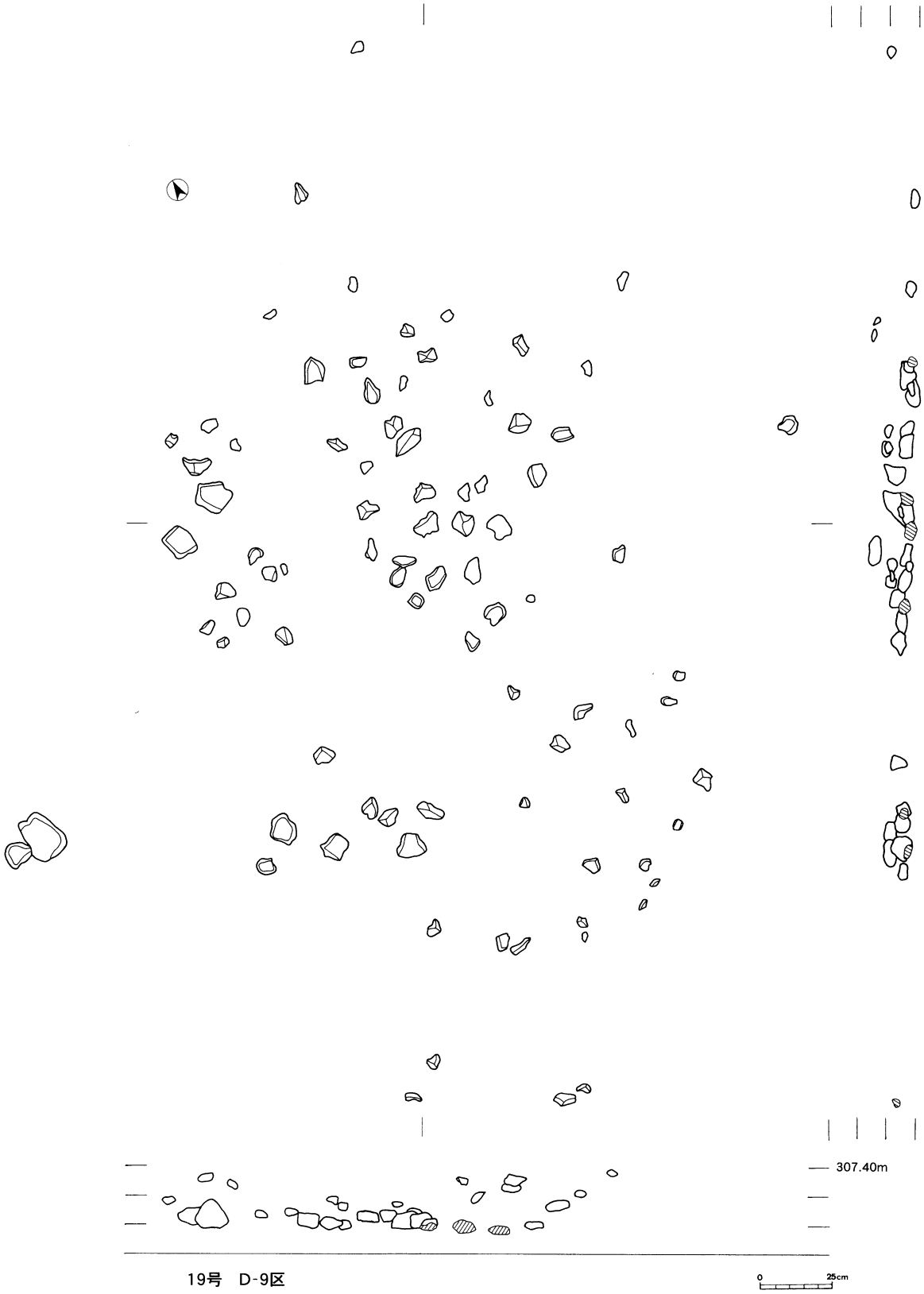
第13図　集石(6)



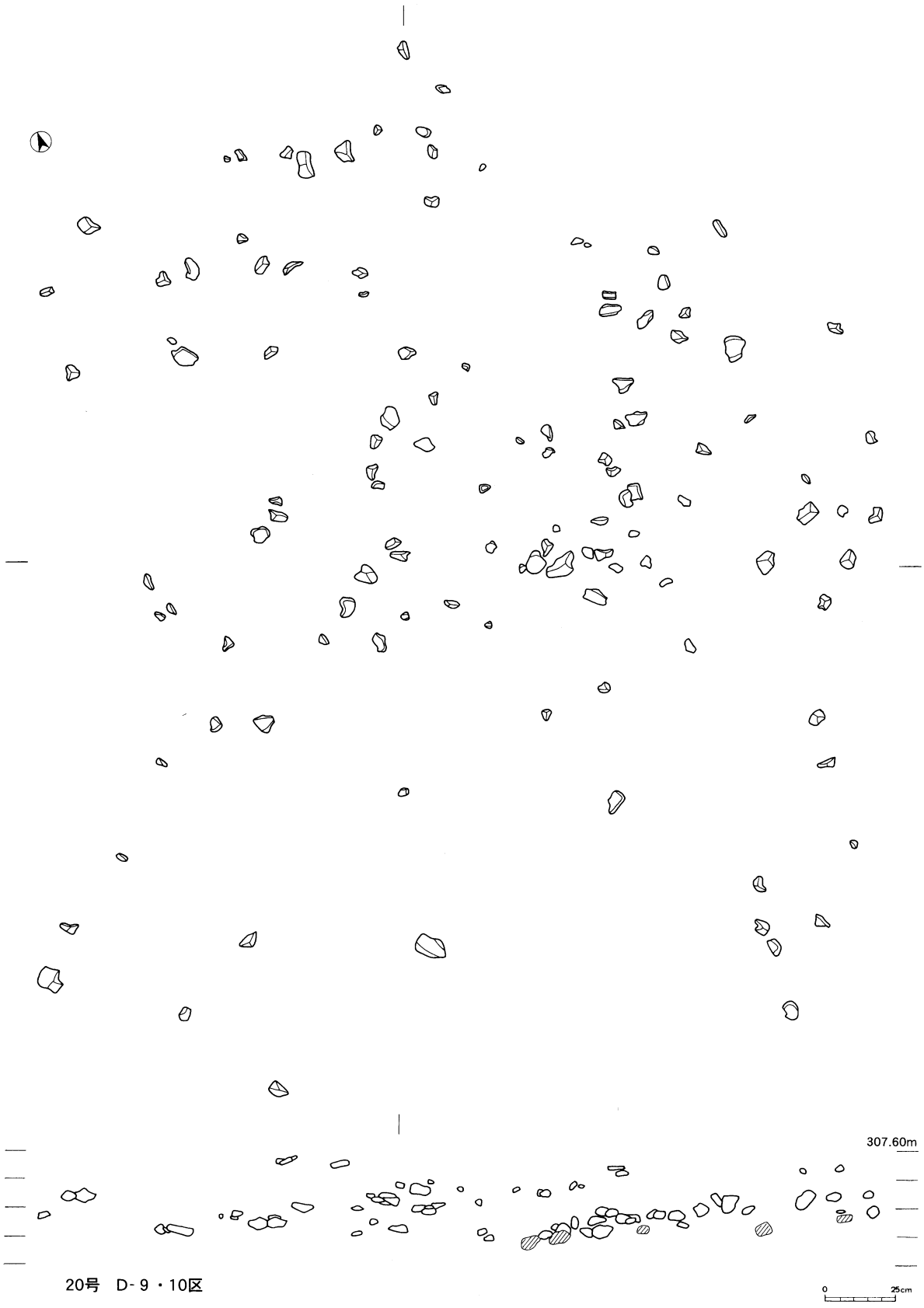
第14図　集石(7)



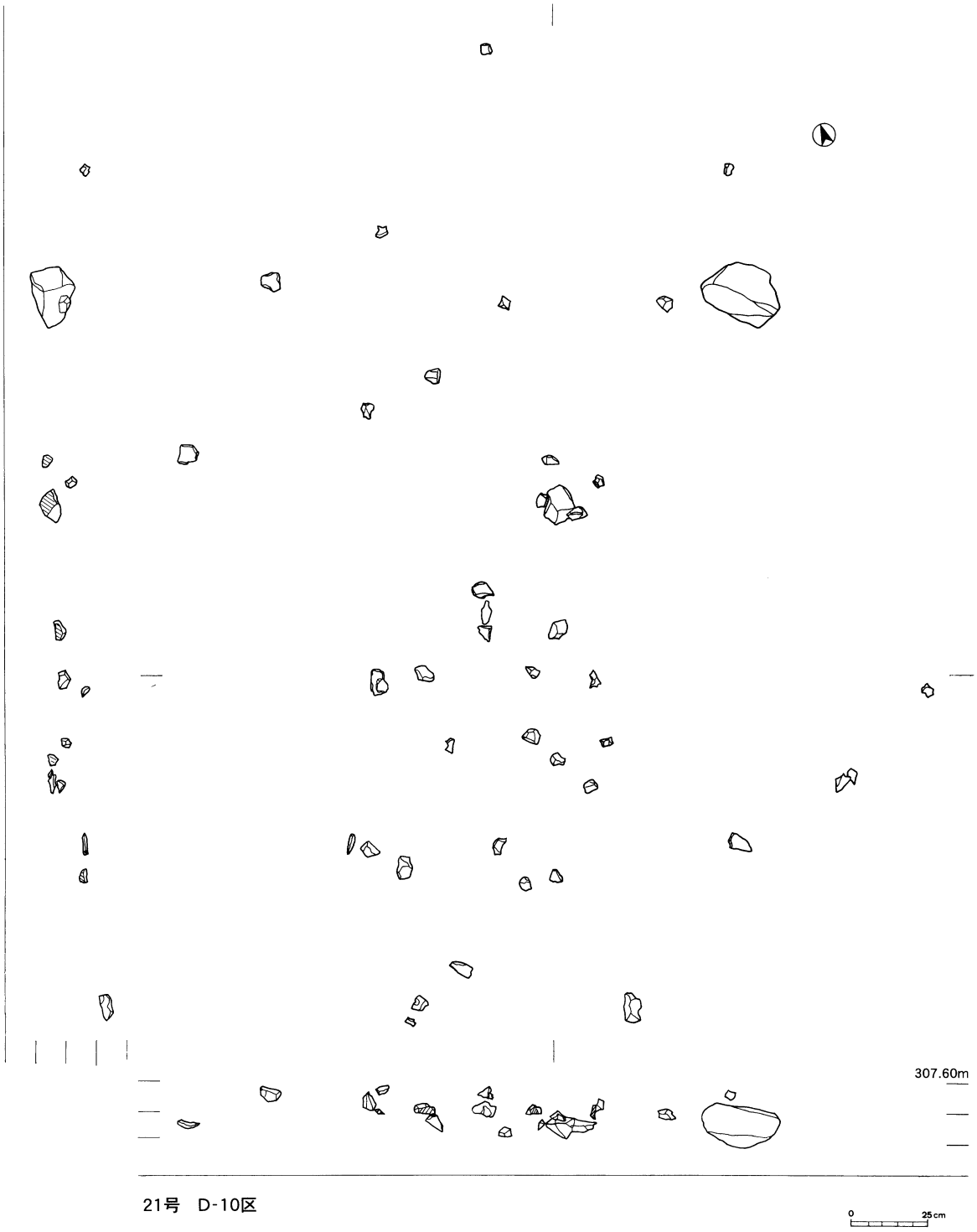
第15図　集石(8)



第16図　集石(9)



第17図　集石(10)



第18図　集石(11)

2　遺物

(1)　土器

本遺跡の遺物は，以下のとおり，形状によりⅠ～Ⅳ類に分類した。さらに各類で文様等の違いにより細分した。出土層は縄文時代早期に相当するⅥa層とⅦ層である。

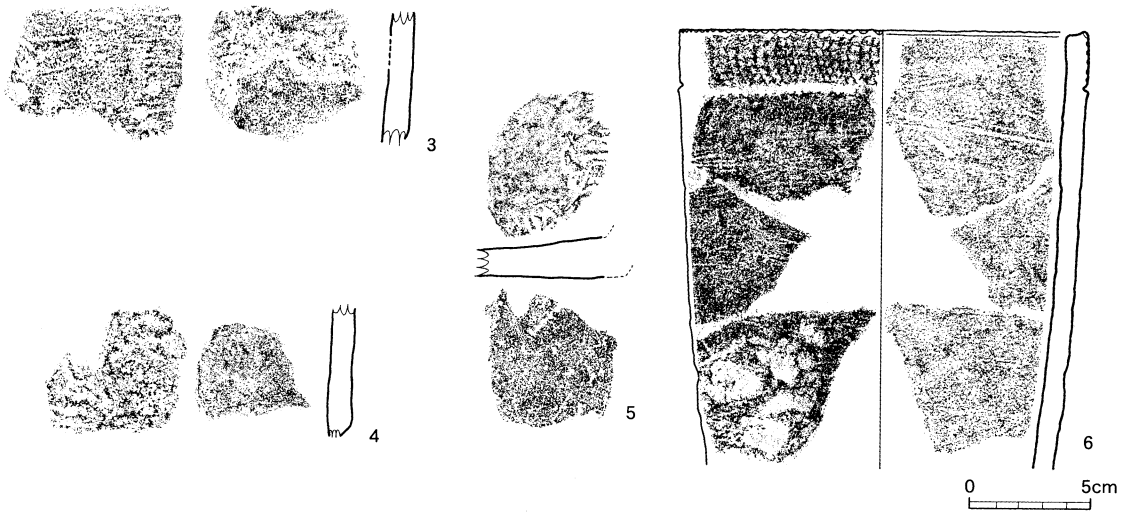
ア　Ⅰ－Ａ類土器（第19図１・２）

１と２は同一個体と考えられる。口唇端部は木口状工具により深い刻み目文が施され，結果正面観が小波状を呈する。口縁部は貝殻刺突線文が２条施され，口唇部断面は内面に傾斜している。内面は丁寧なナデ調整が施されており，焼成は良好である。口縁部は６㎜の厚さだが，胴部にかけ10㎜と厚さを増す。

イ　Ⅰ－Ｂ類土器（第20図３～６）

３～６は同一個体と考えられる。口唇部は若干内面に傾斜しており，口縁部の外面には，ヘラもしくは貝殻による浅い刻み目文が施してあるが，摩滅がはげしい。口縁部上位には縦位の連続した貝殻刺突文が施され，下位には１条の横位の貝殻刺突線文が施されている。胴部には横位から斜位の浅い条痕が刻まれている。内面はナデ調整が施されたのち，木口状工具を用いて調整したと思われる浅い条痕がのこる。底部接地面は丁寧なナデ調整が施され，内面には，接地面と器壁部との接合のために施された放射線状凹線がのこる。器壁の厚さは，口縁部が９㎜であるが，胴部にかけ11㎜と厚さを増し，底部は12㎜の厚さがある。胎土には石英・長石・角閃石・砂粒が含まれており，焼成は良好である。

第19図　Ⅰ－Ａ類土器



第20図　Ⅰ－Ｂ類土器

ウ　Ⅱ－Ａ類土器（第21図７）

７はＨ－４・５区，Ｆ－５区のⅦ層から出土した。器壁は５㎜と全体的に薄い。３㎜程の狭い口唇部の平坦面には，縦方向のヘラ刻みが密に規則的に施され，口縁端部は緩やかに外反している。

器面は横方向に整形された後，口唇部直下の口縁部に，並行した横位４条の貝殻刺突線文と胴部に縦位の貝殻刺突線文が施される。その２種類の文様の間に楔形突帯が２段貼り付け，めぐらされている。この楔形突帯は全長が比較的均一化されており，1段目が最長28㎜，最短25㎜，2段目は最長28.5㎜，最短が27㎜ほどであるが突帯間の間隔は８～12㎜と広い。楔形突帯の頂部と側縁はヘラで鋭く刻み込まれ，側縁に添い両側には連続した刺突点が施されている。内面はナデ調整が施されており，焼成は良好である。

エ　Ⅱ－Ｂ類土器（第22図８～18）

８はＥ－３・４・５区，Ｆ－４・５・６区のⅦ層から出土した。口唇部の平坦面は縦方向のヘラ刻みが規則的に施され，口縁端部は緩やかに外反している。口唇部直下の口縁部には横方向の貝殻刺突線文が２条施され，その下位に楔形突帯が２段貼り付けられ，めぐらされている。楔形突帯の上部はヘラで深く刻み込まれ，側縁に添い両側には連続した細密な刺突点が施されている。胴部には，貝殻腹縁部をもちいて，押引文が施されている。内面は丁寧なナデ調整が施され，焼成は良好である。胎土には金雲母・角閃石・長石が含まれている。

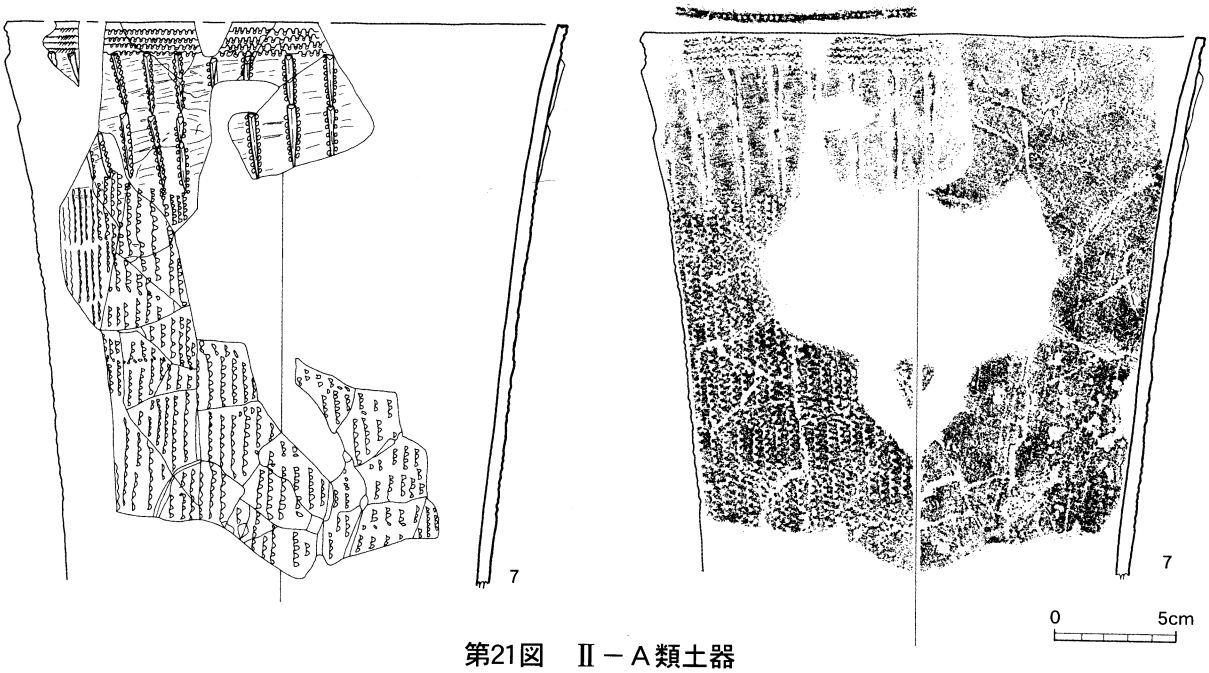
９・10は口唇部の平坦面に斜位のヘラ刻みが密に規則的に施され，口縁端部は緩やかに外反している。口唇部直下の口縁部に，並行した横位２条の貝殻刺突線文が施されている。

さらに，貝殻刺突線文の下位から，縦位に楔形の突帯が貼り付けられ，楔形突帯の上位はヘラで深く刻み込まれ，側縁に添い両側には連続した細密な刺突点が施されている。10の楔形突帯間に未貫通であるが１か所の穿孔がある。穿孔は外面と内面ともに，鋭利な木口状工具を用いて縦方向に繰り返し削られている。内面は丁寧なナデ調整が施されており，焼成は良好である。胎土には金雲母・長石が含まれている。

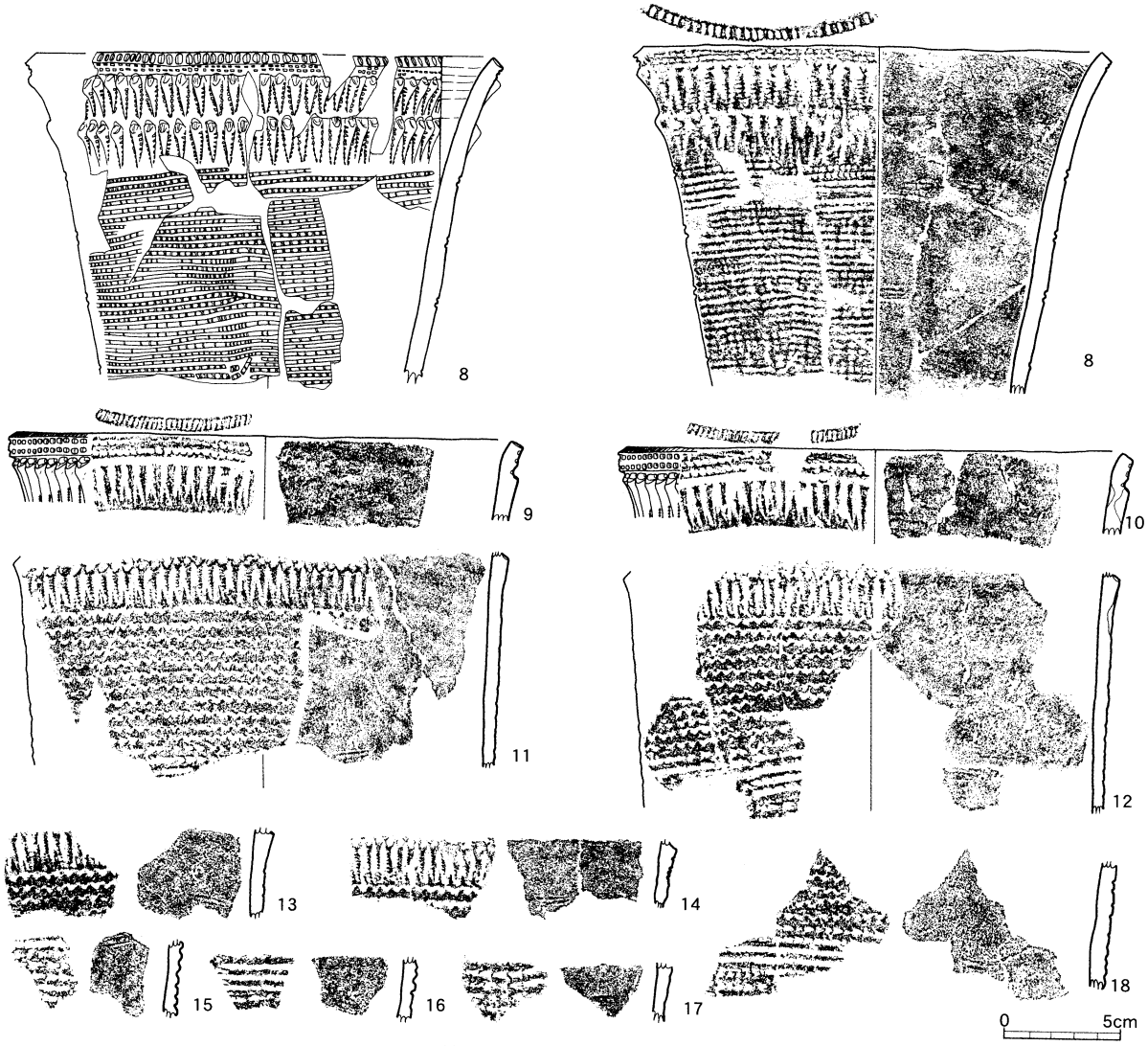
11～18は同一個体と思われる。口縁部には楔形突帯が貼り付けられている。楔形突帯の上位はヘラで深く刻み込まれ，側縁に添い両側には連続した細密な刺突点が施されている。口縁部が欠落しているためヘラの刺突具合が上方から観察できる。胴部には，上部に11条（部分的には10条）の横位の連続した貝殻刺突線文が施された後，横位の押引文が施されている。12の楔形突帯間に未貫通ではあるが１か所の穿孔があり，外面から鋭利な木口状工具を用いて縦方向に繰り返し削られている。内面は丁寧なナデ調整が施されており，焼成は良好である。胎土には石英・金雲母・角閃石・長石が含まれている。

オ　Ⅱ－Ｃ類土器（第23図19）

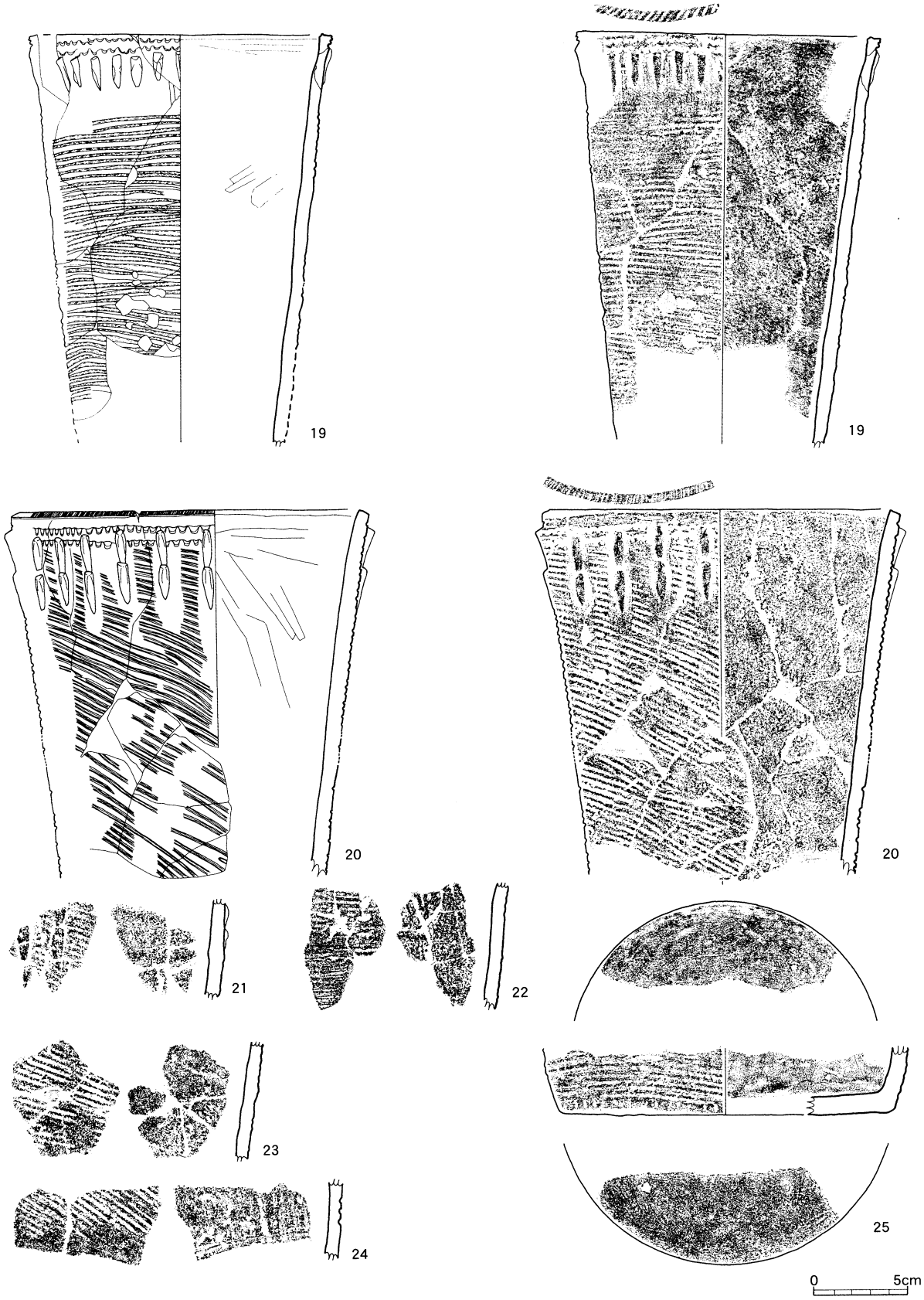
19はＦ－５区・Ｆ－６区のⅦ層，Ｇ－６区のⅦ層から出土した。口唇部の平坦面に斜位のヘラ刻みが密に規則的に施されている。口唇部直下の口縁部には並行した横位２条の貝殻刺突線文が施され，その下位には楔形突帯が１段貼り付けられ，めぐらされている。Ⅱ－Ａ類土器やⅡ－Ｂ類土器とは異なり，楔形突帯側縁に添う，連続した刺突点は施されていない。口縁部の突帯間に，２か所の貫通した穿孔がある。１か所は外面と内面ともに，鋭利な木口状工具を用いて縦方向に繰り返し削られ，別の１か所は外面から鋭利な木口状工具を用いて縦方向に繰り返し削り，途中から工具を



第21図　Ⅱ－Ａ類土器



第22図　Ⅱ－Ｂ類土器



第23図　Ⅱ－C類土器

回転させ，あけられている。楔形突帯の側縁には貼り付け後のナデ調整痕がのこる。胴部には横と斜め方向に貝殻条痕文が施され，内面はヘラケズリの後，なでて仕上げられている。胎土には石英・角閃石・長石が含まれている。

20はE－4・5区，E・F－5区，F・G－6区のⅦ層から出土した。口唇部の平坦面に斜位のヘラ刻みが密に規則的に施されている。口唇部直下の口縁部に，並行した横位2条の貝殻刺突線文が施され，口縁部から胴部にかけて，斜め方向に貝殻条痕文が施されている。2条目の貝殻刺突線文と重ねて，1段目の楔形突帯が貼り付けられ，その楔形突帯と重ねつつ，2段目の突帯が貼り付けられ，めぐらされている。内面はヘラケズリの後，なでて仕上げられている。胎土には，石英・角閃石・長石が含まれている。

21は横方向の貝殻条痕文を施した後，角が丸い楔形突帯が3段貼り付けられているが，剥離している部分もある。

22～24は胴部と考えられる。斜め方向に貝殻条痕文が施されている。

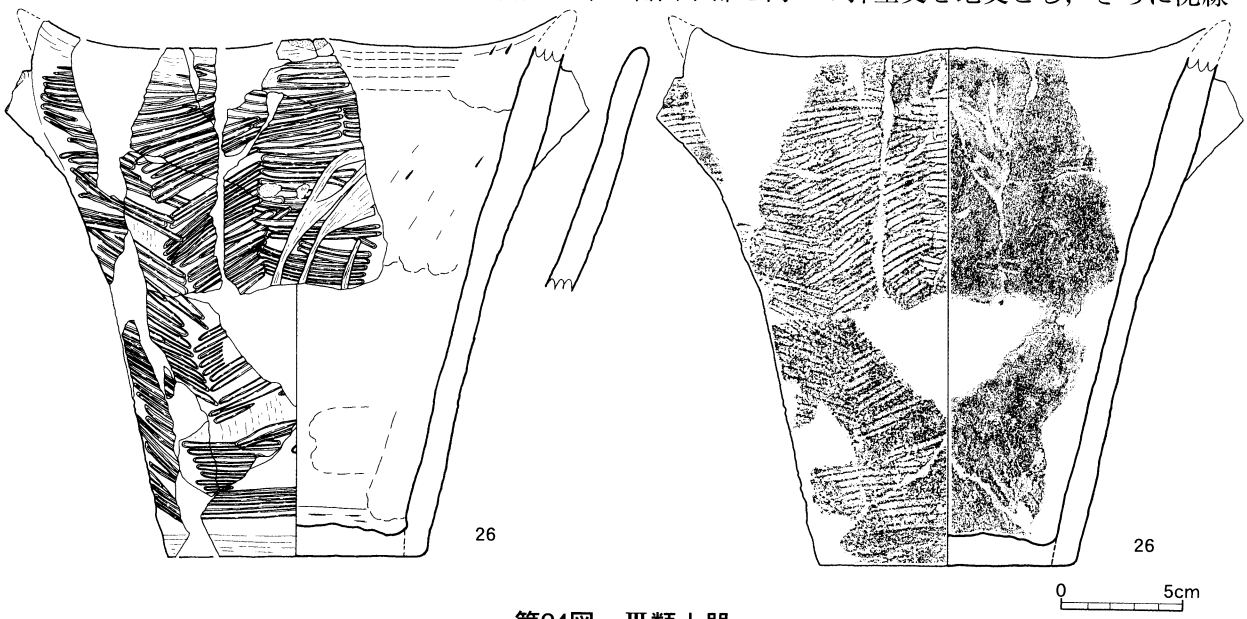
25は胴部が残る底部である。胴部には横方向に貝殻条痕文が施され，底部には縦方向のヘラ刻みが規則的に施され，内面と接地面ともに丁寧にヘラでなでられている。焼成は良好である。

カ　Ⅲ類土器（第24図26）

26は口縁部にかけてゆるやかに外反している。2個の瘤状突起の上部に山形隆起部をもち，瘤間の中央部も隆起した，ゆるやかな波状口縁を形成すると思われる。口唇部は無文で丸みをもって終わる。胴部全体は，調整された器面に綾杉状の貝殻条痕文が施される。底部と胴部は屈曲部を指で横方向にまわす手法を用いて接着されている。胎土には石英・角閃石・長石が含まれ，焼成は良好である。

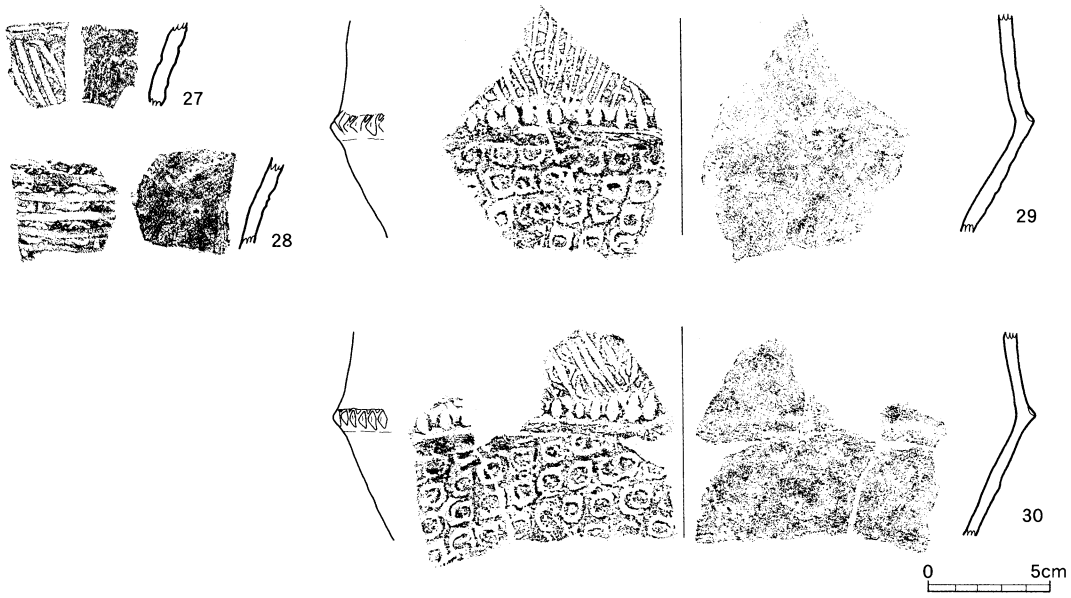
キ　Ⅳ類土器（第25図27～30）

27～30の器壁は6㎜と薄い。底部と口縁部が欠損しているが，器形は屈曲下部が若干膨らみつつ，胴部で「く」の字状に屈曲し，屈曲上部はゆるやかに内傾したのち大きく外反し，口縁部に向かい開いていくと思われる。器面の文様は屈曲上部に屈曲下部と同一の押型文を地文とし，さらに沈線



第24図　Ⅲ類土器

文を重ねてある。一方，屈曲下部は楕円形押型文を施してある。屈曲部には突帯がめぐらされ，ヘラを用いて刻み目文が施されている。内面は丁寧になでられ，焼成は良好である。胎土には角閃石・長石が含まれている。



第25図　Ⅳ類土器

表３　Ⅵa、Ⅶ層出土土器観察表

挿図	番号	器種	登録番号	出土区	層位	部位	胎土 状態	石英	長石	角閃石	金雲母	その他	焼成	色調	文様器面調整等 内面	外面
19	1	深鉢形土器	184	F6	Ⅶ	口縁部	細粒多		○				良	黄褐色	ナデ	口唇端部は木口状工具で刻む。口唇部断面は内面に傾斜している。口縁部に貝殻刺突線文が２条あり。
	2	深鉢形土器	248	F5	Ⅶ	口縁部	細粒多		○				良	黄褐色	ナデ	口唇端部は木口状工具で刻む。口唇部断面は内面に傾斜している。口縁部に貝殻刺突線文が２条あり。
			208	F5	Ⅶ	口縁部	細粒多		○				良	黄褐色	ナデ	
20	3	深鉢形土器	190	F6	Ⅶ	胴部	砂粒多	○	○	○		磁鉄鉱	普通	黄褐色	ナデ	横位から斜位の浅い条痕あり。
	4	深鉢形土器	55	G4	Ⅶ	胴部	砂粒多	○	○	○			普通	黄褐色	ナデ	外面の摩滅が激しい。
	5	深鉢形土器	59	G4	Ⅶ	底部	砂粒多	○	○	○			普通	黄褐色	ナデ	接地面はナデ調整。底部内面に放射状凹線。中央部は指押さえ。
	6	深鉢形土器	61	G4	Ⅶ	口縁部胴部	砂粒多	○	○	○			普通	黄褐色	ナデ	口唇部は浅く刻むが摩滅が激しい。口縁上位に貝殻復縁を縦位に連続刺突。下位に貝殻刺突線文。胴部に横位から斜位の浅い条痕あり。
			62	G4	Ⅶ											
			53	G4	Ⅶ											
			60	G4	Ⅶ											
			58	G4	Ⅶ											
22	9	深鉢形土器	139	E5	Ⅶ	口縁部	細粒多		○		○		良	暗褐色	ナデ	口唇部は斜方向に規則的にヘラで刻まれる。口唇部直下の口縁部に横位２条の貝殻刺突線文が施文される。口縁部に楔形突帯が付けられる。突帯に添い縦位の貝殻刺突文が施される。楔の上位はヘラにより横に深く刻まれ，突帯の間隔は密である。
	10	深鉢形土器	371	E5	Ⅶ	口縁部	細粒多		○		○		良	暗褐色	ナデ	口唇部は斜方向に規則的にヘラで刻まれる。口唇部直下の口縁部に横位２条の貝殻刺突線文が施文される。口縁部に楔形突帯が貼り付けられる。突帯に添い縦位の貝殻刺突文が施される。楔の上位はヘラにより横に深く刻まれ，突帯の間隔は密である。突帯間に未貫通の穿孔が１箇所あり。
	11	深鉢形土器	238	F4	Ⅶ	口縁部胴部	細粒多	○	○	○	○		良	灰褐色	ナデ	口縁部に楔形突帯が貼り付けられる。突帯に添い縦位の貝殻刺突文が施される。楔の上位はヘラにより横に深く刻まれ，突帯の間隔は密である。胴部に横位の貝殻刺突線文が施される。
	12	深鉢形土器	173	F6	Ⅶ	口縁部胴部	細粒多	○	○	○	○		良	灰褐色	ナデ	口縁部に楔形突帯が貼り付けられる。突帯に添い縦位の貝殻刺突文が施される。楔の上位はヘラにより横に深く刻まれ，突帯の間隔は密である。胴部に横位の貝殻刺突線文が施される。
			372	E´, F5	Ⅶ											
	13	深鉢形土器	157	F6	Ⅵ	口縁部胴部	細粒多	○	○	○	○		良	灰褐色	ナデ	口縁部に楔形突帯が貼り付けられる。突帯に添い縦位の貝殻刺突文が施される。楔の上位はヘラにより横に深く刻まれ，突帯の間隔は密である。胴部に横位の貝殻刺突線文と貝殻押引文が施される。
			176	F6	Ⅶ											
			183	F6	Ⅶ											
	14	深鉢形土器	174	F6	Ⅶ	胴部	細粒多	○	○	○	○		良	灰褐色	ナデ	貝殻押引文が施される。
	15	深鉢形土器	204	F5	Ⅶ	胴部	細粒多	○	○	○	○		良	灰褐色	ナデ	貝殻押引文が施される。
	16	深鉢形土器	164	F6	Ⅵ	胴部	細粒多	○	○	○	○		良	灰褐色	ナデ	貝殻押引文が施される。
	17	深鉢形土器	179・175	F6・F6	Ⅶ・Ⅶ	胴部	細粒多	○	○	○	○		良	灰褐色	ナデ	横位の貝殻刺突線文と貝殻押引文が施される。
	18	深鉢形土器	225	E4	Ⅶ	口縁部胴部	細粒多	○	○	○	○		良	灰褐色	ナデ	口縁部に楔形突帯が貼り付けられる。突帯に添い縦位の貝殻刺突文が施される。楔の上位はヘラにより横に深く刻まれ，突帯の間隔は密である。胴部に横位の貝殻刺突線文と貝殻押引文が施される。突帯間に未貫通の穿孔が１か所あり。
			250	E5	Ⅶ											
			227	F4	Ⅶ											
			157	F6	Ⅵ											
23	21	深鉢形土器	191	G6	Ⅶ	口縁部	砂粒多		○	○			普通	〃	ナデ	横位の貝殻条痕文を施した後，角が丸い楔形突帯を３段貼り付けている。
	22	深鉢形土器	378	F5	Ⅶ	胴部	細粒多	○	○	○			普通	明褐色	ナデ	横位の貝殻条痕文
	23	深鉢形土器	191	G6	Ⅶ	胴部	砂粒多		○	○			普通	黄褐色	ナデ	貝殻条痕
	24	深鉢形土器	212・135	F5・E5	Ⅶ・Ⅶ	胴部	砂粒多				○		普通	赤褐色	ナデ	貝殻条痕
	25	深鉢形土器	197	F5	Ⅶ	底部	砂粒多	○	○	○		磁鉄鉱	良	赤褐色	ナデ	貝殻条痕
25	27	深鉢形土器	365	F7	Ⅵ下	屈曲上部	密		○	○			良	明褐色	ナデ	押型文を施した後に沈線文を重ねる。
	28	深鉢形土器	350	G7	Ⅶ	屈曲上部	密		○	○			良	明褐色	ナデ	押型文を施した後に沈線文を重ねる。
	29	深鉢形土器	339	F7	Ⅶ	胴部屈曲部	密		○	○			良	明褐色	ナデ	屈曲下部は押型文，屈曲上部は押型文を施した後に沈線文を重ねる。
			340													
			341													
	30	深鉢形土器	338	F7	Ⅶ	胴部屈曲部	密		○	○			良	明褐色	ナデ	屈曲下部は押型文，屈曲上部は押型文を施した後に沈線文を重ねる。
			342													
			343													
			344													

⑵　石器

Ⅵ層で石鏃４点，石鏃未製品１点，敲石１点，Ⅶ層で石鏃８点，石鏃未製品２点，石斧１点，石匙１点，石核２点，敲石９点，磨石４点，石皿２点，表土一括で石鏃１点の計37点が出土した。石材は黒曜石が大半を占め，わずかにチャート，頁岩が認められる。

13点の石鏃，３点の石鏃未製品のうち13点が黒曜石を利用している。そこで肉眼による観察ではあるが，色調・透過度・不純物の有無と量・自然面の状態・風化等を基準に原産地分析を行った。なお，各遺物の石材は本文中には示さず44頁の遺物観察表⑵に記載した。

黒曜石Ａはアメ色で透明感があり不純物がほとんど無い。熊本，宮崎両県との県境，大口市桑ノ木津留産に比定される。最も多く全体の８割近くを占める。黒曜石Ｂは，淡墨黒色で半透明の良質なガラス質で黒色の筋が入る。全体の２割近くになる。大口市と宮崎県との県境で産出する。黒曜石Ｃは透明感の無い黒色で不純物も無い県内樋脇町上牛鼻産に類似する。黒曜石Ｄは濃灰色で不透明，光沢に乏しい。長崎県佐世保市周辺淀姫系と思われる。黒曜石Ｅは気泡と不純物が混じる。県内の大口市日東産と思われる。数的比率はＣ～Ｅを合わせても１割に満たない。製品は少量で大半がフレーク・チップである（ここでは99点のうち７点を図化）。敲石，磨り石，石皿には砂岩，安山岩が使用されている。Ｄ・Ｅ－５・６区で集中して出土している。

Ⅴ，Ⅵ層の遺物については，Ⅹ層以下の下層確認調査で相当量の遺物が出土していないため包含層とはみなさず，それぞれ１点ずつの図化にとどめた。

ア　打製石鏃（第26図31～43）

形状は基部が平基式，凹式でそれぞれ正三角形，二等辺三角形にちかいもの，小型のものから長幅比の異なるものまであり，出土数は少量だが形状による分類が可能である。整形加工は丁寧になされている。

石材は黒曜石が最も多く12点，その他にチャート３点，頁岩１点である。出土レベルは311ｍ前後のものが多く，Ⅱ類土器と共伴関係にあると思われる。

以上の点から基部をもとにⅠ～Ⅲ類に大別し，さらに形状によりａ～ｂに細分した。なお44頁の観察表中の「＋ａ」は欠損部分を表す。

Ⅰ類・・・基部の抉りの無い平基式とし，形状によりａ～ｂに細分した。

Ⅰ－ａ類・・・形状が正三角形に近いもの。(31～34)

31は先端部が欠損している。側縁は直線で三角形になると思われるが左右非対称である。両脚端は鋭い。32は先端部が欠損しており，両側縁は直線的で形状はやや左右非対称気味であるが，正三角形になると思われる。脚端は非常に鋭く，基部の抉りは無い。33はほぼ正三角形をなす形状である。先端部は鋭く，側縁の片側に肩がみられ，その直下から脚部までが欠損している。腹面に礫皮部分を残している。34は基部の抉りが無く，両側縁も直線的である。

Ⅰ－ｂ類・・・長幅の比率が異なるもの。(35～38)

35は先端部は丸く，両側縁は内弯し，最大幅下端からさらに内弯する。基部は直線的で抉りは無い。最大長と最大幅の比率が２：１あり縦長である。36は先端部は丸く，両側縁は内弯する。一側縁に欠損あり。37は先端部が鈍く，側縁は直線的だが脚端でやや内弯気味になる。脚端は鋭角で，基部の抉りは小さく浅い。脚部に欠損があり正確ではないが，形状は正三角形を成すと想定される。

38は先端部は直線的であるが欠損の可能性も否定できない。両側縁は内弯し，脚端の一方が丸みを帯びている。

Ⅱ類・・・基部に僅かに浅い抉りをもち，Ⅰ類とⅢ類の中間的な基部形状をもつものである。(39)

39は先端部が欠損しており，両側縁は脚端でわずかに内弯し，丸みを帯びる縁と，脚端が直線的で鋭い形状をなす縁とがある。抉りは浅い。側縁は直線でほぼ二等辺三角形に等しい形状になると思われるが左右非対称である。

Ⅲ類は脚部の両端から明瞭に抉りを入れたものである。

Ⅲ－ａ類・・・基部の抉りが深く形状が縦長のもの。(40～42)

40は先端部と脚部に欠損がある。基部の抉りは深い。側縁は内弯し，脚端は鈍く抉りは深い。裏面は両側縁とも素材剥離面が残されているが脚部には丁寧な剥離調整がなされている。41は最大長と最大幅の比率が２：１あり，縦長な形状のいわゆる長身鏃である。本遺跡出土の石鏃では最大である。先端部は丸みを帯び両側縁は直線的で脚部がわずかに内弯し，脚部端は鋭角になる。基部の抉りは半円状に浅く入る。42は先端部が非常に鋭利で，両側縁は直線的で鋸歯状に細かい剥離加工が行われている。脚部端が丸みを帯びる。基部はＵ字状の抉りが深い長脚鏃である。

Ⅲ－ｂ類・・・基部の抉りが深く，長さに比較して幅が広いもの。(43)

43は先端部は鈍く丸みを帯びており，両側縁から脚部にかけて内弯していく。脚端は丸みを帯びている。基部に深い抉りが入る。形状から鍬形鏃に分類できるだろう。

イ　石鏃未製品（第26図44～46）

３点を未製品としてとりあげた。石材は全て黒曜石である。44は素材剥離面が大きく残されており，先端部と側縁の一部，基部にのみ形状調整の剥離が行われている。基部の抉りは半円状に大きく入っている。断面の形状からは先端部に鋭さが無く厚みがあり，側縁は整形剥離が不充分なことがうかがえる。45，46は礫皮面及び素材剥離面が残されており，先端部，基部と側縁の整形剥離が行われているが一部未調整の側縁が残されており，未製品と判断した要因でもある。

ウ　石匙（第27図47）

47は頁岩製の横型石匙である。Ｄ－９区で出土している。つまみ部はやや右に傾き，末端部に近い位置に左右から調整し抉りをいれている。身部は不等辺の三角形で断面は凸レンズ状である。縁辺は表裏とも調整がなされている。

エ　剥片（第27図48～53，56）

黒曜石93点，チャート４点，頁岩２点，計99点出土しており，ここでは７点を図化した。石材は黒曜石とチャートである。48，49，50，52は礫皮面を多く残す。49，50，52は縦長剥片である。51は一側縁に二次加工が見られる。53は両側縁に微細な剥離痕がみられる。56はⅩⅤ層で出土した。背面は礫皮面を多く残し，一側縁と下端部に微細な剥離痕を残している。

オ　石核（第27図54，55，57）

54，55は黒曜石で，礫皮面を多く残している。上下，左右，表裏に自在に打面を転移し，複数以上の作業面を有している。57はⅩⅥ層で出土した。石材はチャートで打面を転移し剥離を行っている。

カ　石斧（第28図58）

58は刃部を欠損しているが基部，側縁部ともに調整剥離により整形している。

キ　敲石（第28図59～68）

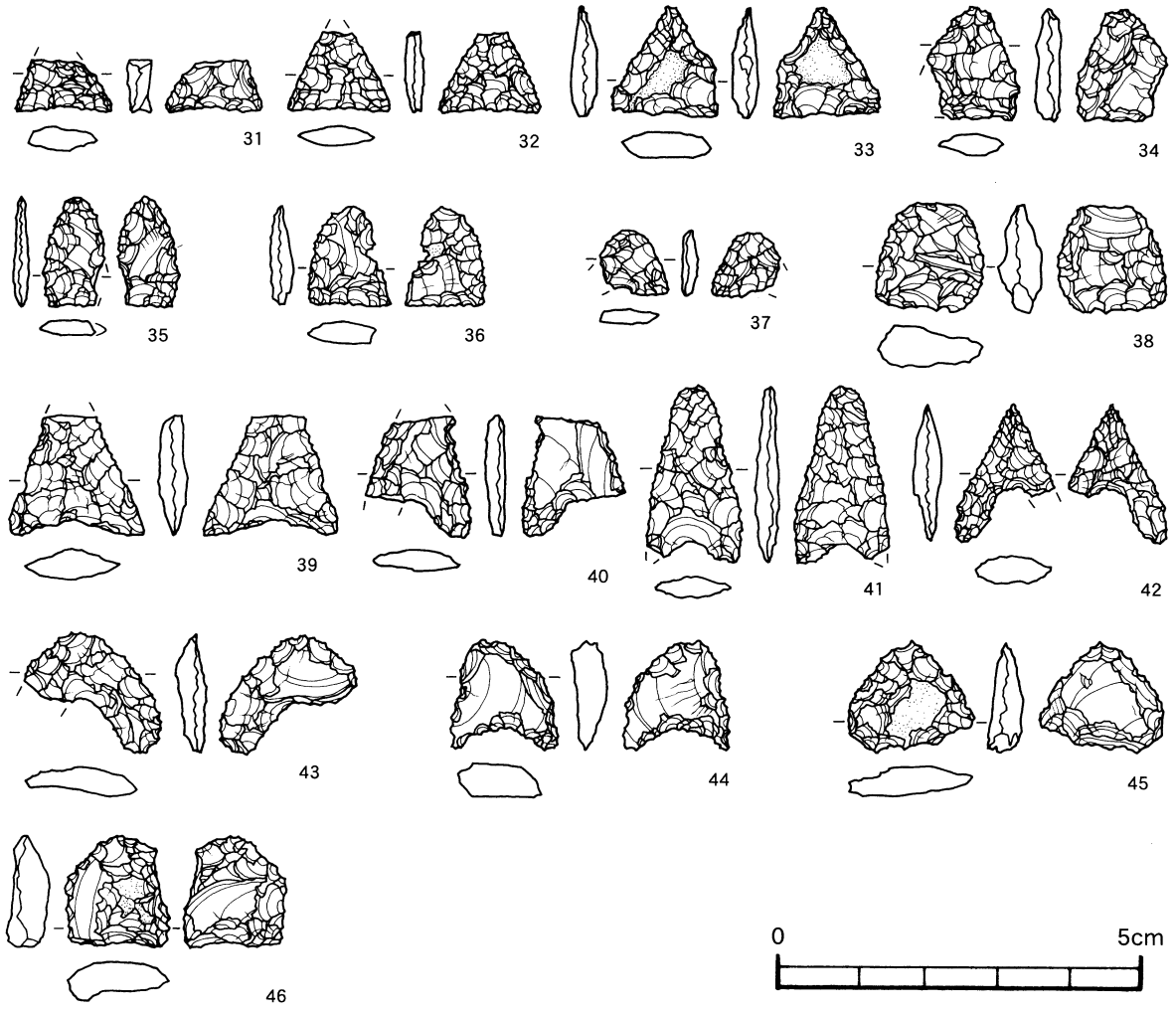
59は表裏両面に敲打痕がみられ，先端と表面の一部に敲打による破損が生じている。60，61は下端と一側縁に敲打痕がみられる。62は表裏両面に研磨痕と敲打痕がみられ磨り石として使用したことも考えられる。63，64は敲打痕と擦り痕がわずかに確認できる程度である。65は表面に敲打痕がみられる。66は礫全体に敲打痕があり側面には擦り痕が，67は礫全体に敲打痕と擦り痕が残っている。68は礫全体に敲打痕と一側縁に擦り痕が残っている。

ク　磨り石（第29図69～72）

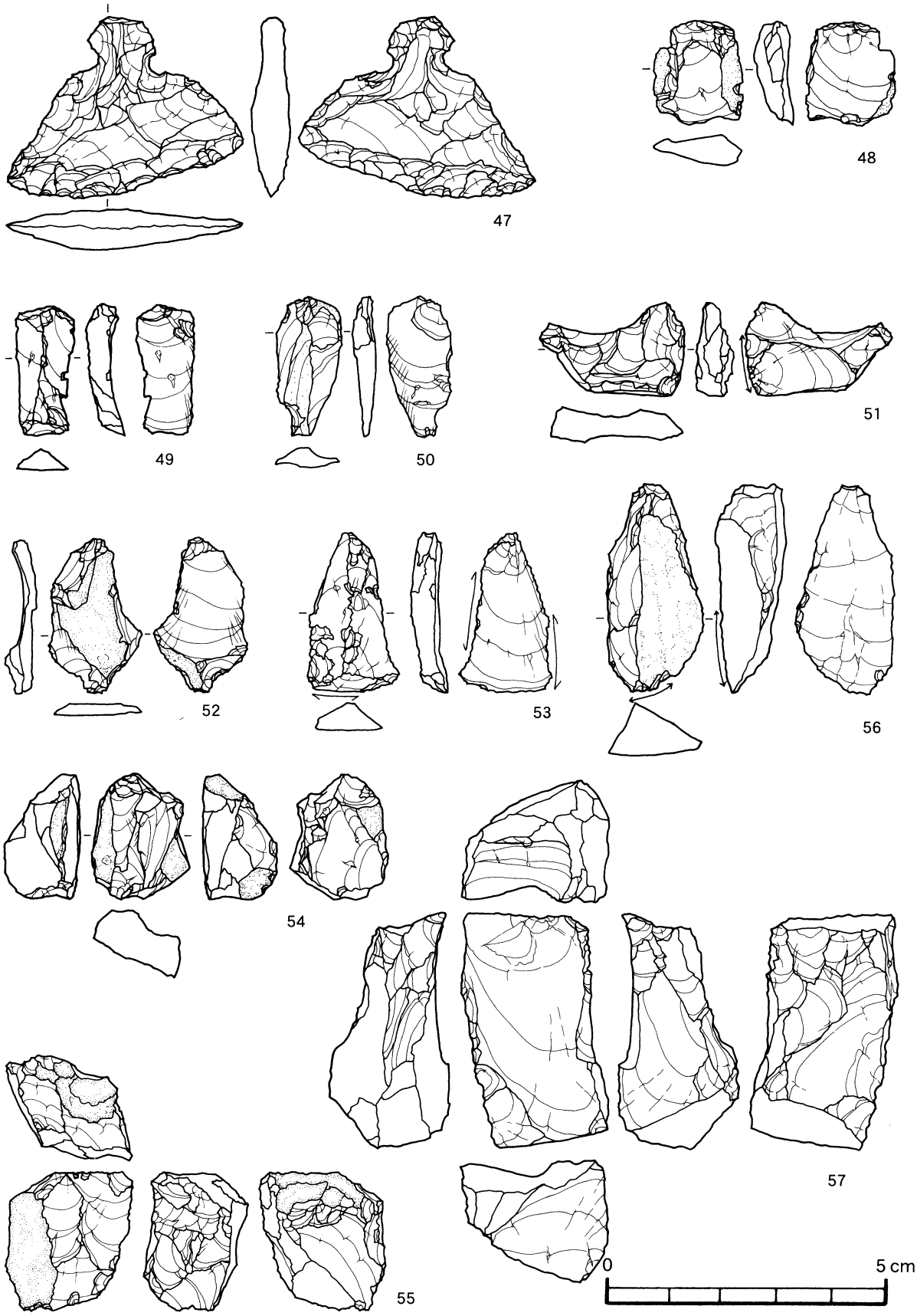
69は表裏面に使用痕が確認できる。70は表裏面と一側縁に使用痕がみられる。断面は２点とも円形に近い。71，72は断面が偏平な楕円形である。71は上半分が欠損しており端部と側縁に敲打痕が残っている。72は表裏面にはスリと敲打痕，側面のほぼ全周にわたり敲打痕がみられる。

ケ　磨り皿（第29図73）

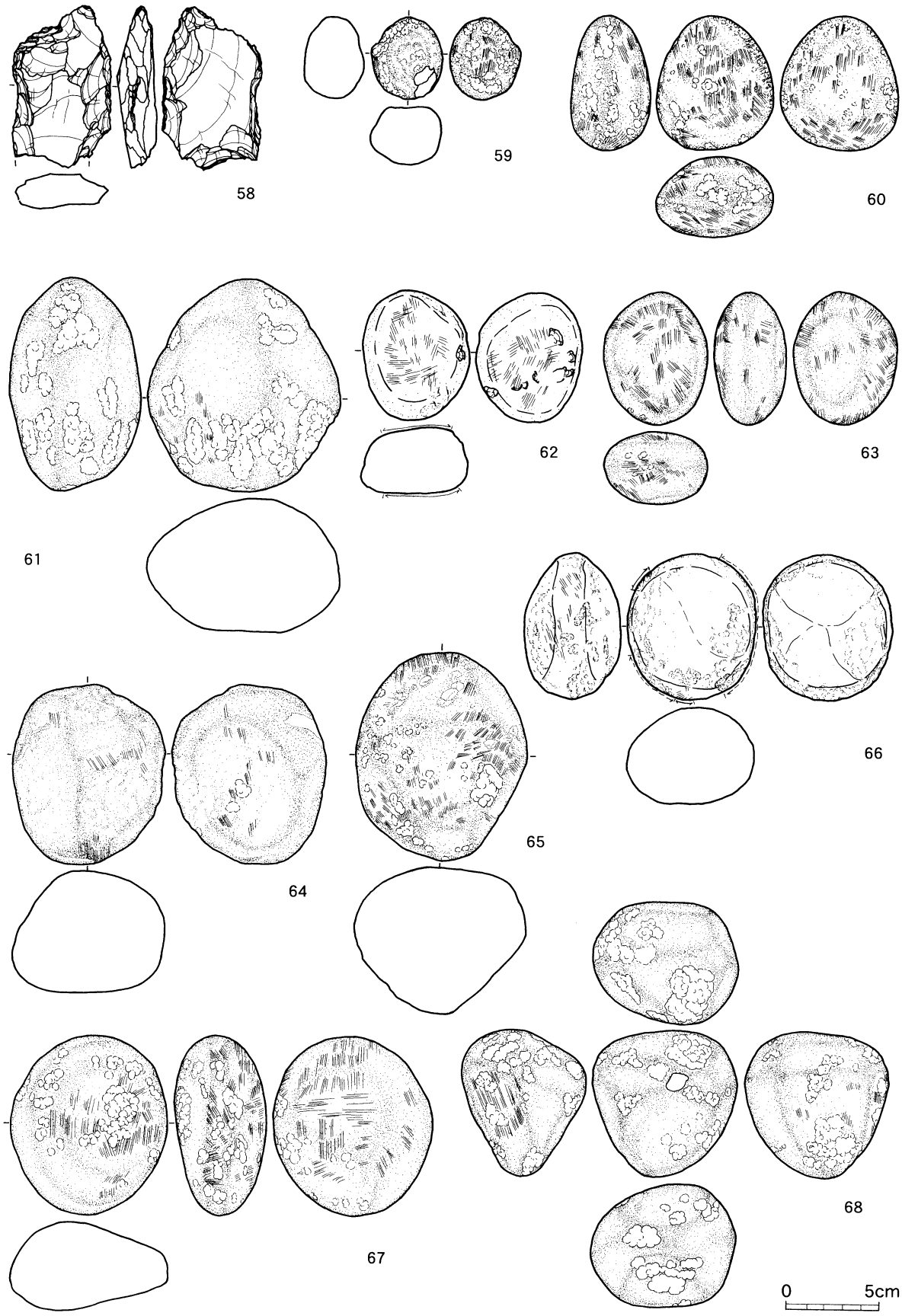
73は扁平な自然礫を使用している。側縁部には敲打による破損がみられる。



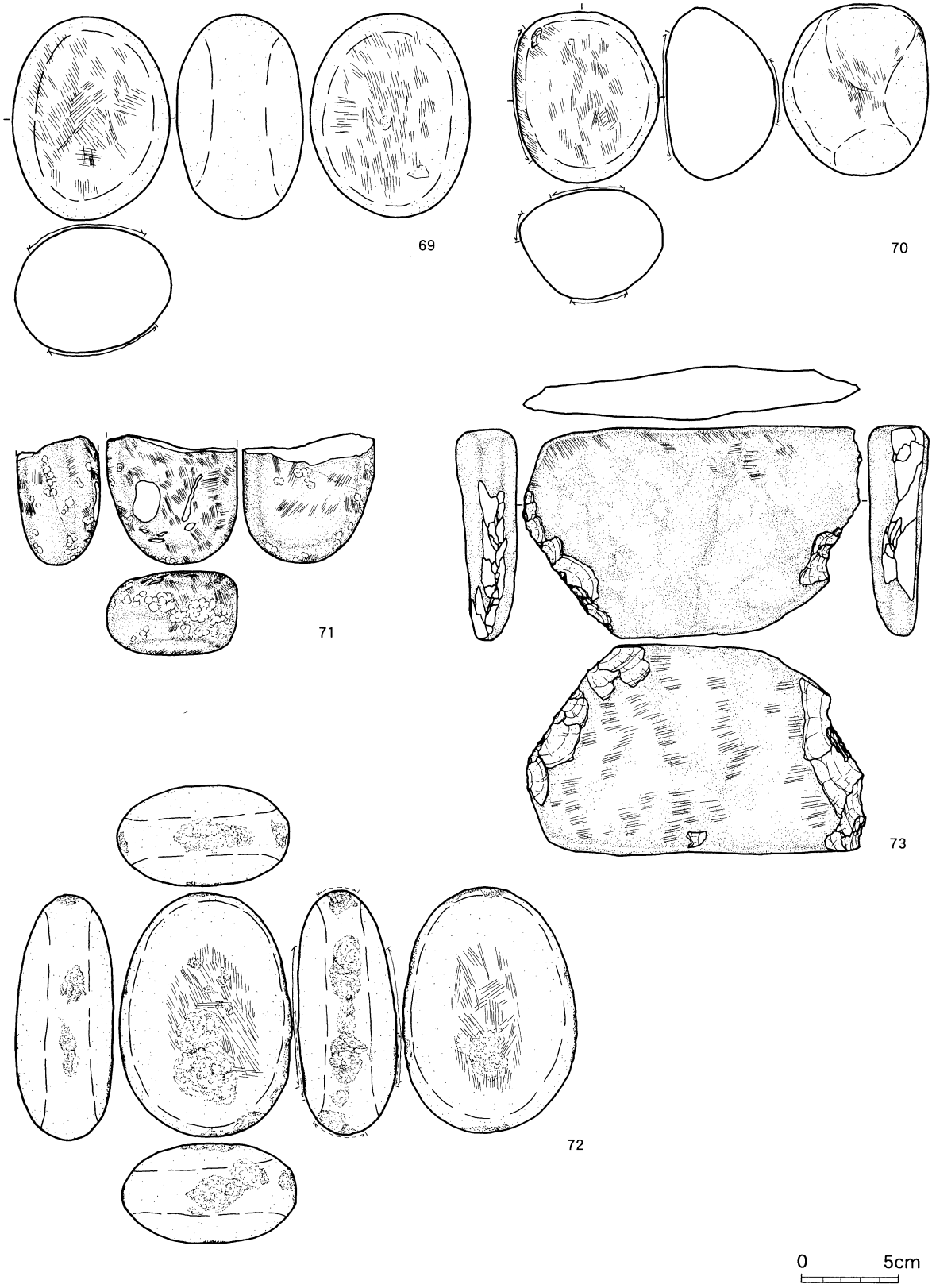
第26図　Ⅵa・Ⅶ層出土石器



第27図　Ⅵa・Ⅶ層出土石器



第28図　Ⅵa・Ⅶ層出土石器

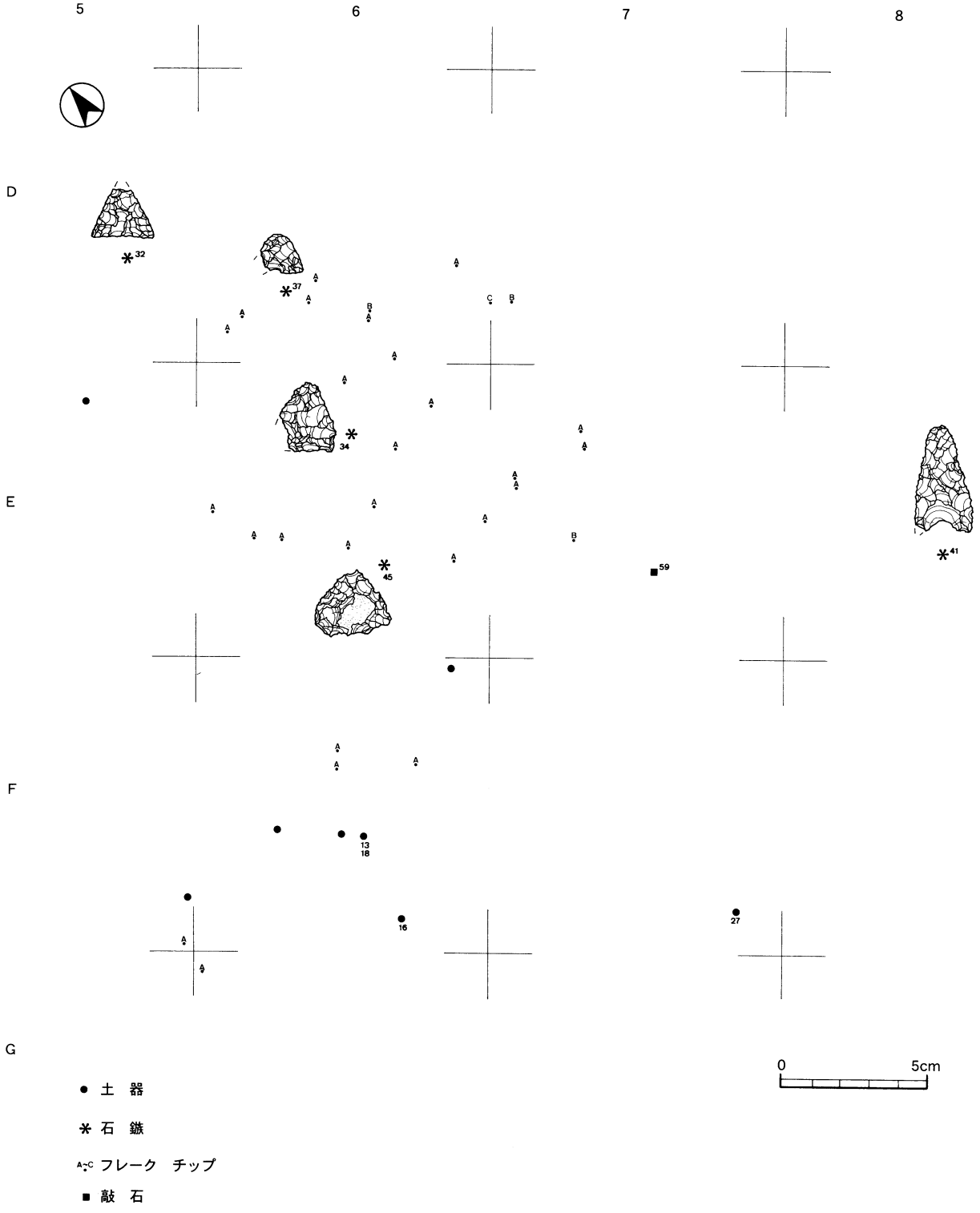


第29図　Ⅵa・Ⅶ層出土石器

表４　Ⅵａ・Ⅶ層出土石器観察表

挿図	番号	登録番号	器　種	出土区	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　材	備　　考
26	31	143	石鏃	E－5	Ⅶ	0.70＋a	1.32	0.31	0.27	黒曜石A	先端部に欠損があり,左右非対称な形状。
	32	284	石鏃	D－5	Ⅵ	1.05＋a	1.41	0.27	0.33	黒曜石A	先端部に欠損あり。
	33	131	石鏃	E－6	Ⅶ	1.51	1.40＋a	0.33	0.65	黒曜石A	脚部に欠損あり。
	34	101	石鏃	E－6	Ⅵ	1.57	1.10＋a	0.31	0.53	黒曜石A	脚部に欠損があり，左右非対称な形状。
	35	246	石鏃	F－6	Ⅶ	1.50	0.70＋a	0.21	0.25	黒曜石A	脚部に欠損あり。
	36	278	石鏃	D－6	Ⅶ	1.38	1.12	0.30	0.30	黒曜石B	一側片に微細な欠損あり。
	37	286	石鏃	D－6	Ⅵ下層	0.88	0.9＋a	0.20	0.15	黒曜石A	脚部に欠損あり。
	38	270	石鏃	D－6	Ⅶ	1.50＋a	1.45	0.58	1.14	黒曜石A	先端部に欠損あり。
	39	121	石鏃	E－6	Ⅶ	1.65＋a	1.86	0.41	0.88	頁岩	先端部に欠損あり。
	40	一括	石鏃	C－7	表採	1.60＋a	1.45＋a	0.44	0.62	チャート	先端部，脚部に欠損あり。
	41	366	石鏃	E－8	Ⅵ下層	2.42	1.30	0.28	0.89	チャート	脚部に欠損あり。
	42	14	石鏃	G－5	Ⅶ	1.90	1.40＋a	0.36	0.49	黒曜石B	脚部に欠損あり。
	43	123	石鏃	E－6	Ⅶ	1.63	1.91＋a	0.32	0.66	黒曜石D	脚部に欠損あり。
	44	330	石鏃未製品	C－7	Ⅶ	1.51	1.46	0.42	0.82	黒曜石A	左右非対称な形状。
	45	105	石鏃未製品	E－6	Ⅵ	1.51	1.75	0.39	0.92	黒曜石A	自然面，素材剥離面が残っている。
	46	266	石鏃未製品	D－6	Ⅶ	1.48	1.39	0.47	1.12	黒曜石A	自然面，素材剥離面が残っている。
27	47	394	石匙	D－9	Ⅶ	3.20	3.73	0.70	6.86	頁岩	横型で，末端部近くで抉りが入る。
	48	172	剥片	F－6	Ⅶ	1.85	1.58	0.52	1.72	黒曜石A	一側片に微細な二次調整がみられる。
	49	320	剥片	E－7	Ⅶ	2.31	1.02	0.39	1.13	黒曜石A	一側片に微細な二次調整がみられる。
	50	363	剥片	E－8	Ⅶ	2.50	1.18	0.34	0.82	黒曜石B	一側片に微細な二次調整がみられる。
	51	32	剥片	G－6	Ⅶ	1.67	2.60	0.58	2.25	黒曜石B	一側片に微細な二次調整がみられる。
	52	327	剥片	D－7	Ⅶ	2.76	1.60	0.20	1.18	黒曜石A	自然面，素材剥離面が残っている。
	53	169	剥片	F－6	Ⅶ	2.82	1.65	0.50	2.01	黒曜石A	両側片に微細な剥離面あり。
	54	362	石核	E－7	Ⅶ	2.24	1.71	0.89	3.55	黒曜石A	打面転移の頻度少なく，自然面が残る。
	55	40	石核	H－6	Ⅶ	2.96	2.20	1.62	9.83	黒曜石D	打面転移の頻度少なく，自然面が残る。
	56	85	剥片	G－5	ⅩⅤ	3.70	1.70	0.92	6.47	チャート	末端片に微細な二次調整がみられる。
	57	96	石核	G－4	ⅩⅥ	4.20	2.31	2.13	22.03	チャート	縦長剥片に打面転移を行っている。
28	58	51	石斧	G－4	Ⅶ	8.38	5.35	2.00	105.00	頁岩	刃部に欠損あり。
	59	354	敲石	E－7	Ⅵ下層	4.45	3.81	3.06	70.02	安山岩	表裏面に敲打痕がみられる。
	60	299	敲石	D－6	Ⅶ	7.20	6.38	4.37	280.12	安山岩	下端と一側片に敲打痕がみられる。
	61	334	敲石	D－8	Ⅶ	11.51	10.40	7.19	1080.00	安山岩	表面，側面に敲打面あり。
	62	63	敲石	C－4	Ⅶ	7.00	5.72	3.52	224.80	安山岩	表裏両面に研磨痕と敲打痕がみられる。
	63	383	敲石	C－10	Ⅶ	7.24	5.66	4.95	224.98	砂岩	礫全体に敲打痕がみられる。
	64	300	敲石	D－5	Ⅶ	9.71	8.29	6.62	803.10	安山岩	礫全体に敲打痕がみられる。
	65	219	敲石	E－4	Ⅶ	11.29	9.29	7.86	1030.11	安山岩	礫全体に敲打痕がみられる。
	66	171	敲石	F－6	Ⅶ	7.89	6.94	5.27	338.30	安山岩	礫全体に敲打痕がみられる。
	67	351	敲石	G－7	Ⅶ	9.77	4.89	4.82	562.08	安山岩	礫全体に敲打痕がみられる。
	68	332	敲石	C－7	Ⅶ	7.91	7.82	6.57	518.20	安山岩	礫全体に敲打痕がみられる。
29	69	393	磨石	D－10	Ⅶ	10.51	8.31	6.52	825.00	安山岩	断面は円形。
	70	348	磨石	F－8	Ⅶ	8.91	7.49	5.70	486.10	安山岩	断面は円形。
	71	382	磨石	C－9	Ⅶ	6.80＋a	6.87	4.32	258.89	砂岩	断面は楕円形。
	72	54	磨石	C－4	Ⅶ	12.64	9.02	5.16	838.00	砂岩	断面は楕円形。
	73	315	磨皿	C－6	Ⅶ	16.99	10.88	2.71	734.96	砂岩	側縁部に敲打による破損がある。

・表中の「＋ａ」は欠損部分を表す。



第30図　Ⅵa層遺物出土状況図

第31図　Ⅶ層遺物出土状況図

第6章　まとめ

高篠坂遺跡は縄文時代早期，特にその前葉を主体とした遺跡である。遺物包含層の遺物出土分布状況を概観すると，Ⅵ・Ⅶ層ともD～H－4～7区で遺物が出土し，Ⅶ層では遺跡範囲の北東寄りにあたるC～G－4～10区で遺構が検出されている。全体的に遺物量は少ないが，両層の比較ではⅦ層が優勢である。

第1節　遺構

集　石

集積遺構が21基確認されている。検出は全てⅦ層からである。各集石の隣接状況から3か所のまとまりがあると考えられる。ただし，層位・レベルの差がほぼ変わらないため時期差は確定できないが，遺物の出土層とは一致している。

遺物を共伴するのは集石1（石Ⅲ），集石5（吉田式土器），集石21（石Ⅲ？）である。また個体復元可能な土器片の出土地点に近接するものもあり，それらの土器編年も参照すれば使用時期は約9,000年前頃と考えるべきか，その後の風化等の影響とすべきか明確な判断は提示できない。

使用された礫数は8～340個余りになり，その規模も様々であるが明確なまとまりに欠ける物が多い。焼成を受けた形跡はみられるが，1基を除いて炭化物がみられないことから比較的短期間での使用であったと考えられる。

各集石を礫の集散状態，掘り込みの有無等により分類した。その結果，本遺跡の集石は掘り込みが無く，礫数も少なく分散したもの，礫数は多いが分散したものが多い傾向がみられた。以下にその分類上の特徴と該当する集石の番号を記した。

表5　Ⅶ層集石形状分類一覧表

掘り込みを有する	礫数が多い	礫が密集している	5
		礫が密集していない	なし
	礫数が少ない	礫が密集している	なし
		礫が密集していない	なし
掘り込みを有しない	礫数が多い	礫が密集している	なし
		礫が密集していない	8，9，16，18，19，20，21
	礫数が少ない	礫が密集している	1，15
		礫が密集していない	2，3，4，6，7，10，11，12，13，14，17

第2節　遺物

1　石　器（第26～29図）

44頁の「石器」の項に記載した分類を基準に石鏃，その未製品，石核と剥片・チップの出土関係を観察した。出土した石材はほぼ県内産で占められる。なかでも桑ノ木津留産の石材（本報告書では黒曜石Aとした）が圧倒的に多く，その近隣の霧島系（同じく黒曜石B）がこれに次ぐ。出土状況図からこれらを使用した石鏃，石鏃未製品とフレーク・チップが密接に関係している状況が認められる。

このことから本遺跡内で製作を行ったと判断した。

製作技術・形状を観察した結果からは，以下のような傾向がみられた。石鏃は１点を除き最大長（平均1.39㎝）・最大幅（平均1.23㎝）とも２㎝以内に収まり，形状的には長幅の比率差があまり無く，厚さも最大0.58㎝で小型のものが多いと言える。重量も１点を除き１ｇ以内で軽量である。先端部の角度は29°～96°の範囲で特に60°前後のものが多くみられ，やや鋭利さに欠ける物が多い。平均するとⅥ層出土のものが59°，Ⅶ層出土のものが63°である。層序による顕著な差はみられない。最大幅は胴部中央よりやや下方で計測できる傾向にある。断面は凸レンズ状をなすものが多い。

基部の抉りは直線的，もしくは若干の抉りが入るものが大半である。形状の統一性はない。調整は表裏面ともに丁寧な調整がなされている。

敲石，磨り石は礫表面にのこされた使用痕から共用されたことがうかがえる。他遺跡の出土遺物の例からも，同一個体内で複合した機能を併せ持つ類例が多く報告されており，本遺跡もその例にもれない。このような機能を持つ遺物は14点中５点である。

２　土器（第19～25図）

全体的な遺物量こそ少ないものの，縄文時代早期の土器がⅦ層を中心に出土している。土器は復元可能なものが５個体あり，土器片は少量である。各土器の編年を基準にⅠ～Ⅳ類に分類した。

Ⅰ－Ａ類は岩本式土器に相当する。同型式の編年が考察できる良好な資料が出土している岩本遺跡（指宿市）を参照した場合，古段階に含まれるものとされる。口唇部外面には刻みを施すため正面の形状が小波状になる。断面形は抉れ気味に内面に傾斜する。口唇部内面には明瞭な段が残る。口縁部には貝殻腹縁部を横位に連続して刺突したものを２列巡らせる。

出土資料がごく一部のため胴部以下の文様はみられず，外面は胴部がナデ調整，口縁部内面以下もナデ調整がなされている。

Ⅰ－Ｂ類は岩本式土器に相当する。Ｆ－５・6，Ｇ－４区で出土した。口唇部は内面には明瞭な段が残っている。口縁部外面には貝殻腹縁部を縦位に連続して刺突をし，その直下に貝殻腹縁による刺突文を１条巡らせる。胴部以下は外内面ともにナデによる調整を行っている。小牧遺跡（指宿市）の出土遺物を参照した場合，新段階に含まれるものとされる。

Ⅱ－Ａ類は小牧遺跡（指宿市）で相当量が出土した吉田式土器に相当する。Ｈ－４・５，Ｆ－５区で出土した。

Ⅱ－Ｂ類は吉田式土器に相当する。口唇部はキザミを斜位に密に施す。断面形は外面に緩やかに外傾する。口縁部上端部には横位に刺突文を２列施し，その下に逆三角形の通称くさび形突帯を２列貼り付ける。突帯の間隔は極めて近く，上端部でそれぞれ接している。突帯の上部には深い刺突がなされている。

この型式の胴部の施文は「条痕＋押引き」が一般的であるが，この土器は，貝殻腹縁部を横位に連続して刺突したものを10列前後巡らし，次いで貝殻腹縁部を縦位に右方向に押し引いて施文する。このパターンの繰り返しは，異なる施文を交互に繰り返すことによって文様に変化を持たせる効果をねらったのだろうか。いずれにせよ，この施文パターンは県内での出土例が少なく貴重な資料となる。

Ⅱ－Ｃ類は吉田式土器に相当する。Ｆ－5，6区で出土した。口唇部はキザミを斜状に密に施す。

断面形は外面に傾斜する。

口縁部から底部にかけて貝殻条痕文を斜位に施した後，口縁部を丁寧に磨き逆三角形の突帯を貼り付けている。突帯間の間隔は空いている。突帯周辺は器面を丁寧に磨り消している。内面は丁寧なナデ調整を行っている。突帯部分の施文を簡略化し，貝殻条痕文を斜状に施文するスタイルは石坂式土器との関係性が考えられ，この土器形式の最終段階にあたるものと考えられる。

Ⅲ類土器は石坂式土器に相当する。肥厚した口縁部に対のコブ状突起がつき，ゆるやかな波状口縁を形成する。口唇部は肥厚している。器面全体に条痕文を綾杉状に施す。この形状の石坂式土器は出土例が少なく貴重な資料となる。

Ⅳ類土器

Ⅳ類土器は手向山式土器に相当する。F・G－7区で出土した。胴部屈曲部にはつまみ出しによる突帯にキザミを施し，これを挟み上部には楕円押型文を施文した後に縦位の沈線をやや斜状に施している。楕円文は沈線文との重複により，擦り消されている。下部は楕円押型文のみを施文している。上部は煤の付着が全体に及び黒褐色を呈しており，胴部下部の明褐色と対照的である。

出土状況はⅣ類を除いて分散する傾向である。最大約20m程離れて接合する資料もみられる。周辺地形よりレベルが低く，同じレベルの面がひろがる地点で出土する傾向にある。

また，Ⅰ－B類土器，Ⅲ類土器は1号集石，Ⅱ－C類土器は5号集石が近接して検出されている。これらの集石は本遺跡でも特にまとまりがあり形状のしっかりしたものである。

遺物は土器・石器共に出土量は少ないがそれぞれがある程度のまとまりをもって出土している。集石遺構は全体的に礫数が少なく，散在した傾向を持つ。焼成を受けた形跡はみられるが，炭化物等がみられないことから比較的短期間の使用であったようだ。以上のことから長期的な生活地とは考えにくい。

《参考文献》

1　鹿児島県教育委員会　「九日田・供養之元・前原和田遺跡」　鹿児島県埋蔵文化財報告書(36)　2002

2　鹿児島県教育委員会　「小牧3A・岩本遺跡」　鹿児島県埋蔵文化財報告書(15)　1996

3　鹿児島県教育委員会　「計志加里遺跡」　鹿児島県埋蔵文化財報告書(38)　2002

4　田代町教育言委員会　「ホケノ頭遺跡」　田代町埋蔵文化財報告書(4)　2001

5　財部町教育委員会　「横尾遺跡」　財部町埋蔵文化財報告書

6　財部町教育委員会　「財部町郷土史」改訂版　1997

図　　版

遺跡遠景

調査風景

土層断面

調査風景

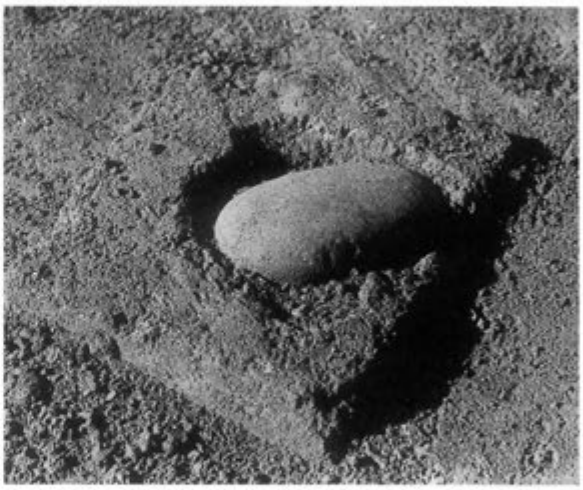
図版１　遺跡遠景，調査風景，土層断面

Ⅶ層遺物出土状況

Ⅳ類土器

Ⅱ－Ａ類土器

Ⅱ－Ｃ類土器



磨石

図版２　Ⅶ層出土遺物

Ⅶ層集石検出状況

1号集石

5号集石

3号集石

11号集石

図版3　Ⅶ層出土遺構

Ⅶ層集石・遺物

10号集石

磨皿・磨石

19号集石

20号集石

図版４　Ⅶ層出土遺構

Ⅱ－Ａ類土器

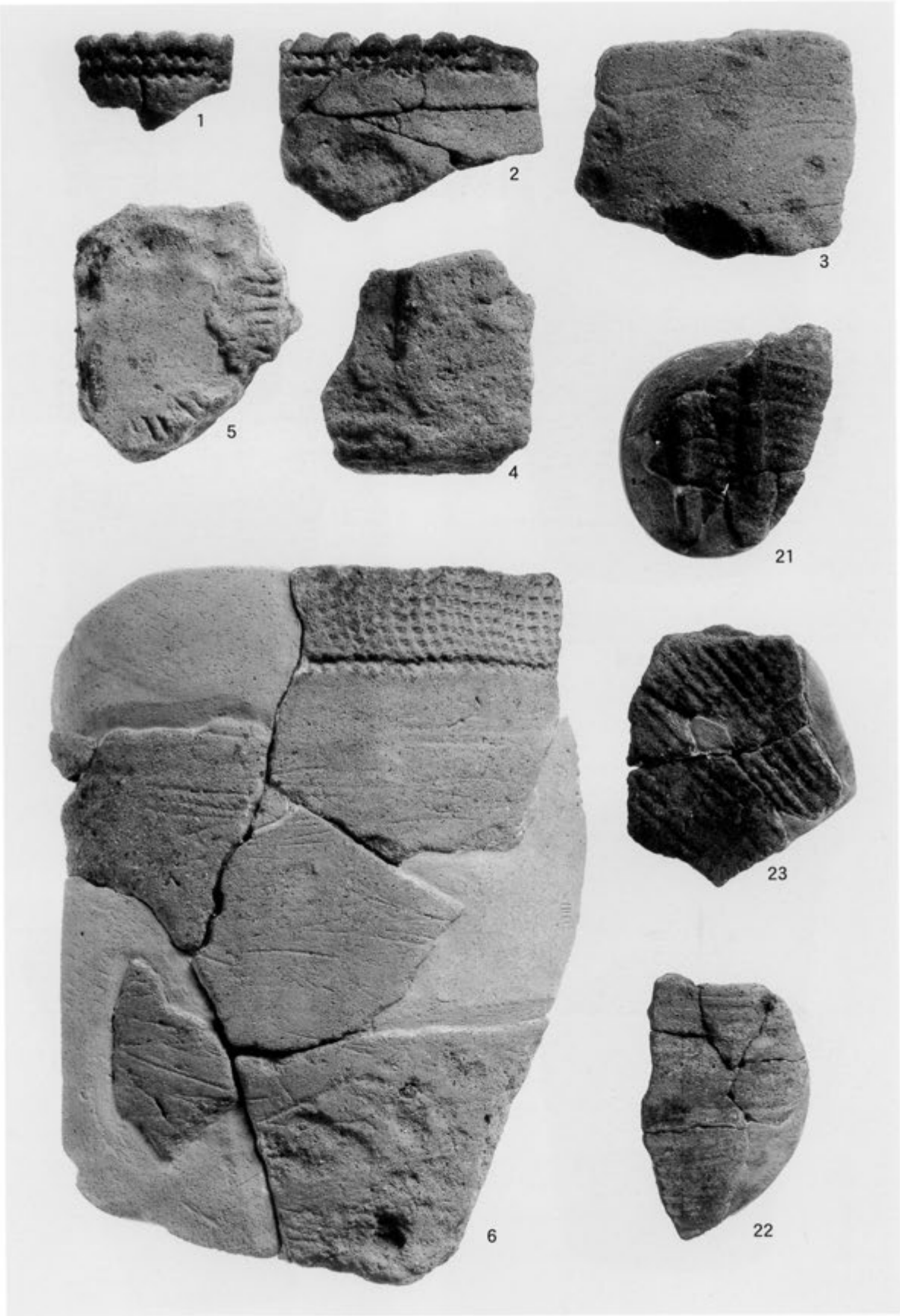
Ⅱ－Ｃ類土器

Ⅱ－Ｃ類土器

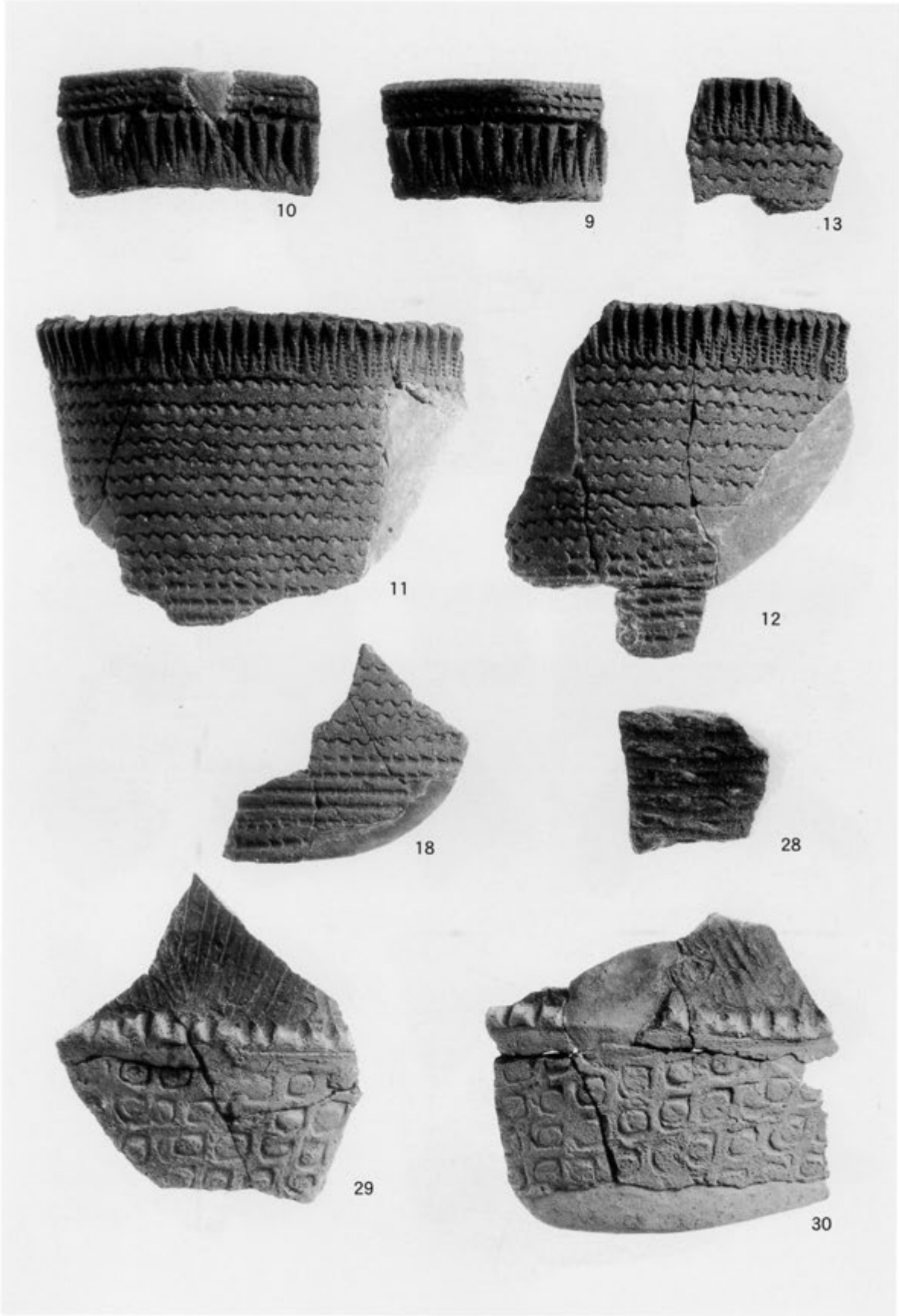
Ⅱ－Ｂ類土器

Ⅲ類土器

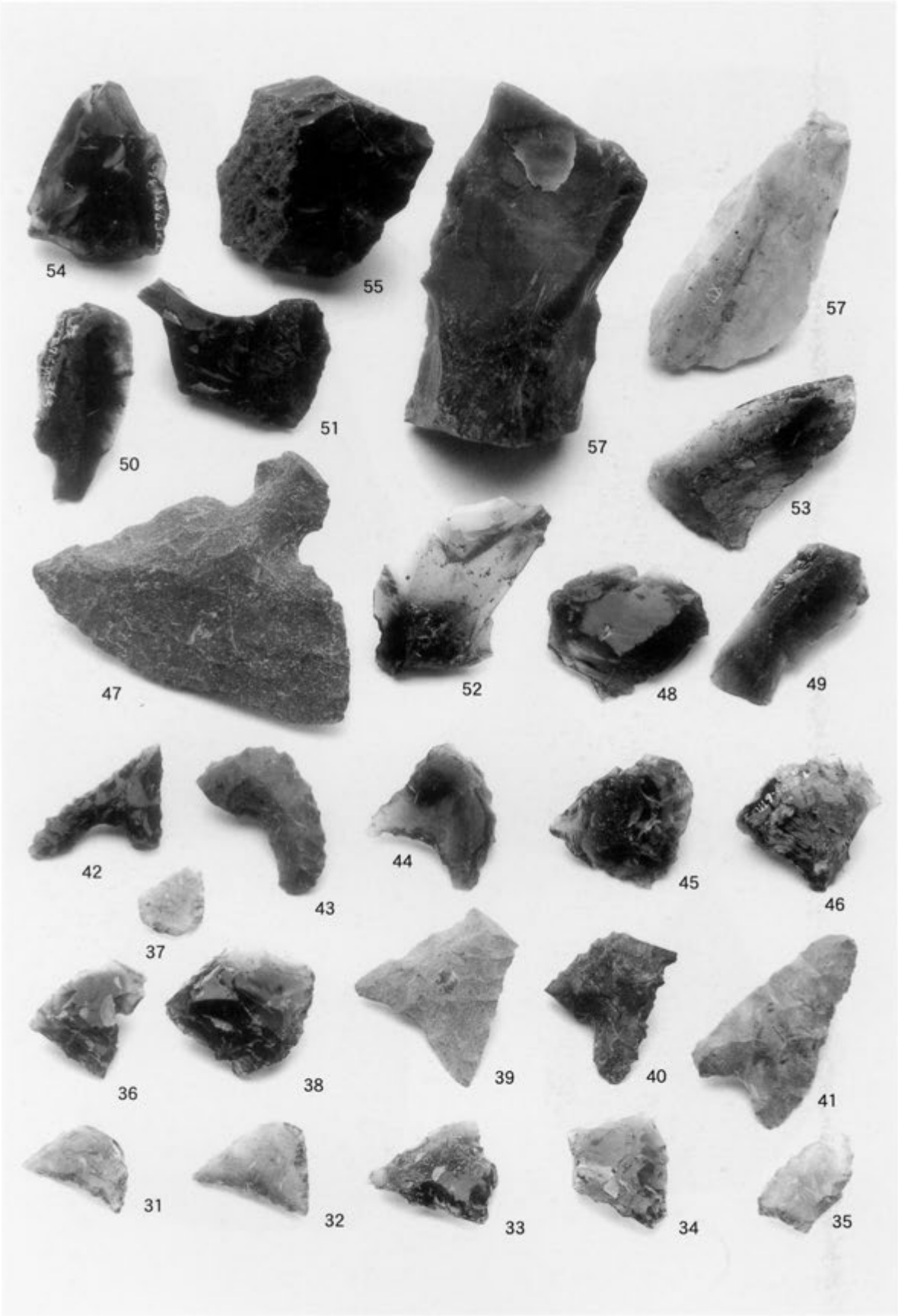
図版５　Ⅶ層出土土器



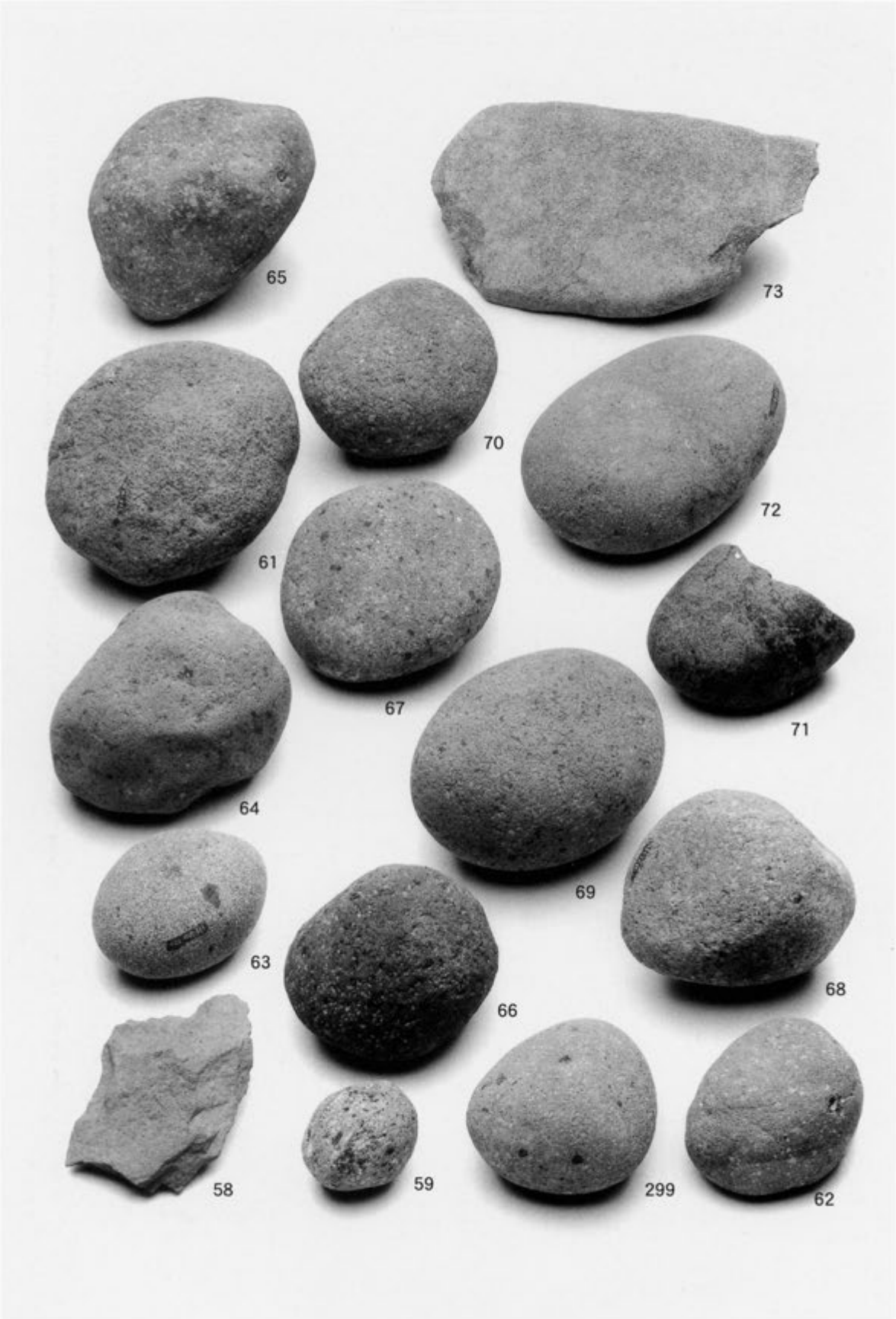
図版6　Ⅶ層出土土器



図版７　Ⅶ層出土土器



図版８　Ⅵa・Ⅶ層出土石器



図版９　Ⅵa・Ⅶ層出土石器

永磯遺跡

報告書抄録

ふりがな	ながいそいせき
書名	永磯遺跡
副書名	東九州自動車道（末吉ＩＣ～国分ＩＣ間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅲ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	61
編著者名	岩戸孝夫・馬籠亮道
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4461　国分市上之段1175番地１　TEL0995－48－5811
発行年月日	2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
永磯（ながいそ）	鹿児島県姶良郡（かごしまけんあいらぐん）福山町佳例川字（ふくやまちょうかれいがわあざ）永磯（ながいそ）	464518	62－48－00	31°42′17″	130°53′33″	確認調査 1997 0421 ～ 1997 0630 本調査 1997 0701 ～ 1998 0331	13,560㎡	東九州自動車道建設（末吉ＩＣ～国分ＩＣ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永磯遺跡	包含地	旧石器時代	礫群遺構　５基 土坑遺構　３基	三稜尖頭器 台形石器 ナイフ形石器	
		縄文時代草創期		石鏃，細石刃，土器片	
		早期	集石遺構　18基 落し穴状遺構 26基	桑ノ丸３類土器，押型文土器，下剥峰式土器，塞ノ神式土器 石鏃，石斧，磨石，石皿	
		前・中期	落し穴状遺構 12基	石鏃，スクレイパー，石皿	
		後・晩期	落し穴状遺構 ２基	石鏃，スクレイパー，石皿	
		古代～近代	近代土坑　１基 溝状遺構	石鏃	

遺跡の位置図

目　　次

報告書抄録

遺跡の位置図

目次

第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　調査の経過 …… 3
第２章　調査の位置と環境 …… 6
　第１節　地理的環境 …… 6
　第２節　歴史的環境 …… 6
第３章　遺跡の層位 …… 9
第４章　確認調査 …… 12
第５章　本調査 …… 15
　第１節　発掘調査の方法 …… 15
　第２節　旧石器時代 …… 15
　第３節　縄文時代 …… 24
　第４節　古代・中世・近世 …… 75
第６章　自然科学分析報告 …… 90
第７章　まとめ …… 94

表　目　次

第１表　旧石器時代土坑観察表 …… 19
第２表　旧石器時代出土石器観察表 …… 21
第３表　Ⅹ層出土石器観察表 …… 24
第４表　縄文時代早期落し穴状遺構観察表 …… 39
第５表　縄文時代早期土器観察表 …… 48
第６表　Ⅶ・Ⅵ層出土石器観察表(1) …… 51
第７表　Ⅶ・Ⅵ層出土石器観察表(2) …… 52
第８表　Ⅴ層落し穴状遺構観察表 …… 63
第９表　Ⅴ層出土石器観察表 …… 68
第10表　Ⅳ層落し穴状遺構観察表 …… 74
第11表　Ⅳ層出土石器観察表 …… 74

第12表　Ⅰ層近代土坑観察表 …… 75
第13表　Ⅲ層以下出土石器観察表 …… 75
第14表　Ⅲ層出土土器観察表(1) …… 88
第15表　Ⅲ層出土土器観察表(2) …… 89

挿　図　目　次

第１図　遺跡と周辺の地形図 …… 7
第２図　調査範囲及びグリッド配置図 …… 8
第３図　土層模式柱状図 …… 9
第４図　土層断面図(1) …… 10
第５図　土層断面図(2) …… 11
第６図　土層断面図　確認トレンチ(1) …… 12
第７図　土層断面図　確認トレンチ(2) …… 13
第８図　確認調査トレンチ配置図 …… 14
第９図　礫群遺構(1) …… 15
第10図　礫群遺構(2) …… 16
第11図　旧石器時代礫群・土坑遺構分布図 …… 17
第12図　土坑遺構(1) …… 18
第13図　土坑遺構(2) …… 19
第14図　旧石器時代出土遺物分布図 …… 20
第15図　旧石器時代出土石器(1) …… 22
第16図　旧石器時代出土石器(2) …… 23
第17図　Ⅹ層出土石器 …… 24
第18図　Ⅵ・Ⅶ層集石遺構(1) …… 27
第19図　Ⅵ・Ⅶ層集石遺構(2) …… 28
第20図　Ⅵ・Ⅶ層集石遺構(3) …… 29
第21図　Ⅵ・Ⅶ層集石遺構(4) …… 30
第22図　Ⅵ・Ⅶ層集石遺構(5) …… 31
第23図　Ⅵ～Ⅹ層集石落し穴状遺構分布図 …… 32
第24図　Ⅵ・Ⅶ層落し穴状遺構(1) …… 36
第25図　Ⅵ・Ⅶ層落し穴状遺構(2) …… 37
第26図　Ⅵ・Ⅶ層落し穴状遺構(3) …… 38
第27図　Ⅵ・Ⅶ層落し穴状遺構(4) …… 39
第28図　早期出土遺物分布図 …… 40
第29図　Ⅵ・Ⅶ層出土土器(1) …… 43
第30図　Ⅵ・Ⅶ層出土土器(2) …… 44

第31図　Ⅵ・Ⅶ層出土土器(3) …… 45
第32図　Ⅵ・Ⅶ層出土土器(4) …… 46
第33図　Ⅵ・Ⅶ層出土土器(5) …… 47
第34図　Ⅵ・Ⅶ層出土石器(1) …… 53
第35図　Ⅵ・Ⅶ層出土石器(2) …… 54
第36図　Ⅵ・Ⅶ層出土石器(3) …… 55
第37図　Ⅵ・Ⅶ層出土石器(4) …… 56
第38図　Ⅵ・Ⅶ層出土石器(5) …… 57
第39図　Ⅵ・Ⅶ層出土石器(6) …… 58
第40図　Ⅵ・Ⅶ層出土石器(7) …… 59
第41図　Ⅵ・Ⅶ層出土石器(8) …… 60
第42図　Ⅵ・Ⅶ層出土石器(9) …… 61
第43図　前中期落し穴状遺構分布図 …… 64
第44図　Ⅴ層落し穴状遺構(1) …… 65
第45図　Ⅴ層落し穴状遺構(2) …… 66
第46図　Ⅴ層落し穴状遺構(3) …… 67
第47図　Ⅴ層出土石器(1) …… 67
第48図　Ⅴ層出土石器(2) …… 68
第49図　Ⅳ層集石遺構落し穴状遺構 …… 70
第50図　Ⅰ～Ⅳ層遺構分布図 …… 71
第51図　Ⅳ・Ⅴ層出土遺物分布図 …… 72
第52図　Ⅳ層出土石器(1) …… 73
第53図　Ⅳ層出土石器(2) …… 74
第54図　Ⅰ層近代土坑 …… 75
第55図　溝状遺構(1) …… 76
第56図　溝状遺構(2) …… 77
第57図　Ⅲ層以下出土遺物分布図 …… 78
第58図　Ⅲ層出土土器(1) …… 82
第59図　Ⅲ層出土土器(2) …… 83
第60図　Ⅲ層出土土器(3) …… 84
第61図　Ⅲ層出土土器(4) …… 85
第62図　Ⅲ層出土土器(5) …… 86
第63図　Ⅲ層出土石器及びその他の石器 …… 87

図　版　目　次

図版１ …… 96
図版２ …… 97

図版 3 …… 98
図版 4 …… 99
図版 5 …… 100
図版 6 …… 101
図版 7 …… 102
図版 8 …… 103
図版 9 …… 104
図版10 …… 105
図版11 …… 106
図版12 …… 107
図版13 …… 108
図版14 …… 109
図版15 …… 110
図版16 …… 111
図版17 …… 112
図版18 …… 113
図版19 …… 114
図版20 …… 115
図版21 …… 116

第１章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道（末吉ＩＣ～国分ＩＣ間）の建設を計画し，工事を行った。この建設工事に伴い，鹿児島県教育委員会・日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所・鹿児島県立埋蔵文化財センターとの間で協議が重ねられ，鹿児島県立埋蔵文化財センターは工事予定地を対象に平成６年10月と平成７年５月に埋蔵文化財の分布調査を実施した。

分布調査の結果，工事予定地に13箇所の遺物散布地や確認調査の必要な地点が所在することが判明した。そこで，平成８年４月から用地買収等の条件が整った区域を対象に順次確認調査を実施することとなった。

永磯遺跡は，調査対象面積約13,560㎡であり，平成９年度は確認調査を先行して実施し，その後本調査に移し，7,100㎡の調査を実施した。平成10年度は6,460㎡を本調査の対象とした。

第２節　調査の組織

平成９年度確認調査及び本調査

事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

調査主体者　鹿児島県教育委員会

企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	吉元　正幸
	〃	次長兼総務課長	尾﨑　　進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査課係長	新東　晃一
	〃	主任文化財主事兼第二調査課係長	立神　次郎
調査担当者	〃	主任文化財主事兼第二調査課係長	立神　次郎
	〃	文化財主事	児玉健一郎
〃	〃		立部　　剛
	〃	文化財研究員	福永　修一
〃	〃		有馬　孝一
	〃	文化財調査員	西園　勝彦
調査事務担当者	〃	主　　査	前屋敷裕徳
	〃	〃	政倉　孝弘
	〃	主　　事	追立ひとみ

平成10年度緊急発掘調査

事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

調査主体者　鹿児島県教育委員会

企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	吉永　和人
		次長兼総務課長	尾﨑　　進
		主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
		課長補佐兼第一調査課係長	新東　晃一
		主任文化財主事兼第二調査課係長	立神　次郎
調査担当者		主任文化財主事兼第二調査課係長	立神　次郎
		文化財主事	井ノ上秀文
		〃	溝口　　学
		文化財研究員	有馬　孝一
		〃	西村　喜一
調査事務担当者		主　　査	政倉　孝弘

平成13年度整理・報告書作成事業

事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

調査主体者　鹿児島県教育委員会

企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	井上　明文
作成企画者	〃	次長兼総務課長	黒木　友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東　晃一
	〃	主任文化財主事兼課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査課係長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事	長野　眞一
作成担当者	〃	文化財研究員	宇都　俊一
	〃	〃	馬籠　亮道
事務担当者	〃	主　　査	前田　昭信
	〃	〃	栗山　和己

平成14年度整理・報告書作成事業

事業主体者　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所

調査主体者　鹿児島県教育委員会

企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	井上　明文
作成企画者	〃	次長兼総務課長	田中　文雄
	〃	調査課長	新東　晃一
	〃	課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査課係長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事	長野　眞一

作成担当者	〃	文化財主事	岩戸　孝夫
	〃	文化財研究員	馬籠　亮道
事務担当者	〃	主　　査	前田　昭信
	〃	〃	栗山　和己

第3節調査の経過

調査の経過については，日誌抄をもってかえる。

確認調査

平成9年4月

21日より作業開始。1～8トレンチの設定・掘り下げ。Ⅱ層から土師器出土。

平成9年5月

1～7トレンチ拡張。1～9トレンチの調査。1トレンチにて土坑検出。2トレンチにてⅦ層より土器片，Ⅷ層より集石検出。4トレンチにてナイフ形石器出土。5トレンチにてⅧ層より集石検出。8トレンチにて薩摩火山灰層Ⅻ層より黒曜石チップ数点出土。11トレンチにてⅦ層よりスクレイパー1点出土。

B－5・6区のⅣ層の調査。B－5区にて土器片，石鏃1点，石皿1点出土。

平成9年6月

1～9トレンチの調査。1トレンチにてⅧ層より黒曜石チップ出土，シラス層まで掘り下げ終了。3トレンチにてⅧ層より黒曜石片出土。9トレンチにてⅤa層より黒曜石片出土，Ⅹ層より細石刃2点出土。10～17トレンチ設定，掘り下げ。10トレンチにてⅥ層より土器片，黒曜石原礫1点，剥片1点，Ⅶ層より土器片，黒曜石片出土。11トレンチにて表土より土器片出土，Ⅱ層下より畝跡検出，Ⅲ層より土師器出土。12トレンチにてⅦ層より集石検出。14トレンチにてⅢ層より土器片，Ⅳ層より土器片，石鏃1点出土。15トレンチにてⅢ層上面に溝状遺構検出。16トレンチにてⅢ層より陶器1点，Ⅳ層より土器片出土。

以上の確認調査の結果を判断し，翌月より本調査に移行することとなる。

本調査

平成9年7月

9，10，12～14，16，17トレンチの調査。10トレンチにて黒曜石石核出土。13トレンチにてⅩ層より黒曜石片，Ⅺ層より黒曜石剥片出土。17トレンチにてⅫ層より黒曜石剥片・チップ出土。

A－21，B～D－20，C～E－16～19区，C－15区の表土剥ぎ，Ⅱ層からⅣ層の調査。D・E－18・19区にてⅢ層より土器片9点，陶器2点出土，溝状遺構検出。C－15・16区，D－16・17区にてⅢ層より溝状遺構検出。

平成9年8月

B～D－20区，C～F－18・19区，C－15・16区，D・F－16・17区のⅣ層からⅧ層，Ⅸ層の調査。D－19区にてⅤ層より溝状遺構検出。D・E－19区にてⅣ層より黒曜石剥片，石鏃1点，Ⅴ層上面で土坑落し穴3基を検出。

平成9年9月

B－20区，C・D－18～20区，E・F－18・19区のⅥ層からⅩⅤ層までの調査。Ⅹ層より石鏃１点，黒曜石片出土。細石刃出土。

C～E－16・17区のⅥ層の調査。Ⅵ層より石鏃１点，黒曜石片，剥片出土。E－17区にて溝状遺構検出。D－17区にてⅦ層下より石鏃１点出土。F・G－16・17区の表土剥ぎ，重機によるⅣ・Ⅴ層掘り下げ，Ⅵ層の調査。

平成９年10月

C～E－16・17区のⅧ～ⅩⅤ層の調査。D－16区にてⅪ層より黒曜石剥片出土。D－17区にてⅩ層より黒曜石剥片，チャート剥片出土，ⅩⅡ層より黒曜石剥片出土。F・G－16・17区のⅥ層～ⅩⅤ層の調査。G－17区にてⅦ層より凹石，石鏃２点出土，Ⅷ層上面にて集石検出，ⅩⅢ層上面より礫群検出。F－17区にてⅦ層より土器片出土。F・G－18区のⅥ～Ⅹ層の調査。H～K－１～３区の表土～Ⅴ層を重機にて掘り下げ。Ⅵ層の調査。

平成９年11月

H～K－１～３区のⅥ～Ⅶ層の調査。落し穴４基，集石検出，土器片，黒曜石出土。H～J－４・５区のⅢ層～Ⅳ層の調査。H・I－４・５区にて溝状遺構検出，土器片，土師器，青磁，石鏃出土。

H－５区にて炉跡検出。H～J－６・７区のⅢ層からⅣ層の調査。Ⅳa層上面より土坑，溝状遺構検出。J－７区にてⅢ層より土師器出土。H～J－８・９区のⅠ層からⅤ層の調査。土坑（I－９区），溝状遺構検出。H－９区にてⅢ層より土師器出土。

平成９年12月

H～K－１～３区のⅧ～ⅩⅦ層の調査。礫集中部分検出。H～J－４・５区のⅥ～ⅩⅢ層の調査。集石検出，土器片，細石刃（Ⅺ層）出土。H～I－６・７区のⅥ～ⅩⅢ層の調査。チャート剥片，黒曜石出土。H～J－８・９区のⅥ～ⅩⅥ層の調査。黒曜石出土。H～J－10～15区の表土剥ぎ，Ⅰ層～Ⅲ層の調査。

平成10年１月

H～J－１～３区のⅦ層～ⅩⅤ層の調査。土坑（H－１区），集石（H－３区）検出。H～J－４・５区のⅩⅢ層～ⅩⅤ層の調査。落し穴検出（５基）。H～J－６・７区のⅪ層～ⅩⅤ層の調査。石鏃，土器片出土（Ⅹ層）。チャート剥片出土。H～J－８・９区のⅪ層～ⅩⅢ層の調査。黒曜石チップ。H～J－10・11区のⅢ層の調査。溝状遺構検出。H～J－12・13区のⅣ層の調査。H－19区の調査。溝状遺構検出。D・E－20・21区のⅢ層の調査。溝状遺構検出。

平成10年２月

H～J－１～７区のⅦ層～ⅩⅤ層の調査。落し穴（４号～16号）の調査。H～J－６・７区Ⅶ層からⅥ層の調査。H～J－11区。ⅩⅢ層からⅩⅥ層の調査。黒曜石剥片出土。H～J－12・13区のⅦ層からⅧ層の調査。先行トレンチ設定。H～J－14・15区のⅥ層からⅦ層の調査。

平成10年３月

E～G－４～７区のⅢ層の調査。土師器，青磁，白磁，成川式土器，土錘出土。E～G－21区の下層確認トレンチの調査。H～J－12・13区のⅩⅢ層からⅩⅥ層の調査。H～J－11区のⅩⅤ層からⅩⅥ層の調査。黒曜石剥片出土。H～J－14・15区のⅩ層～ⅩⅤ層の調査。落し穴（F－20区）断面の土層

剥ぎ取り。３月31日，平成９年度調査終了。

平成10年５月

Ｅ～Ｇ－５～７区のⅢ層の調査。土師器，須恵器，土錘出土。Ｅ－４区，Ｇ－１・２区，Ｆ－２区Ⅵ層およびＥ・Ｆ－２・３区Ⅶ層の調査。土器片，石鏃，磨石，スクレイパー，剥片出土。

平成10年６月

Ｅ～Ｇ－１～３区のⅦ層の調査。土器片・黒曜石・剥片出土。Ｇ－13・15区のⅢ～Ⅴ層の調査。石鏃・石皿出土。Ｅ～Ｇ－６・７区のⅢ～Ⅳ層の調査。土師器出土。Ｅ～Ｇ－４～６区のⅥ層の調査。石鏃・石皿・土器出土。Ｄ～Ｇ－９～11区のⅢ層の調査。青磁・白磁・土器出土。

平成10年７月

Ｅ～Ｇ－５・６区のⅢ層の調査。土師器・須恵器出土。Ｅ～Ｇ－14・15区のⅥ・Ⅶ層の調査。石鏃・磨石・土器出土。Ｆ～Ｈ－10・11区のⅢ層溝状遺構の埋土並びにⅣ層上面の調査。土器・石鏃・礫出土。Ｉ－16区のⅣ層の調査。土器片・石鏃出土。

平成10年８月

Ｄ～Ｆ－９・10区のⅣ層の調査。土師器・磨石・礫出土。Ｅ・Ｆ－５・６区のⅢ～Ⅵ層の調査。土師器・土錘・石鏃出土。Ｅ～Ｇ－12区のⅣ層の調査。Ｉ・Ｊ－16区のⅥ層の調査。石鏃出土。

平成10年９月

Ｅ・Ｆ－12区のⅥ・Ⅶ層の調査。押型文土器・石鏃出土。Ｅ・Ｆ－４・５区のⅩ～Ⅻ層の調査。黒曜石チップ等出土。

平成10年10月

Ｅ・Ｇ－14・15区のⅩ～Ⅻ層の調査。剥片出土。

平成10年11月

Ｅ－３区，Ｆ－２区のⅦ層の調査。土器・チャート・黒曜石片出土。Ｇ－１・２区，Ｆ－３区のⅦ層の調査。土器・石鏃・剥片・磨石出土。Ｉ～Ｋ－16・17区のⅩ～Ⅺ層の調査。石鏃・剥片出土。

平成10年12月

Ｆ・Ｇ－14区のⅩⅤ層の調査。三稜尖頭器・スクレイパー・剥片・黒曜石剥片等出土。Ｉ～Ｋ－16・17区のⅪ～ⅩⅤ層の調査。チャート・黒曜石出土。

平成11年１月

Ｆ・Ｇ－２・３区のⅦ層の調査。炭化物・チャート出土。Ｈ～Ｋ－18・19区のⅪ～ⅩⅤ層の調査。台形土器・黒曜石・チャート等出土。Ｈ～Ｋ－16・17区のⅪ～ⅩⅤ層の調査。黒曜石・チャートの剥片出土。

平成11年２月

Ｈ～Ｊ－16・17区のⅫ～ⅩⅤ層の調査。黒曜石剥片出土。Ｇ－１区のⅦ層の調査。菱形押型文土器片出土。

平成11年３月

Ｋ－17区のⅫ～ⅩⅤ層の調査。黒曜石・チャート・頁岩の剥片出土。３月31日，平成10年度調査終了。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

永磯遺跡は，鹿児島県姶良郡福山町佳例川に所在する。

遺跡の所在する福山町は，鹿児島県中央部・鹿児島湾奥に位置し，北は国分市，南は曽於郡輝北町・垂水市，東は曽於郡財部町・末吉町・大隅町に隣接し，西は鹿児島湾に面している。標高380mの丘陵性の火山灰台地をなす牧之原地域にあり，地元でいう「上場地域」に位置する。なお，海岸地域は「下場地域」と呼んでいる。

永磯遺跡が所在する佳例川地区は，上述の上場にあたるが，遺跡はさらに北方の町境付近に位置する。この地域は，平坦な丘陵性台地から山地が卓越する地域に漸移しており，これらの山地によって小規模な台地や丘陵が分断されて散在する。本遺跡はこうした小規模な台地上に位置する。

第２節　歴史的環境

永磯遺跡は，福山町比曽木野地区に所在する。

近年，特に比曽木野地区では，東九州自動車道建設に伴う発掘調査により遺跡の調査成果が加えられ，考古学的にも大変貴重な資料が提供されており，早い時期から当地において人々の活動が展開されていたことを窺わせる。

旧石器時代

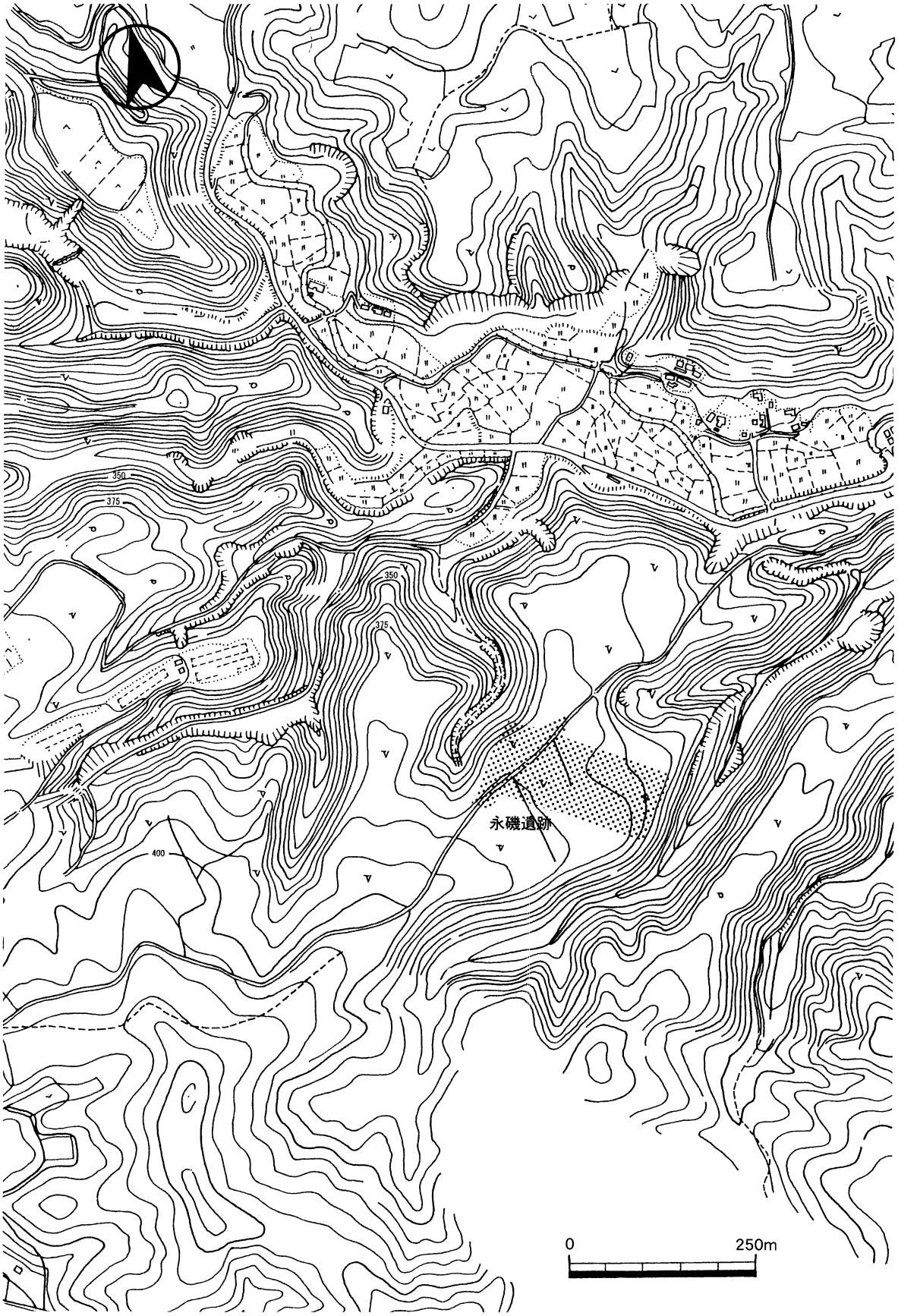
本遺跡に近い福山城ヶ尾遺跡では，平成10・11年度に発掘調査を行い，ナイフ形石器文化期（約２万年前）の遺構・遺物が発掘されている。隣接する前原和田遺跡でも同じくナイフ形石器文化期の遺物が確認されている。このほか，福山町教育委員会を中心とした発掘調査や情報収集により，比曽木野地区には多くの遺跡が集中することが知られるようになり，当地区は，先史時代から生活の舞台となっていたことが明らかにされつつある。

縄文時代

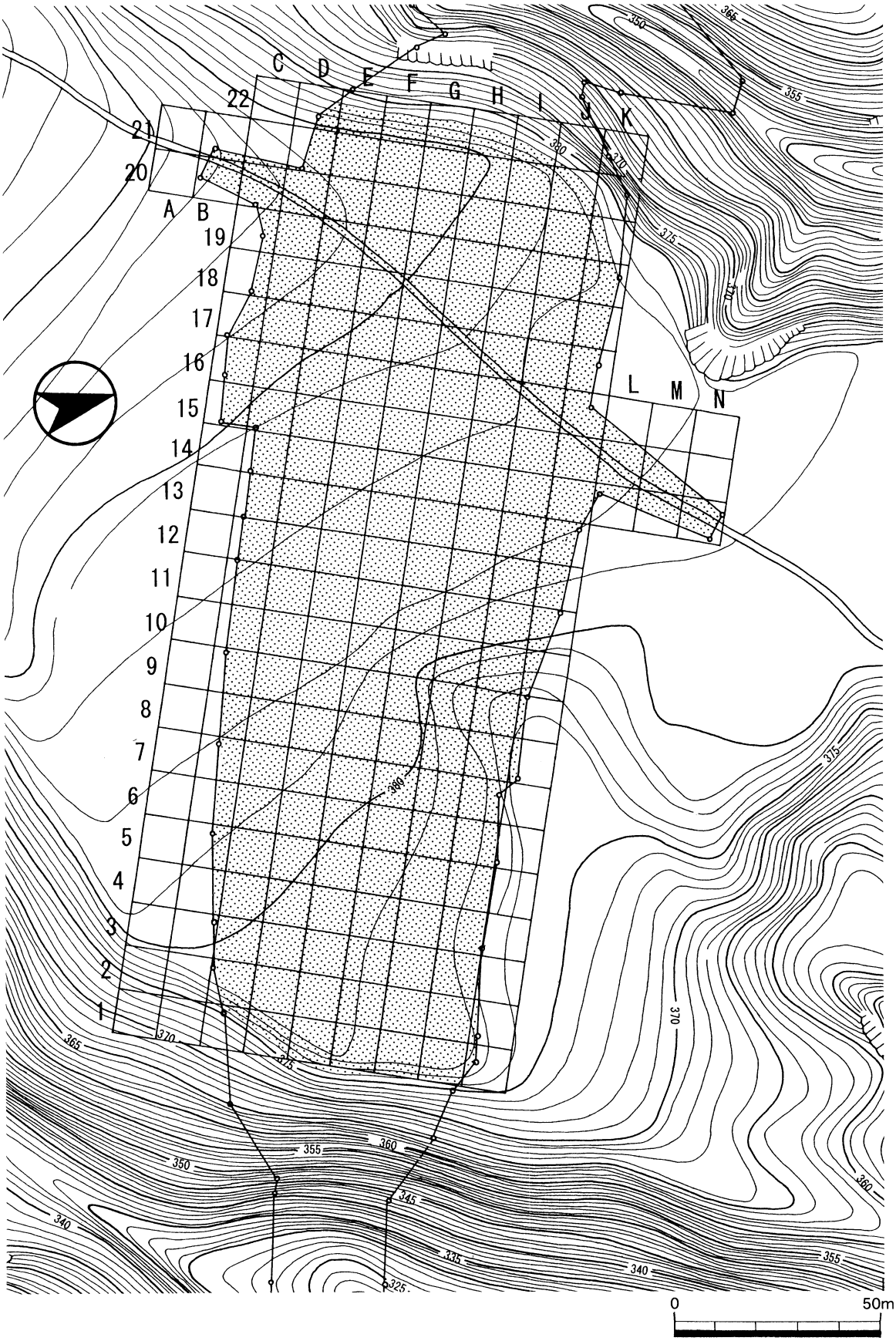
東九州自動車道建設に伴う発掘調査により当地区には隣接の供養之元遺跡をはじめ，多数の縄文時代の遺跡が確認されている。また，福山町教育委員会の調査報告においても，イラケ谷遺跡，寺屋敷遺跡等多くの縄文時代の遺跡所在が報告されている。旧石器時代と比較すると福山町内陸部のシラス台地上に多く確認されるようになり，シラス小台地上を基盤にした狩猟採集生活が本格的に繰り広げられるようになった様子が窺える。

弥生時代以後

弥生時代から古代にかけての遺跡数は少なくなる。籐兵衛坂段遺跡では，文明ボラにパックされた古代の畠跡が検出されるなどの考古学的な成果も報告されるようになり，これらの考古学的資料や文献等の資料から推測すると，当地域は政治・経済・軍事面においても重要な地域として積極的に開かれていった様子が窺われる。中世は，島津氏と肝付氏をはじめとする諸豪族の激しい政争の場となったが，近世に入り，島津氏の統一が完成されるとともに，福山もその配下に置かれ，福山牧の創設等により，藩の重要な牧場としての地位を確立していったようである。



第１図　遺跡と周辺の地形図

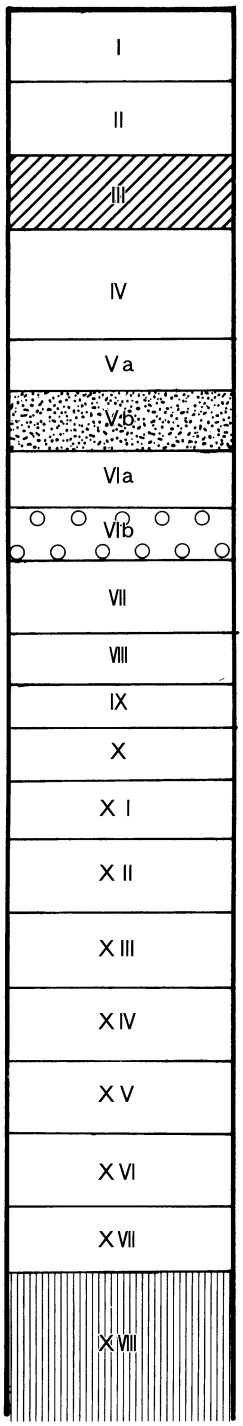


第２図　調査範囲及びグリッド配置図

第３章　遺跡の層位

本遺跡の基本層序及び遺物包含層・年代・文化との関係は下図のとおりである。遺跡の標準土層はＨ－11区の北西側を基準とした。

Ⅰ層　暗褐色土現在の表土



Ⅱ層　黄白色軽石層Ｐ－３・文明ボラ。西暦1471年頃の桜島の噴出物。

Ⅲ層　黒色腐植土古代～室町時代の遺物包含層。土師器や白磁・青磁などが出土した。

Ⅳ層　黄褐色細粒軽石混硬質土御池軽石・約4,000年前（縄文時代後期）の霧島御池の噴出物。腐植した上位に縄文時代後・晩期の遺物がわずかに含まれる。

Ⅴa層　暗橙色土Ⅴb層の腐植土。縄文時代中期末の落し穴状遺構

Ⅴb層　明橙色火山灰層アカホヤ火山灰・約6,300年～6,400年前の鬼界カルデラ噴出物。

Ⅵa層　黄褐色軽石混暗青灰色土縄文時代早期の遺物包含層。

Ⅵb層　黄褐色軽石層Ｐ－11。約7,400年前の桜島の噴出物。

Ⅶ層　明茶褐色土縄文時代早期の遺物包含層。

Ⅷ層　黒褐色土

Ⅸ層　黄白色火山灰Ｐ－14。薩摩火山灰。約11,000年前の桜島の噴出物。

Ⅹ層　黒褐色土Ⅷ層より粘質が強い。縄文時代草創期の遺物包含層。

ⅩⅠ層　暗黄褐色軟質ローム層旧石器時代のナイフ形石器文化の遺物包含層。

ⅩⅡ層　灰褐色硬質ローム層灰褐色の硬質ロームがブロック状に堆積。旧石器時代のナイフ形石器文化の遺物包含層。

ⅩⅢ層　暗黄褐色硬質ローム層径２～３㎜の白色パミスが部分的に点在する。旧石器時代のナイフ形石器文化の遺物包含層。

ⅩⅣ層　黄褐色硬質ローム層赤褐色パミス（Ｐ－15？）点在。旧石器時代のナイフ形石器文化の遺物包含層。

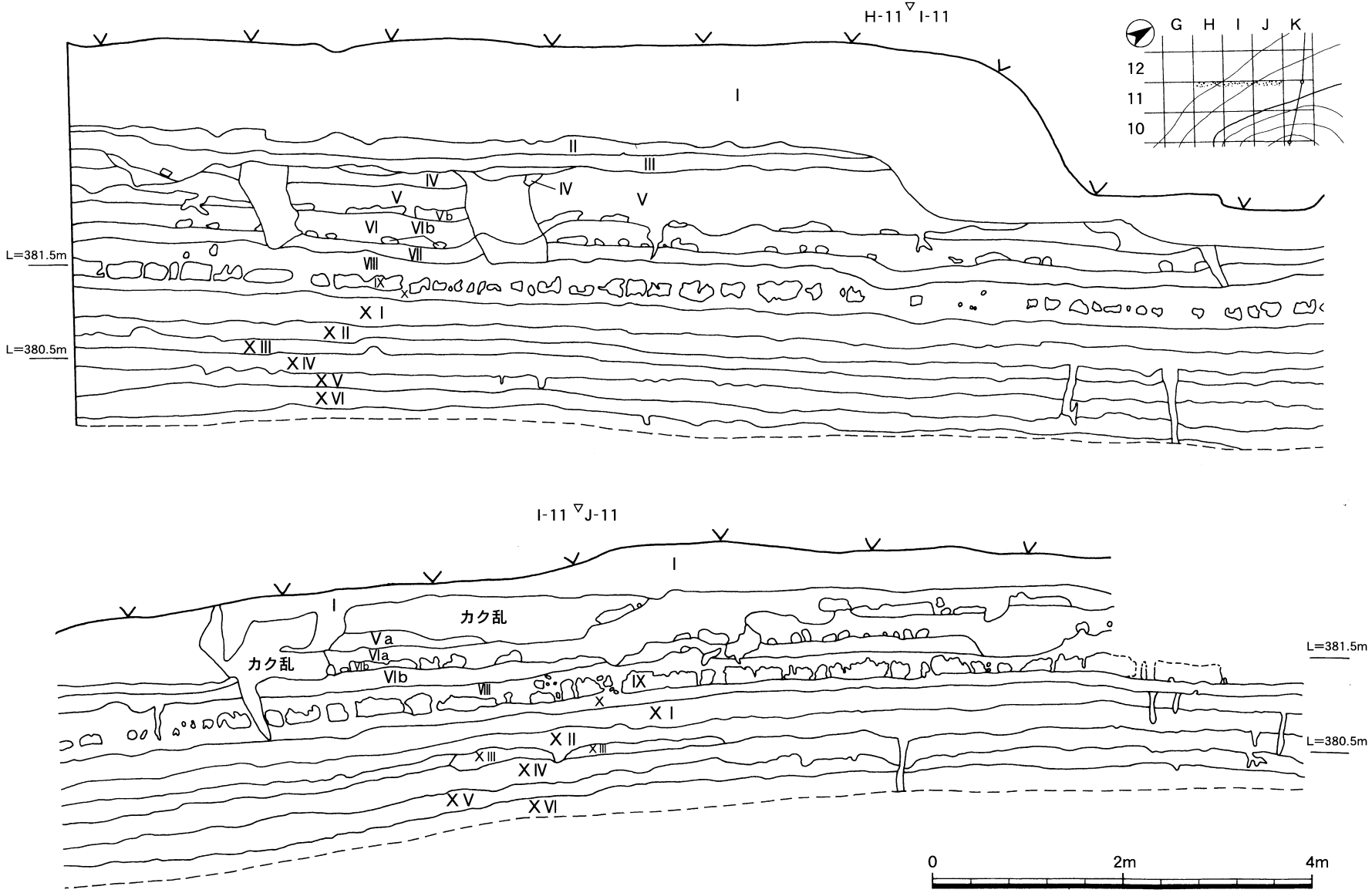
ⅩⅤ層　暗褐色硬質ローム層下部に旧石器時代のナイフ形石器文化の遺物包含層。

ⅩⅥ層　灰褐色硬質ローム層赤褐色～黄褐色のパミス（Ｐ－17？）が混在する。灰褐色の硬質ロームがブロック状に堆積。上部に旧石器時代のナイフ形石器文化の遺物包含層を含む。

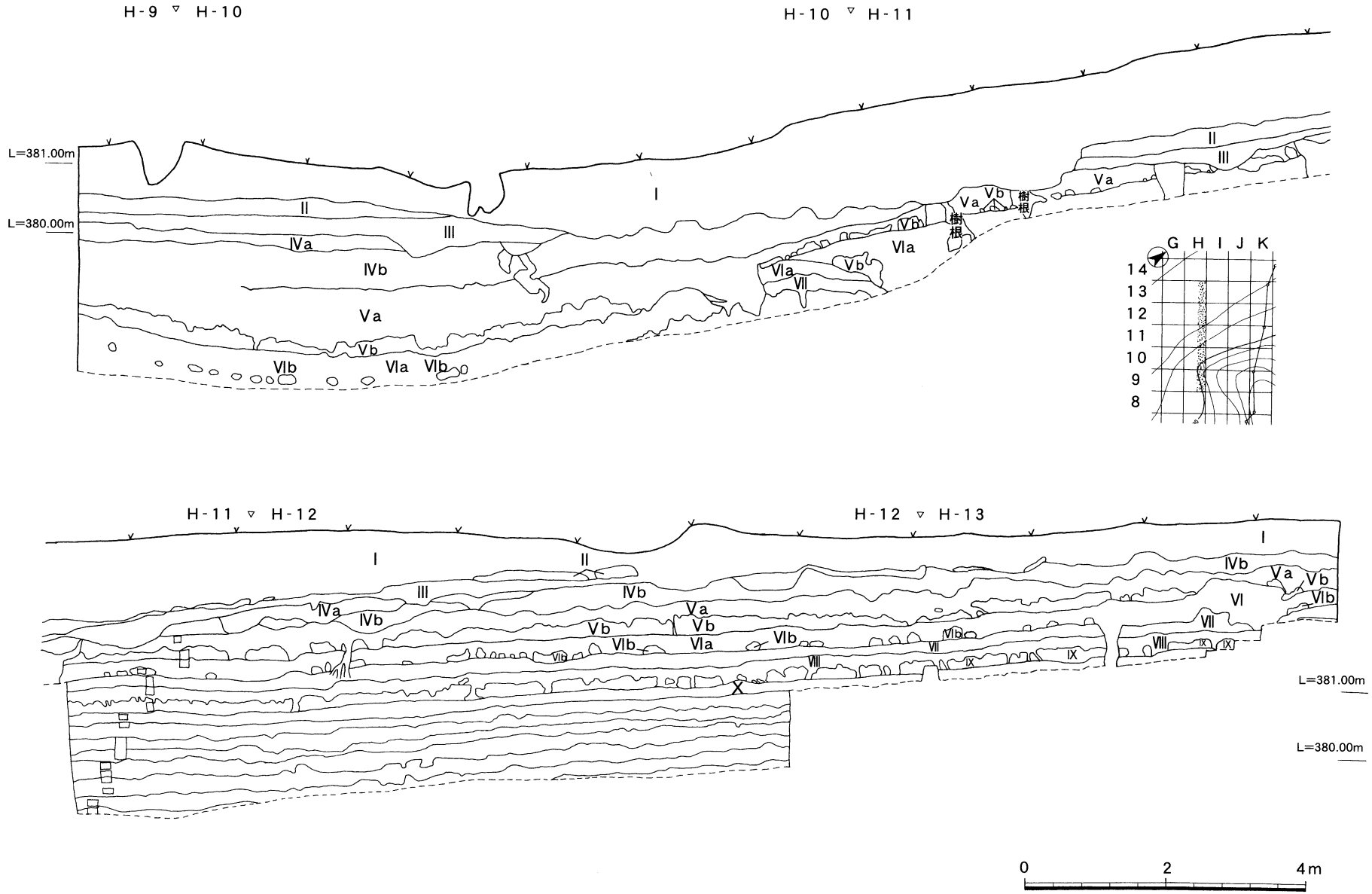
ⅩⅦ層　濁黄白色砂質土ⅩⅧ層の風化層

ⅩⅧ層　約22,000年～24,000年の姶良カルデラの噴出物。

第３図　土層模式柱状図　　**◎パミス＝軽石（桜島の噴出物は新しい順に番号をつける）**


H-11 ▽ I-11
G H I J K
12
11
10
I
II
III
IV
V
Vb
VI
VIb
VII
VIII
IX
X
XI
XII
XIII
XIV
XV
XVI
L=381.5m
L=380.5m
I-11 ▽ J-11
カク乱
Va
Via
VIb
VIII
IX
X
XI
XII
XIII
XIV
XV
XVI
0
2m
4m

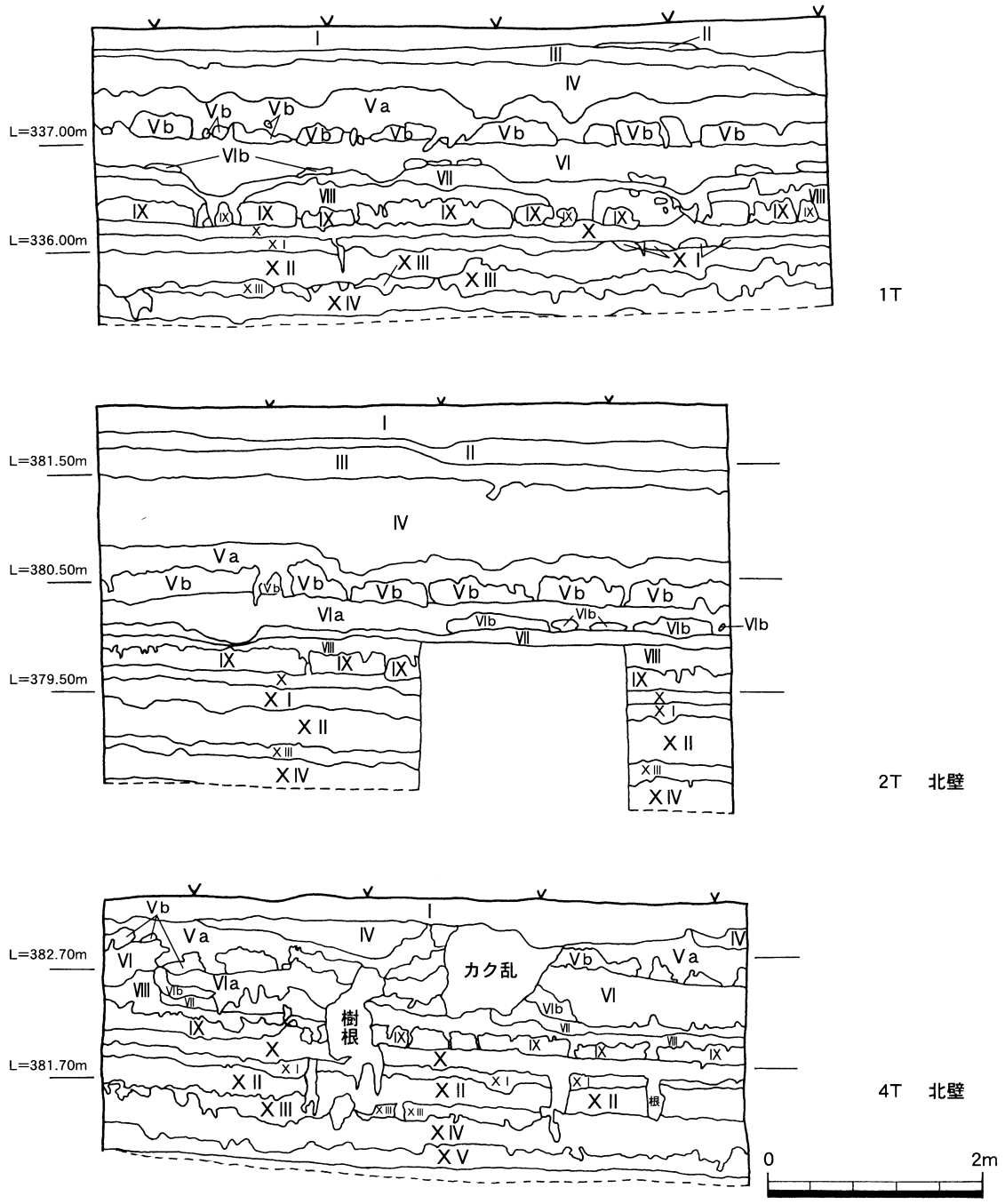
第４図　土層断面図(1)


H-9 ▽ H-10
H-10 ▽ H-11
H-11 ▽ H-12
H-12 ▽ H-13
L=381.00m
L=380.00m
I
II
III
IVa
IVb
Va
Vb
VIa
VIb
VII
VIII
IX
X
樹根
G H I J K
14
13
12
11
10
9
8
0
2
4m

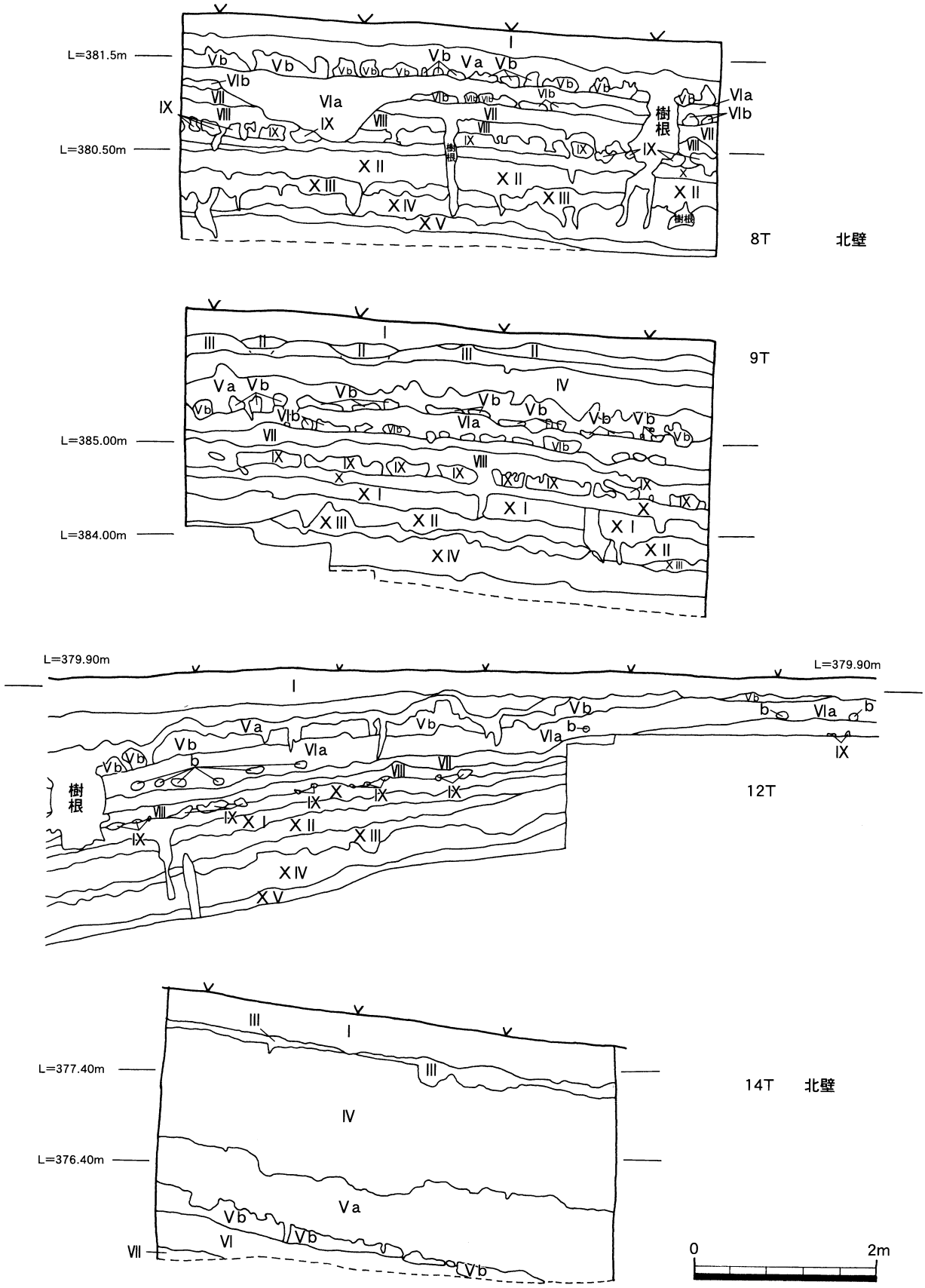
第５図　土層断面図(2)

第４章　確認調査

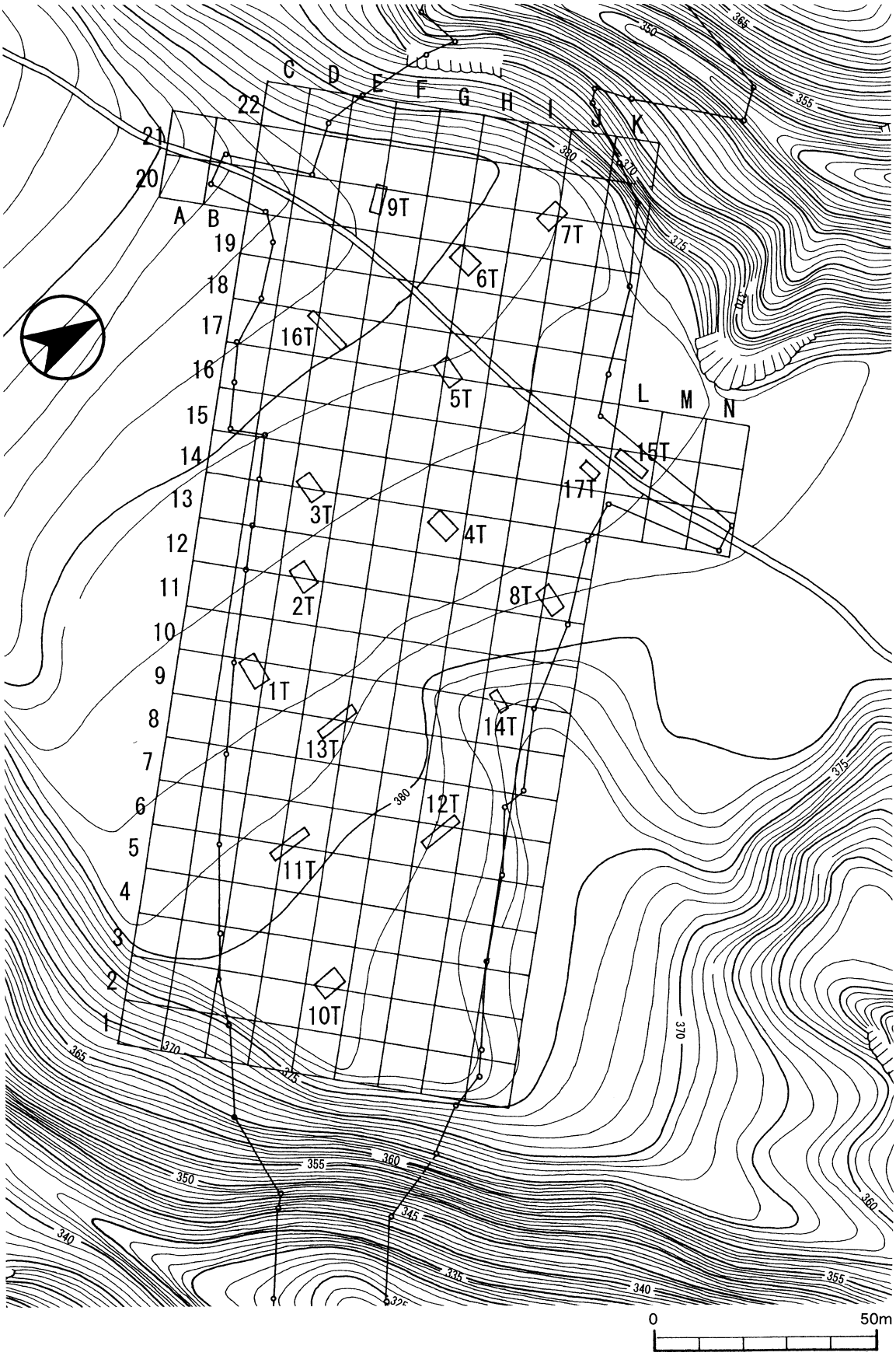
永磯遺跡の調査対象面積は約13,560㎡であり，調査前は山林となっていた。そこで，まず遺物包含層の有無・遺物包含層の広がりを把握するために，平成９年４月から，３ｍ×４ｍを基本とした17か所のトレンチを設定し，確認調査を実施した。その結果，調査対象地区のほぼ全域にわたり７つの異なる時期の遺物包含層が存在することを確認した。



第６図　土層断面図　確認トレンチ(1)



第７図　土層断面図　確認トレンチ(2)



第８図　確認調査トレンチ配置図

第５章　本調査

第１節　発掘調査の方法

本調査は，工事用センター杭「ＳＴＡ73」「ＳＴＡ74」を結ぶ線を基準軸とし，10m四方のグリッド（調査用区画）を設定して実施した。グリッドは南から北へＡ区～Ｋ区，東から西へ１区～22区と呼ぶこととし，1グリッドは例えばＡ－３区というようにアルファベットと数字を組み合わせた呼称とした。以下，時期ごとに記述していく。

第２節　旧石器時代

１　遺構

遺構は礫群がⅩⅣ層から３基，Ⅻ層・Ⅺ層から各１基が検出された。ほかに，土坑がⅩⅣ層から掘り込まれた１基と，Ⅻ層から掘り込まれた１基，さらにⅪ層上面から１基が検出されている。全体的にどの礫群も礫数が少なく，散在したものが多い。

(1)　礫群遺構

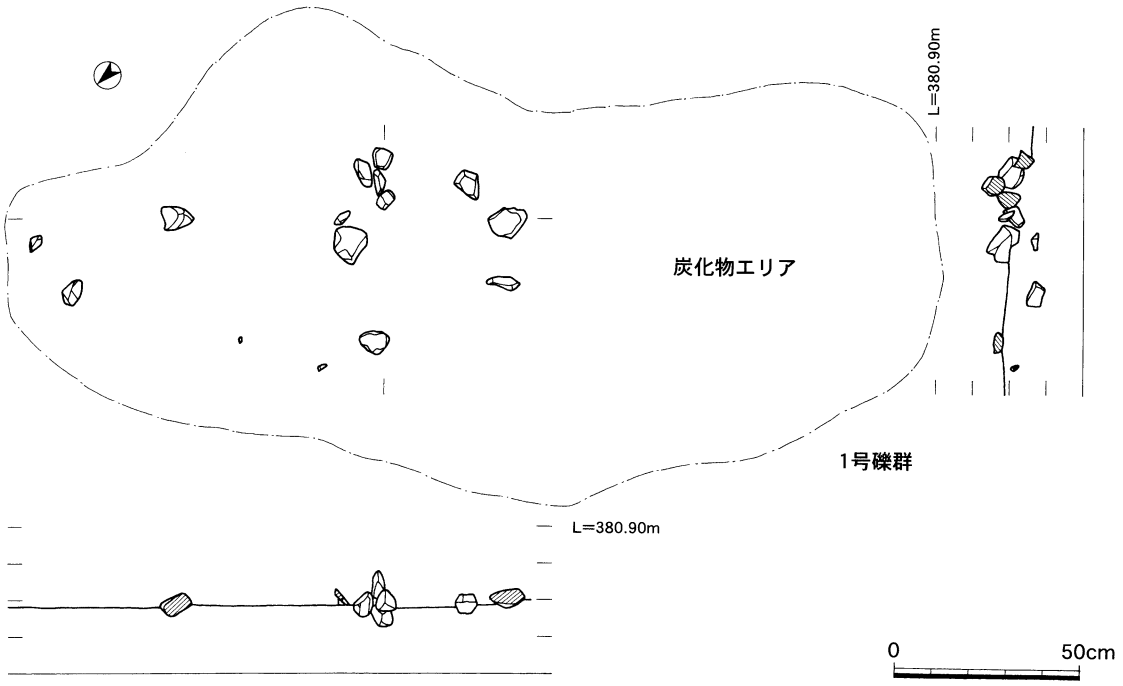
１号礫群（ⅩⅣ層）はＫ－17区で検出された。掘り込みは確認できなかった。礫は焼けていて，礫群周辺に少量ではあるが炭化物が分布している。

２号礫群（ⅩⅣ層）はＧ－１区で検出された。掘り込みは確認できなかった。北東の方向へ傾斜している。

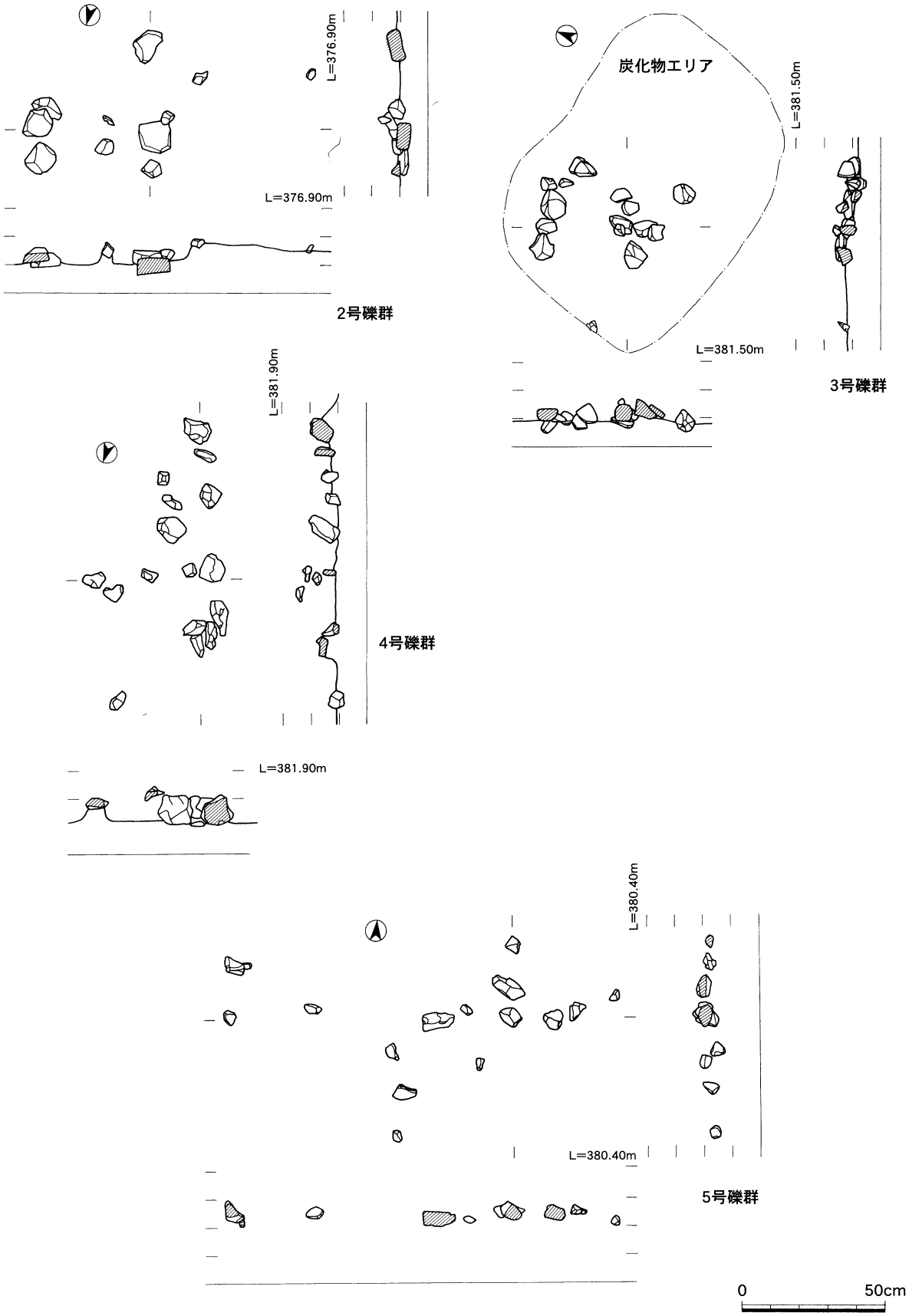
３号礫群（ⅩⅣ層）はＩ－16区で検出された。掘り込みは確認できなかった。礫群の中では比較的集結している。

４号礫群（Ⅻ層）はＧ－17区で検出された。掘り込みは確認できなかった。

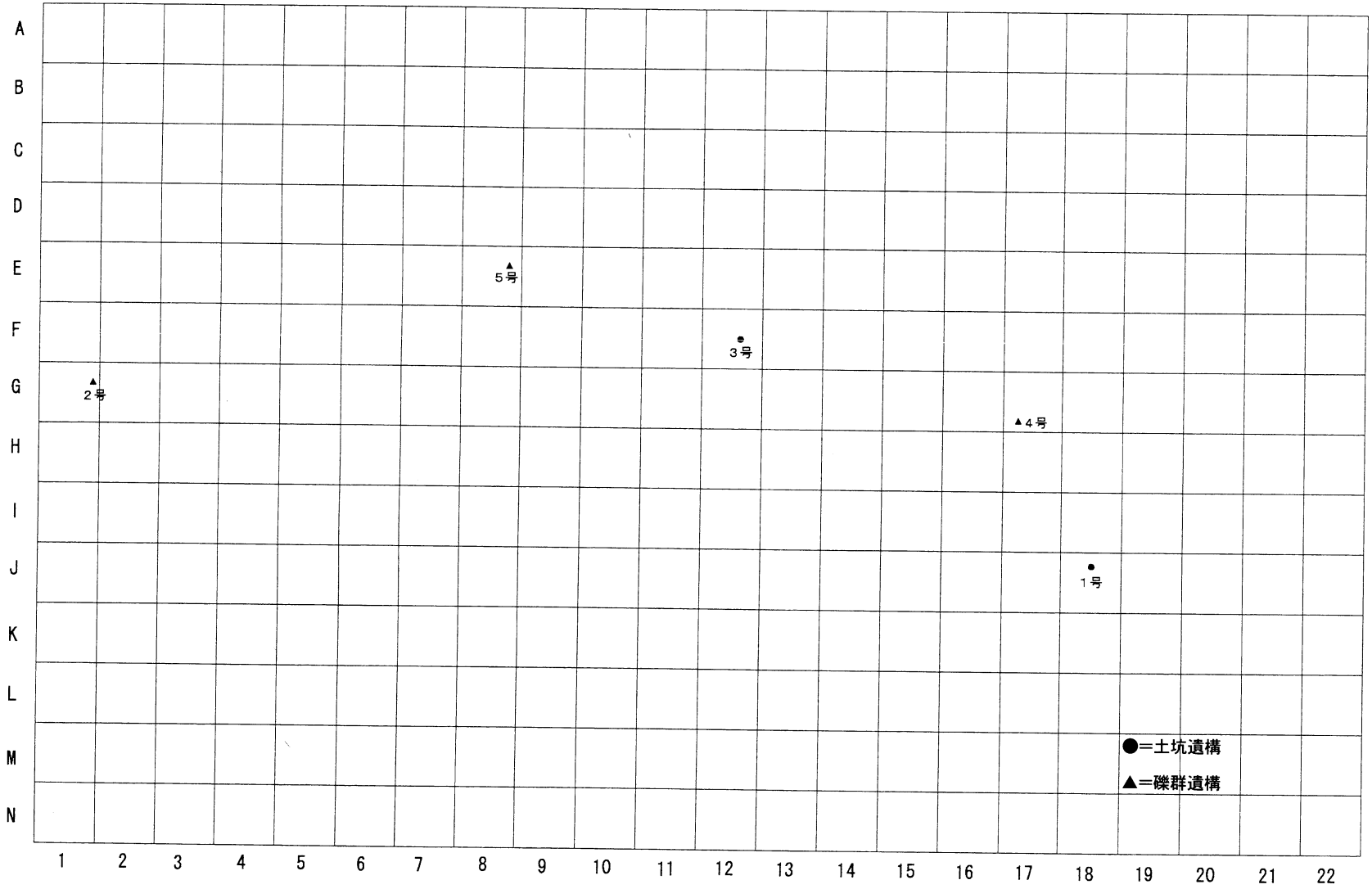
５号礫群（Ⅺ層）はＥ－８区で検出された。掘り込みは確認できなかった。



第９図　礫群遺構(1)


L=376.90m
L=376.90m
2号礫群
炭化物エリア
L=381.50m
L=381.50m
3号礫群
L=381.90m
L=381.90m
4号礫群
L=380.40m
L=380.40m
5号礫群
0
50cm

第10図　礫群遺構(2)



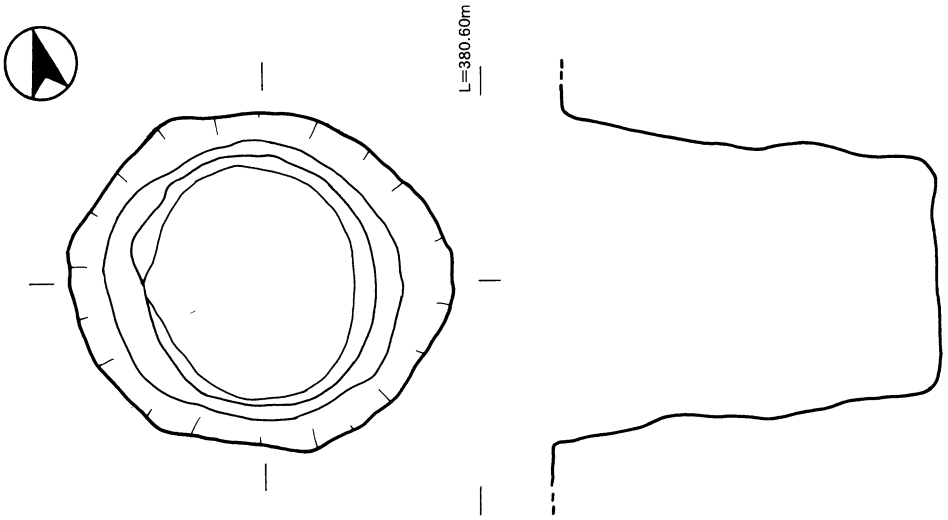
第11図　旧石器時代礫群土坑遺構分布図

(2) 土坑遺構

1号土坑はJ－18区，XIV層より検出された。上面プランは楕円形で検出ラインの長軸が105cm，短軸が91cm，底面の長軸が63cm，短軸が58cm，深さが104cmである。土坑下部にXIV層土並びにXI層土のブロックが混入しているだけで，埋土は複雑な形成をしている。土坑の時期は，底部の埋土の色調からXIII層堆積前後ではないかと推測される。

2号土坑はF－12区，XII層より検出された。上面プランは楕円形で検出ラインの長軸が142cm，短軸が115cm，底面の長軸が80cm，短軸が49cm，深さが162cmである。土坑下部にXVII層土のブロックが混入しているだけで，埋土は複雑な形成をしている。土坑の時期は，底部の埋土の色調からXI層堆積前後ではないかと推測される。

3号土坑はJ－15区，XI層より検出された。上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸が120cm，短軸が51cm，底面の長軸が74cm，短軸が32cm，深さが71cmである。薩摩火山灰層上面で土坑の平面が検出されなかったので埋土はX層土と推測され，時期的にはその前後ではないかと推測される。

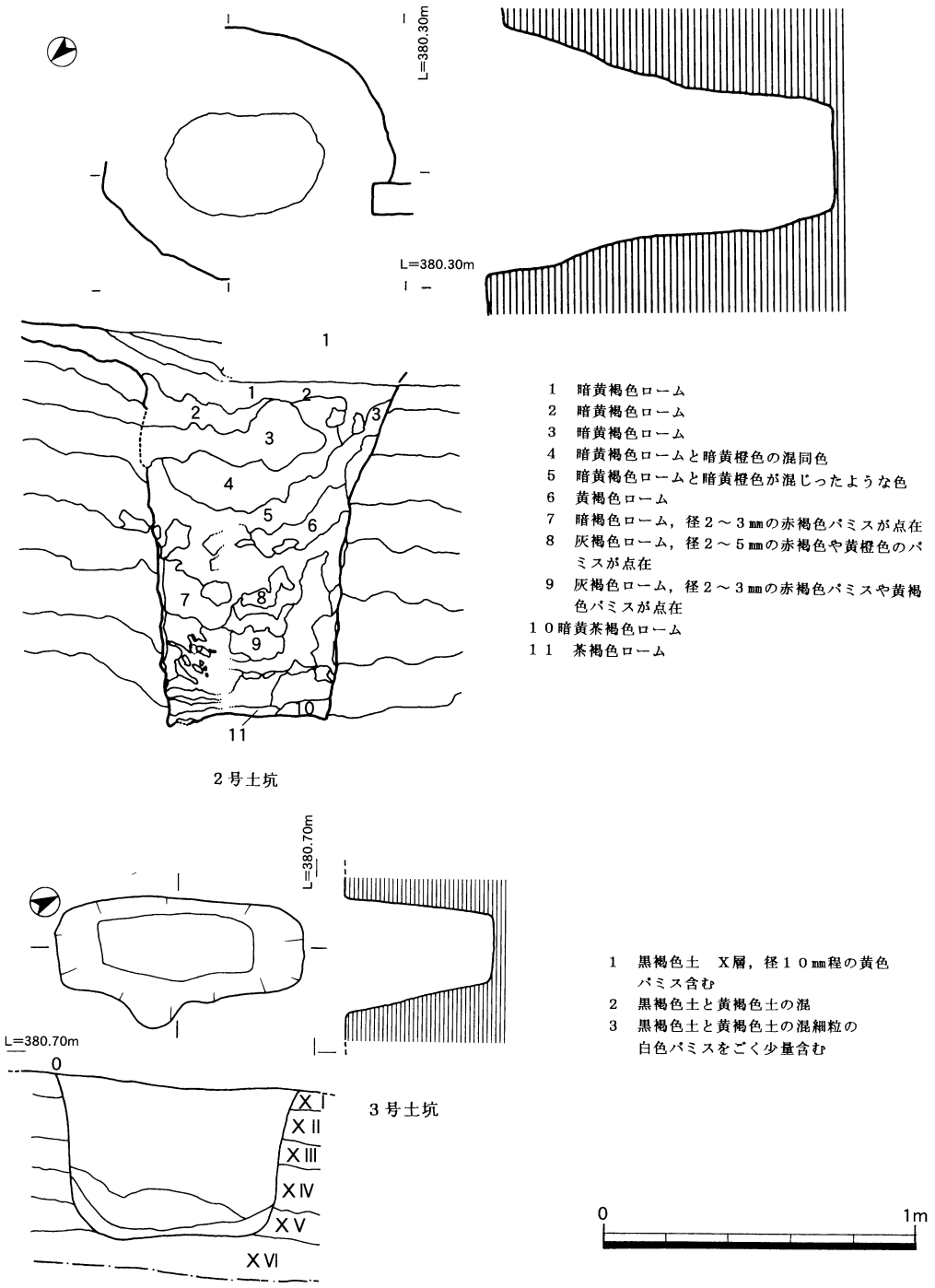


1号土坑

1　黄白色土，一部淡褐色土
2　暗黄灰色土
3　淡黄褐色土
4　明淡茶褐色土
　一部分のみ白色軽石混
5　暗乳白色土
6　黄褐色土，黄橙色パミス混
7　黄褐色土，褐色のブロック混
8　褐色土，暗乳白色土混
9　褐色土，一部乳白色土混
10　褐色土，一部乳白色土混
11　黄褐色土
12　淡黄褐色土
13　暗褐色土
14　褐色土
15　淡褐色土
16　褐色土と黄褐色土の混
17　淡褐色土
18　黄褐色土，一部黄橙色パミス混
19　淡褐色土で黄褐色土の混
20　褐色土と暗乳白色土の混
21　暗乳白色土，黄褐色土の混
22　淡褐色土
23　黄褐色土，黄色パミス混
24　褐色土と黄褐色土の混
25　褐色土と暗乳白色土の混
26　褐色土，黄褐色土一部混
27　黄褐色土
28　黄褐色土
29　褐色土
30　灰青色，褐色土と黄褐色土の混
31　淡褐色土

0　1m

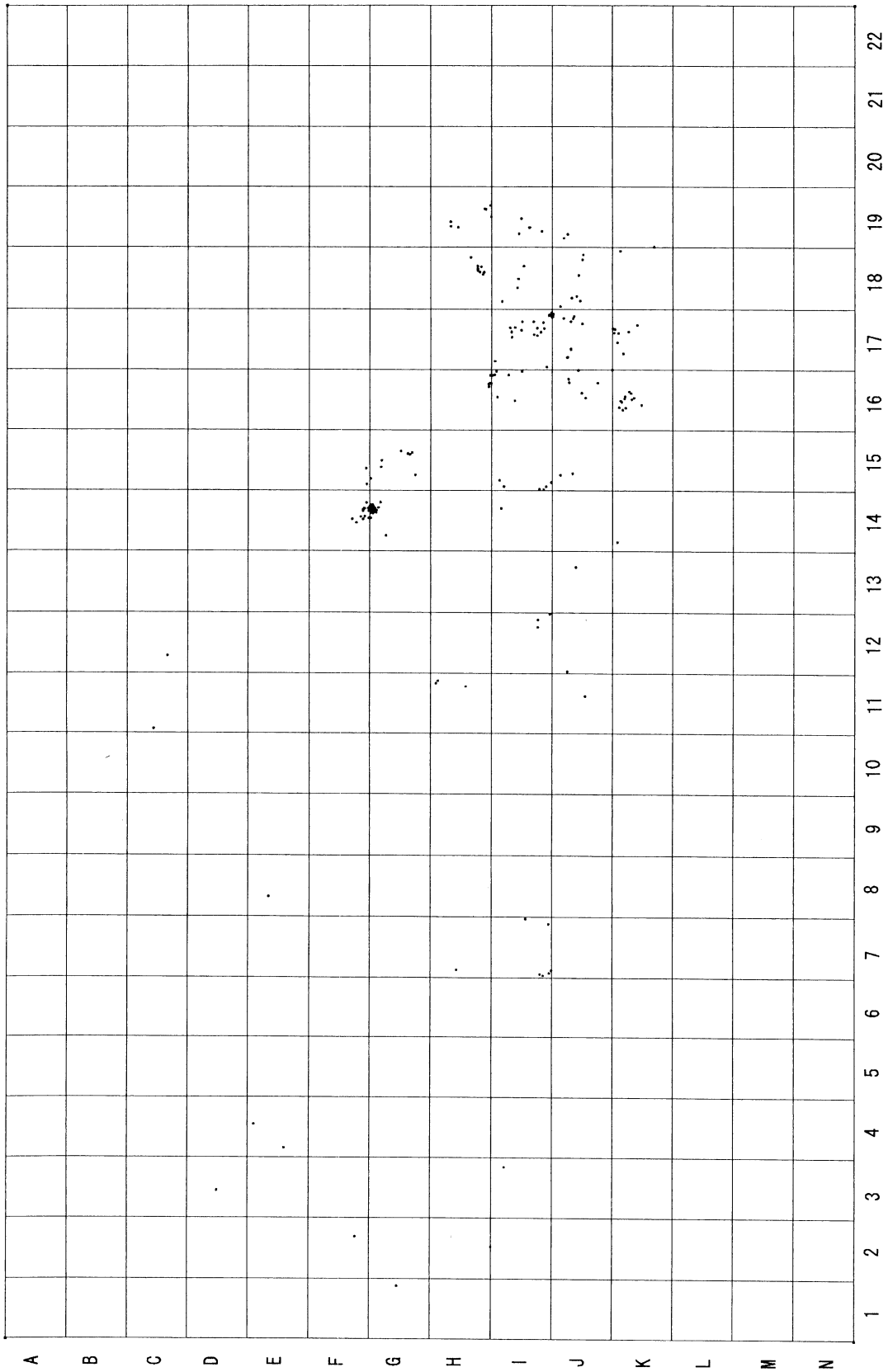
第12図　土坑遺構(1)



第13図　土坑遺構(2)

第１表　旧石器時代土坑観察表

遺構一覧表	検出面(層)	時期	検出区	検出面				底面		備考
				平面プラン	長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	
１号土坑	XⅣ	旧石器	J－18	楕円形	105	91	104	63	58	
２号土坑	XⅡ	旧石器	F－12	楕円形						
３号土坑	XⅠ	旧石器	J－15	隅丸長方形	120	51	71	74	32	



第14図　旧石器時代出土遺物分布図

2　遺物

ナイフ形石器文化の時期の遺物が，遺物量は少ないものの，XIV層を中心に14点が各層から出土した。XI層からは黒曜石を利用した細石刃，XII層からはタンパク石の横長剥片を利用したナイフ形石器，XIV層からは黒曜石製の三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器などが出土した。これらの遺物は調査区内で散発的に出土する状況であった。

(1)　XIV層出土の石器

ア　三稜尖頭器（第15図）

1～3の計3点が出土する。1は頁岩，2・3は黒曜石2類である。1は裏面基部に平坦剥離を施し，整形剥離は周辺から行っている。2は欠損品，3は未製品で，整形剥離は周辺から行っている。

イ　剥片・チップ（第15図）

4～9の計6点が出土し，5・9は二次加工のある剥片，4・8はチップである。4・5・7・8が安山岩で6・9が頁岩である。

ウ　石核（第16図）

10・11の2点出土する。10は頁岩で，打面は単剥離打面である。11はチャートで，多方面からの打点がみられ，回転しながら剥いだものと思われる。

(2)　XII層出土の石器

ア　台形石器（第16図）

12が1点出土する。石材は黒曜石3類で，不定形剥片の両側縁部と下縁部の3面に刃潰し加工が行われている。

イ　ナイフ形石器（第16図）

13が1点出土する。石材は玉髄で横長の不定形剥片を利用し，打面部に刃潰し加工が両面から行われた一側縁加工で，一部は欠損している。

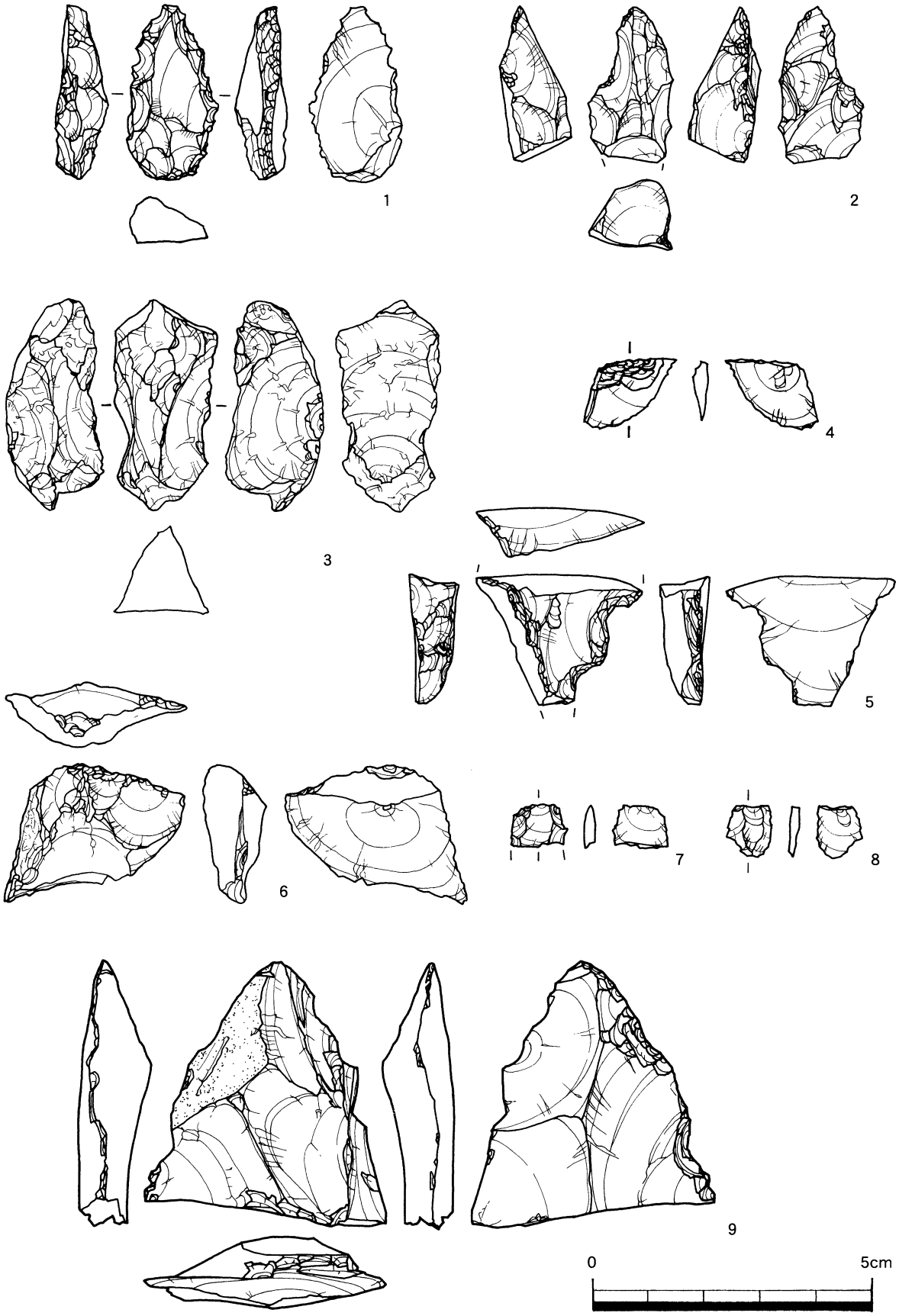
(3)　XI層出土の石器

ア　細石刃（第16図）

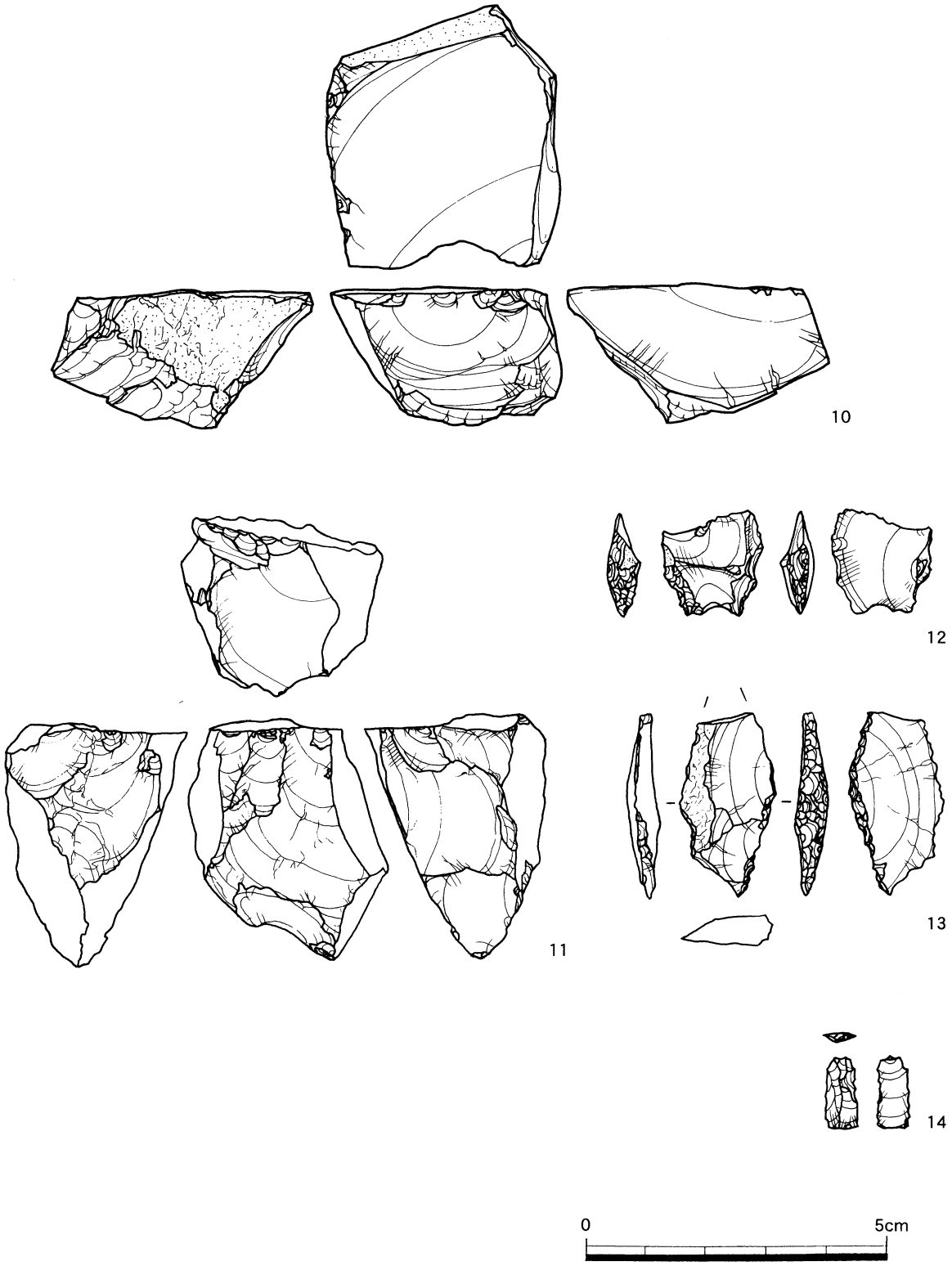
14が1点出土する。石材は黒曜石3類で細石核は出土しなかった。

第2表　旧石器時代出土石器観察表

挿図	番号	層	出土区	器　種	地点No	石材	実測No	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
15	1	XIV	H－5	三稜尖頭器	738	SH	28	3.10	1.50	0.80	3.97
	2	XIV	G－14	三稜尖頭器	2532	OB 2	31	2.80	1.80	1.10	3.65
	3	XIV	F－14	三稜尖頭器	2692	OB 2	30	3.80	1.80	1.50	9.72
	4	XIV	G－14	剥片	2835	AN	57	1.00	0.70	0.20	0.34
	5	XIV	F－14	剥片	2522	AN	33	2.40	2.90	0.80	3.97
	6	XIV	F－14	剥片	2693	SH	29	2.10	2.70	1.20	6.62
	7	XIV	G－14	剥片	2718	AN	55	0.80	1.00	0.20	0.14
	8	XIV	G－14	剥片	2793	AN	56	1.20	1.30	0.30	0.34
	9	XIV	F－16	剥片	3031	SH	35	4.60	4.40	1.30	19.36
16	10	XIV	K－17	石核	3010	SH	32	2.40	3.30	3.70	40.23
	11	XIV	K－16	石核	3016	CH	27	3.80	3.10	2.70	35.31
	12	XII	G－15	台形石器	2447	OB 3	25	1.60	1.70	0.60	1.16
	13	XII	4T	ナイフ型石器	1	CC	26	3.0＋a	1.50	0.60	2.20
	14	XI	F－15	細石刃	2444	OB 3	24	1.30	0.50	0.20	0.09



第15図　旧石器時代出土石器(1)



第16図　旧石器時代出土石器(2)

第３節　縄文時代

１　草創期

(1)　遺構

遺構は検出されなかった。

(2)　遺物

遺物はＸ層から細石刃・石鏃・剥片等が出土したが量は少なかった。また，土器は出土しなかった。

ア　石鏃（第17図）

２点出土する。形状は15・16ともに長幅比が著しく異なる型の凹基式である。切れ込みは浅い。両側縁部とも微調整剥離が施され，断面形は凸レンズ状を呈している。

イ　細石刃（第17図）

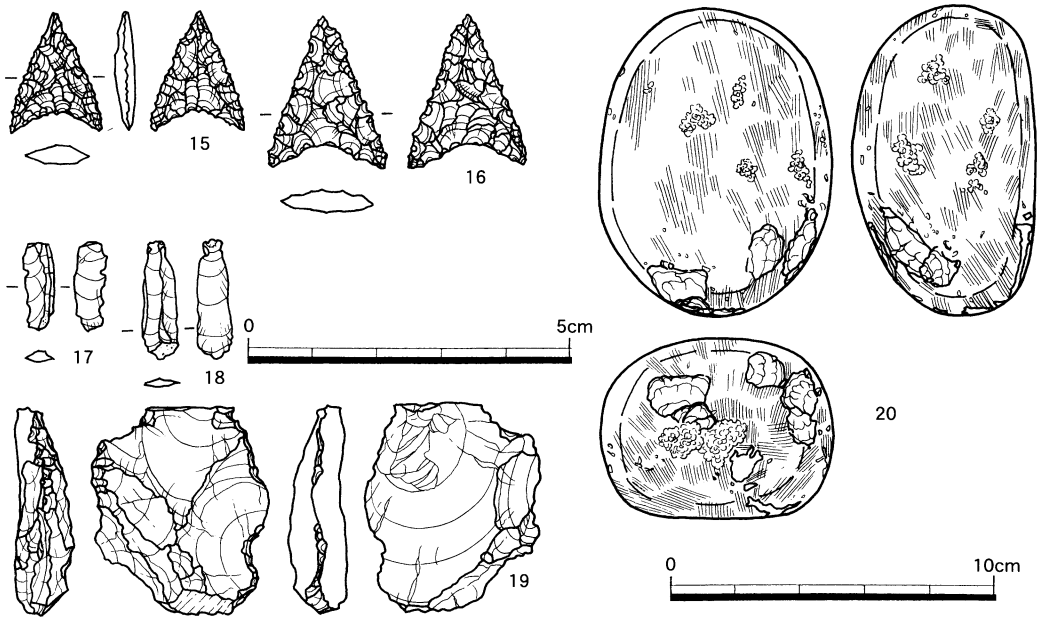
17・18の２点出土する。石材はともに黒曜石４類で，細石核は出土しなかった。

ウ　剥片（第17図）

19の１点が出土する。石材は頁岩で素材剥片と思われる。

エ　磨石・敲石（第17図）

20の１点が出土する。裏面の平滑面は磨石である。周辺部も磨石の機能を備えるが，一部に敲打痕が残っている。



第17図　Ｘ層出土石器

第３表　Ｘ層出土石器観察表

挿図	番号	層	出土区	器　種	地点No	石材	実測No	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
17	15	X	Ｉ－16	石鏃	2515	CC	138	1.80	1.50	0.30	0.50
	16	X	Ｄ－18	石鏃	38	SH	23	2.30	1.90	0.40	0.96
	17	X	９Ｔ	細石刃	1	OB４	22	1.30	0.40	0.20	0.09
	18	X	９Ｔ	細石刃	2	OB４	20	1.80	0.50	0.15	0.10
	19	X	Ｄ－17	剥片	54	SH	21	3.30	2.60	0.90	7.67
	20	X	Ｈ－２	磨石・敲石	－	AN	34	11.20	7.20	5.40	560.00

2　早期

桜島の火山噴出物であるＰ－11（約7,400年前，Ⅵb層）という軽石層をはさんで，上下に二つの時期の遺物包含層が存在する。

(1)　遺構

遺構は集石群がⅧ層から４基，Ⅶ層から８基，Ⅵ層から６基が検出された。ほかに落し穴状遺構がⅨ層上面より６基，Ⅷ層より４基，Ⅶ層より２基，Ⅵ層より14基が検出されている。

ア　集石遺構

１号集石（Ⅷ層）はＧ－17区で検出された。10cm前後の角礫が中心で割合は砂岩と安山岩が半々である。集石の熱破損は少量であるが赤変もみられる。炭化物の集中があり，Ⅶ層文化の集石と推測される。掘り込みは確認されなかった。

２号集石（Ⅷ層）もＧ－17区で検出された。９cm前後の角礫が中心で砂岩が主であり，安山岩も含まれている。集石の熱による赤変が見られ，炭化物粒子があり灰も集中している。Ⅶ層文化の集石と推測される。掘り込みは確認されなかった。

３号集石（Ⅷ層）はＩ－１区で検出された。円礫・亜角礫の安山岩が主体で，砂岩も混じる。礫は熱により赤変もしくは黒く焼けている。埋土はⅧ層黒色土のようであるが，相当する時期の遺物は周囲で検出されなかった。炭化物粒子が若干見られたが焼土は検出されなかった。掘り込みがあり，径80cm，深さ12cm中に27個の礫を検出。ほぼ垂直に掘り込まれ，底面は平坦である。

４号集石（Ⅷ層）はＥ－12区で検出された。掘り込みの確認はできなかった。12～13cmの角礫が点在する形態である。

５号集石（Ⅶ層）はＦ－２区・Ｐ11層下位で検出された。礫は赤変しているものが多く，炭化物も少量確認された。掘り込みは確認されなかった。垂直に立ち上がる台状の土の上に比較的集中した形態である。

６号集石（Ⅶ層）はＦ－13区で検出された。掘り込み等の確認はできなかった。14～15cmの角礫を中心に38個の礫が点在する。

７号集石（Ⅶ層）はＤ－10区で検出された。掘り込み等の確認はできなかった。６cm以下の比較的小さな18個の石が点在する形態である。

８号集石（Ⅶ層）はＦ－２区で検出された。層が反転しており詳細は確認できなかった。

９号集石（Ⅶ層）はＧ－２区・Ｐ11層下位で検出された。ほとんどの礫が熱のため赤変しており，11号集石と比較すると安山岩が多い。15cm前後の角礫を中心に２ｍ四方の範囲に散在した形態である。

10号集石（Ⅶ層）はＧ－３区で検出された。安山岩・砂岩共にあり，赤変している。上部には少量であるが炭化物が確認された。下部にも確認できた。また，中心では楕円押型文の土器の口縁部が，西端では長径35cmの石皿状の平石が確認された。関連性については明確でない。

11号集石（Ⅶ層）はＦ－２区で検出された。こぶし大の安山岩・砂岩共にあり，よく焼けて赤変したものやはじけたもの，すすが付着したものなどが多く，炭化物を含み周囲にも若干広

がっている。ある程度礫をのぞいた後で掘り込みを検出し，径は長軸53cm・短軸41cm・深さ9cmであった。また，掘り込みの近くでも赤変したりすすが付着した10cm以上の大きな安山岩の集石が確認された。

12号集石（Ⅶ層）は12トレンチより検出された。掘り込み等の確認はできなかった。10cm前後の角礫を中心に70cm四方に38個の礫が集中している形態である。

13号集石（Ⅵ層）はⅠ－2区で検出された。掘り込み等の確認はできなかった。17～18cmの平石3枚と10cm前後の角礫8個で形成された比較的小さい形態である。

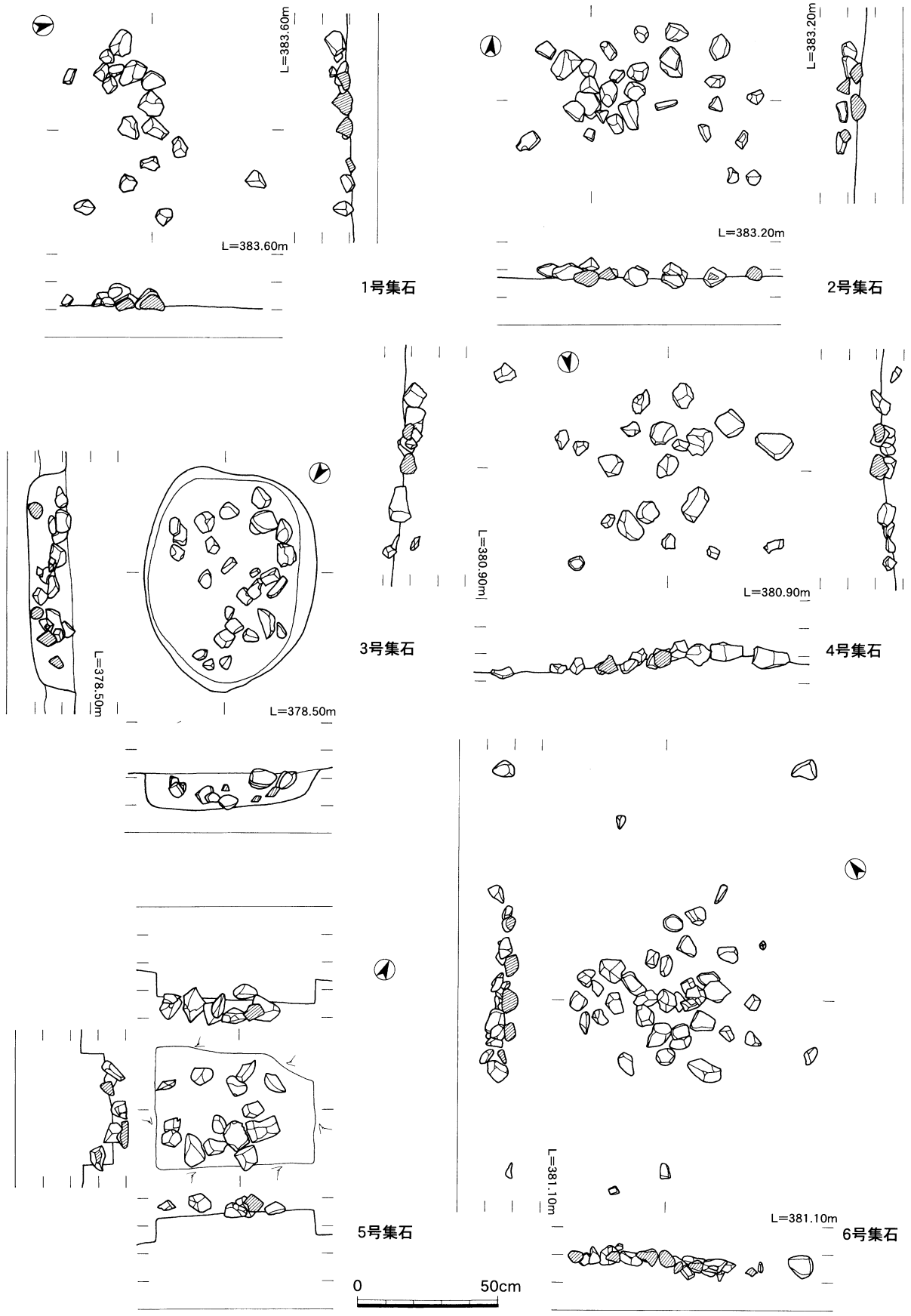
14号集石（Ⅵ層）はⅠ－2区で検出された。掘り込み等の確認はできなかった。50cm四方に10個前後の礫が点在している。

15号集石（Ⅵ層）はH－1区で検出された。掘り込み等の確認はできなかった。14～15cm前後の角礫を中心に13個の礫が点在する形態である。

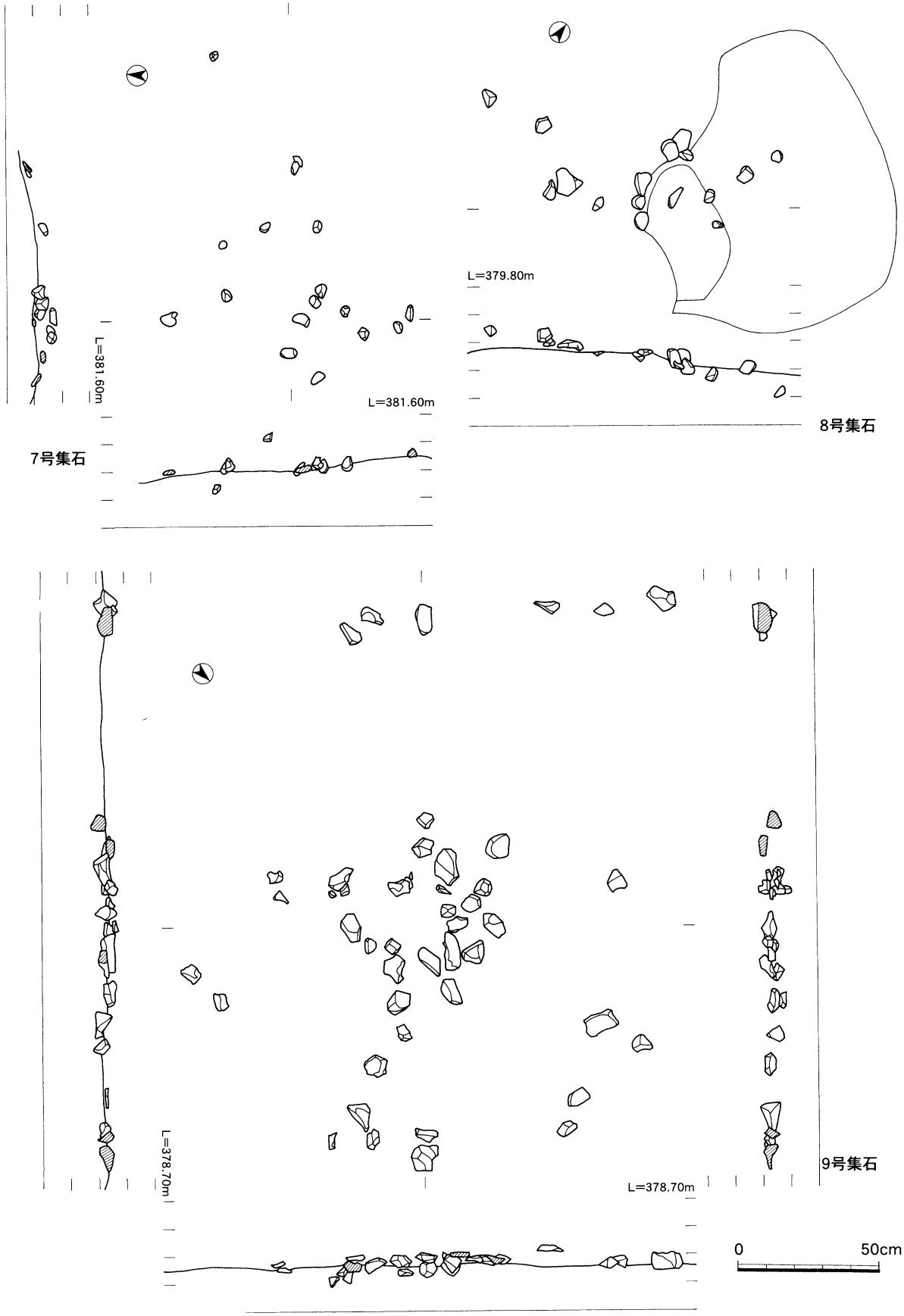
16号集石（Ⅵ層）はH－1区で検出された。ほとんどの礫が熱のため赤変若しくはすすの付着が認められた。掘り込み等の確認はできなかった。比較的まとまった形態をしている。

17号集石（Ⅵ層）はG－4区で検出された。掘り込み等の確認はできなかった。20cmの角礫を中心に大小38個の礫が集中する一方で12～15cmの角礫が1.5～2m離れて点在する形態である。

18号集石（Ⅵ層）はH－4区で検出された。掘り込み等の確認はできなかった。2×4mの細長い範囲に大小93個の礫が散在する形態である。

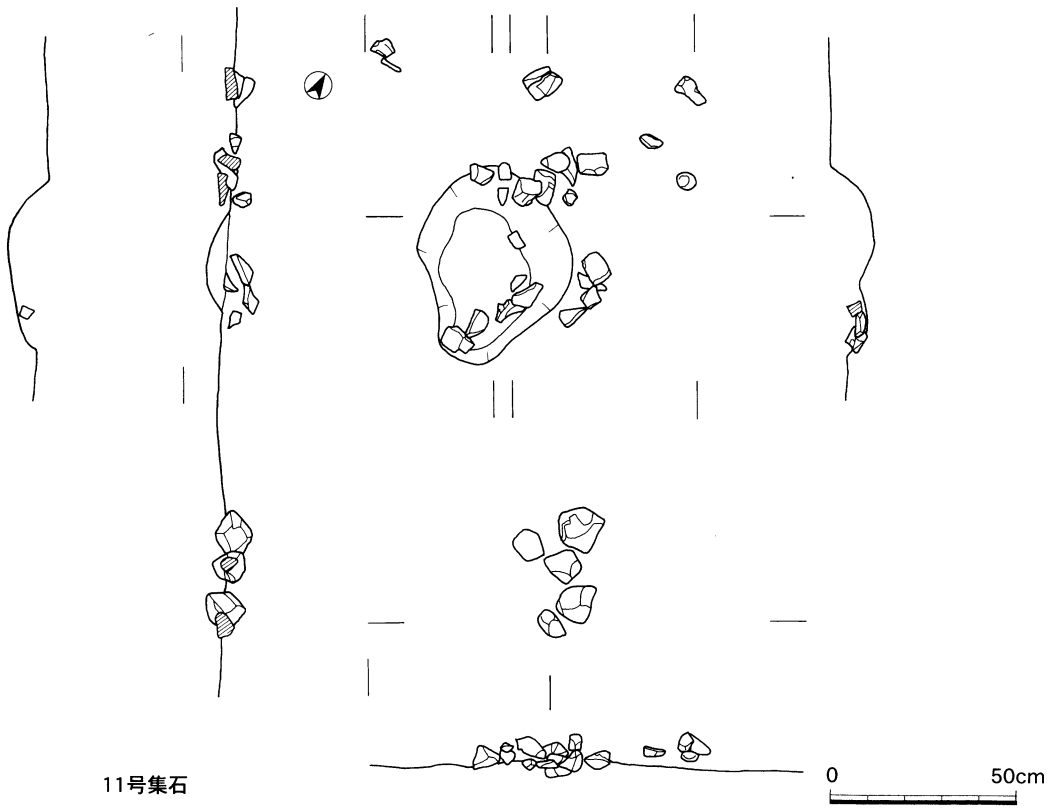


第18図　Ⅵ・Ⅶ層集石遺構(1)



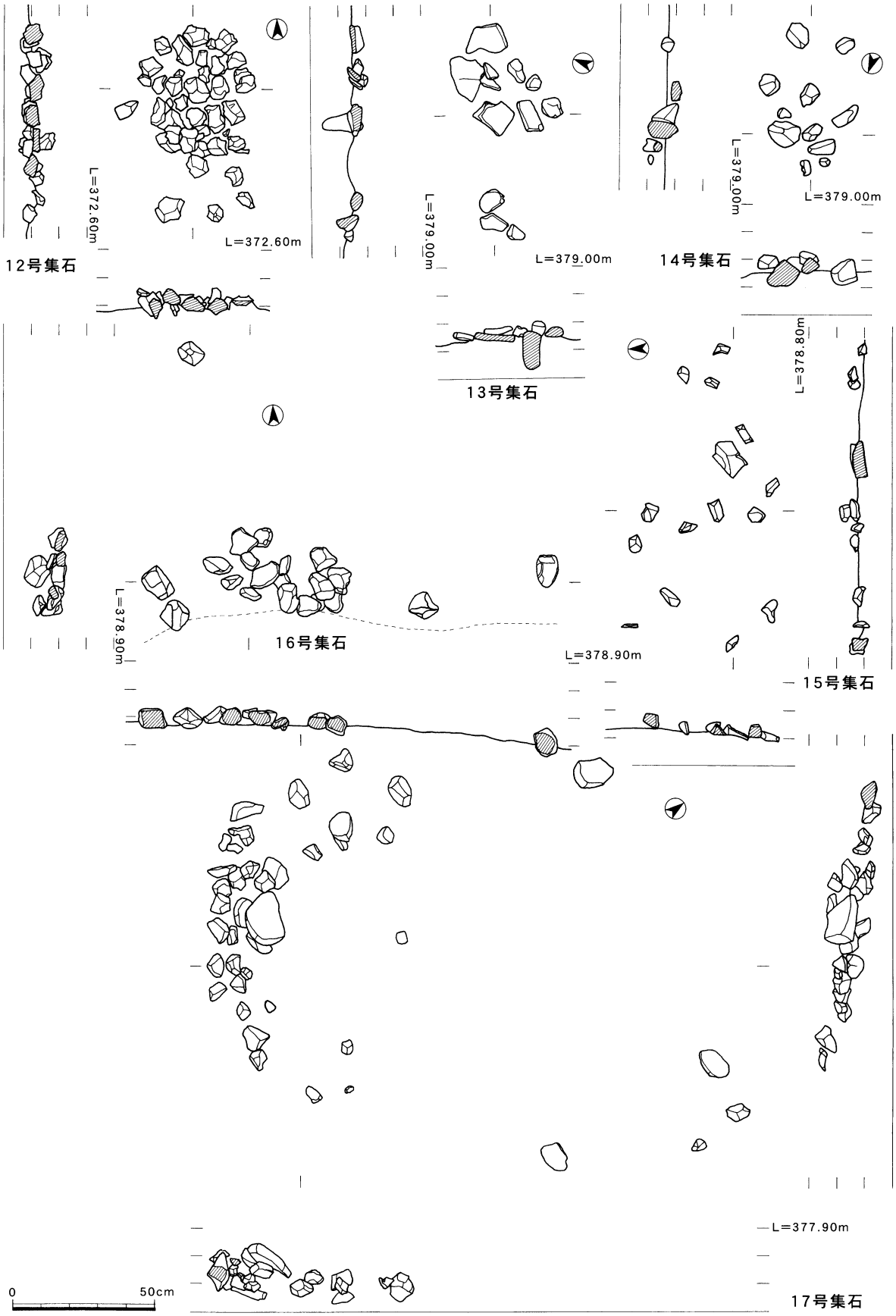
第19図　Ⅵ・Ⅶ層集石遺構(2)

10号集石

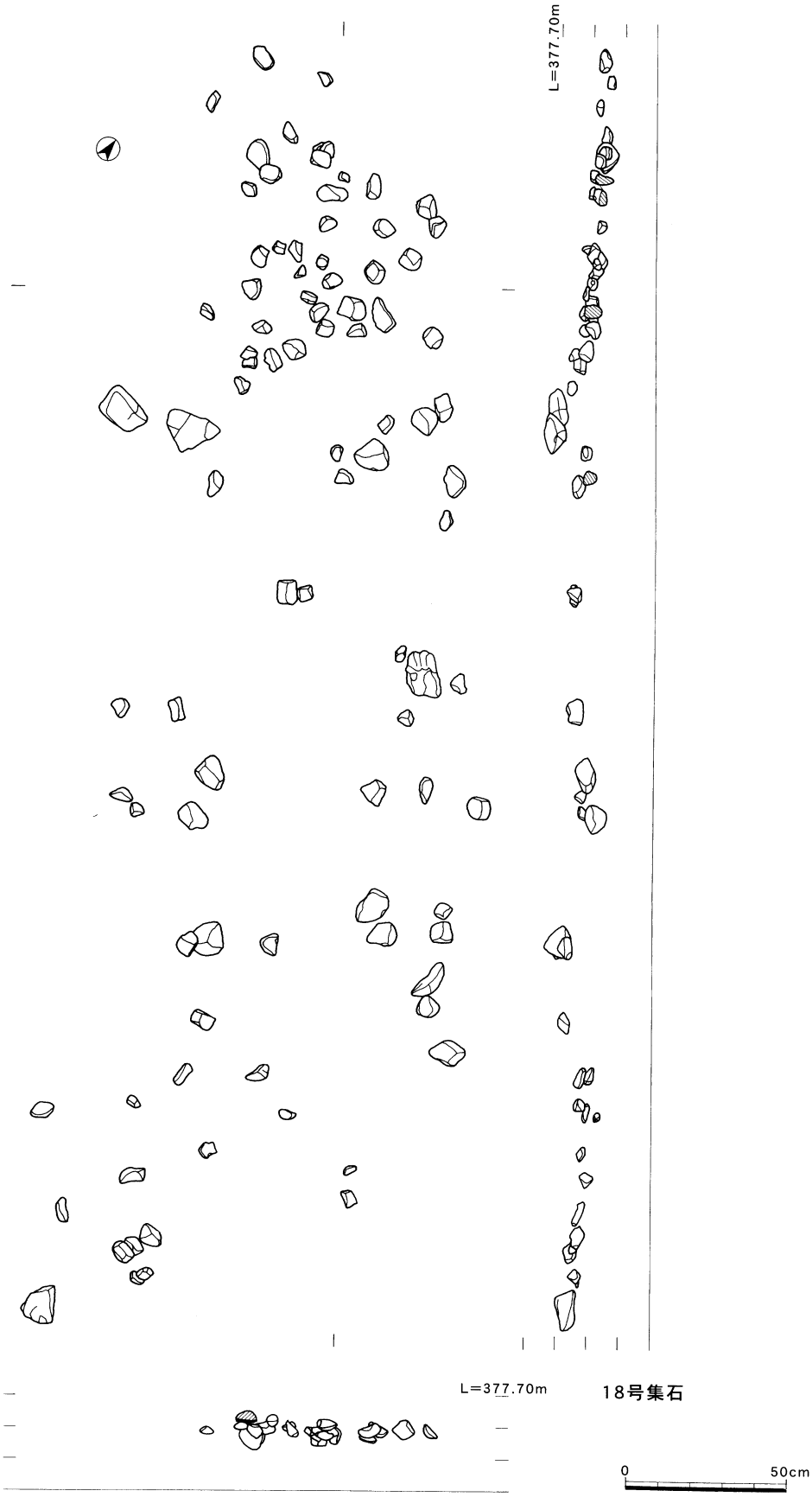


11号集石

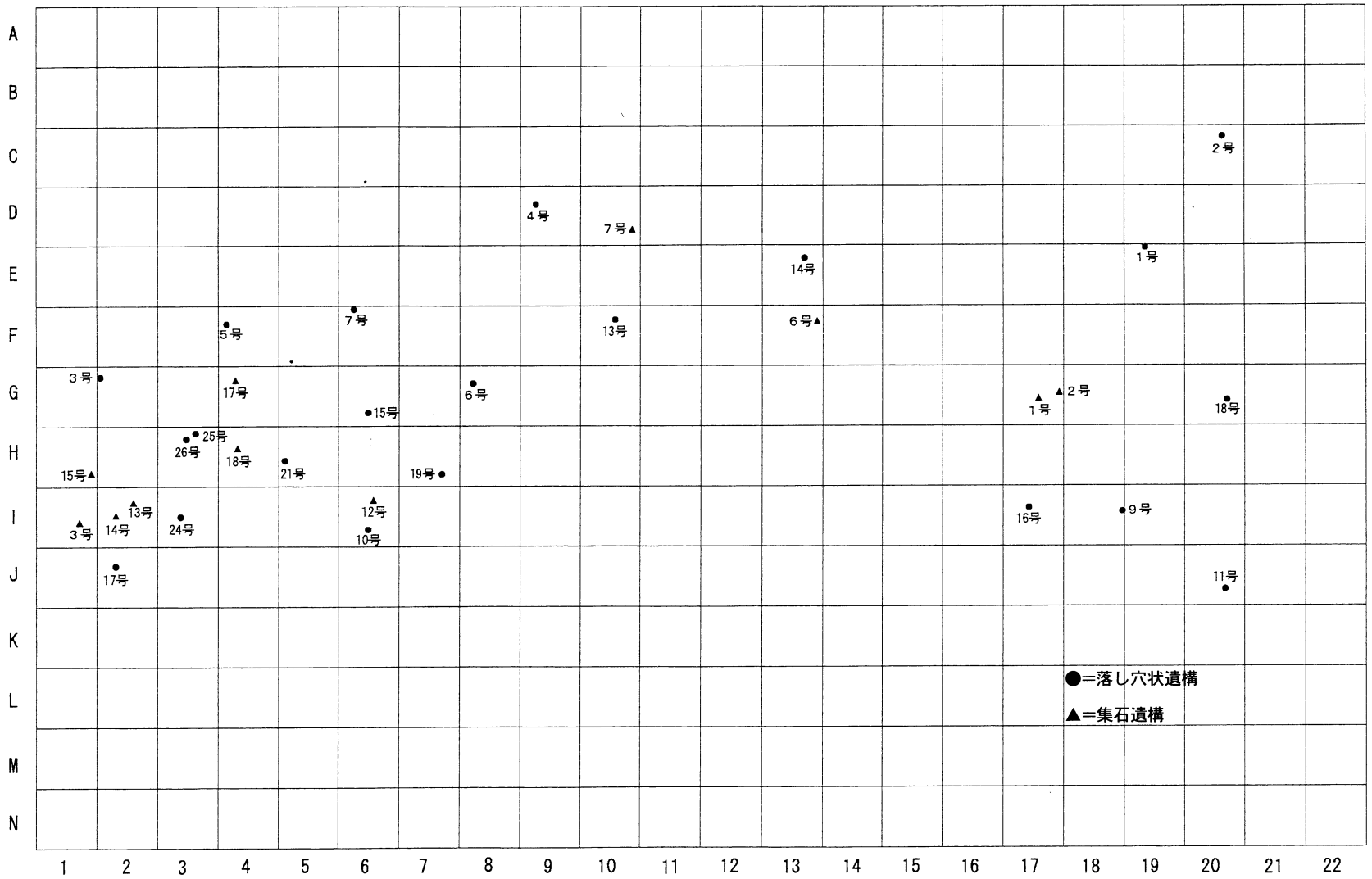
第20図　Ⅵ・Ⅶ層集石遺構(3)



第21図　Ⅵ・Ⅶ層集石遺構(4)



第22図　Ⅵ・Ⅶ層集石遺構(5)



第23図　縄文時代Ⅵ～Ⅹ層集石落し穴状遺構分布図

イ　落し穴状遺構

１号落し穴状遺構（Ⅸ層）はＥ－19区で検出された。

上面プランは不定形で検出ラインの長軸が145cm，短軸が46cm，底面の長軸が117cm，短軸が41cm，深さが27cmである。

２号落し穴状遺構（Ⅸ層）はＣ－20区で検出された。

上面プランは不定形で検出ラインの長軸が90cm，短軸が60cm，長軸と短軸の比率が約３：１と他の落し穴状遺構に比べかなり縦長である。底面の長軸が73cm，短軸が48cm，深さが30cmである。埋土底部は粘質が強い茶褐色土で粒子が非常に細かく，また上部はⅧ層土に少量のＰ－11パミスが混入したような黒色土が流入したように見えるので，時期的にはＰ－11堆積以前の時代と思われる。

３号落し穴状遺構（Ⅸ層）はＧ－２区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸が78cm，短軸が48cm，底面の長軸が54cm，短軸が40cm，深さが12cmである。埋土底部は粘質が弱いアカホヤが少し混じっており，時期的には鬼界カルデラ噴出以前の時代と思われる。

４号落し穴状遺構（Ⅸ層）はＤ－９区で検出された。

上面プランは楕円形で検出ラインの長軸が93cm，短軸が75cm，底面の長軸が80cm，短軸が55cm，深さが40cmである。埋土底部は粘質の強いⅥ層・Ⅶ層より暗く，Ⅷ層より明るい黒褐色土で黄色パミスが混じっている。時期的にはＰ－11堆積よりかなり以前の時代と思われる。

５号落し穴状遺構（Ⅸ層）はＦ－４区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸が97cm，短軸が55cm，底面の長軸が81cm，短軸が43cm，深さが56cmである。底部には２基のピットがあり，その大きさはそれぞれ径24cmと深さ33cm，径22cmと深さ42cmである。

６号落し穴状遺構（Ⅸ層）はＧ－８区で検出された。

上面プランはほぼ円形で検出ラインの長軸90cm，短軸82cm，底面の長軸が75cm，短軸が70cm，深さ35cmである。底部にはピットが１基あり，その大きさは径36cm，深さ34cmである。埋土が複雑に堆積しており，時期についてははっきりしない。

７号落し穴状遺構（Ⅷ層）はＦ－６区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸97cm，短軸65cm，底面の長軸が86cm，短軸が56cm，深さ19cmである。埋土の大半にアカホヤのブロックが混じっており，底部にはさらに薩摩火山灰が見られる。時期的には鬼界カルデラ堆積以前と思われる。

８号落し穴状遺構（Ⅷ層）はＦ－３区で検出された。

上面プランは楕円形で検出ラインの長軸110cm，短軸64cm，底面の長軸が86cm，短軸が63cm，深さ25cmである。埋土の大半は粘質の弱いⅤ～Ⅷが混ざり，人工的に埋められた可能性もある。（Ⅶ層土はわずか）時期としては鬼界カルデラ堆積前の時代と思われる。

９号落し穴状遺構（Ⅷ層）はＩ－19区で検出された。

上面プランはほぼ長方形で検出ラインの長軸131cm，短軸63cm，底面の長軸が126cm，短軸が54cm，深さ17cmである。埋土の底部はアカホヤ火山灰の火砕流であり，時期としては鬼界カル

デラの堆積直前かそれに近い時期と思われる。

10号落し穴状遺構（Ⅷ層）はＩ－６区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸100cm，短軸63cm，底面の長軸が79cm，短軸が52cm，深さ41cmである。埋土底部は黄色パミスが混じる黒褐色土で，上部はアカホヤ二次堆積土である。アカホヤ堆積と混じりながら堆積したと思われる。時期としては鬼界カルデラの堆積前の時期と思われる。

11号落し穴状遺構（Ⅶ層）はＪ－20区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸129cm，短軸69cm，底面の長軸が125cm，短軸が60cm，深さが38cmである。底面にピットが二基あり，その大きさはそれぞれ径21cm，深さ72cmと径21cm，深さ38cmである。

12号落し穴状遺構（Ⅶ層）はＦ・Ｇ－３区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸98cm，短軸54cm，底面の長軸が73cm，短軸が47cm，深さ38cmである。底面にピットが三基あり，その大きさはそれぞれ径15cm，深さ９cm，径13cm，深さ34cm，径８cm，深さ42cmである。埋土は大半がアカホヤ土であるが，中にⅥ～Ⅸ層のブロックが混じっていることから自然流入堆積したものとは考えにくく，人為的に埋められたものではないかと思われる。時期の判断も難しい。

13号落し穴状遺構（Ⅵ層）はＦ－10区で検出された。

上面プランは楕円形で検出ラインの長軸95cm，短軸77cm，底面の長軸が85cm，短軸が65cm，深さ74cmである。埋土の中部から下部分はほとんどアカホヤ火山灰の小ブロックが混入している。時期としては鬼界カルデラ噴出前の比較的近い時期と思われる。

14号落し穴状遺構（Ⅵ層）はＥ－13区で検出された。

上面プランは楕円形で検出ラインの長軸89cm，短軸70cm，底面の長軸が81cm，短軸が64cm，深さ46cmである。底部にピットが一基あり，その大きさは径31cm，深さ30cmである。埋土は複雑に堆積しており，時期の確認は難しい。

15号落し穴状遺構（Ⅵ層）はＧ－６区で検出された。

上面プランは細長楕円形で検出ラインの長軸171cm，短軸59cm，底面の長軸159cm，短軸50cm，深さ50cmである。底部埋土にアカホヤが多く混在する暗橙茶褐色土が見られ，中部にはアカホヤのブロックも見られる。御池軽石とアカホヤ火山灰のパミスが混在する層も見られることから，人為的に埋められた可能性があり時期の判断は難しい。

16号落し穴状遺構（Ⅵ層）はＩ－17区で検出された。

上面プランは楕円形で検出ラインの長軸137cm，短軸62cm，底面の長軸108cm，短軸51cm，深さ78cmである。埋土は黄色軽石を含む明黄褐色土であるが線引きが不能で，時期の判断は難しい。

17号落し穴状遺構（Ⅵa層）はＪ－２区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸99cm，短軸57cm，底面の長軸78cm，短軸60cm，深さ53cmである。埋土の大半はアカホヤの二次堆積土にＰ－11が混じっている。底部には黒色土が堆積しているが，時期を判断することは難しい。

18号落し穴状遺構（Ⅵa層）はＧ－20区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸137cm，短軸61cm，底面の長軸115cm，短軸43cm，深さ120cmである。埋土の大半はアカホヤの堆積土で軽石を含んでいることから鬼界カルデラ堆積時に流入した可能性もある。上部は御池軽石であり完全に埋まる前に堆積しているので，時期としてはアカホヤ堆積前の時期に近いと思われる。

19号落し穴状遺構（Ⅵa層）はＨ－７区で検出された。

上面プランは細長楕円形で検出ラインの長軸115cm，短軸60cm，底面の長軸80cm，短軸48cm，深さ68cmである。埋土の底部はⅩ層・Ⅺ層の腐植したような土が堆積している。またその上部はすべてアカホヤの堆積土で，埋土全体に10～30mmのかなり大きいパミスを含んでいることから，鬼界カルデラ堆積時に流入した可能性もある。

20号落し穴状遺構（Ⅵa層）はＪ－５区で検出された。

上面プランは不定形で検出ラインの長軸83cm，短軸70cm，底面の長軸97cm，短軸97cm，深さ64cmである。埋土はすべて黄色パミスが混じるアカホヤの二次堆積土で，遺構上部にはアカホヤ火山灰の層も見られることから時期としては鬼界カルデラ噴出直前に近い時期と思われる。

21号落し穴状遺構（Ⅵa層）はＨ－５区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸101cm，短軸54cm，底面の長軸88cm，短軸50cm，深さ54cmである。埋土はほぼアカホヤの二次堆積土と思われるが，10mm程度のパミスを含んでいることから，鬼界カルデラ堆積時に流入した可能性もある。また，底部に腐植化したＰ－11のような層があり，時期としては鬼界カルデラ堆積直前の時期と思われる。

22号落し穴状遺構（Ⅵa層）はＪ－４区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸97cm，短軸55cm，底面の長軸88cm，短軸46cm，深さが61cmである。埋土の大半がアカホヤの二次堆積土のようであるが，中部の層に10～20mmの黄色パミスが混入していることや底部の黒色土にもアカホヤが混じっていることから，アカホヤ堆積時に流入した可能性もある。時期としては鬼界カルデラ堆積直前の時期に近いと思われる。

23号落し穴状遺構（Ⅵa層）はＪ－４区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸86cm，短軸56cm，底面の長軸67cm，短軸62cm，深さ60cmである。埋土の大半がアカホヤの二次堆積土であるが，層全体にわたりＰ－11を多く含んでいるので人為的に埋められた可能性もある。

24号落し穴状遺構（Ⅵa層）はＩ－３区で検出された。

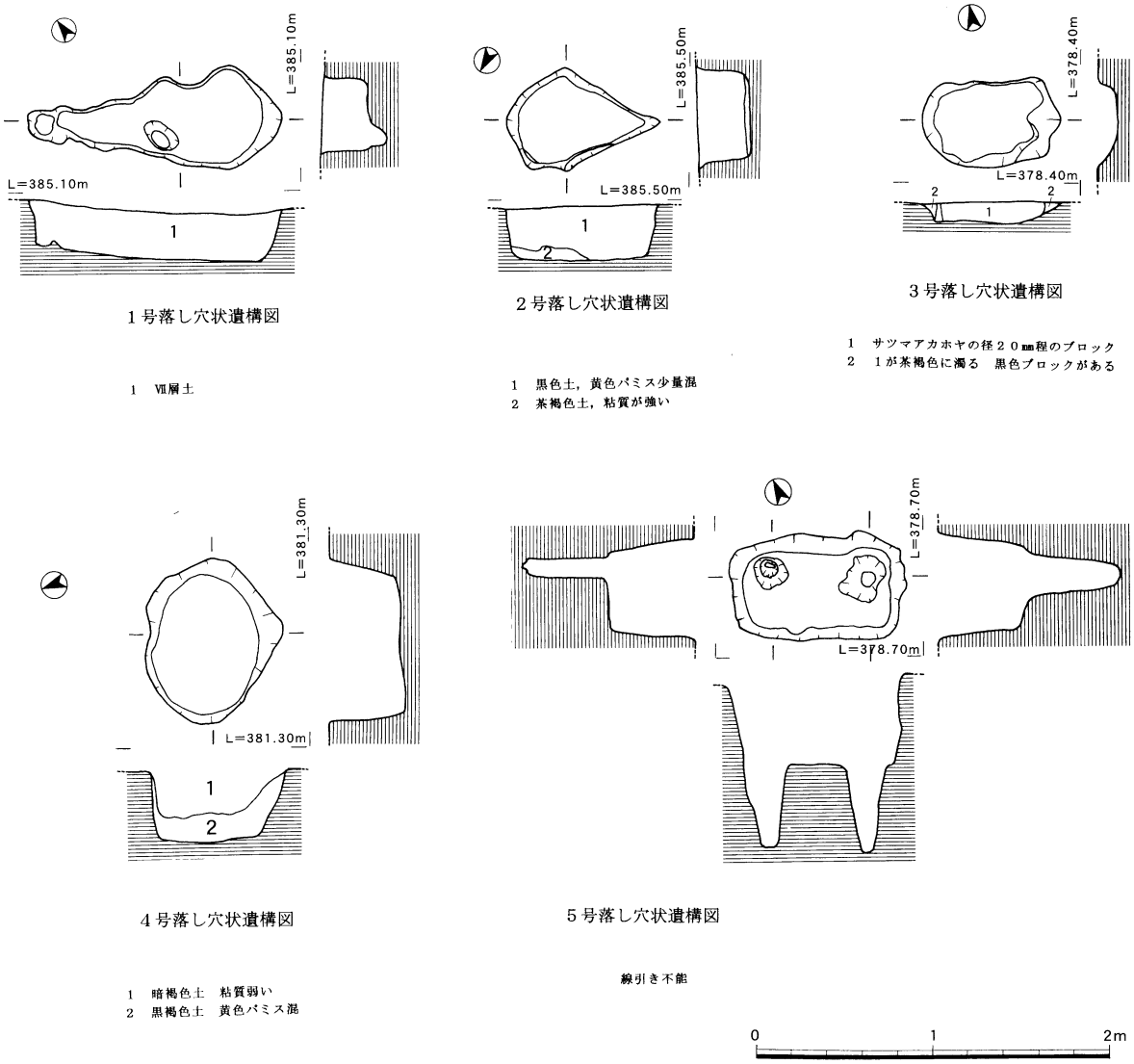
上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸82cm，短軸58cm，底面の長軸85cm，短軸59cm，深さ90cmである。埋土中部にＰ－11が多く混じるⅥ層の流入堆積土が見られ，また上部はアカホヤの二次堆積土である。時期としては74,000年前の桜島噴火後の時期に近いと思われる。

25号落し穴状遺構（Ⅵa層）はＨ－３区で検出された。

上面プランは楕円形で検出ラインの長軸98cm，短軸79cm，底面の長軸87cm，短軸75cm，深さ52cmである。底面中心には径35cm，深さ43cmの土坑がある。埋土は底部ほど複雑に堆積し，時期の判断は難しい。

26号落し穴状遺構（Ⅵa層）はＨ－３区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸114cm，短軸62cm，底面の長軸62cm，短軸61cm，深さ77cmである。遺構の形状がこれまでのものと比較してはっきりせず，埋土はアカホヤブロックやＰ－11が混入した流入土と見られるため，時期の判断が難しい。



１号落し穴状遺構図

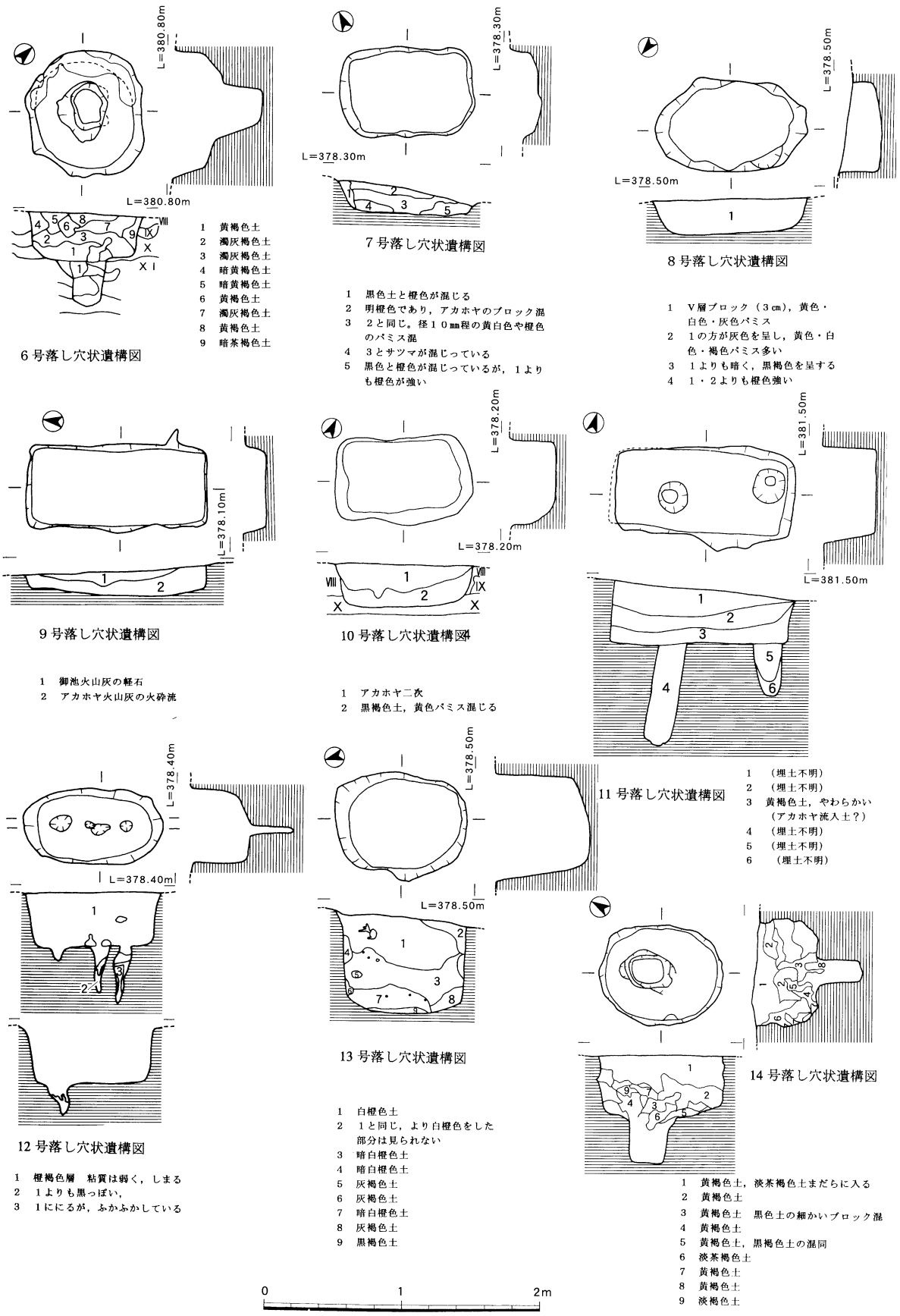
２号落し穴状遺構図

３号落し穴状遺構図

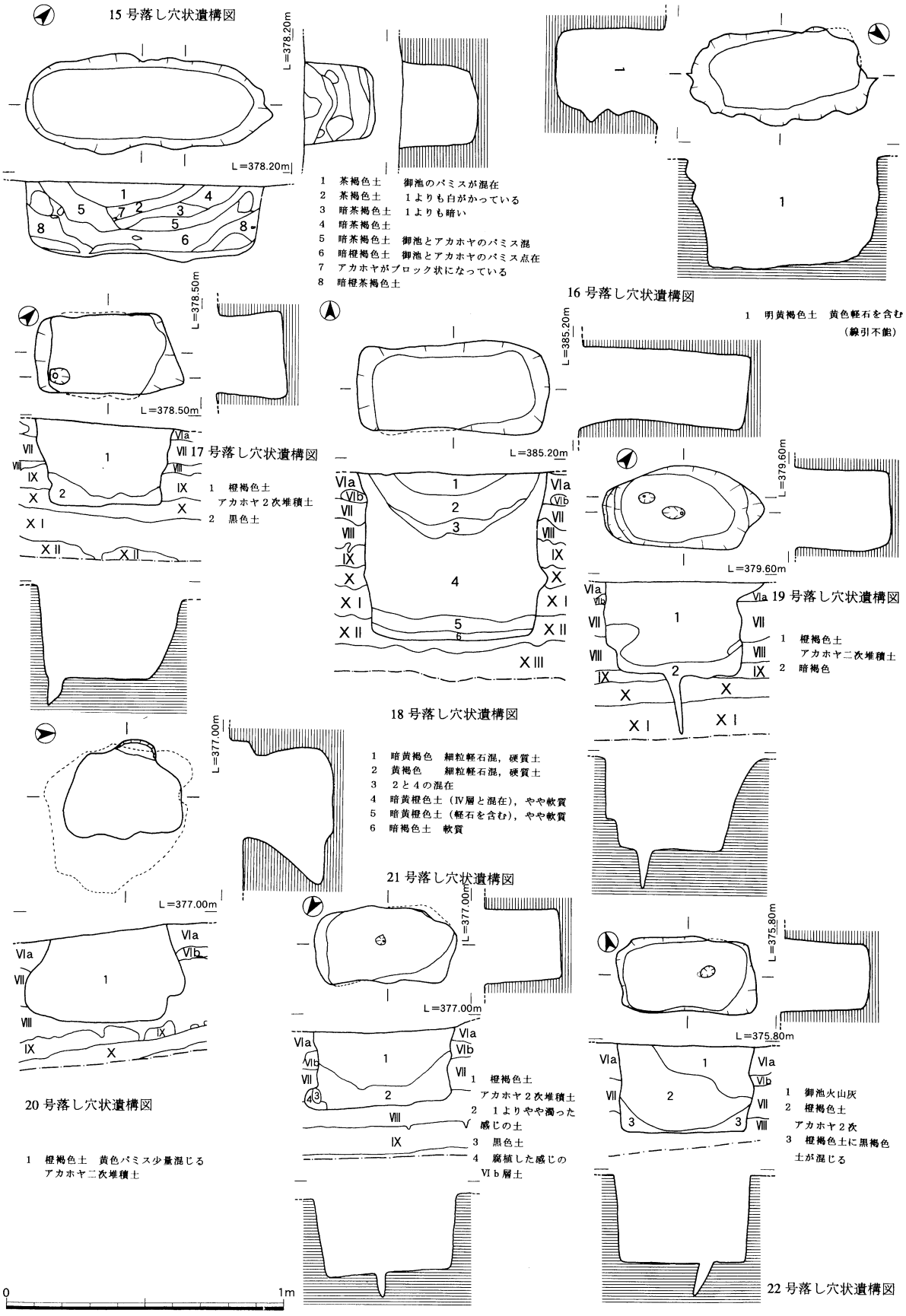
４号落し穴状遺構図

５号落し穴状遺構図

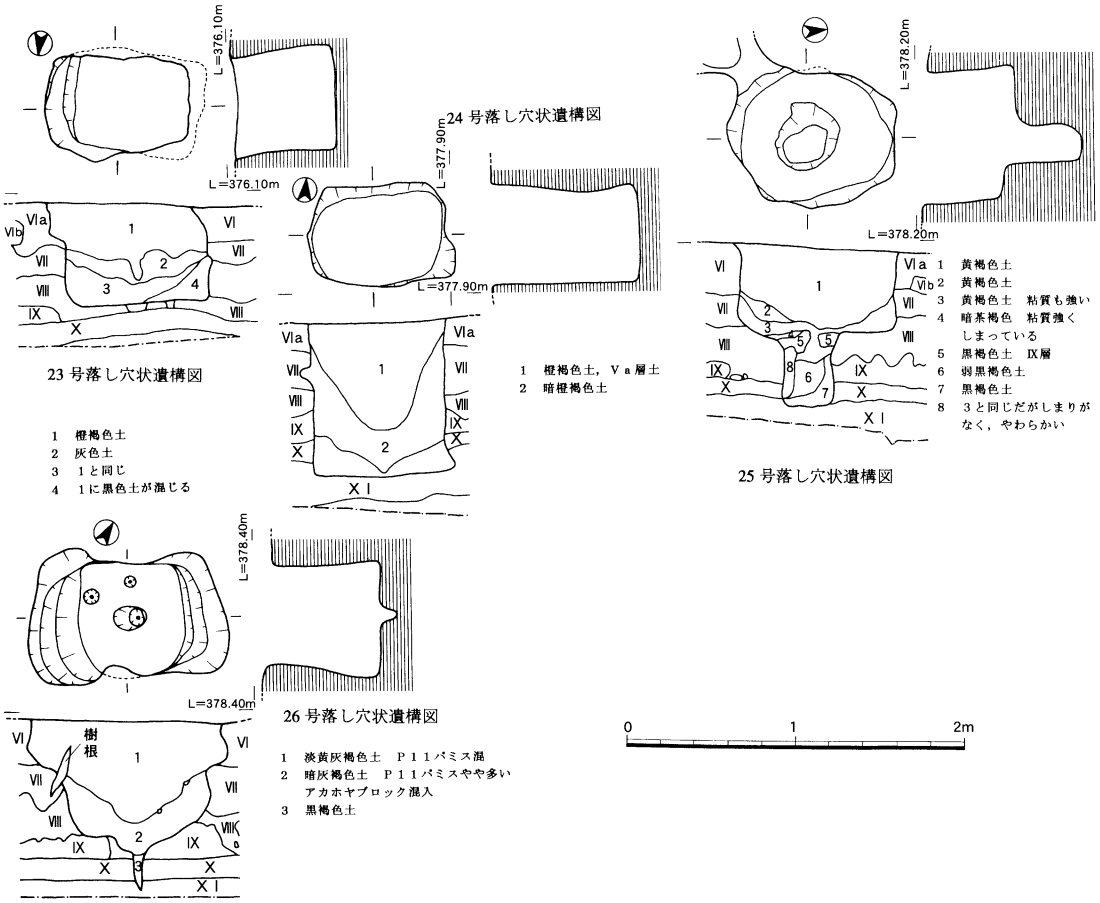
第24図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層落し穴状遺構(1)



第25図 縄文時代Ⅵ・Ⅶ層落し穴状遺構(2)



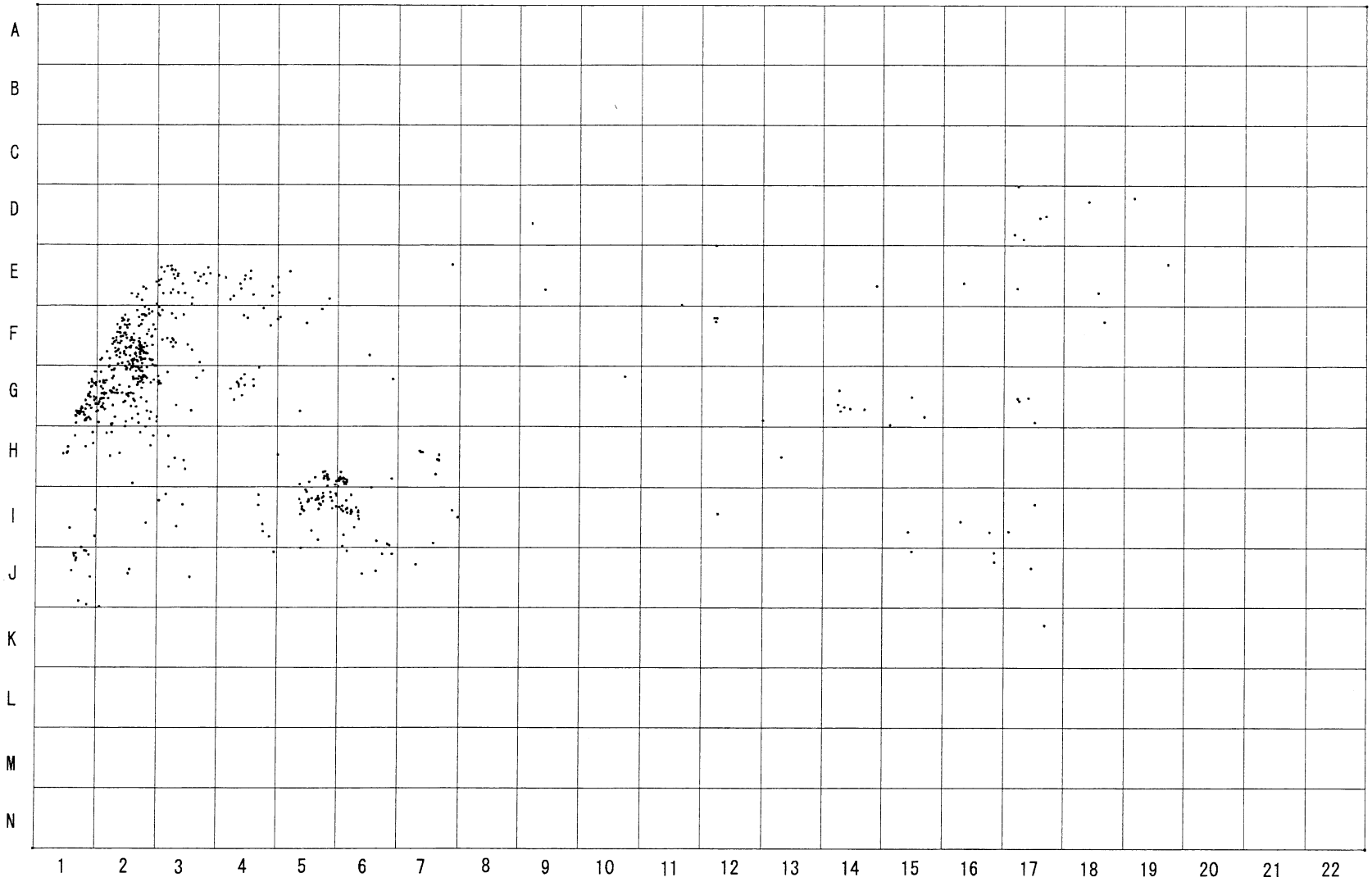
第26図 縄文時代VI・VII層落し穴状遺構(3)



第27図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層落し穴状遺構(4)

第４表　縄文時代早期落し穴状遺構観察表

遺構一覧表	検出面(層)	時期	検出区	検出面 平面プラン	検出面 長軸	検出面 短軸	検出面 深さ	底面 長軸	底面 短軸	備考
1号落し穴状遺構	Ⅸ	早期	E－19	不定形	145	46	27	117	41	
2号落し穴状遺構	Ⅸ	早期	C－20	不定形	90	60	30	73	48	
3号落し穴状遺構	Ⅸ	早期	G－2	隅丸長方形	78	48	12	54	40	
4号落し穴状遺構	Ⅸ	早期	D－9	楕円形	93	75	40	80	55	
5号落し穴状遺構	Ⅸ	早期	F－4	隅丸長方形	97	55	56	81	43	逆茂木2－10，18－19，46
6号落し穴状遺構	Ⅸ	早期	G－8	円形	90	82	35	75	70	逆茂木1－26－32
7号落し穴状遺構	Ⅷ	早期	F－6	隅丸長方形	97	65	19	86	56	
8号落し穴状遺構	Ⅷ	早期	F－3	楕円形	110	64	25	86	63	
9号落し穴状遺構	Ⅷ	早期	I－19	長方形	131	63	17	126	54	
10号落し穴状遺構	Ⅷ	早期	I－6	隅丸長方形	99	62	30	80	51	
11号落し穴状遺構	Ⅶ	早期	J－20	隅丸長方形	129	69	38	125	60	逆茂木？2－20，20－72，38
12号落し穴状遺構	Ⅶ	早期	F･G－3	楕円形	98	54	38	73	47	逆茂木2－14，7－33，42
13号落し穴状遺構	Ⅵ	早期	F－10	楕円形	95	77	74	85	65	
14号落し穴状遺構	Ⅵ	早期	E－13	楕円形	89	70	46	81	64	逆茂木1－32－32
15号落し穴状遺構	Ⅵ	早期	G－6	長楕円形	171	59	50	159	50	埋土サンプル
16号落し穴状遺構	Ⅵ	早期	I－17	楕円形	137	62	78	108	51	
17号落し穴状遺構	Ⅵa	早期	J－2	隅丸長方形	99	57	53	78	60	
18号落し穴状遺構	Ⅵa	早期	G－20	隅丸長方形	137	61	120	115	43	
19号落し穴状遺構	Ⅵa	早期	H－7	楕円形	115	60	68	80	48	逆茂木2－12，13－43，28
20号落し穴状遺構	Ⅵa	早期	J－5	不定形	83	70	64	97	97	
21号落し穴状遺構	Ⅵa	早期	H－5	隅丸長方形	101	54	54	88	50	逆茂木1－7－18
22号落し穴状遺構	Ⅵa	早期	J－4	隅丸長方形	97	55	61	88	46	逆茂木1－10－23
23号落し穴状遺構	Ⅵa	早期	J－4	隅丸長方形	86	56	60	67	62	
24号落し穴状遺構	Ⅵa	早期	I－3	隅丸長方形	82	58	90	85	59	
25号落し穴状遺構	Ⅵa	早期	H－3	楕円形	98	79	52	87	75	逆茂木1－35－44
26号落し穴状遺構	Ⅵa	早期	H－3	隅丸長方形	114	62	77	62	61	逆茂木1－7－22



第28図　縄文時代早期出土遺物分布図

(2) 遺物

Ⅶ層からは貝殻文円筒形土器・手向山式土器・桑ノ丸３類土器・下剥峰式土器や石鏃・スクレイパー等が出土した。またⅥａ層からは塞ノ神式土器や石鏃・磨石・石斧等が出土した。

土器

ア　Ⅰ類土器（第29図　№21～25）

貝殻文を施した一群を一括して取り扱っている。21は口縁部及び胴部上半である。Ｆ－２区のⅦ層上面で出土した。口縁部と胴部までの部位である。器壁の平均は約10㎜，厚い部分で13㎜である。口縁端部は直に立ち上がる。器面は口縁部に平行して胴部中位まで貝殻腹縁による条線文が施文されている。また，下部には縦施文も確認できる。胎土は細かいが石が混じっており，内面はナデて仕上げている。胴部下位及び底部は出土していない。22～24はそれぞれ胴部上位である。22と24はＩ－６区で，23はＩ－５区のⅦ層で出土した。22は内弯しており，23と24は縦位条痕である。25は底部と胴部下半である。Ｉ－５区のⅦ層上面で出土した。底部は平底，胴部は円筒形で底径は134㎜である。胴部には縦に浅く貝殻条痕文が施されている。胎土は砂質で１㎜前後の粒が見られる。内面はナデて仕上げている。胴部上位及び口縁部は出土していない。

イ　Ⅱ類土器（第29図，第30図　№26～34）

26～34の９点とも器面は明瞭な貝殻刺突文で仕上げている。すべてＦ－２区のⅦ層で出土した。26～30は口縁部で，すべてわずかに内弯する。口唇部はすべて丁寧にナデられて形を整えられ，厚さは12～14㎜である。28と29は二種類の刺突文が縦に施され，28の内面はヘラのような工具でナデられている。30は内面をヘラ状工具でナデられ，外面は貝殻刺突文が口縁部から縦に，途中から横さらにその下部では斜めに施されている。26と27は同じ土器と推測され，内面外面共にすすが付着している。工具等は不明であるが，内面は丁寧にナデて仕上げられている。貝殻によるものと思われる刺突文が口縁部から縦に施されている。31～34は胴部ですべてわずかに内弯する。32は貝殻刺突文が斜位に施され，Ｖ型の文様になっている。表面には使用痕があり，すすが付着している。表面の一部が欠けているが，内面外面共にナデられ仕上げている。33は貝殻刺突文が横位及び斜位に施され，斜位の文様は放射線状に広がる。内面はヘラのような工具でナデられている。34は貝殻刺突文が上部は横にその下部は斜位に施され，Ｖ型の文様になっている。内面は削られたあと，丁寧なナデが施されている。31も同じく貝殻刺突文が斜位に施され，Ｖ型の文様になっている。内面外面共にナデられ仕上げている。31～34は厚さが９～14㎜である。

ウ　Ⅲ類土器（第30図　№35）

35は唯一復元できた土器である。Ｉ－６区Ⅶ層で出土した。口径は長径13.9㎝，短径13.1㎝，器高18.7㎝である。器壁は約１㎝，胎土は細かく石英，角閃石の他細礫を含んでいる。調整は良好で口唇部から胴部外面上部にすすの付着が見られる。器形は口縁部がやや内弯し，両端へ山形にせり上がり二箇所に瘤状突起をもっている。文様は胴部全体に横位の貝殻腹縁文がやや平行して施されている。

エ　Ⅳ類土器１（第30図，第31図　№36～55）

押型文を施文した一群を一括して取り扱っている。文様としては，山形と楕円形に区分される。53は楕円文の他に一部貝殻条痕文が見られる。47だけが貝殻腹縁文が施されている。36～38・52は口縁部で36・38は外面に楕円形押型文が施され，37はさらに内面にまで及んでいる。52は文様は見られないが，内外面ともに丁寧にナデられている。口唇部が確認できるものはヘラ状の工具で削られた後にナデて仕上げてある。また，すべて内面あるいは外面にすすが付着し使用痕が見られる。

39～55・47～50・53の12個は胴部で中央下部より弯曲しているが，接合資料の不足により復元することが困難なため，部位についての推定ができないものが多い。内面にヘラ状工具類を用いてナデられているものが多く見られる。

46・51・54・55は底部で46と51は上げ底気味の平底である。底径は46が8.4㎝，51が6.4㎝，54が8.0㎝，55が66㎝である。46・51・55はそれぞれ内面に使用痕（すす）が見られる。

オ　Ⅳ類土器２（第32図　№56～60）

４類土器類と同じ系統の土器であるが，器面は変形撚糸文で仕上げている。５点とも胴部資料で，厚さは９～12㎜である。60は口縁部に近い部分と思われ，口唇部に向かうにつれて外側に広がっている。内面は丁寧にナデて仕上げられている。57・58は内面をヘラのような工具で削られたあと，ナデられている。外面の一部に摩耗が激しい箇所がある。

カ　Ⅴ類土器（第32図　№61・62）

61は口縁部で文様はみられないが，内外面ともに丁寧にナデられている。62は胴部で厚さが約５㎜とやや薄く，貝殻刺突紋が横位に施されて外面は一部摩耗が激しい。内面は丁寧にナデられている。

キ　Ⅵ類土器１（第32図　№63～71）

撚糸文の上から沈線文を施している特徴を指摘できる。内面はすべてナデられ，外面も同じように施されているものもある。器壁は７～９㎜である。63～66は口縁部で口唇部にも沈線文が見られる。64と66の外面にはすすが付着している。67～69は胴部で外面内面ともにナデられ，使用痕とみられるすすが付着している。70・71は底部壁面の一部であるが，接合資料の不足により底径等の正確な情報は求められなかった。

ク　Ⅵ類土器２（第32図，第33図　№72～79）

胴部上半が内弯した後，口縁部に向かい狭まっていく壺形土器である。文様は口縁部と口縁部・頸部境に微隆起線文が見られる。微隆起線文は１本の幅が約２㎜でそれぞれ刻みが加えられており，約３㎜ほど間隔を取りながら３もしくは４本並べて口縁部器壁に不規則に施されている。また，口縁部・頸部境の微隆起線文は，口縁に平行になるように１本の線を螺旋状に飾り，79にはその開始した部分が確認できる。厚さは約５㎜と薄く，口径・器高は接合資料の不足により，復元が困難なため確認できない。内面には使用痕と思われるすすの付着が確認できる。

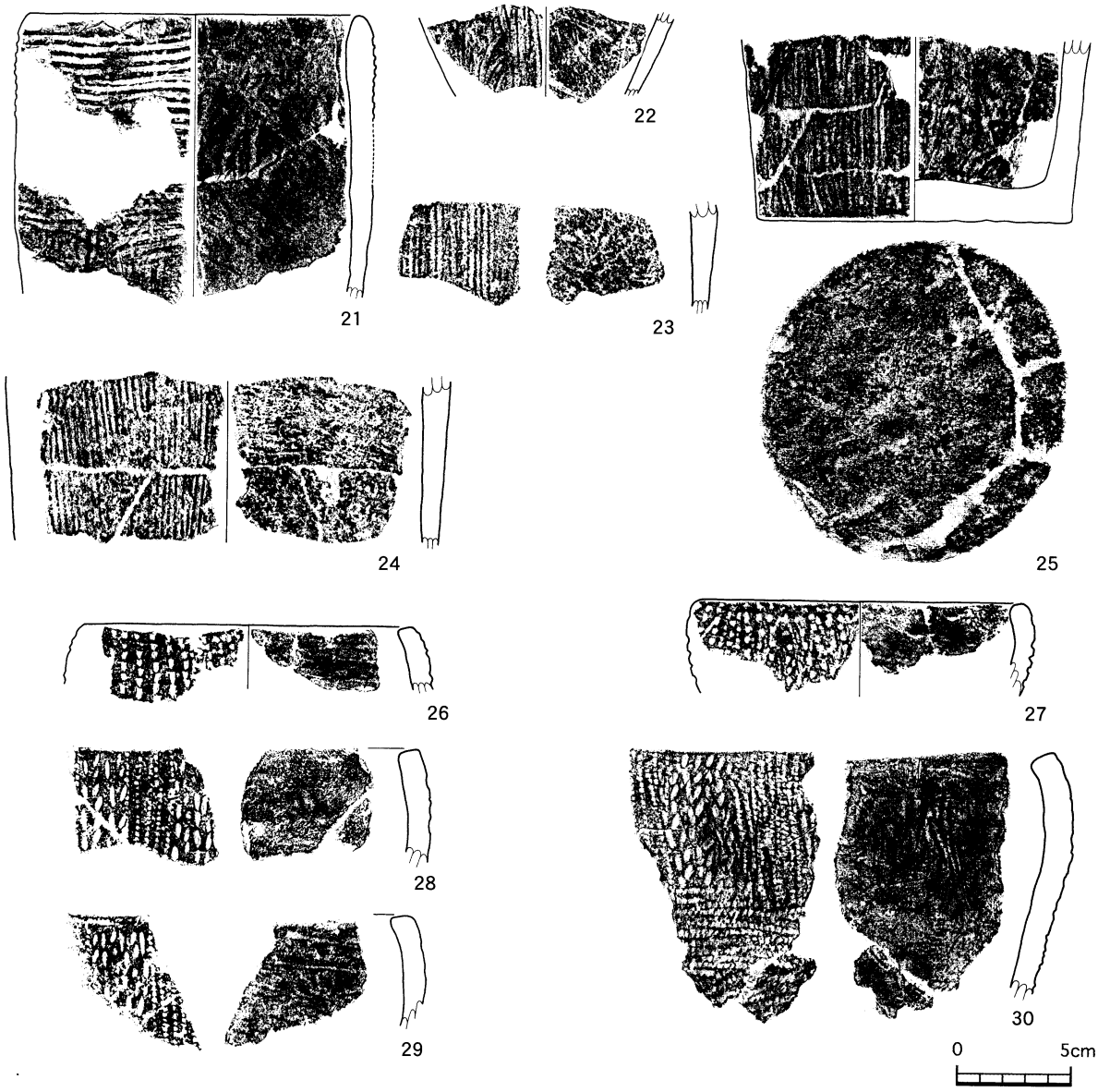
ケ　Ⅶ類土器（第33図　№80～84）

81だけが貝殻刺突文であり，残りは貝殻条痕文である。80・81は口縁部で，口唇部には貝殻

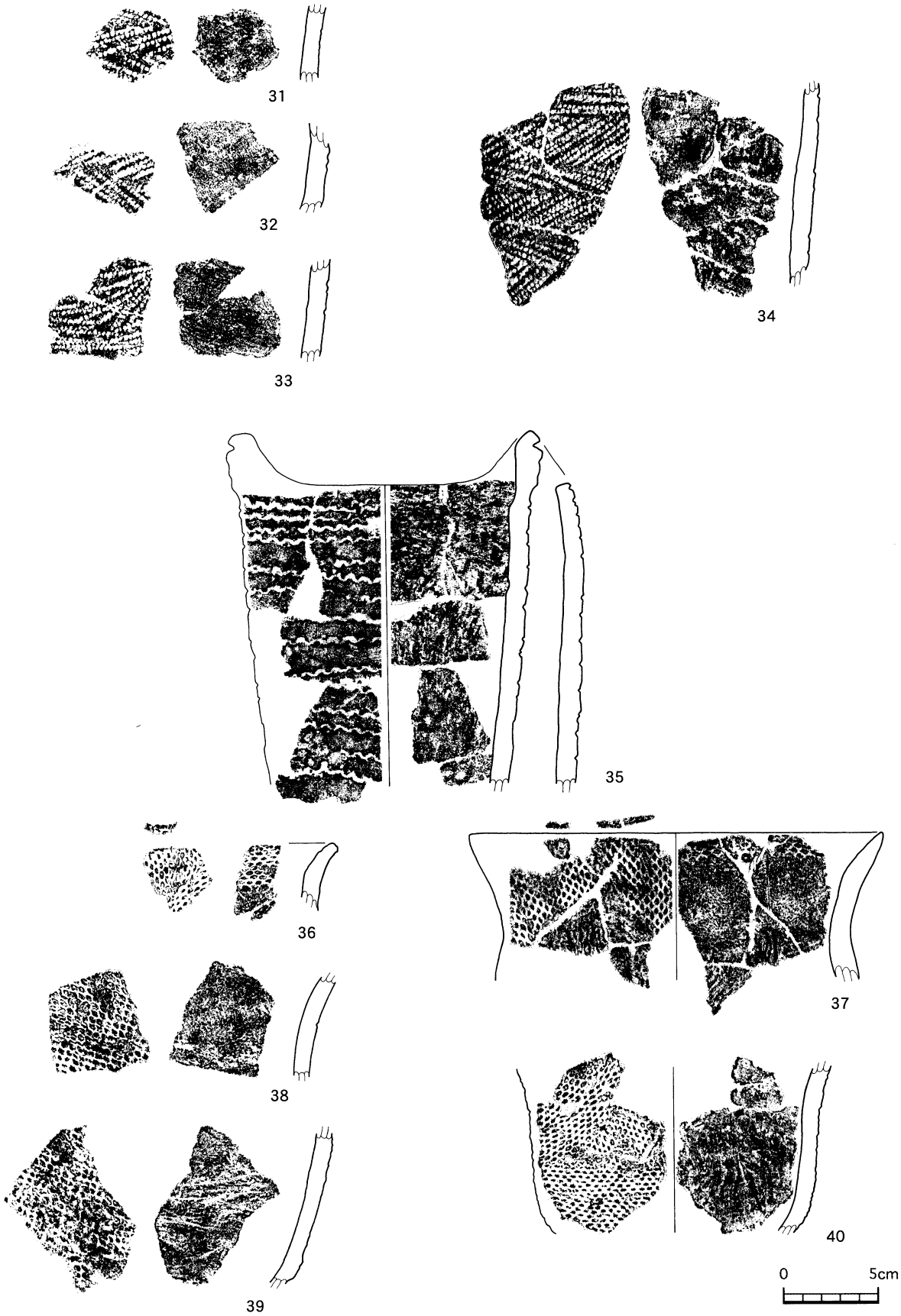
によるものと思われる沈線文が見られる。内面は丁寧にナデて仕上げていて，外面にはすすが付着している。84は胴部上位と推測され，横位波形と縦位の貝殻条痕文に竹管文が施されている。外面内面ともにすすが付着している。胴部は外面内面ともに丁寧にナデられ，使用痕と見られるすすが付着している。全体的に胎土は細かく，焼成もよい。

コ　Ⅷ類土器（第33図　No.85）

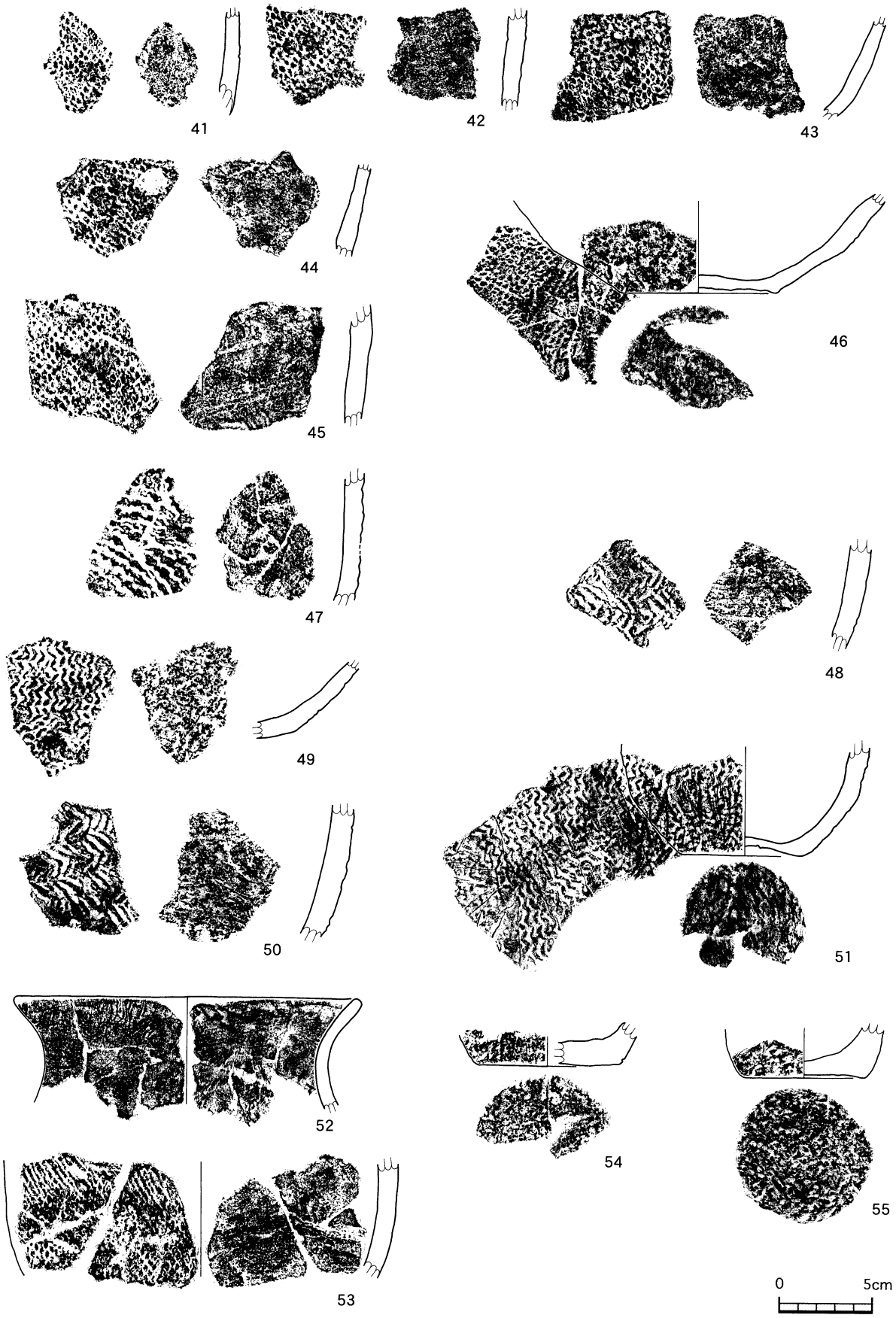
器壁は８㎜前後で，内面はヘラのようなもので削った痕が見られる。底径は6.8㎝で口径は接合資料の不足により推定できない。土器下半部分しか復元できず，外面に文様等は確認できない。胎土は荒く，粒が肉眼でも確認できる。外面内面ともに使用痕と見られるすすが付着している。



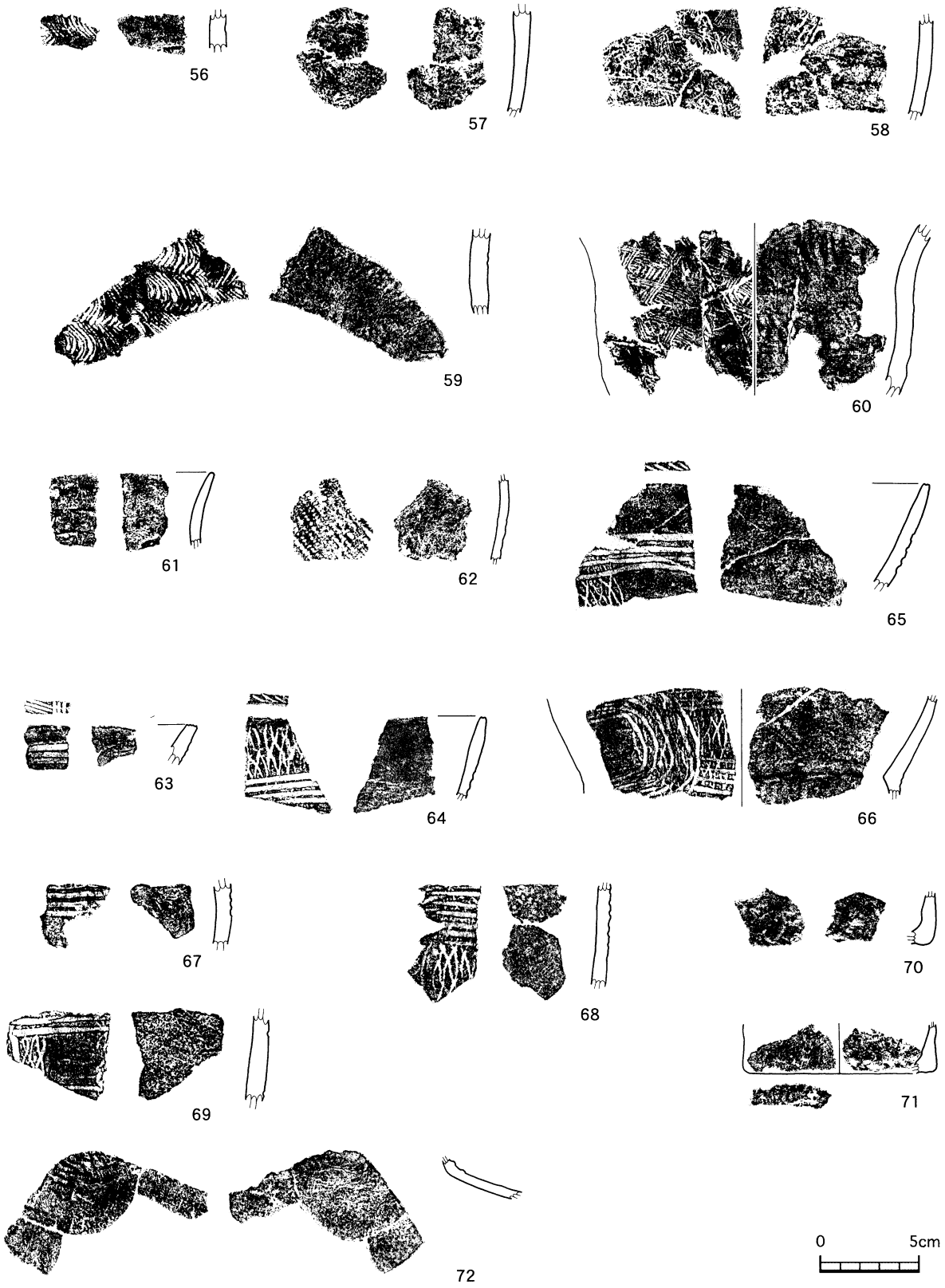
第29図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層出土土器(1)



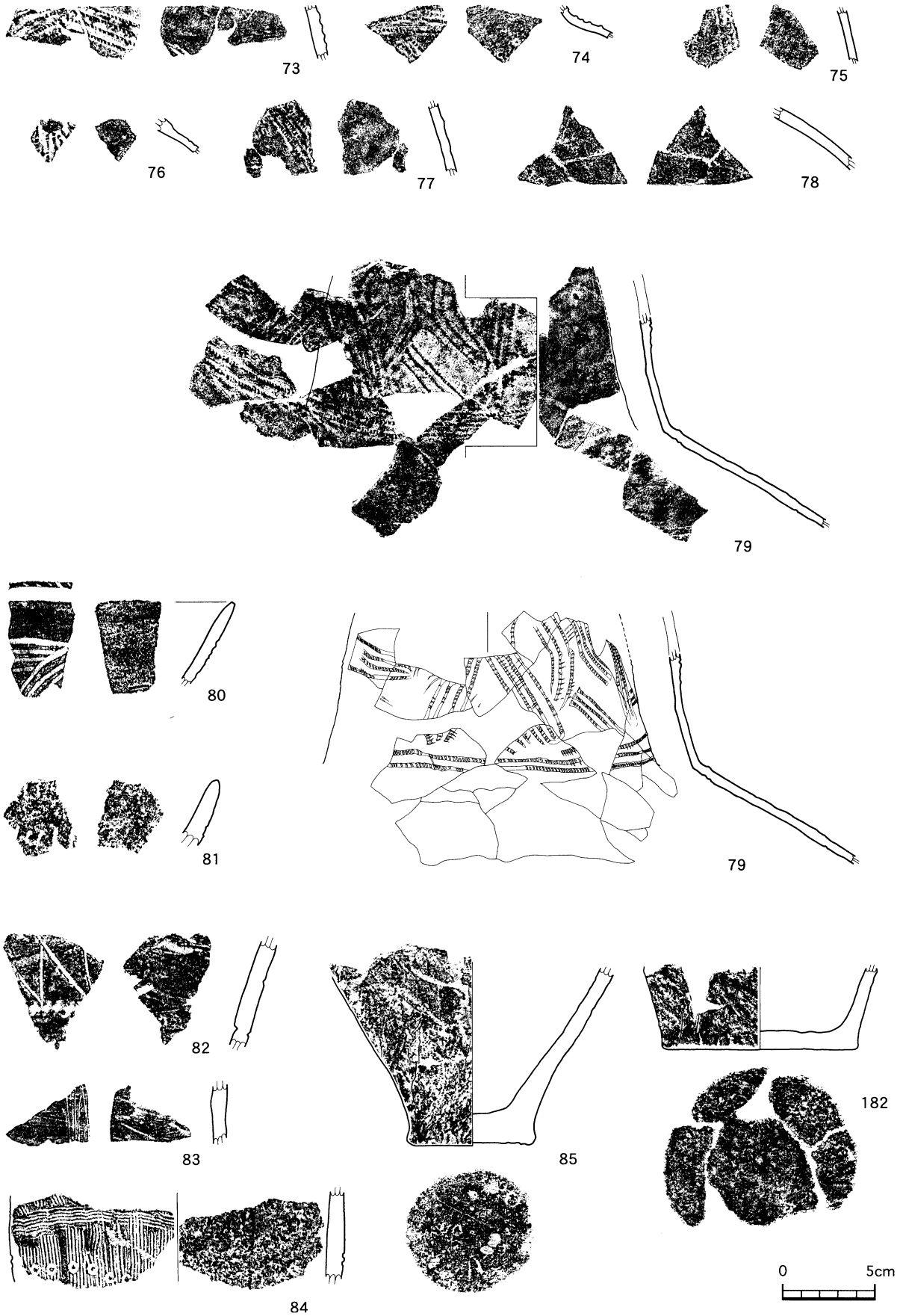
第30図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層出土土器(2)



第31図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層出土土器(3)



第32図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層出土土器(4)



第33図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層出土土器(5)

第５表　縄文時代早期土器観察表

番号	出土区	層位	部位	胎土	焼成	内面色調	外面色調	内面器面調整	外面器面調整	実測番号
円筒形条痕										
21	F－2	Ⅶ	口縁部，胴部上位	石・長・角・細礫	良	浅黄橙色	灰白色	ナデ	口縁部に平行して貝殻腹縁による条線文　すす付着	135
22	I－6	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	黒褐色	にぶい赤橙色	ナデ	貝殻条痕文　内弯	122
23	I－5	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	にぶい赤橙色	橙色	すす付着	貝殻条痕文　縦位	132
24	I－6	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	明赤褐色	橙色	ナデ？	貝殻条痕文　縦位	129
25	I－5	Ⅶ	底部，胴部下位	石・長・角・細礫	良	橙色	橙色	ナデ	底面径13.4cm，縦貝殻条痕文，摩耗して文様がはっきりしない	141
桑ノ丸３類										
26	F－2	Ⅶ	口縁部	石・長・細礫	良	にぶい赤褐色	灰黄褐色	ナデ	口縁部わずかに内弯　貝殻刺突文　縦位　すす全体付着	108
27	F－2	Ⅶ	口縁部	石・長・細礫	良	明赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ	口縁部わずかに内弯　貝殻刺突文　縦位　すす全体付着	105
28	F－2	Ⅶ	口縁部	石・長・細礫	良	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	口縁部わずかに内弯　貝殻刺突文　縦位　すす付着	102
29	F－2	Ⅶ	口縁部	石・長・細礫	良	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	口縁部わずかに内弯　貝殻刺突文　縦位　すす付着	100
30	F－2	Ⅶ	口縁部，胴部上位	石・長・細礫	良	赤褐色	明赤褐色	ヘラナデ	口縁部わずかに内弯　貝殻刺突文　上位より順に縦，横，斜位	104
31	F－2	Ⅶ	胴部	石・長・細礫	良	にぶい赤褐色	明赤褐色	ナデ	貝殻刺突文	107
32	F－2	Ⅶ	胴部	石・長・細礫	良	にぶい赤褐色	にぶい赤橙色	ナデ	貝殻刺突文　横・斜位　ナデ　使用痕（すす）	95
33	F－2	Ⅶ	胴部	石・長・細礫	良	褐色	橙色	ナデ	貝殻刺突文	101
34	F－2	Ⅶ	胴部	石・長・細礫	良	にぶい赤橙色	明赤褐色	ケズリ→ていねいなナデ	貝殻刺突文　方向不定　すす付着	106
手向山										
36	G－3	Ⅶ	口縁部	石・長・細礫	良	黒褐色	にぶい赤褐色	押型文	外弯　押型文（楕円文）　すす付着	83
37	E－3	Ⅶ	口縁部	石・長・角・細礫	良	灰黄色	淡黄色	外弯　ていねいなナデ	外弯　押型文（楕円文）　すす付着	86
38	G－2	Ⅶ	口縁部	石・長・細礫	良	にぶい黄橙色	灰褐色	ナデ	外弯　押型文（楕円文）　すす付着	68
39	E－3	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ていねいなナデ	押型文（楕円文）　すす付着　ナデ？	69
40	G－3	Ⅶ	胴部上位	石・長・細礫	良	黒褐色	にぶい橙色	ていねいなナデ　すす付着	押型文（楕円文）　すす付着	85
41	G－4	Ⅶ	胴部	石・長・細礫	良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	押型文（楕円文？）　かなり摩耗　すす付着	67
42	G－2	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	にぶい黄橙色	橙色	ナデ	押型文（楕円文）　かなり摩耗	71
43	G－3	Ⅶ	胴部	石・長・角	良	灰黄色	にぶい黄橙色	ナデ	押型文（楕円文）　かなり摩耗　ナデ	74
44	F－2	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	にぶい黄橙色	橙色		押型文（楕円文）	77
45	E－2	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	灰白色	浅黄橙色	ナデ	押型文（楕円文）	70
46	E－3	Ⅶ	底部，胴部下位	石・長・角・細礫	良	灰黄色	浅黄橙色	ナデ　平底	押型文（楕円文）	89
手向山（山形）										
47	H－1	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	黒褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ　貝殻腹縁文	81
48	F－3	Ⅶ	胴部	石・長・細礫	良	明赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ	山形押型文　すす付着	64
49	F－12	Ⅶ	胴部下位	石・長・細礫	良	にぶい褐色	にぶい赤褐色		山形押型文　内弯　一部ナデらしき跡あり	66
50	G－1	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		山形押型文　ナデ　すす付着	65
51	F－12	Ⅶ	底部，胴部下位	石・長・細礫	良	にぶい赤褐色	赤褐色	平底	山形押型文　ナデ	80
手向山（無文平行楕円）										
52	F－2	Ⅶ	口縁部	石・長・角・細礫	良	灰黄色	灰黄色	ていねいなナデ　すす付着	外弯　ていねいなナデ　すす付着	115
53	F－2	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	灰黄褐色	にぶい黄橙色	ていねいなナデ	わずかに内弯　貝殻ｊ条痕文	87
54	F－2	Ⅵ	底部	石・長・角・細礫	良	明赤褐色	橙色		平底	88
55	F－2	Ⅶ	底部	石・長・角・細礫	良	黄灰色	橙色	すす付着	平底	90
手向山（変形撚糸紋）										
56	F－2	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	明赤褐色	暗赤褐色	ナデ	変形撚糸文　ナデ	92
57	G－1	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	赤褐色	赤褐色	ヘラケズリ	一部変形撚糸文　摩耗が激しい　ナデ	94
58	G－1	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	にぶい黄橙色	赤褐色	ヘラケズリ	変形撚糸文　ナデ？	93
59	E－3	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	橙色	にぶい橙色	ナデ	変形撚糸文　ナデ	91
60	G－1	Ⅶ	胴部上位	石・長・角・細礫	良	にぶい赤橙色	明赤褐色	ていねいなナデ	変形撚糸文　ナデ	110
平栫										
61	F－4	Ⅵ	口縁部	石・長・角・細礫	良	にぶい黄橙色	灰黄色	ていねいなナデ	外弯　ていねいなナデ　すす付着	117
62	F－6	Ⅶ	胴部	石・長・細礫	良	灰黄褐色	にぶい褐色	ナデ	貝殻刺突文　横位　ナデ	109
塞ノ神Ａ										
63	１T		口縁部　口唇部	石・長・角・細礫	良	灰褐色	褐灰色	ナデ	沈線文　口唇部にも沈線文あり	32
64	H－1	Ⅵ	口縁部　口唇部	石・長・角	良	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	沈線文　撚糸文　口唇部にも沈線文あり	26
65	H－1	Ⅶ	口縁部　口唇部	石・長・角・細礫	良	にぶい黄橙色	にぶい橙色	ナデ	沈線文　撚糸文　口唇部にも沈線文あり	28
66	H－1	Ⅵ	口縁部	石・長・角・細礫	良	にぶい橙色	橙色	ヘラけずり　ナデ	沈線文　撚糸文	25
67	F－2	Ⅶ	胴部	石・長・角	良	浅黄色	にぶい黄橙色	ナデ	沈線文	140
68	G－2	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	にぶい橙色	橙色	ナデ　すす付着	沈線文　撚糸文	31
69	F－2	Ⅶ	胴部	石・長・角	良	にぶい褐色	橙色	ナデ	沈線文　撚糸文	29
70	J－1	Ⅵ	胴部下位	石・長・角	良	灰黄褐色	橙色	すす付着	ナデ	48
71	J－1	Ⅵ	胴部下位	石・長・角・細礫	良	灰黄褐色	橙色	すす付着	ナデ	72
塞ノ神Ａ（壺型）										
72	H－6	Ⅶ	頸部	石・長・角	良	灰色	浅黄橙色	ていねいなナデ　すす付着	微隆起線文	123
73	H－5	Ⅶ	頸部	石・長・角・細礫	良	にぶい黄橙色	橙色	ていねいなナデ	微隆起線文	113
74	H－5	Ⅶ	頸部	石・長・角	良	灰色	橙色	ていねいなナデ	微隆起線文	121
75	H－5	Ⅶ	胴部	石・長・角	良	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ていねいなナデ	微隆起線文	111
76	H－6	Ⅶ	胴部	石・長・角	良	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ていねいなナデ	微隆起線文	112
77	H－5	Ⅵ	頸部	石・長・角	良	浅黄橙色	淡橙色	ていねいなナデ	微隆起線文	120
78	H－6	Ⅶ	胴部	石・長・角	良	灰オリーブ色	にぶい橙色	ていねいなナデ	ていねいなナデ	138
79	H－5	Ⅶ	胴部上位，頸部	石・長・角	良	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ていねいなナデ　すす付着	微隆起線文	130
塞ノ神Ｂ										
80	F－2	Ⅶ	口縁部　口唇部	石・長・角・細礫	良	にぶい橙色	橙色	ヘラけずり　ナデ	貝殻条痕文　ナデ？　口唇部にも貝殻条痕文	35
81	E－4	Ⅵ	口縁部	石・長・角・細礫	良	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	貝殻刺突文　ナデ？	127
82	F－2	Ⅶ	胴部	石・長・角	良	浅黄色	黒褐色	ナデ？	貝殻条痕文　刺突文	34
83	E－3	Ⅶ	胴部	石・長・角・細礫	良	にぶい黄橙色	灰黄褐色	ていねいなナデ	貝殻条痕文	167
84	I－1	Ⅶ	胴部上位	石・長・角・細礫	良	にぶい橙色	橙色	ナデ　すす付着	貝殻条痕文　縦位・横波型　竹管文	27
貝殻条痕（右京西）										
85	G－4	Ⅵ	底部，胴部	石・長・角・細礫	良	にぶい橙色	橙色	すす付着	すす付着	119
不明（中期）										
182	F－12	Ⅳ	底部，胴部下位	石・長・角	良	灰色	にぶい赤橙色	平底	ナデ	118

石器

ア　石鏃（第34図，第40図，第41図）

Ⅶ層から24点・Ⅵ層から９点が出土した。形状は基部が平基式・凹式でそれぞれ正三角形に近いもの・二等辺三角形に近いもの・長幅比の大きく異なるものなどがあるが，形状による分類が可能である。そこで，基部をもとにⅠ～Ⅲ類に大別し，さらに形状等でａ～ｃに細分した。また，分類できないものと未製品がⅥ層からそれぞれ１点ずつ出土した。

(ア)　Ⅰ－ａ類（基部が平基式で正三角形に近いもの）

86・87の２点がⅦ層から出土した。石材はともに玉髄である。86は先端部及び脚部の一部が欠損している。断面は表面が丸みを帯びているのに対し，裏面は平坦である。87は表面裏面ともに微調整剥離が施され，断面形はレンズ状であり完成品と思われる。

(イ)　Ⅰ－ｂ類（基部が平基式で不定形のもの）

89の１点がⅦ層から出土した。石材は黒曜石２類であり，脚部の一部が欠損している。調整剥離は右側面に集中し，断面形はレンズ状である。

(ウ)　Ⅱ－ａ類（基部が凹基式で切れ込みが浅く，正三角形に近いもの）

88・90～97・121の10点がⅦ層から出土した。88・90・91・94が玉髄，95が安山岩，97が黒曜石１類，92と93が黒曜石２Ａ類，96が黒曜石５類，121が黒曜石６類である。121以外は断面形はレンズ状で，側縁部に微調整剥離を施している。88・90・91・93・95・96・97は脚部が一部，94は先端部が欠損している。91は片脚がやや長めに造られている。121は左半分が欠損しており全体がつかめないが，縁部は裏面からの微調整がみられる。

(エ)　Ⅱ－ｂ類（基部が凹基式で切れ込みが浅く，二等辺三角形に近いもの）

98～101の４点がⅦ層から，144・145の２点がⅥ層からそれぞれ出土した。石材はすべて異なり，98がチャート，99が黒曜石２Ａ類，100が頁岩，101が玉髄，144が安山岩，145が黒曜石３類である。98・100・101・144の４点は脚部・先端部のいずれかが欠損しているが，側縁に微調整剥離が施されている。99は片脚がやや長めに造られ，左側縁部に微調整剥離が多く施されている。断面形はレンズ状で，すべて完成品に近いと思われる。

(オ)　Ⅱ－ｃ類（基部が凹基式で切れ込みが浅く，不定形のもの）

102～104の３点がⅦ層から出土した。石材はすべて黒曜石で102が１類，103が２Ａ類，104が５類である。いずれも調整剥離が施されているが，左右非対称で特に103と104は側面からみて抉れている部分がみられる。また103は大きく先端部が欠損している。

(カ)　Ⅲ－ａ類（基部が凹基式で切れ込みが深く，正三角形に近いもの）

105の１点がⅦ層から出土した。石材は黒曜石４類で，両縁部に微調整剥離が施され完成品に近いと思われる。断面形はレンズ状である。

(キ)　Ⅲ－ｂ類（基部が凹基式で切れ込みが深く，二等辺三角形に近いもの）

106・107の２点がⅦ層から，146・147の２点がⅥ層からそれぞれ出土した。石材はすべて異なり，106が玉髄，107が頁岩，146が黒曜石２Ａ類，147がチャートである。146は先端部，147は脚部が欠損しているが，4点とも両縁部に微調整剥離が施されており完成品に近いと思われる。

(ク) Ⅲ－ｃ類（基部が凹基式で切れ込みが深く，長幅比が著しく異なるもの）

108・109の２点がⅦ層から，148～151の４点がⅥ層からそれぞれ出土した。石材は148が黒曜石８類，149が黒曜石６類，残りがチャートである。149が片脚を大きく，108・148・150が片脚若しくは片脚と先端部を欠損しているが，6点ともⅢ－ｂ類と同じく両縁部に微調整剥離が施されており完成品に近いと思われる。

(ケ) Ⅳ類（基部がわずかに抉れ，長幅比が著しく異なるもの）

277の１点がⅥ層から出土した。石材は玉髄である。完成度が高いものである。

(コ) 未製品

166の１点がⅥ層から出土した。石材は玉髄である。

イ　スクレイパー（第37図，第42図）

129がⅦ層から，174がⅥ層からそれぞれ出土した。石材は129が頁岩，174が安山岩である。129は剥片をそのまま利用したもので身部の両面に剥離面を大きく残している。片側側辺のみ両面調整による刃部を形成している。174も剥片を利用したもので身部の片面に剥離面を残している。両面調整による刃部を形成している。

ウ　微細剥離片石器（第40図）

155がⅥ層から１点出土した。石材は玉髄で，自然面を残し片面に調整剥離を施している。

エ　加工痕のある剥片（第40図）

160がⅥ層から１点出土した。石材は玉髄である。剥片を利用し，片面に調整剥離を施している。

オ　石核（第35図）

Ⅶ層から５点が出土した。石材はすべて黒曜石で，115・117・120が２Ａ類，116が２Ｃ類，119が５類である。なお，115・116は残核と判断した。

カ　原礫（第41図，第42図）

171，172，173の３点がⅥ層から出土した。石材はすべて黒曜石５類である。打面調整は行われていない。

キ　加工痕のある剥片（第35図，第36図，第40図，第41図）

Ⅶ層から４点，Ⅵ層から６点が出土した。石材はⅦ層から出土したものでは110・111が黒曜石２Ｃ類，112が黒曜石２Ａ類，128が玉髄であり，Ⅵ層から出土したものでは157が頁岩で，残りの152・161・162・167・169が玉髄である。Ⅶ層から出土した４点はすべて裏面に片面剥離調整が見られる。Ⅵ層から出土した161・162・169はすべて裏面に片面剥離調整が見られ，152・157・167は片面に細かい剥離痕が残り，一部に両面からの剥離調整が見られる。

ク　剥片（第35図，第36図，第40図，第41図）

Ⅶ層から９点，Ⅵ層から10点出土した。石材はⅦ層から出土したものでは113・114・118が黒曜石２Ａ類，122～127が玉髄の二種類で，Ⅵ層から出土したものでは156・170が黒曜石１類，159・168が黒曜石２Ａ類，163が黒曜石２Ｃ類，164が黒曜石８類，153・154・158・165が玉髄である。使用痕や調整は見られず，縁辺を使用した結果の痕と見られる。

ケ　磨製石斧（第37図）

131・132の２点がⅦ層から出土した。使用石材は２点ともホルンフェルスで，板状の礫素材を利用している。一次形成の後刃部周辺を集中的に入念な研磨で仕上げている。

コ　敲石（第37図，第38図，第42図）

Ⅶ層から130・135～137の４点，Ⅵ層から175の１点が出土した。石材は130のみが砂岩で残りは安山岩である。円礫を利用し，両端部や側面の使用が目立つ。

サ　磨石（第37図，第38図，第39図，第42図）

Ⅶ層から138・133・134・140・141・142の６点，Ⅵ層から176～178の３点が出土した。石材はすべて安山岩である。円礫を利用しているが，134・138・176の３点ははっきりした面取りが見られない。残りの５点も周辺の４面が面取りされた石鹸状の存在は見られなかった。なお，140は正面中央に浅いくぼみが見られ，敲石としても使用されたと思われる。

シ　石皿（第38図，第39図）

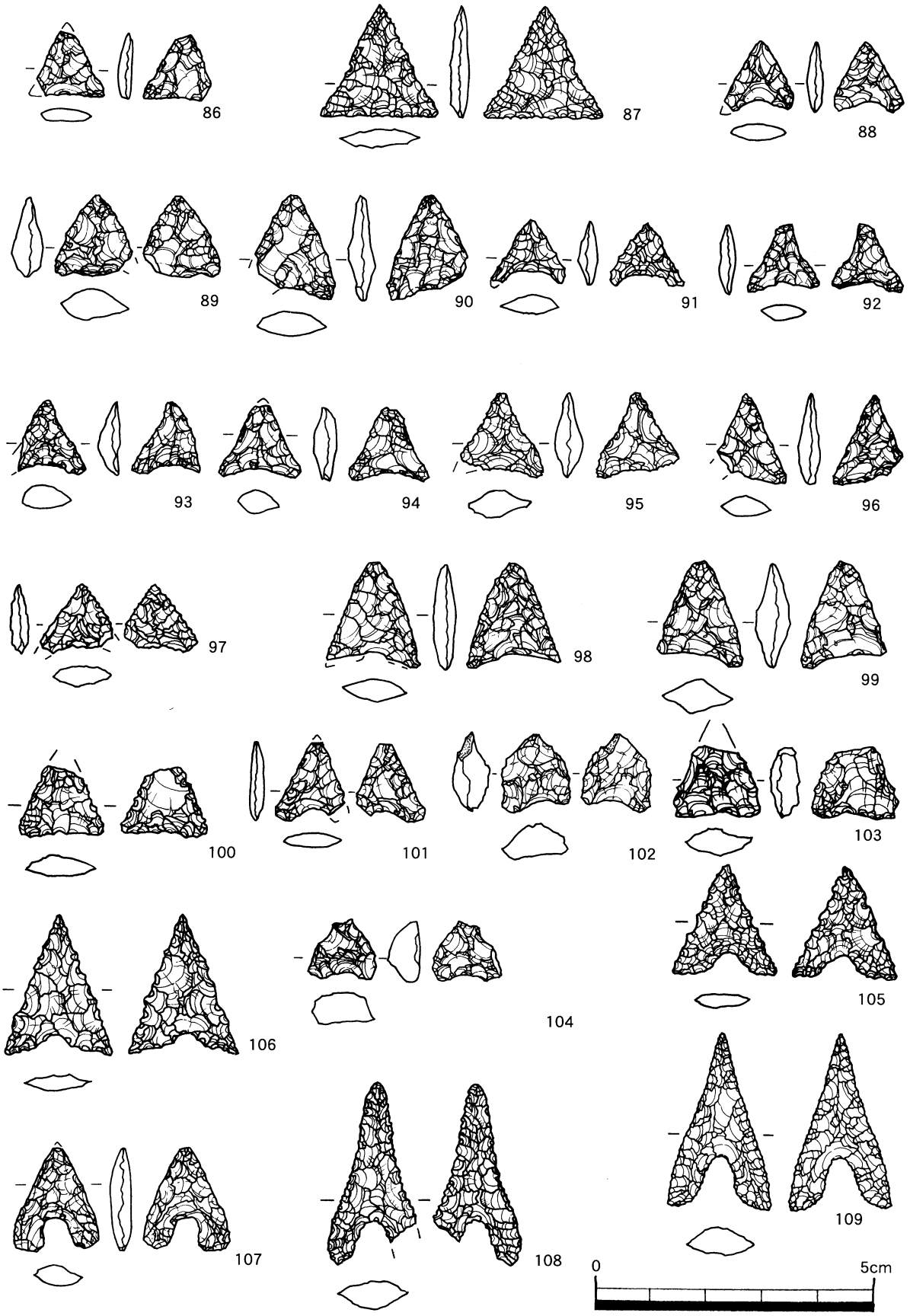
139・143の２点がⅦ層から出土した。石材はすべて安山岩である。139は磨面が緩やかに曲面をなし，横断面は船底型をなしている。143は正面観が台形状で，横断面は長方形を呈している。摩耗の痕跡がはっきりせず，使用した向き等については指摘できない。

第６表　Ⅶ・Ⅵ層出土石器観察表(1)

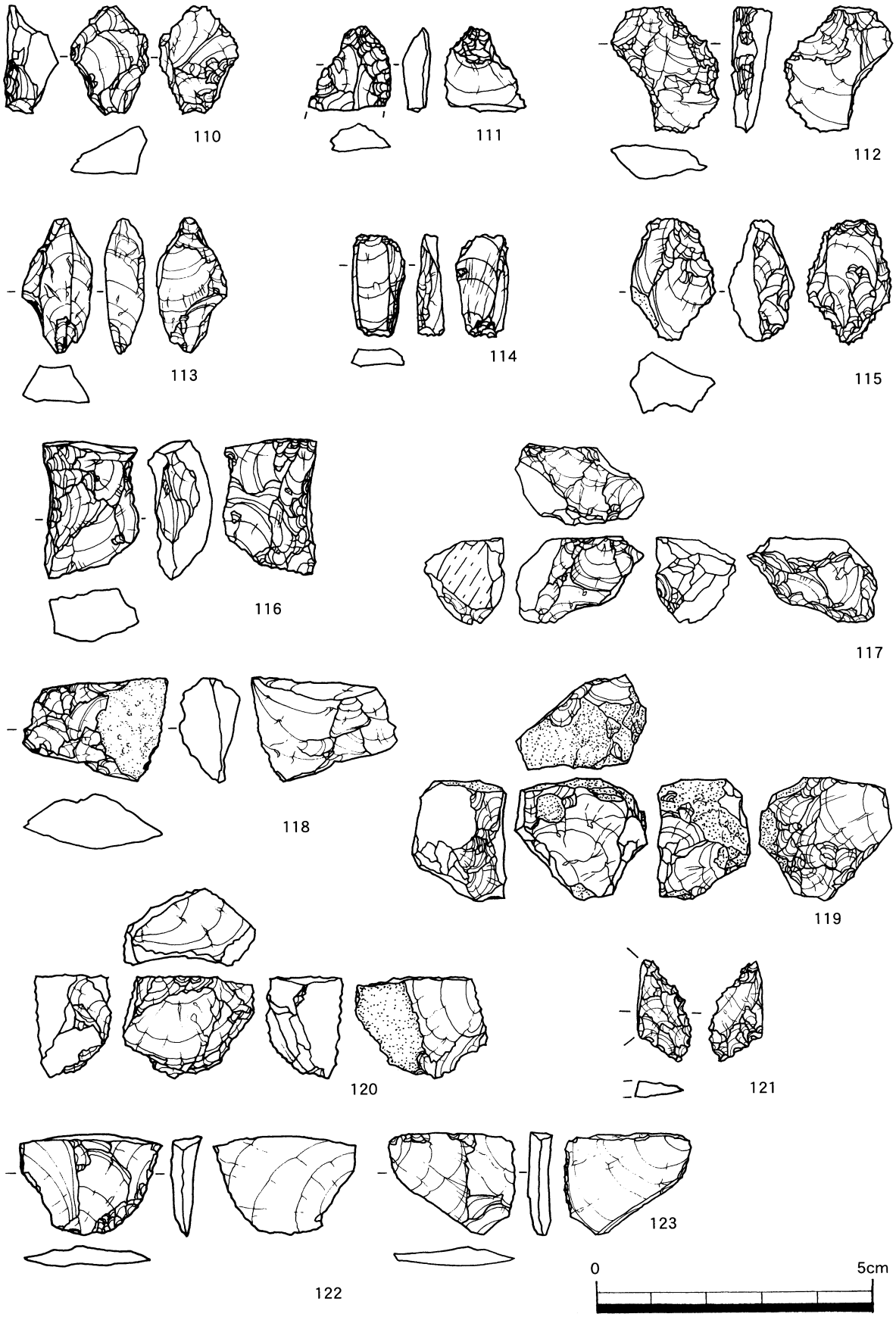
挿図	番号	層	出土区	器　種	地点No	石材	実測No	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
34	86	Ⅶ	F－2	石鏃	1890	CC	133	1.10＋a	1.10＋a	0.30	0.28
	87	Ⅶ	F－11	石鏃	2434	CC	101	2.00	2.10	0.30	0.89
	88	Ⅶ	F－2	石鏃	1893	CC	132	1.30	1.20＋a	0.30	0.26
	89	Ⅶ	F－2	石鏃	1888	OB２A	125	1.50	1.30＋a	0.60	0.74
	90	Ⅶ	F－2	石鏃	1837	CC	118	1.40＋a	1.90	0.40	0.85
	91	Ⅶ	G－2	石鏃	2498	CC	100	1.20	1.20	0.30	0.27
	92	Ⅶ	F－2	石鏃	1878	OB２A	123	1.20	1.30	0.30	0.27
	93	Ⅶ	G－2	石鏃	1951	OB２A	131	1.40	1.20＋a	0.40	0.35
	94	Ⅶ	G－1	石鏃	1978	CC	130	1.30＋a	1.50	0.40	0.50
	95	Ⅶ	G－2	石鏃	集石No１	AN	109	1.50	1.40＋a	0.50	0.56
	96	Ⅶ	F－2	石鏃	1889	OB５	124	1.70	1.20＋a	0.40	0.49
	97	Ⅶ	F－2	石鏃	1835	OB１	119	1.40＋a	1.20＋a	0.30	0.38
	98	Ⅶ	F－2	石鏃	1851	CH	121	1.90	1.70	0.50	0.99
	99	Ⅶ	F－2	石鏃	2012	OB２A	136	1.90	1.60	0.70	0.92
	100	Ⅶ	C－20	石鏃	34	SH	17	1.20＋a	1.50	0.30	0.57
	101	Ⅶ	F－2	石鏃	1859	CC	120	1.30＋a	1.40＋a	0.20	0.36
	102	Ⅶ	G－2	石鏃	2017	OB１	104	1.20	1.70	0.60	0.85
	103	Ⅶ	G－3	石鏃	2014	OB２A	103	1.30＋a	1.10	0.50	0.87
	104	Ⅶ	F－2	石鏃	1898	OB５	127	1.20	1.30	0.60	0.64
	105	Ⅶ	G－17	石鏃	51	OB４	15	2.00	1.90	0.20	0.45
	106	Ⅶ	I－7	石鏃	316	CC	19	2.50	2.00	0.30	0.78
	107	Ⅶ	G－3	石鏃	1998	SH	135	1.80＋a	1.50	0.40	0.84
	108	Ⅶ	D－17	石鏃	48	CH	16	3.30	1.60＋a	0.50	1.27
	109	Ⅶ	G－17	石鏃	52	CH	139	3.13	1.93	0.47	1.57
35	110	Ⅶ	G－1	二次加工剥片	1986	OB２C	110	1.90	1.80	0.90	1.67
	111	Ⅶ	G－1	二次加工剥片	2501	OB２C	114	1.50	1.60	0.60	0.81
	112	Ⅶ	F－2	二次加工剥片	1853	OB２A	111	2.20	1.70	0.70	2.33
	113	Ⅶ	G－3	剥片	2015	OB２A	113	2.40	1.30	0.70	1.64
	114	Ⅶ	G－3	剥片	2504	OB２A	115	1.80	0.90	0.50	0.85
	115	Ⅶ	F－2	石核(残核)	1833	OB２A	116	2.20	1.50	1.30	2.64
	116	Ⅶ	G－1	石核(残核)	1904	OB２C	117	2.50	1.60	1.10	4.19
	117	Ⅶ	G－2	石核	2120	OB２A	129	1.60	2.30	1.40	3.56
	118	Ⅶ	F－2	剥片	2011	OB２A	134	1.90	2.40	1.10	9.49

第７表　Ⅶ・Ⅵ層出土石器観察表(2)

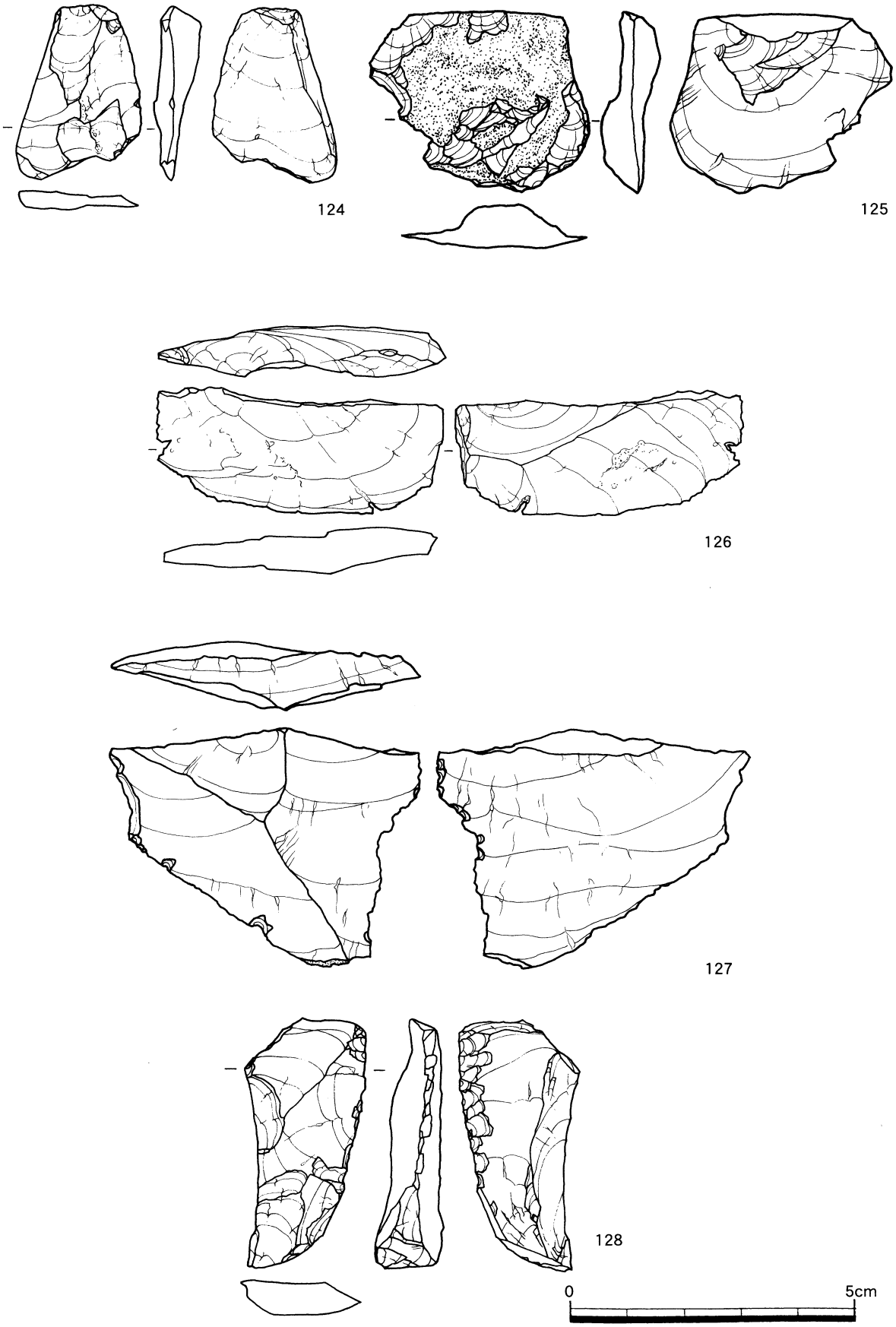
挿図	番号	層	出土区	器　種	地点No	石材	実測No	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
35	119	Ⅶ	F－2	石核	2482	OB 5	107	2.20	2.40	1.60	8.09
	120	Ⅶ	G－2	石核	1912	OB 2 A	112	1.80	2.40	1.30	5.17
	121	Ⅶ	H－2	石鏃	155	OB 6	18	1.80	0.90＋a	0.30	0.40
	122	Ⅶ	F－3	剥片	1821	CC	108	1.90	2.50	0.50	1.86
	123	Ⅶ	G－2	剥片	1921	CC	126	1.80	2.30	0.30	1.60
36	124	Ⅶ	F－2	剥片	1879	CC	122	3.10	2.30	0.70	3.31
	125	Ⅶ	G－2	剥片	2492	CC	106	3.20	3.70	0.80	10.17
	126	Ⅶ	G－1	剥片	2021	CC	105	2.00	5.10	0.90	7.76
	127	Ⅶ	10T	剥片	12	CC	14	4.30	5.60	1.10	17.94
	128	Ⅶ	G－2	二次加工剥片	1931	CC	128	4.50	2.20	1.20	9.08
37	129	Ⅶ	F－3	スクレイパー	1817	SH	102	3.80	7.30	1.20	20.20
	130	Ⅶ	F－2	敲石	1836	SS	51	4.70＋a	3.90	3.20	81.31
	131	Ⅶ	G－10	磨製石斧	2443	HF	45	8.80	3.80	1.70	97.49
	132	Ⅶ	G－2	磨製石斧	1800	HF	44	14.40	6.00	3.80	400.00
	133	Ⅶ	E－2	磨石	2005	AN	48	5.30	5.80	2.50	118.74
38	134	Ⅶ	D－9	磨石	2513	AN	52	15.20	9.20	6.40	173.66
	135	Ⅶ	I－12	敲石	333	AN	40	7.50	5.60	3.00	169.33
	136	Ⅶ下	I－5一括	敲石	－	AN	42	8.00	11.20	4.00	560.00
	137	Ⅶ下	E－3	敲石	1823	AN	53	7.60	6.60	4.00	265.71
	138	Ⅶ	I－4一括	磨石	－	AN	39	7.80＋a	6.80＋a	5.40	390.00
	139	Ⅶ	J－6	石皿	292	AN	41	7.00	11.00	2.40	239.82
39	140	Ⅶ	一括	磨石	－	AN	38	10.80	9.60	5.00	910.00
	141	Ⅶ	C－4	磨石	2205	AN	46	10.60	9.00	5.20	810.00
	142	Ⅶ	H－7	磨石	248	AN	43	9.80	8.20	4.40	610.00
	143	Ⅶ	－	石皿	－	AN	54	26.20	19.60	4.80	4,800.00
40	144	Ⅵ	D－17	石鏃	41	AN	12	1.40＋a	1.60＋a	0.40	0.77
	145	Ⅵ	J－4	石鏃	－	OB 3	13	1.60	1.80	0.50	0.78
	146	Ⅵ	E－14	石鏃	2375	OB 2 A	76	1.40＋a	1.60	0.50	0.78
	147	Ⅵ	I－4	石鏃	234	CH	2	1.90＋a	1.70	0.40	0.98
	148	Ⅵ	F－5	石鏃	2123	OB 8	81	1.80＋a	1.50＋a	0.30	0.64
	149	Ⅵa	G－6	石鏃	2379	OB 6	78	2.20＋a	1.20＋a	0.30	0.56
	150	Ⅵa	E－7	石鏃	2377	CH	77	3.30＋a	2.00＋a	0.30	2.13
	151	Ⅵ	E－12	石鏃	2433	CH	79	2.90	2.00	0.50	1.79
	152	Ⅵ	F－2	二次加工剥片	1764	CC	75	1.60＋a	1.10＋a	0.40	0.61
	153	Ⅵ	G－2	剥片	1719	CC	74	1.40	1.40	0.30	0.60
	154	Ⅵ	F－2	剥片	1797	CC	72	2.80	3.90	0.90	7.43
	155	Ⅵ	G－2	微細剥離片石器	1761	CC	73	2.30	1.50	0.80	3.21
	156	Ⅵ	G－2	剥片	1724	OB 1	97	1.60	0.70	0.40	0.25
	157	Ⅵ	F－2	二次加工剥片	1751	SH	86	1.60	2.00	0.20	0.58
	158	Ⅵ	G－2	剥片	1728	CC	87	2.40	1.70	0.70	2.48
	159	Ⅵ	F－2	剥片	1758	OB 2 A	89	2.70	1.40	1.00	3.85
	160	Ⅵ	F－2	二次加工剥片	1767	CC	91	2.80	1.50	0.50	1.26
41	161	Ⅵ	F－2	二次加工剥片	1753	CC	88	1.40	1.30	0.60	0.79
	162	Ⅵ	F－2	二次加工剥片	1776	CC	93	2.30	1.50	0.70	2.08
	163	Ⅵ	F－2	剥片	1780	OB 2 C	95	1.90	1.60	0.60	1.55
	164	Ⅵ	E－4	剥片	2115	OB 8	96	1.20	3.30	0.70	2.60
	165	Ⅵ	G－2	剥片	1763	CC	90	3.40	2.20	1.00	6.37
	166	Ⅵ	F－2	石鏃（未製品）	1773	CC	92	2.30	1.60	0.80	1.98
	167	Ⅵ	F－2	二次加工剥片	1777	CC	94	2.20	1.90	0.60	2.07
	168	Ⅵ	G－2	剥片	1803	OB 2 A	83	3.20	3.90	1.00	11.12
	169	Ⅵ	G－1	二次加工剥片	1715	CC	98	2.40	2.20	0.90	5.54
	170	Ⅵ	G－2	剥片	1737	OB 1	99	3.20	2.00	0.90	5.12
	171	Ⅵ	G－3	原礫	2503	OB 5	80	2.10	2.90	2.60	13.42
42	172	Ⅵ	G－2	原礫	1769	OB 5	84	2.20	2.70	1.40	8.15
	173	Ⅵ	F－2	原礫	1760	OB 5	85	3.10	2.10	1.90	12.51
	174	Ⅵ	E－4	スクレイパー	2117	AN	82	3.20	2.50	0.90	5.88
	175	Ⅵ	F－2	敲石	1750	AN	47	3.00	2.60	1.80	19.91
	176	Ⅵ	G－14	磨石	2368	AN	49	6.00	7.10	4.90	293.84
	177	Ⅵ	J－10	磨石	179	AN	36	9.60	7.00	4.00	440.00
	178	Ⅵ	E－5	磨石	2414	AN	50	9.40	9.20	4.00	690.00
41	277	Ⅵ	I－16	石鏃	2428	CC		3.40	1.30	0.30	1.96



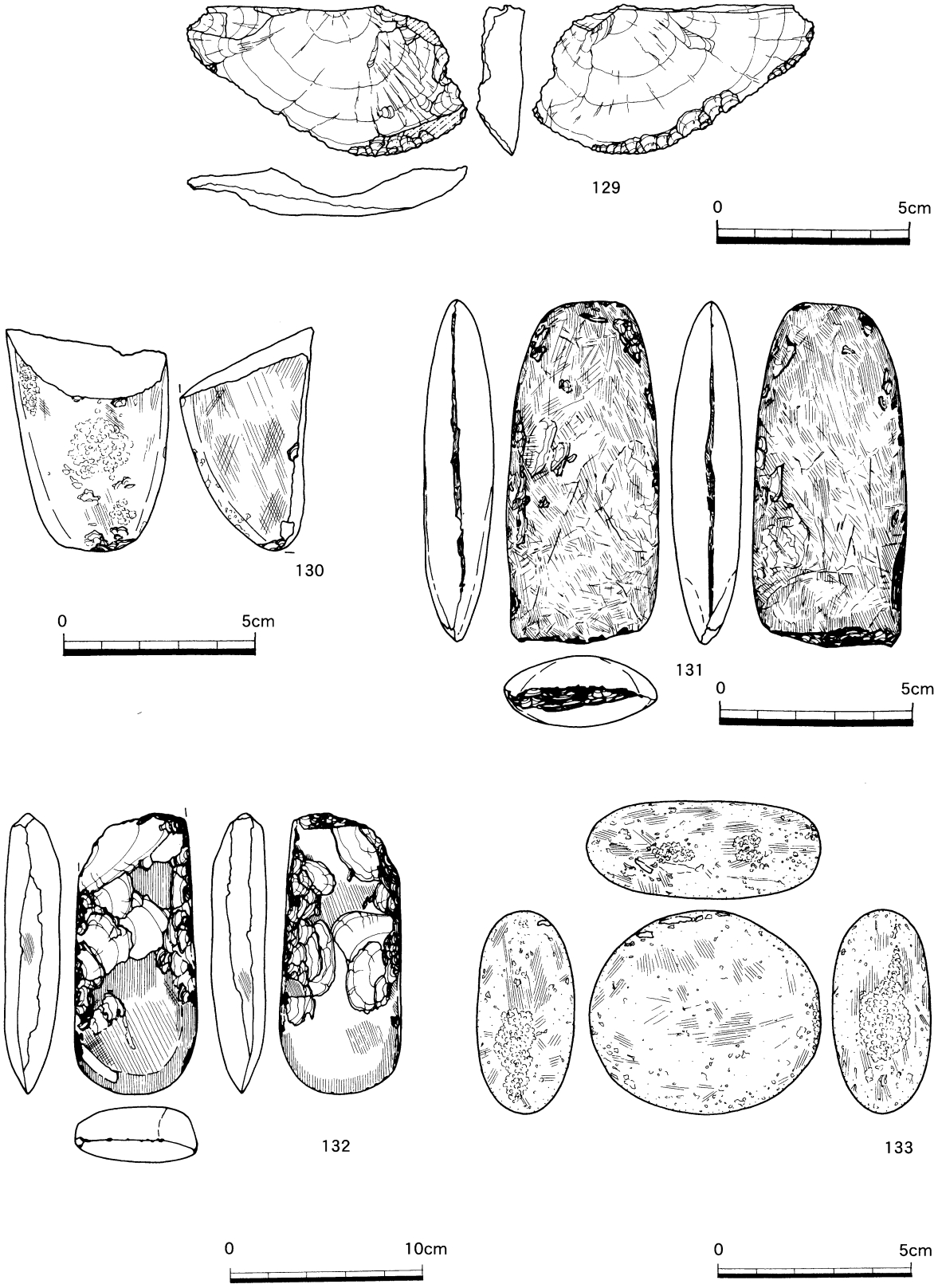
第34図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層出土石器(1)



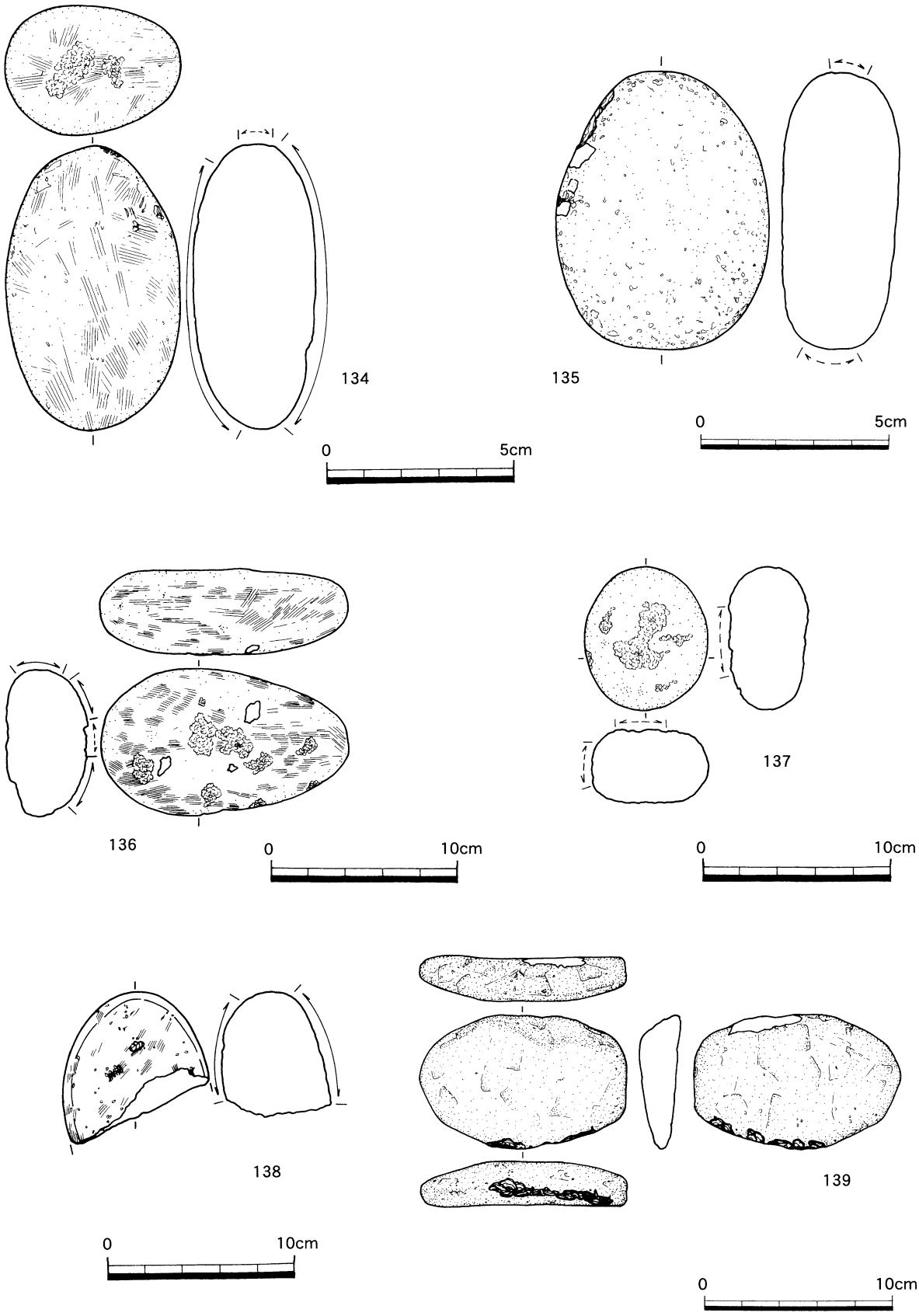
第35図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層出土石器(2)



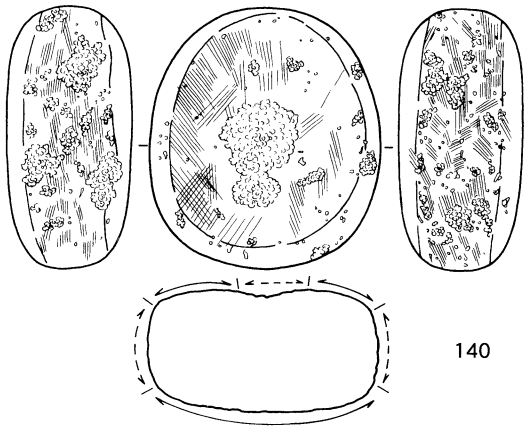
第36図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層出土石器(3)

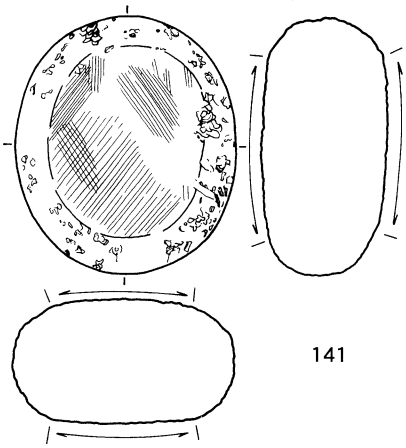


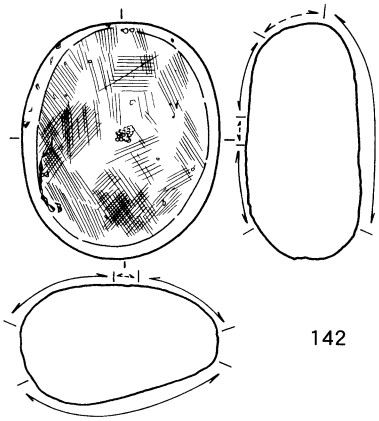
第37図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層出土石器(4)

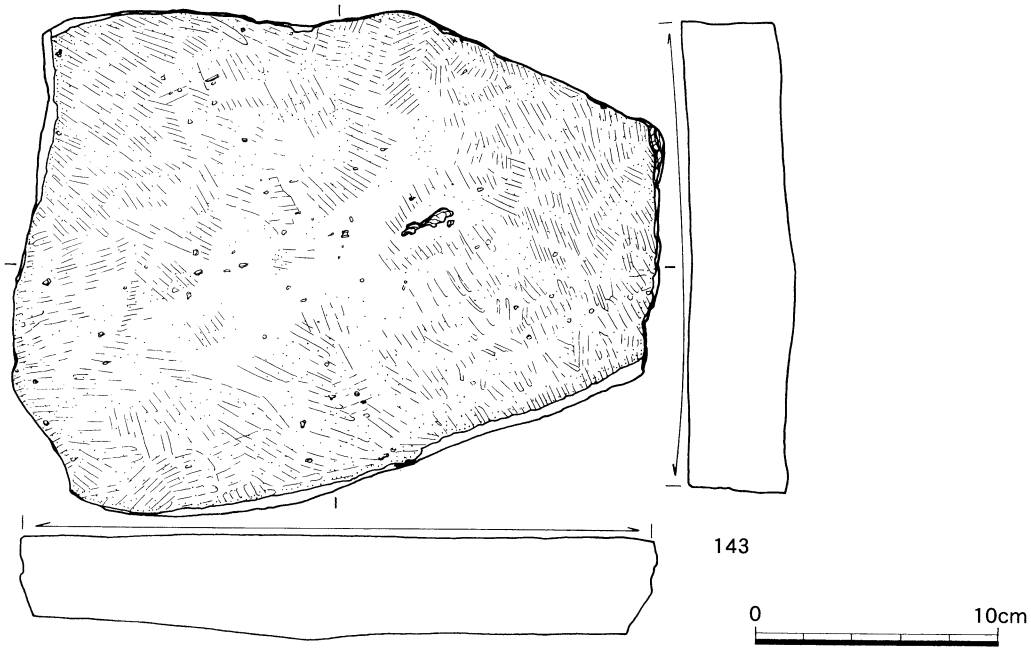


第38図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層出土石器(5)

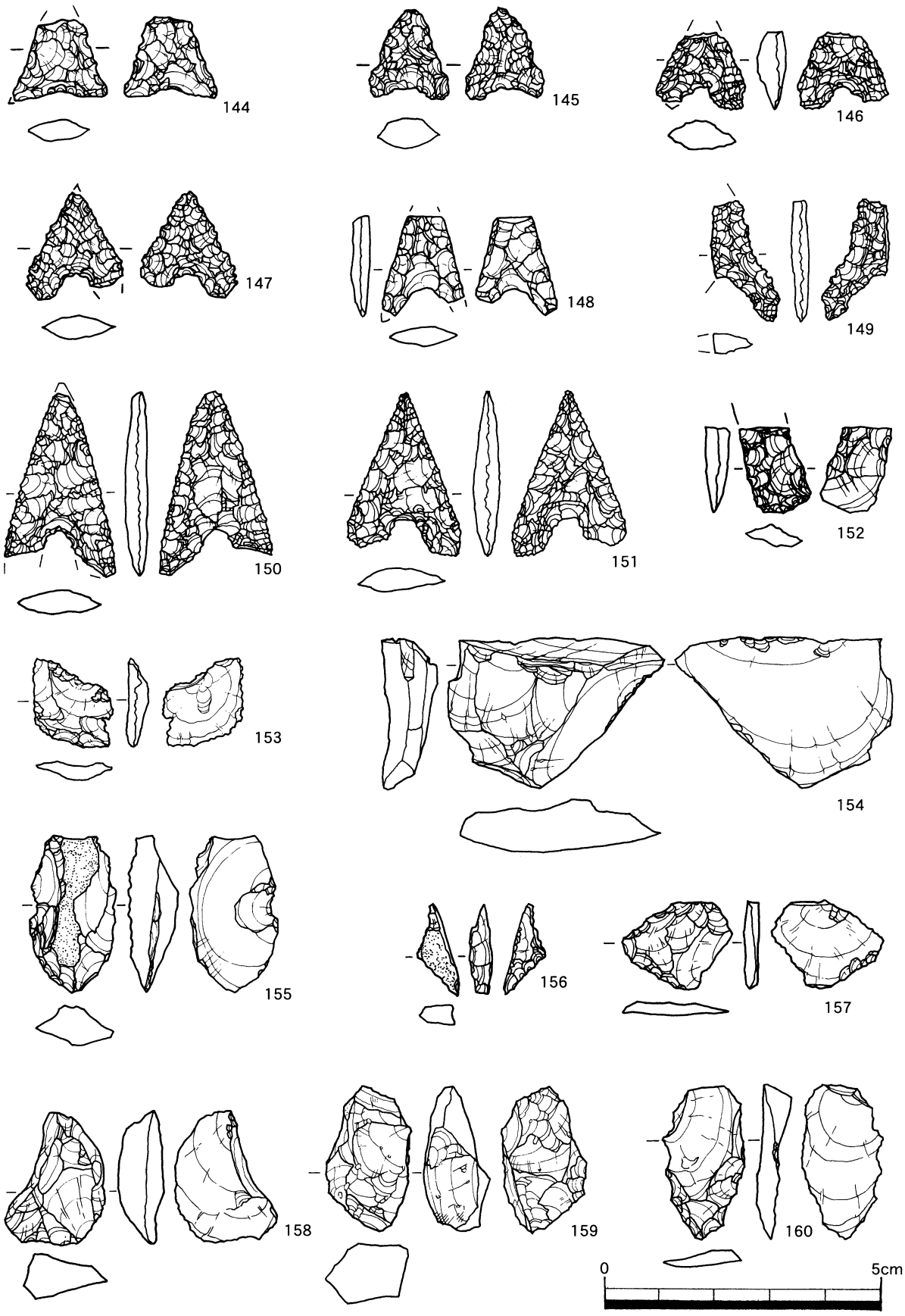




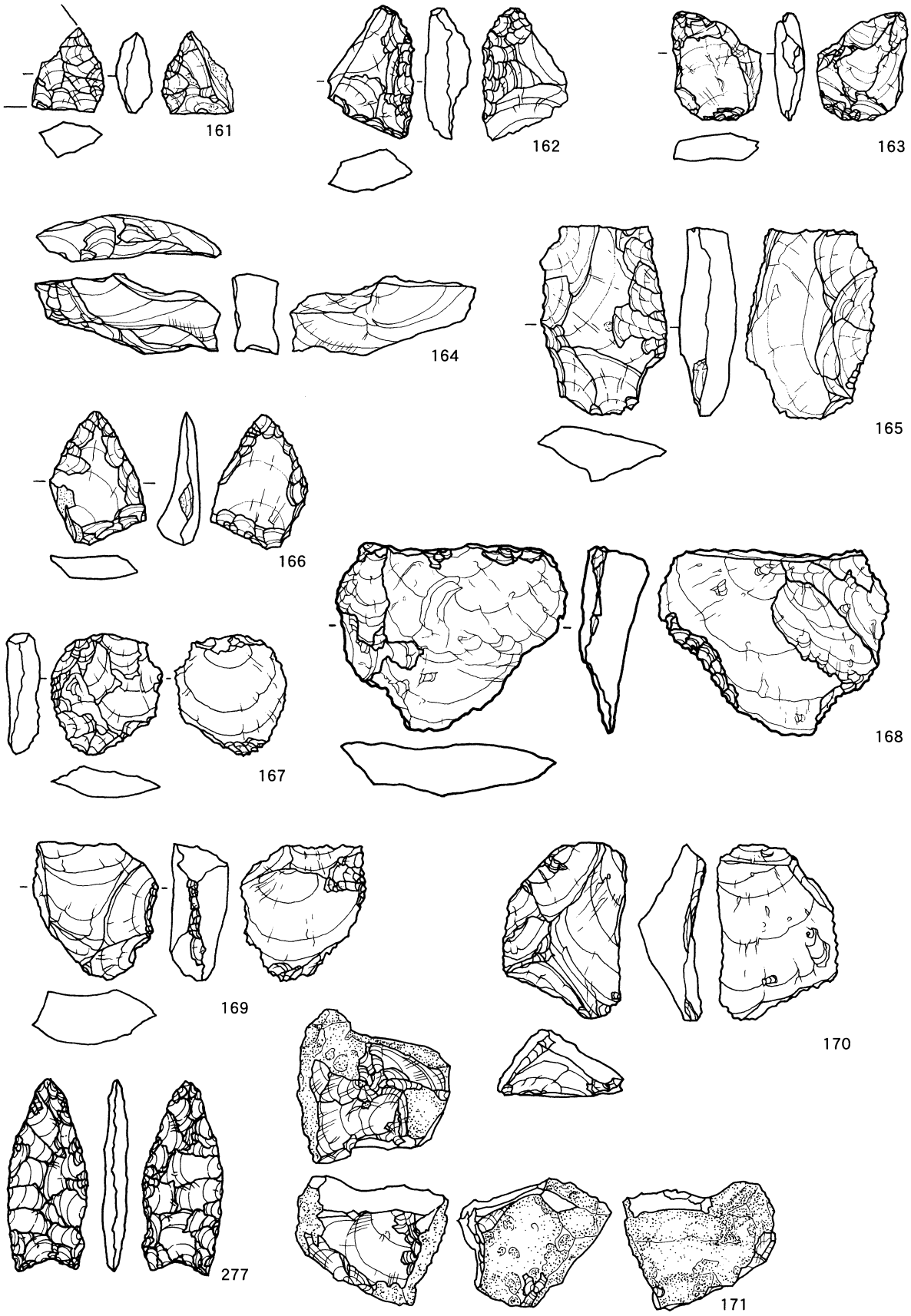




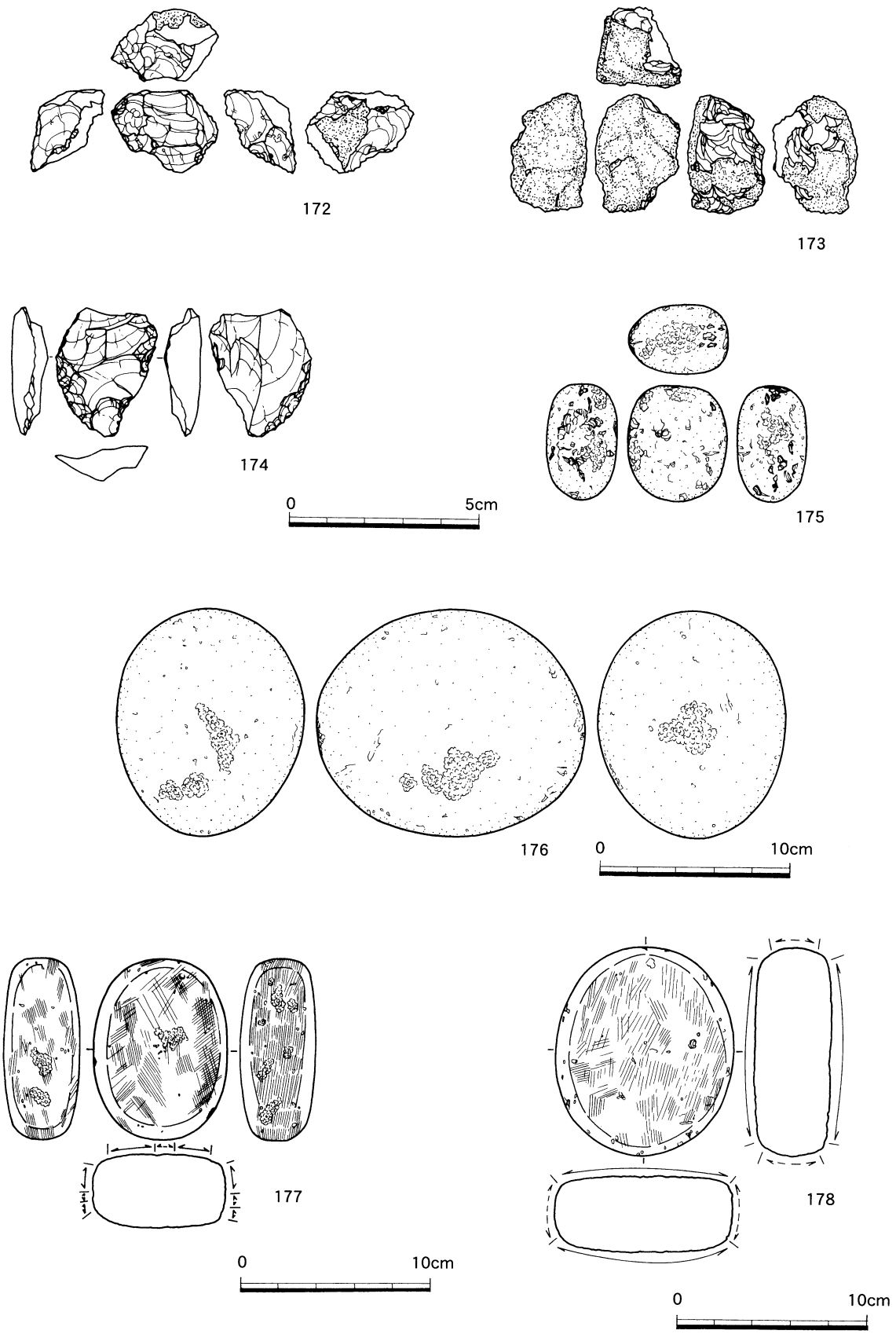
第39図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層出土石器(6)



第40図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層出土石器(7)



第41図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層出土石器(8)



第42図　縄文時代Ⅵ・Ⅶ層出土石器(9)

3　縄文時代前・中期

(1)　遺構

遺構としては，落し穴状遺構が12基検出された。

ア　落し穴状遺構

27号落し穴状遺構（Va層）はＩ－５区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸107cm，短軸65cm，底面の長軸71cm，短軸64cm，深さ81cmである。埋土全てがアカホヤ二次堆積土でアカホヤ火山灰の層まで堆積していることから，時期としては鬼界カルデラ堆積後に近い時期のものと考えられる。

28号落し穴状遺構（Va層）はＤ－20区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸169cm，短軸54cm，底面の長軸105cm，短軸21cm，深さ151cmである。埋土の大半はアカホヤの二次堆積土のようであり，上部の御池軽石は遺構が完全に埋まりきらない状態の上に堆積しているので，時期としては，アカホヤ堆積後の時期に近いと思われる。

29号落し穴状遺構（Va層）はＨ－１区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸98cm，短軸52cm，底面の長軸が89cm，短軸が49cm，深さ75cmである。中部から下部にかけてはＰ－11を含むアカホヤ二次堆積土らしい埋土であり，上部には御池軽石の一次堆積が見られる。この遺構が完全に埋まらないうちに御池噴火が発生したものと考えられ，遺構と御池噴火の時期は近いと思われる。

30号落し穴状遺構（Va層）はＥ－19区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸177cm，短軸110cm，底面の長軸110cm，短軸50cm，深さ155cmである。埋土中部から下部はⅥ層起源のパミスを含むアカホヤ二次堆積土のようで上部は御池軽石である。28号遺構と同様，遺構が完全に埋まらないうちに御池噴火が発生したものと思われる。時期も28号遺構と同じ時期と思われる。

31号落し穴状遺構（Vb層）はＩ－６区で検出された。

上面プランは掘削され正確な大きさはわからないが，深さは85cmである。埋土は全体にＰ－11を含み上部はアカホヤ二次堆積土のようである。時期としてはアカホヤ堆積後に近い時期であると思われる。

32号落し穴状遺構（Ⅴ層）はＤ－11区で検出された。

上面プランは楕円形で検出ラインの長軸89cm，短軸66cm，底面の長軸72cm，短軸59cm，深さ23cmである。埋土は黄褐色土と黒褐色土が混じっており，人工的に埋められた可能性もあるため，時期を特定することは難しい。

33号落し穴状遺構（Ⅴ層）はＤ・Ｅ－14区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸184cm，短軸98cm，底面の長軸164cm，短軸63cm，深さ57cmである。埋土底部はアカホヤの腐植土がブロック状に入っており，その上に御池軽石とアカホヤ腐植土ブロックがまばらに混じっている。上部は御池軽石であり，時期としては御池噴火に近い時期のものと思われる。

34号落し穴状遺構は（Ⅴ層）はＪ－17区で検出された。

上面プランは細長楕円形で検出ラインの長軸179cm，短軸106cm，底面の長軸115cm，短軸71cm，深さ130cmである。埋土底部は大きめのパミスを含むアカホヤ腐植土のようであり，その上に御池パミスやアカホヤブロックを含むアカホヤ腐植土のような層が重なっている。さらに御池軽石の一次堆積土と御池腐植土が重なっているので，この遺構が完全に埋まらないうちに御池噴火が発生したものと思われる。29・30号遺構よりも少し時期的に新しいようであるが，御池噴火により近い時期であると思われる。

35号落し穴状遺構（Ｖ層）はＫ－17区で検出された。

上面プランは掘削のためはっきりしないが底面の検出ラインの長軸は180cm，短軸75cm，底面の長軸120cm，短軸45cm，深さ132cmと想定される。埋土は上面が御池ボラで全体的に御池ボラを含む複雑な堆積層となっている。時期としては御池噴火直前に最も近い時期のものと思われる。

36号落し穴状遺構（Ｖ層）はＨ－18で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸164cm，短軸87cm，底面の長軸109cm，短軸55cm，深さ129cmである。上部に御池ボラが堆積し，その下の御池ボラ混入層まで含めると全体の３分の１の深さに達する。この遺構も完全に堆積する前に御池噴火が発生したと考えられる。下層の堆積は周囲からの流入堆積ではっきりした時期は確認しづらいが，御池噴火に近い時期ではあると思われる。

37号落し穴状遺構（Ｖ層）はＥ－19区で検出された。

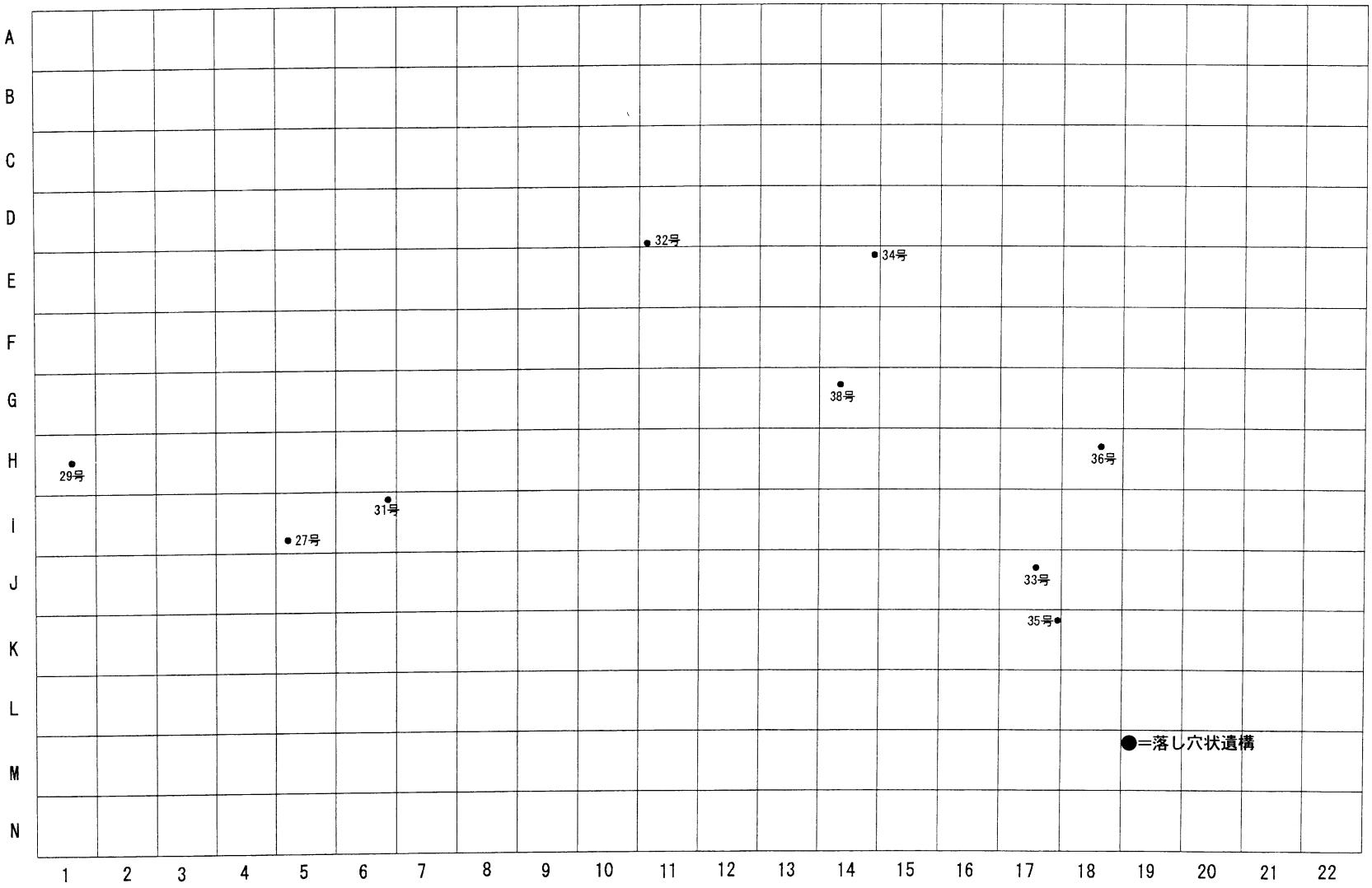
上面プランは掘削のためはっきりしないが，検出されたラインの範囲では長軸が133cm，短軸が47cmで底面の長軸は86cm，短軸37cm，深さ105cmである。上部に御池火山灰が厚く堆積しており，遺構が完全に埋まる前に御池噴火が起こったものと思われる。時期も28・30号遺跡と同じ頃の時期と思われる。

38号落し穴状遺構（Ｖ層）はＧ－14区で検出された。

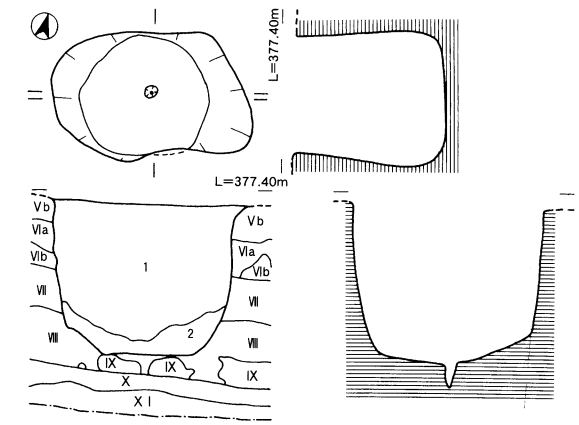
上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸160cm，短軸64cm，底面の長軸150cm，短軸59cm，深さ36cmである。埋土の大半が御池火山灰を多く含む流入土と思われる。埋土下部から底部への堆積土は御池火山灰の流入堆積の可能性があり，時期としては御池噴火直前に近い時期と思われる。底部にピットが一基あり，その大きさは径９センチ，深さ16cmである。

第８表　Ｖ層落し穴状遺構観察表

遺構一覧表	検出面（層）	時期	検出区	検出面				底面		備考
				平面プラン	長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	
27号落し穴状遺構	Ｖａ	前・中期	Ｉ－５	隅丸長方形	107	65	81	71	64	逆茂木２－7，５－14，31
28号落し穴状遺構	Ｖａ	前・中期	Ｄ－20	隅丸長方形	169	54	151	105	21	一部削平
29号落し穴状遺構	Ｖａ	前・中期	Ｈ－１	隅丸長方形	98	52	75	89	49	
30号落し穴状遺構	Ｖａ	前・中期	Ｅ－19	隅丸長方形	177	110	155	110	50	
31号落し穴状遺構	Ｖｂ	前・中期	Ｉ－６	隅丸長方形	－	－	85	－	－	半分調査できず
32号落し穴状遺構	Ｖ	前・中期	Ｄ－11	楕円形	89	66	23	72	59	一部削平
33号落し穴状遺構	Ｖ	前・中期	Ｄ･Ｅ－14	隅丸長方形	184	98	57	164	63	
34号落し穴状遺構	Ｖ	前・中期	Ｊ－17	楕円形	179	106	130	115	71	逆茂木２－15，21－29，43
35号落し穴状遺構	Ｖ	前・中期	Ｋ－17	隅丸長方形	180	75	132	120	45	一部削平，石鏃出土　逆茂木４－9，9，9，4－36，40，34，39
36号落し穴状遺構	Ｖ	前・中期	Ｈ－18	隅丸長方形	164	87	129	109	55	
37号落し穴状遺構	Ｖ	前・中期	Ｅ－19	隅丸長方形	133	47	105	86	37	
38号落し穴状遺構	Ｖ	前・中期	Ｇ－14	隅丸長方形	160	64	36	150	59	樹根３箇所　逆茂木１－15－15

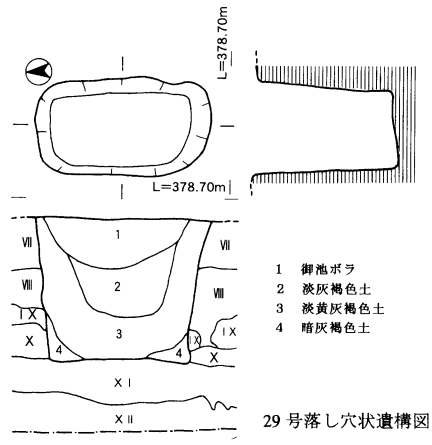


第43図　前・中期落し穴状遺構分布図



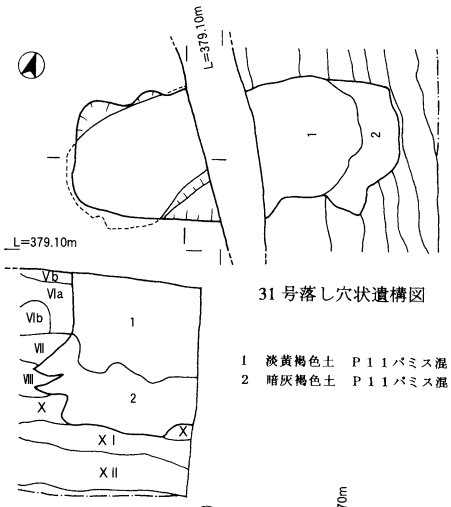
27 号落し穴状遺構図

1　橙褐色土　アカホヤ二次堆積土
2　1よりも黒色がかけ色調が暗い



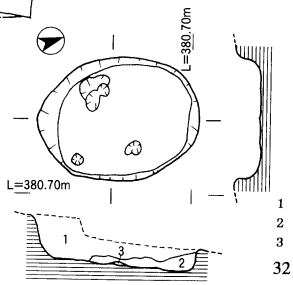
1　御池ボラ
2　淡灰褐色土
3　淡黄灰褐色土
4　暗灰褐色土

29 号落し穴状遺構図



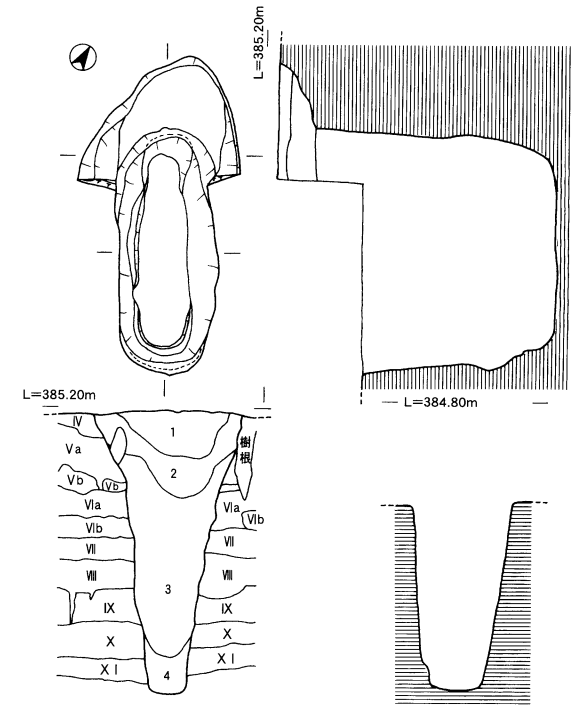
31 号落し穴状遺構図

1　淡黄褐色土　P11パミス混
2　暗灰褐色土　P11パミス混



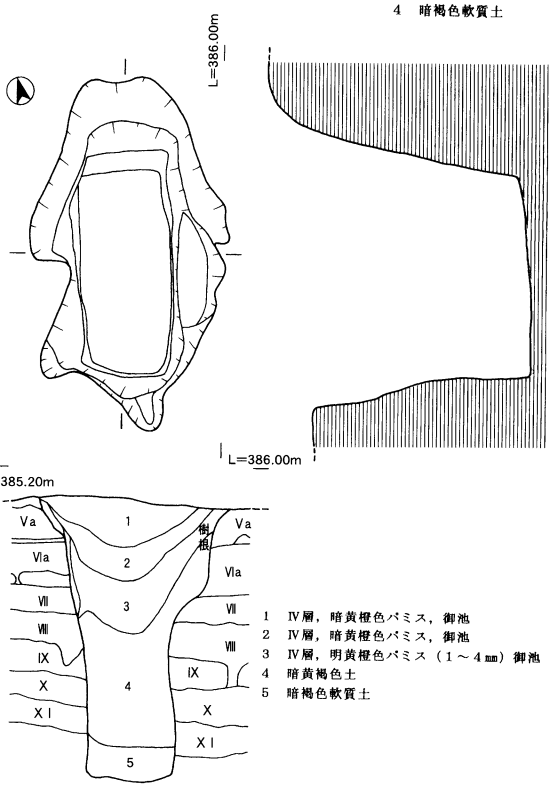
1　褐色土
2　黒褐色土
3　黄褐色土

32 号落し穴状遺構図



28 号落し穴状遺構図

1　IV層
2　IV層
3　暗黄褐色土
4　暗褐色軟質土

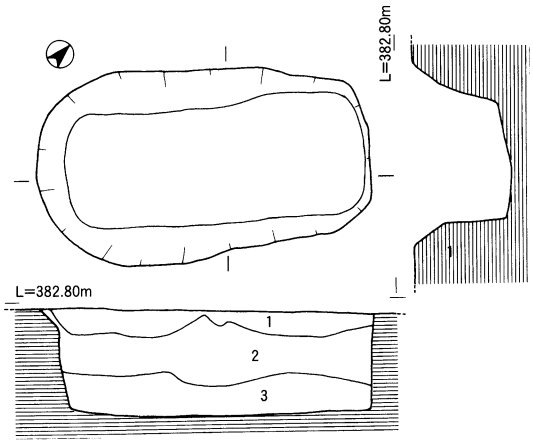


1　IV層，暗黄橙色パミス，御池
2　IV層，暗黄橙色パミス，御池
3　IV層，明黄橙色パミス（1～4mm）御池
4　暗黄褐色土
5　暗褐色軟質土

30 号落し穴状遺構図

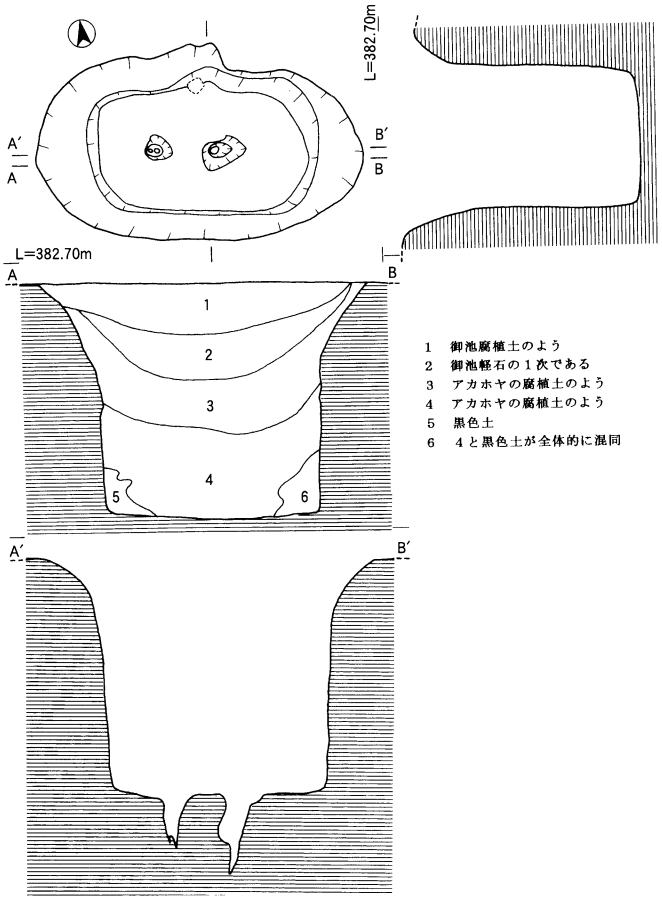
0　1　2m

第44図　V層落し穴状遺構(1)



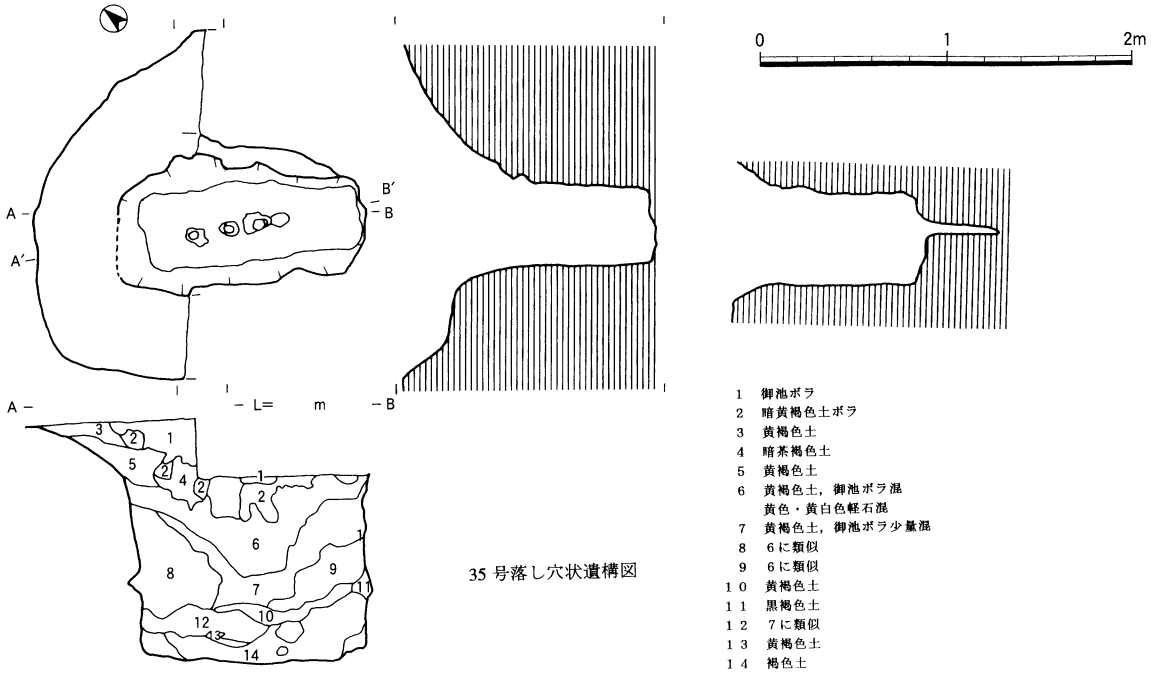
1　黄褐色細粒軽石混硬質土
2　1と暗橙色土が混同
3　暗橙色土

33 号落し穴状遺構図



1　御池腐植土のよう
2　御池軽石の1次である
3　アカホヤの腐植土のよう
4　アカホヤの腐植土のよう
5　黒色土
6　4と黒色土が全体的に混同

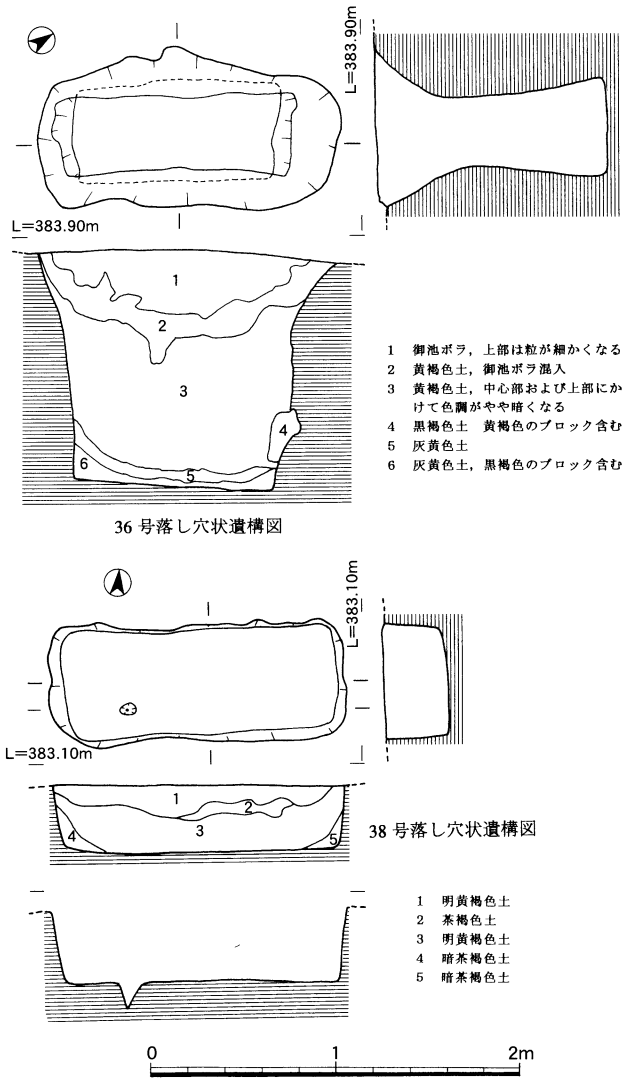
34 号落し穴状遺構図



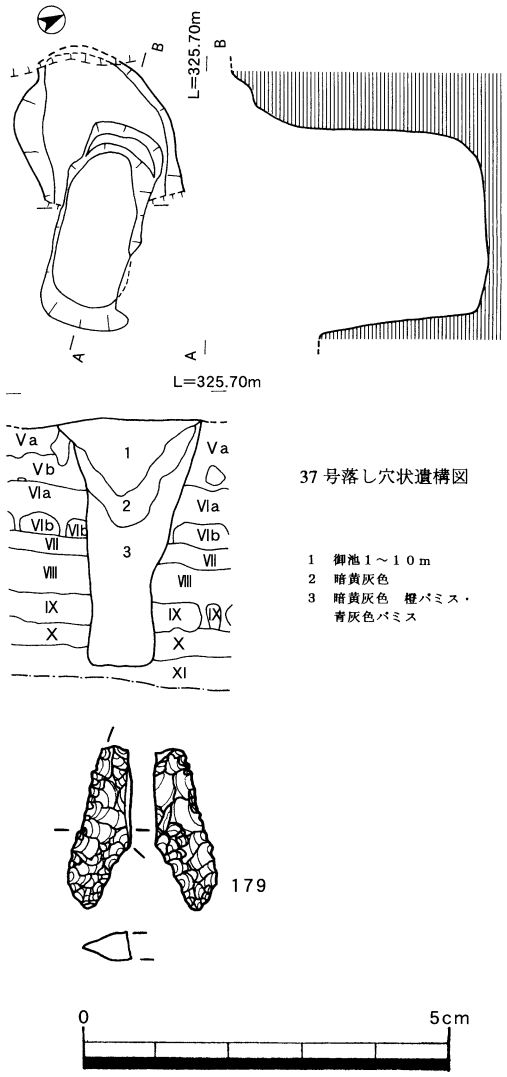
35 号落し穴状遺構図

1　御池ボラ
2　暗黄褐色土ボラ
3　黄褐色土
4　暗茶褐色土
5　黄褐色土
6　黄褐色土，御池ボラ混
　　黄色・黄白色軽石混
7　黄褐色土，御池ボラ少量混
8　6に類似
9　6に類似
10　黄褐色土
11　黒褐色土
12　7に類似
13　黄褐色土
14　褐色土

第45図　V層落し穴状遺構(2)



第46図　V層落し穴状遺構(3)



第47図　V層出土石器(1)

(2) 遺物

この時期には居住地から離れた狩場として利用されていたらしく，遺物としては石鏃，スクレーパー，石皿が出土しただけにとどまっている。

ア　石鏃（第47図）

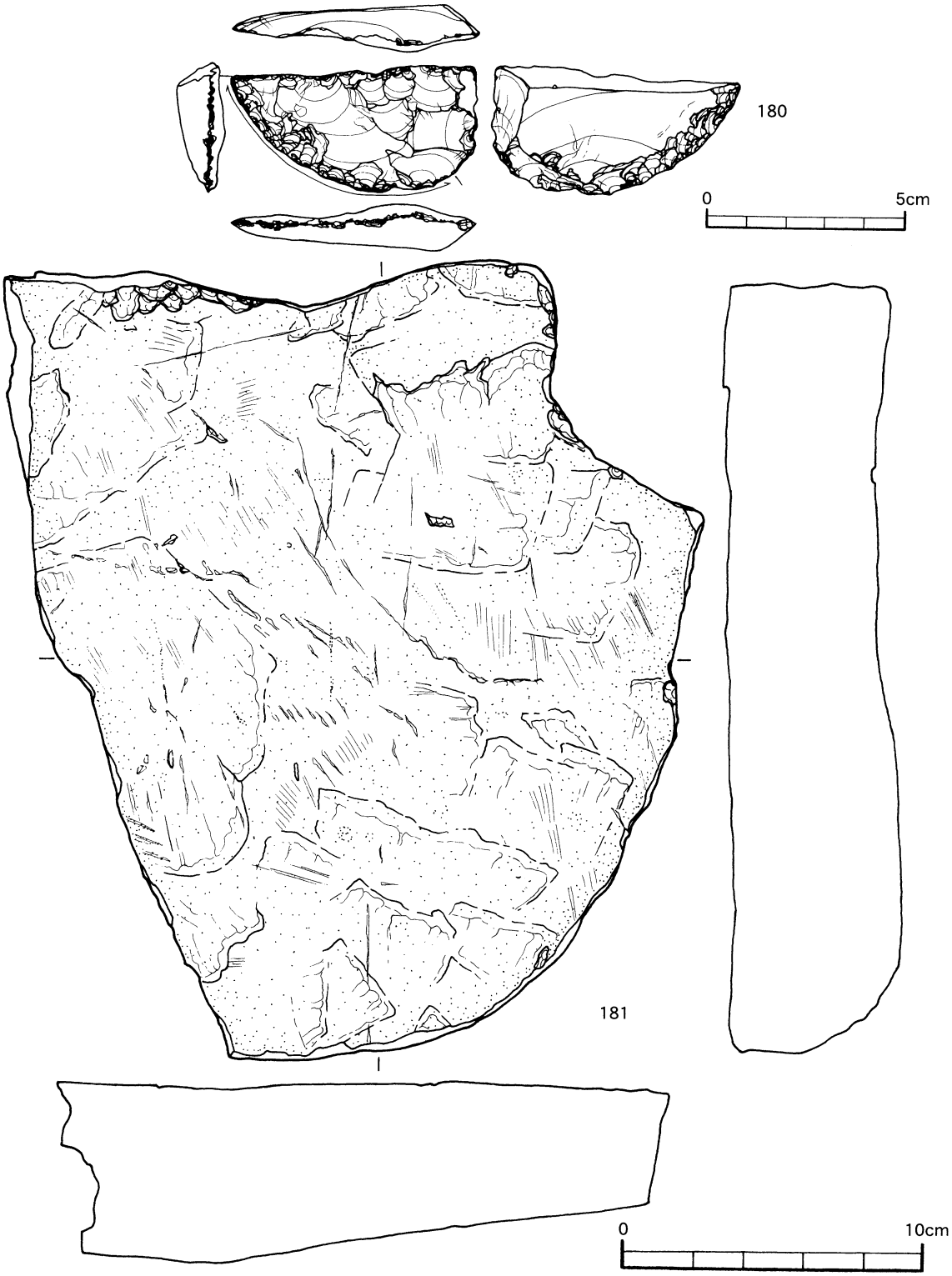
179が1点出土した。形状は長幅比が著しく異なる凹基式である。切れ込みは深い。石材は玉髄である。先端部及び右半分が欠損しているため全体はつかめないが，側縁部には両面から微調整剥離が施され，断面形は凸レンズ状を呈していると思われる。

イ　スクレイパー（第48図）

180が1点出土した。石材は安山岩である。剥片を利用したもので身部の片面に剥離面を残している。両面調整による刃部を形成している。

ウ　石皿（第48図）

181が1点出土した。石材は砂岩である。形状は不定形で，磨面も粗雑である。自然礫をそのまま利用したものと思われる。



第48図　Ⅴ層出土石器(2)

第９表　Ⅴ層出土石器観察表

挿図	番号	層	出土区	器　種	地点No	石材	実測No	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
47	179	Ⅴa	H－4	石鏃	139	CC	10	2.20＋a	0.70＋a	0.40	0.53
48	180	Ⅴa	G－14	スクレイパー	138	AN	11	3.10	6.20	1.10	19.41
	181	Ⅴ上	G－15	石皿	2030	SS	58	24.40	20.40	5.80	5,600.00

4　縄文時代後期～晩期

(1)　遺構

遺構は，集石遺構１基と落し穴状遺構２基が検出された。

ア　集石遺構

19号集石（Ⅳa層）はＪ－18区で検出された。礫の大きさは10cm前後で焼けている。掘り込みは確認されなかった。

イ　落し穴状遺構

39号落し穴状遺構（Ⅳ層）はＨ－７区で検出された。

上面プランは円形で検出ラインの長軸80cm，短軸73cm，底面の長軸70cm，短軸67cm，深さ10cmである。埋土はほぼⅢ層土で時期の判断は難しい。

40号落し穴状遺構（Ⅳ層）はＩ－９区で検出された。

上面プランは隅丸長方形で検出ラインの長軸202cm，短軸121cm，底面の長軸192cm，短軸47cm，深さ160cmである。39号と同じく，埋土はほぼⅢ層土で，時期の判断は難しい。

(2)　遺物

遺物としては土器片や石鏃等が出土された。土器片は小片がほとんどで形式名は不明である。

土器

ア　Ⅸ類土器（第33図）

182が１点出土した。資料の不足により分類できなかった土器である。胴部の下部と底面が残っており，底径が10.6cmである。すべて内面にすすが付着している。

石器

ア　石鏃（第52図）

183～194のⅦ層から12点が出土した。早期と同じく形状による分類が可能なので，基部をもとにⅠ～Ⅳ類に大別し，さらに形状等でａ～ｂに細分した。

(ア)　Ⅰ－ａ類（基部が平基式で正三角形に近いもの）

184・187の２点が出土した。石材はともに安山岩である。表面裏面ともに微調整剥離が施され，断面形はレンズ状であり完成品と思われる。

(イ)　Ⅰ－ｂ類（基部が平基式で二等辺三角形のもの）

189の１点が出土した。石材は頁岩であり，先端部が欠損している。表面裏面ともに微調整剥離が施され，断面形はレンズ状である。

(ウ)　Ⅱ－ａ類（基部が凹基式で切れ込みが浅く，正三角形に近いもの）

186の１点が出土した。石材は安山岩である。脚部が一部欠損している。横断面形はレンズ状で，右側縁部に微調整剥離を施している。

(エ)　Ⅱ－ｂ類（基部が凹基式で切れ込みが浅く，不定形のもの）

183・185・188の３点が出土した。石材はすべて異なり，183がチャート，185が黒曜石４類，188が頁岩である。183・185は五角形状で側縁に微調整剥離が施されている。188は形状がはっきりしないが，側縁部に微調整剥離が施されている。横断面形は３点ともレンズ状である。

(オ) Ⅲ－a類（基部が凹基式で切れ込みが深く，正三角形に近いもの）

190・193の2点が出土した。石材は190が頁岩，193が玉髄である。190は両側縁部に微調整剥離が施されている。断面形はレンズ状である。193は先端部及び右半分が欠損しているため全体がつかめないが，側縁部に微調整剥離が施され，丁寧な仕上げが予想される。

(カ) Ⅲ－b類（基部が凹基式で切れ込みが深く，二等辺三角形に近いもの）

191・192の2点が出土した。石材は，191が黒曜石6類，192が頁岩である。192は脚部が欠損しているが，2点とも両縁部に微調整剥離が施されており完成品に近いと思われる。

(キ) Ⅳ類（形状が不明なもの）

194の1点が出土した。石材は黒曜石6類である。先端部・両脚部を欠損しているため，全体の形状等はわからない。両縁部に微調整剥離がみられる。

イ　スクレイパー（第52図）

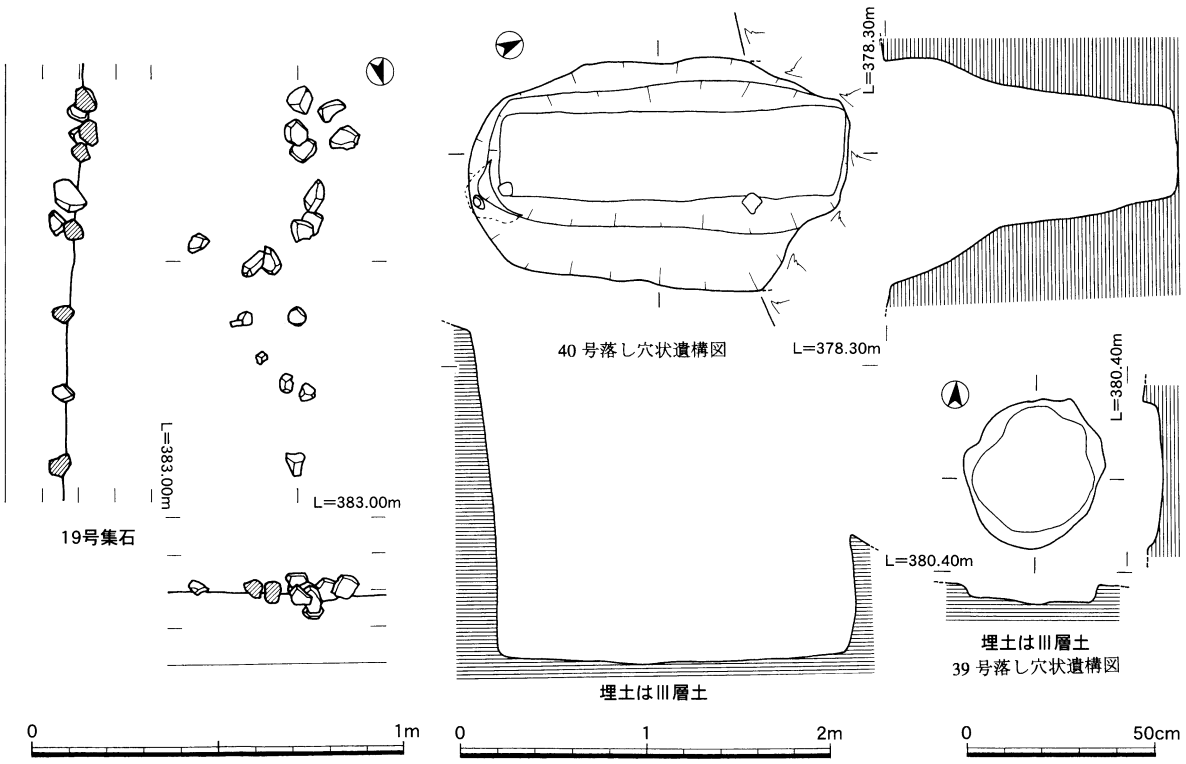
195の1点が出土した。石材は黒曜石8類である。剥片を利用しており，両面に剥離面を大きく残している。両面調整による刃部を形成している。基部の片面にも調整剥離がみられる。

ウ　石匙（第52図）

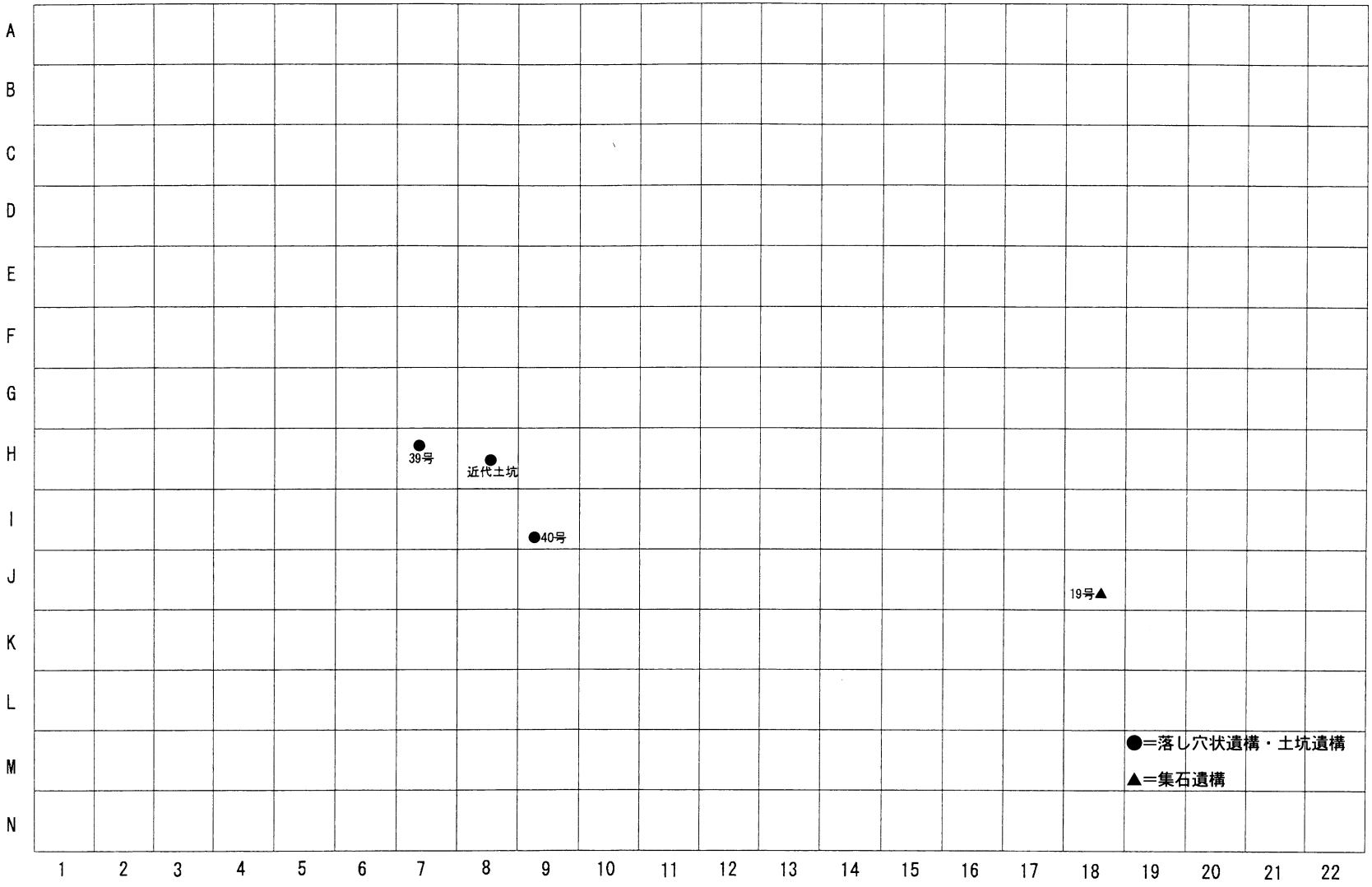
196の1点が出土した。石材は安山岩である。剥片を利用しており，片面に剥離面を残している。裏面・両面からの調整剥離がみられるが，粗雑である。

エ　二次加工のある剥片（第53図）

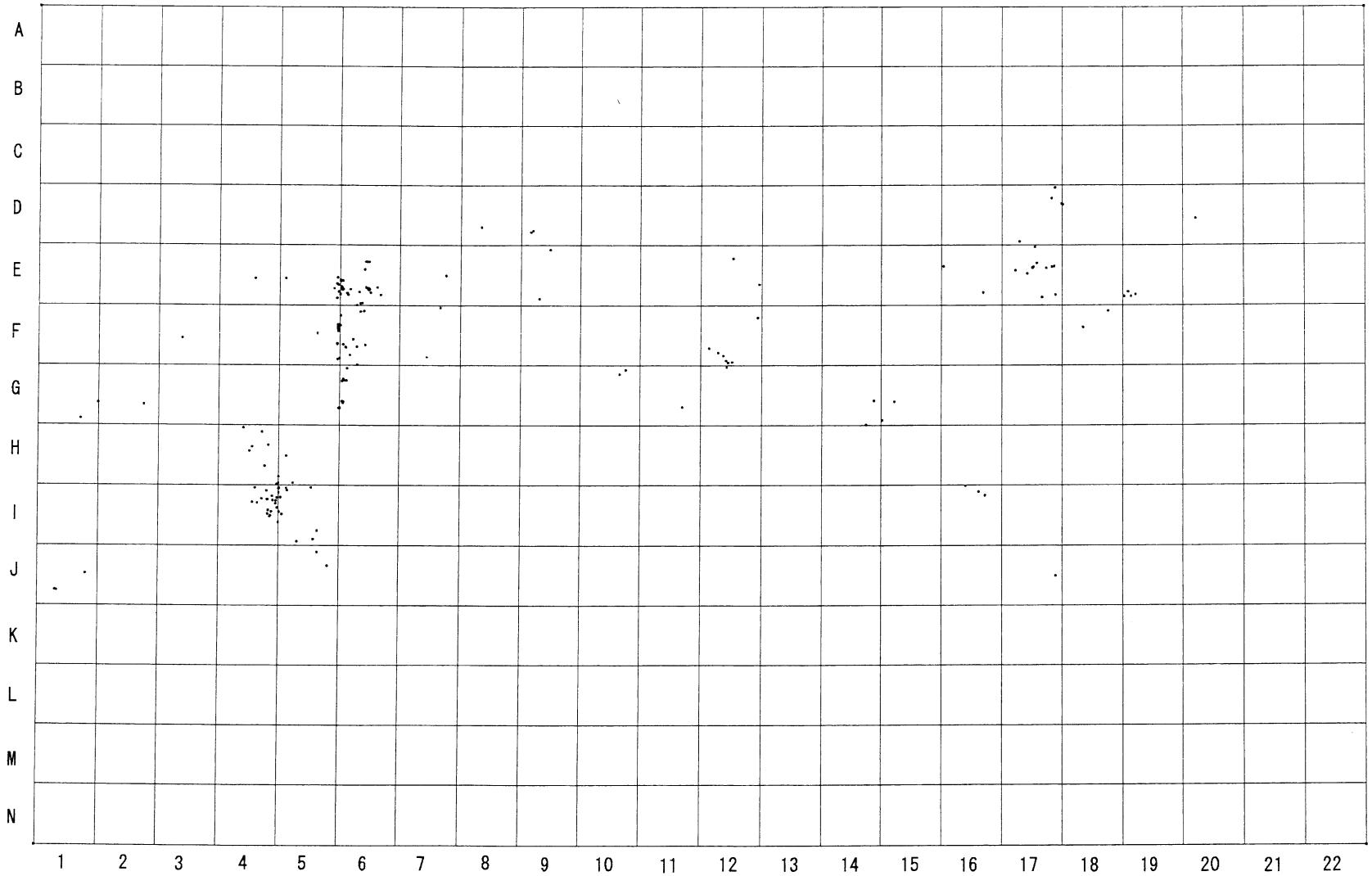
197の1点が出土した。石材は安山岩である。大型の剥片で側縁部に二次加工の調整剥離がみられる。



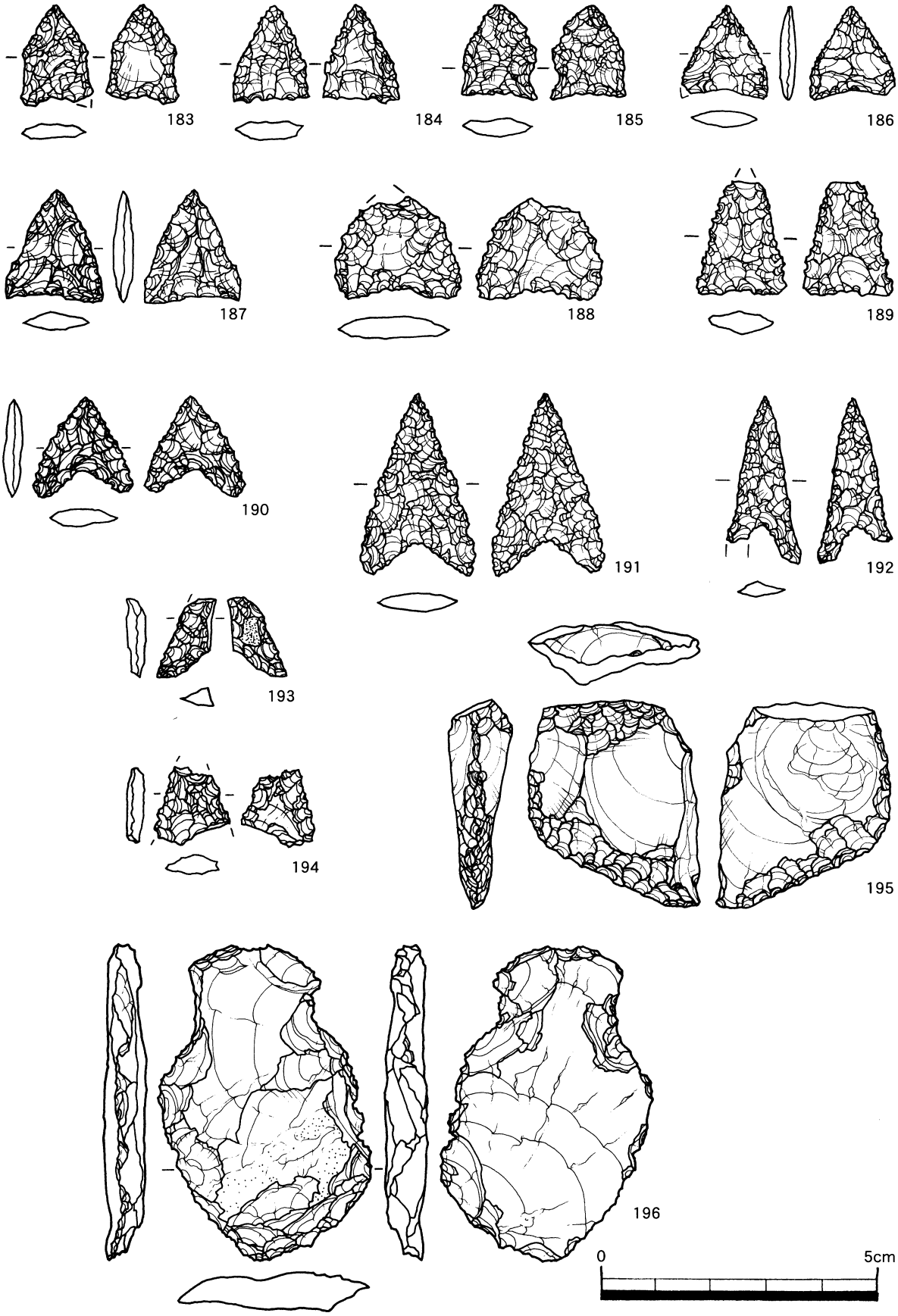
第49図　Ⅳ層集石遺構・落し穴状遺構



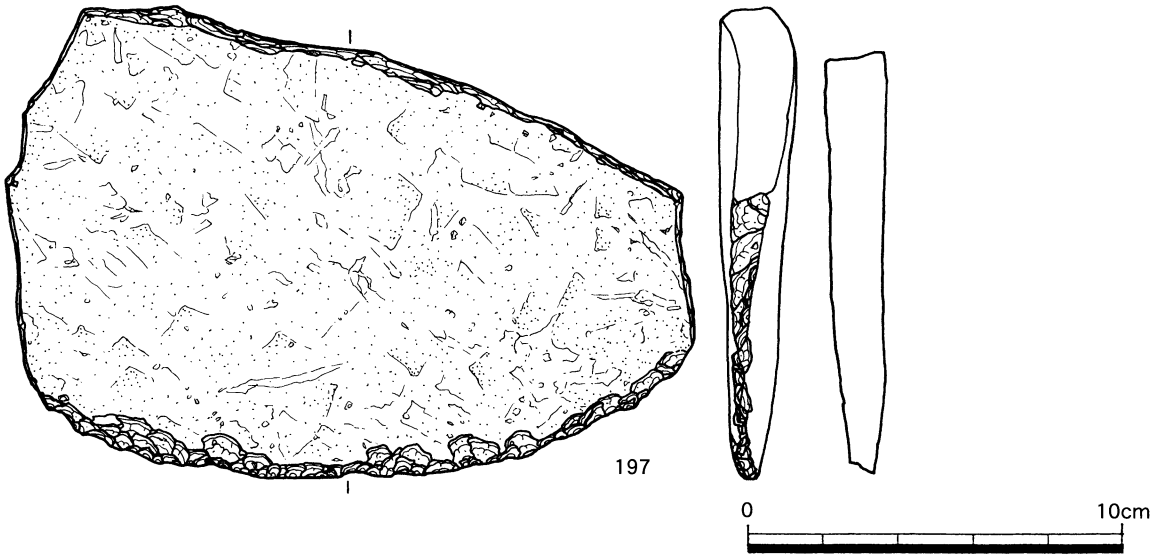
第50図　Ⅰ～Ⅳ層遺構分布図



第51図　Ⅳ・Ⅴ層出土遺物分布図



第52図　Ⅳ層出土石器(1)（183～196）



第53図　Ⅳ層出土石器(2)

第10表　Ⅳ層落し穴状遺構観察表

遺構一覧表	検出面(層)	時期	検出区	検出面				底面		備考
				平面プラン	長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	
39号落し穴状遺構	Ⅳ	後・晩期	H－7	円形	80	73	10	70	67	
40号落し穴状遺構	Ⅳ	後・晩期	I－9	隅丸長方形	202	121	160	192	47	欠落部あり

第11表　Ⅳ層出土石器観察表

挿図	番号	層	出土区	器種	地点No	石材	実測No	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
52	183	Ⅳ	H－4	石鏃	95	CH	4	1.80	1.20	0.30	0.55
	184	Ⅳ	E－19	石鏃	12	AN	8	1.60	1.40	0.30	0.60
	185	Ⅳ	H－4	石鏃	94	OB 4	7	1.60	1.80	0.30	0.59
	186	Ⅳ	J－17	石鏃	2392	AN	69	1.60	1.50＋a	0.30	0.53
	187	Ⅳ上	G－11	石鏃	2382	AN	67	2.00	1.70	0.30	0.95
	188	Ⅳb	H－5	石鏃	135	SH	3	1.90＋a	2.20	0.40	1.77
	189	Ⅳ上	14T	石鏃	5	SH	6	2.00＋a	1.60	0.40	1.15
	190	Ⅳ下	G－14	石鏃	2027	SH	66	1.80	1.80	0.30	0.68
	191	Ⅳ	D－17	石鏃	19	OB 6	9	3.30	2.00	0.40	1.46
	192	Ⅳ	H－4	石鏃	93	SH	5	3.00＋a	1.40＋a	0.30	0.72
	193	Ⅳ	E－5	石鏃	2412	CC	68	1.40＋a	1.00＋a	0.40	0.34
	194	Ⅳ	E－4	石鏃	1644	OB 6	71	1.40＋a	1.20＋a	0.30	0.48
	195	Ⅳ	E－19	スクレイパー	8	OB 8	1	3.70	3.00	1.10	8.90
	196	Ⅳ上	G－7	石さじ	2097	AN	70	5.60	3.40	0.70	16.29
53	197	Ⅳ	D－9	石皿	2403	AN	37	11.40	18.40	1.00	560.00

第３節　古代・中世～近世

調査対象地区の現況は山林であったが，以前は畑地として利用されていた。そのために古代から室町時代にかけての遺物包含層は耕作によって削平を受けている部分が多かったが，一部において遺構の検出や遺物の出土があった。

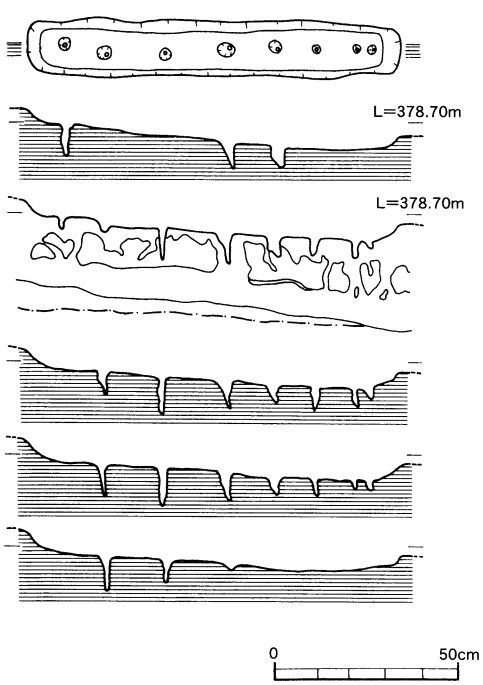
１　遺構

⑴　溝状遺構

遺構としては，畑の畝跡と考えられる遺構，溝状遺構が検出された。畑の畝跡らしい遺構や溝状遺構はⅢ層上面とⅣ層上面の広い範囲で検出されたが，削平されている部分がほとんどで遺構の全容や詳細な時期といった資料の判断ができなかった。

⑵　近代土抗

Ｈ－８区のＩ層より１基検出された。検出面の長軸204cm，短軸30cm，深さ13cmである。稲かけの竿をたてた跡のようなピットが８基検出されたが時期等詳しいことはわからなかった。



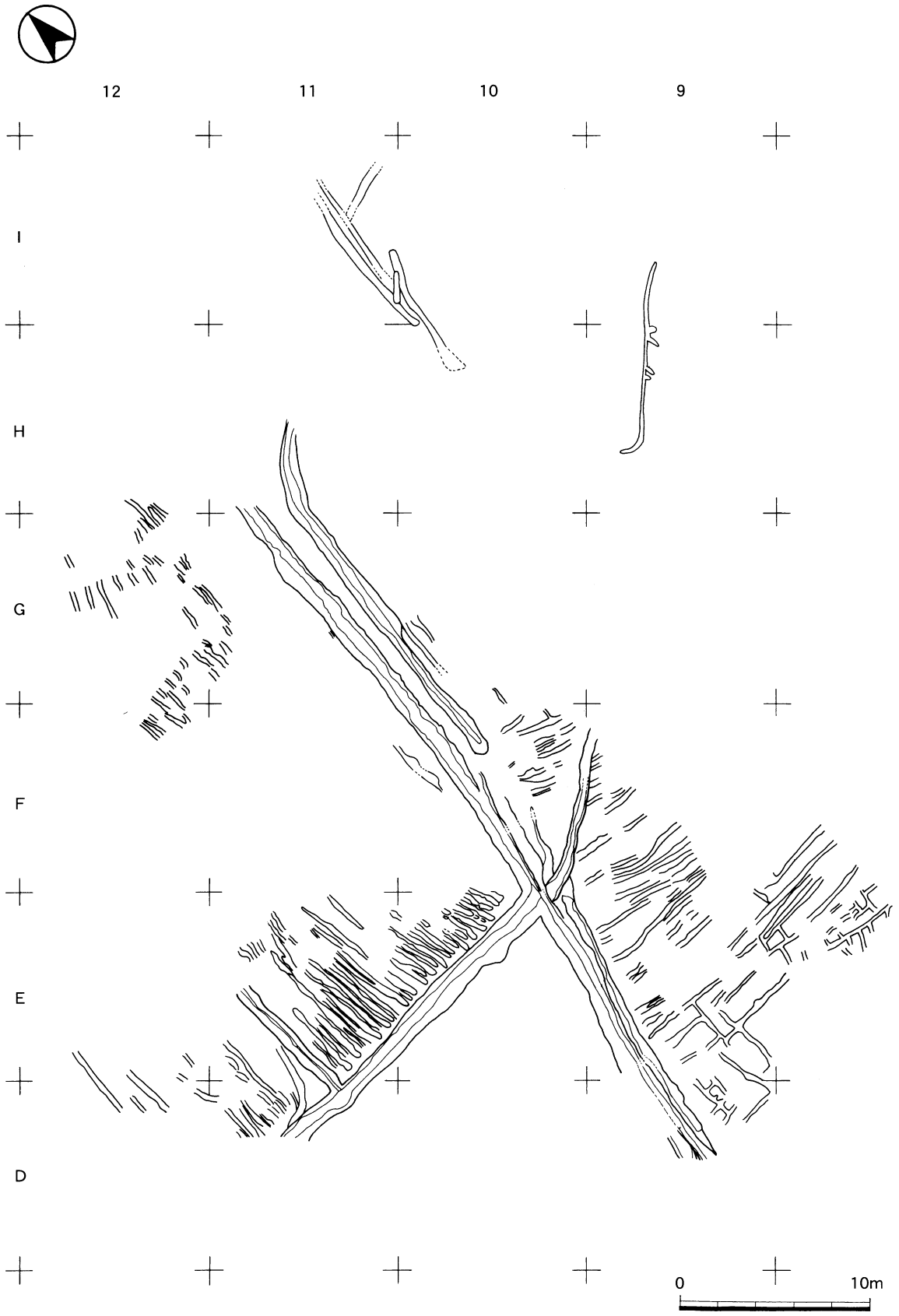
第54図　Ｉ層近代土坑

第12表　Ｉ層近代土坑観察表

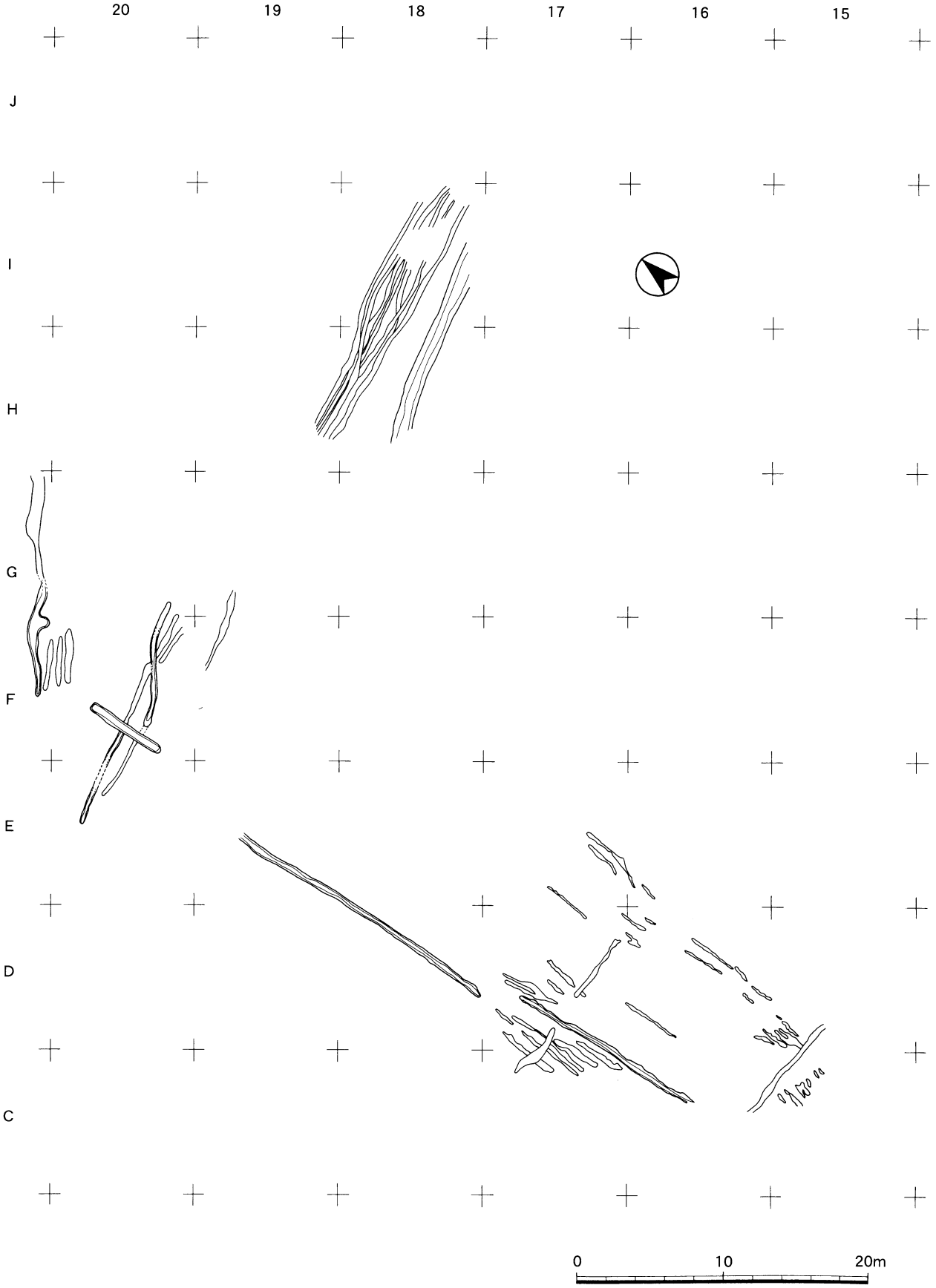
遺構一覧表	検出面（層）	時期	検出区	検出面				底面		備考
				平面プラン	長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	
１号近代土杭	Ｉ	近代	Ｈ－８	長方形	204	30	13	187	20	水田の稲かけの竿をたてた跡のようなもの　ピット８

第13表　Ⅲ層以下出土石器観察表

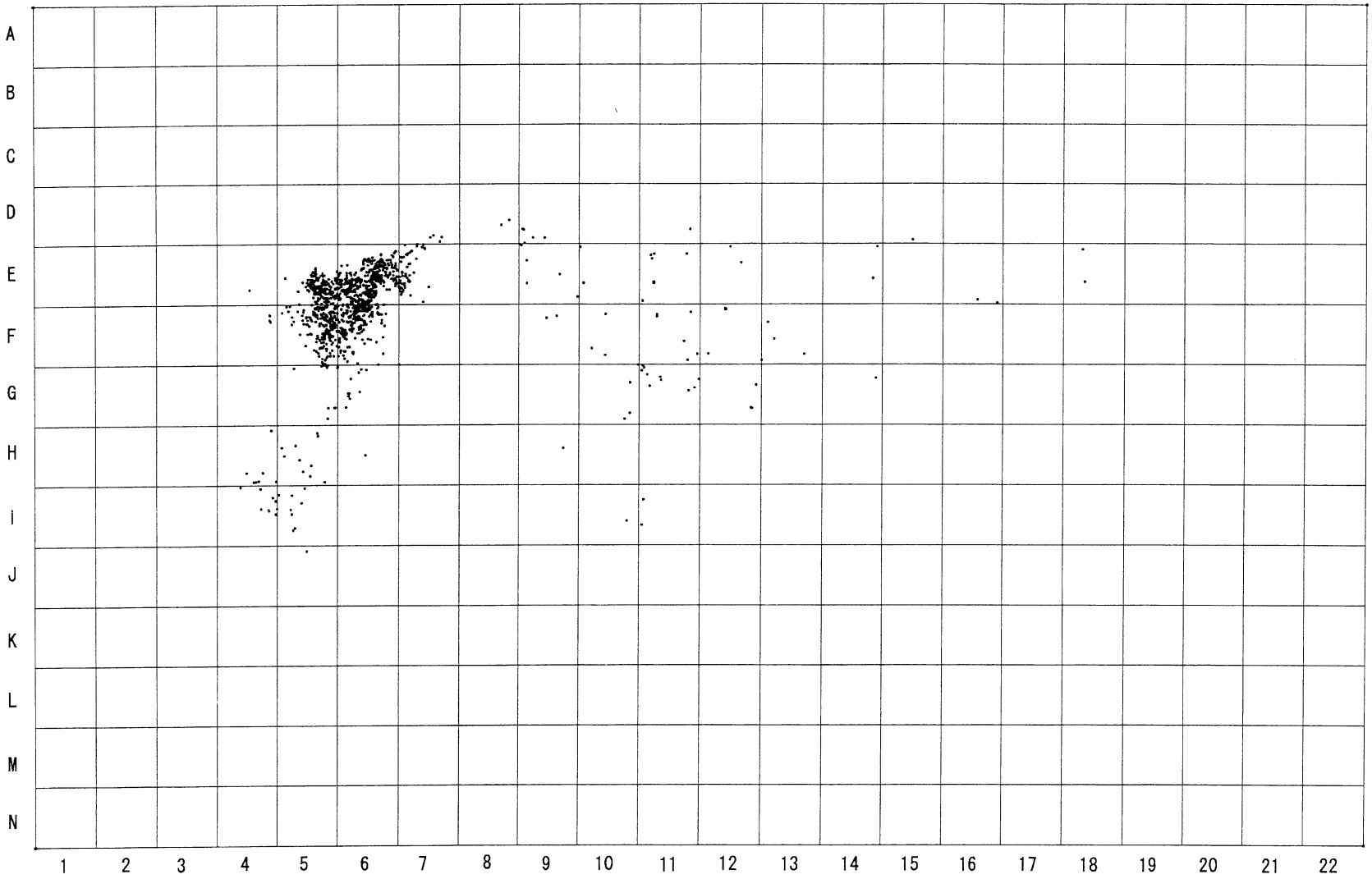
挿図	番号	層	出土区	器種	地点No	石材	実測No	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
63	269	Ⅲ	Ｄ－15	石鏃	2025	OB４	64	2.10	1.30	0.30	0.74
	270	Ⅲ	Ｅ－７	石鏃	2032	CH	65	2.50	1.20	0.40	1.28
	271	Ⅲ	Ｇ－21	石鏃	296	CC	62	1.50＋a	1.00＋a	0.30	0.40
	272	Ⅲ	Ｆ－６	石鏃	1702	AN	63	2.60	2.10	0.40	1.54
	273	Ⅲ	Ｆ－11	原礫	2165	CC	61	2.00	2.50	1.00	7.72
	274	表採	Ｄ－13	石鏃	－	CH	137	1.30	1.80	0.30	0.28
	275	落し穴	Ｋ－17	石鏃	2564	OB６	60	1.30＋a	1.40＋a	0.50	0.72
	276	下の畝	Ｅ－９	二次加工剥片	－	SH	59	2.80	3.20	0.70	5.66



第55図　溝状遺構(1)



第56図　溝状遺構(2)



第57図　Ⅲ層以下出土遺物分布図

2　遺物

Ⅲ層からの出土遺物はほとんどが土師器で，そのほかは黒色土器や紡錘車，土錘，須恵器，すり鉢などわずか数点である。石器は石鏃を中心に５点が出土した。

(1)　土師器（第58図～第61図）

包含層内の土師器はほとんどが破片であり，復元が可能なものは小皿，杯，甕の数点のみであった。したがって，破片は口縁部～胴部や底部といった特徴のある部分を取り上げた。

ア　甕（198～222）

器形は口縁端部が丸くなるものが大部分であるが，頸部から口唇部にかけて急に外反するものと立ち上がりながら緩やかに移るものがある。胴部は口唇部ほど出土せず推測ではあるが，ふくらみを持つ球形に近いと思われる。底部は丸底になる。

198は唯一復元できたものである。口径22.6cm，器高22.4cmで口縁は緩やかに外反する。胴部内面はケズリ調整で，口縁部並びに外面はナデたあと刷毛目調整を施している。また，内面・外面ともにすすが付着している。胎土は細かく石英・長石・角閃石・砂粒を含む。

199～209は頸部から緩やかに立ち上がる口縁部である。199・200は頸部から緩やかに外弯し，口唇部が約１～２cmと薄い。内面・外面ともに使用痕が見られ，刷毛目調整が施されている。胎土は粒子が粗く，2～５mmの礫が見られる。口径は199が23.2cm，200が23.2cmである。201と205～207は外面もしくは内・外面に櫛目刷目が見られるものである。口縁部は刷毛目調整であるが，櫛目刷目が見られるものもある。口径は201が24.8cm，205が28.6cm，206が22.5cm，207が21.8cmである。202～204も同じく口縁部が頸部から緩やかに立ち上がって外弯している。202と204は口唇部が約２～2.5cmとやや厚い。内面・外面ともに刷毛目調整が施されており，内面・外面ともにすすが付着している。胎土は粗く，３～８cmの礫が見られる。口径は202が25.2cm，204が28.8cmである。203も刷毛目調整で胎土はやや粗い。口径は19.4cmである。208・209は外面に横位の櫛目刷目を施してすすが付着している。内面は208がへら削りナデ調整で口唇部にも櫛目刷目を施しており，209はナデ調整である。また両方とも口縁部は刷毛目調整である。口径はどちらも27cmである。

210～212は頸部から水平に広がる口縁部である。210は口唇部が約２～2．5cmとやや厚い。

内面・外面ともに刷毛目調整が施されており，内面・外面ともにすすが付着している。胎土は粗く，３～８mmの礫が見られる。口径は24.6cmである。211・212は口唇部が３～3.5cmと厚いが均等ではない。胎土は非常に粗く，礫に加え小石も混じる。口縁部及び外面にすすが付着している。口径は211が34cm，212が25.8cmである。

213～215は頸部からわずかに外弯し，他のものに比べて短い口縁部である。213と215は内面・外面ともに使用痕が見られ，刷毛目調整が施されている。胎土は粒子が粗く，２～５mmの礫が見られる。口径は83が24.2cm，85が25.8cmである。84は内面・外面ともに刷毛目調整が施されており，内面・外面ともにすすが付着している。こちらも胎土は粗く，３～８mmの礫が見られる。口径は25.6cmである。

216・217は小型鉢の口縁部である。器の厚さが８～10mmとこれまでのものよりも薄く作られている。刷毛目調整が施され，内面・外面ともにすすが付着している。口径は216が13.5cm，

217が15cmである。

218は胴部上位から口縁にかけての部位で口縁部に沿ってけずられ玉縁状になっている。頸部もケズリらしい加工の後ナデ仕上げをしている。口径は30.8cmである。

219～222は胴部である。219は外面が櫛目刷目で球形に近い形状と思われる。内面はナデで胎土はやや粗い。胴回りは22.2cmである。220は内面をヘラでけずられている胴部である。厚さは8mm前後で焼成は良好である。球形に近い形状と思われる。外面には特に条痕等は見られない。2～4mmの礫が見られるなど胎土はやや粗い。胴回りは16.4cmである。221は外面にゆがんでいる条痕が見られる。内面は指ナデで胎土はやや細かいが，1～3mmの粒が見られる。厚さは7～9mmで，胎土はやや粗い。内弯しているが，形状はわからない。

222は外面を刷毛目調整されている胴部である。厚さは1. 3cm で割と厚い。土器片は内弯しており，形状は緩やかに弯曲しているものと思われる。胎土は粗く，3～7mmの礫が見られる。

イ　碗型（223～230）

223～226は高台のない型で227～230は高台付きの型である。223・224は底部で，底径はともに6.6cmである。内面・外面ともにナデ・刷毛目調整であり胎土も細かいが，つくりが粗い。底径は224が6.6cmである。223は資料不足のため不明である。225・226は底部から口縁部である。内面・外面ともにナデ・刷毛目調整であるが，225の口縁部は底部から斜めにまっすぐに立ち上がっているのに対し，226は口唇部でわずかに外に広がっている。225は底径が2.8cm，口径13cm，器高4.5cmで，226は底径は6cm，口径13.6cm，器高4.6cmである。227は内面・外面ともにナデ・刷毛目調整である。高台接合部は工具をあてて，仕上げている。底径は8.6cmである。228は口縁部で内面・外面ともにナデ・刷毛目調整である。口径は13cmである。3～4mmの礫が見られ，胎土が少し粗くなっている。229も内面・外面ともにナデ・刷毛目調整である。底径は7.2cm，口径15.2cm，器高が5.5cmである。内外面ともにすすが付着している。底部から緩やかに内弯して，口唇部で外に広がっている。97と異なり，高台が底部の縁が隠れるように接合されている。230は内面・外面ともにナデ調整である。高台接合部は工具をあてて，仕上げている。底径は8.6cm，口径17.2cm，器高が6cmである。内外面ともにすすが付着している。

ウ　壺型（231）

この型は231の1点で完全に復元ができなかった。内面及び外面はケズリによる調整で外面はさらにナデて仕上げている。胎土はやや粗く，2～7mmの礫が混じっている。外面及び内面の一部にはすすが付着していて実用的であったと思われる。胴回りは21.6cmである。

エ　小皿型（232～243）

102・103は底部から口縁部にかけての破片である。どちらも内面・外面ともにナデ調整であり232の底径は5.7cm，口径6.3cm，器高1.7cm，233の底径は5.8cm，口径6.8cm，器高1.3cmである。234は底部から胴部にかけての破片である。内面・外面ともにナデ調整である。胎土は細かく，礫等は見られない。底径は4cmである。235・236はいずれも口縁部である。内面・外面ともにナデ・刷毛目調整で胎土は細かい。236には2～4mmの礫が確認できるが，他はほとんど見あたらない。口径は235が12.2cm，236が15cmである。237も口縁部で内面・外面ともにナ

デ調整である。胎土は細かく，礫等は見られない。口径は13.4cmである。使用痕と思われるすすが付着している。238は底部で内面・外面ともに刷毛目調整が見られる。胎土は細かいが，1～3mmの礫がまばらに見られる。底径は6cmである。239と240はいずれも口縁部で239は内面がナデ，外面がナデと刷毛目調整である。胎土は細かく，礫等は見られない。口径は11.4cmである。240は内面・外面ともにナデ・刷毛目調整で胎土は細かい。口径は16cmである。241・242はともに底部で，241は内面・外面ともにナデ調整である。胎土は細かく，礫等は見られない。底径は6cmである。242は内面は刷毛目調整で外面はナデ調整が見られる。胎土は細かく，礫等は見られない。土器片からの情報が少なく，底径は割り出すことができなかった。243は口縁部で内面・外面ともにナデ・刷毛目調整で胎土は細かく，礫等はほとんど見あたらない。口径は17.2cmである。

(2) 黒色土器（第61図　244～246）

244～246は内面のみが黒く燻される黒色土器3点である。調整は内面・外面ともナデ調整で，244以外は外面に刷毛目調整が見られる。焼成・胎土等から244と245は，同一体もしくは同じ粘土より作られたものと思われる。244と245はともに外面にすすが付着していて，胎土は非常に細かく礫等は見られない。245は口縁部で口径13.2cm，厚さは5～6mmである。244は底部で底径は6.2cm，厚さは7mmである。246は底部から胴部にかけての部分で，外面の二箇所に墨書らしいものが確認できる。一つは底部にあり中心に向かって，もう一つは胴部で縦にそれぞれ墨書らしいものがあるが文字等の判読はできない。

(3) 土錘（第62図　247～260）

247～260は二つの形状に別れる。253～257のような細身類が5点出土しており，平均長3.1cm，平均最大径1.5cm，平均孔径4.4mmである。247～252，258～260の9点は紡錘型で，平均長2.9cm，平均最大径1.9cm，平均孔径4.8mmである。

(4) 紡錘車（第62図　261・262）

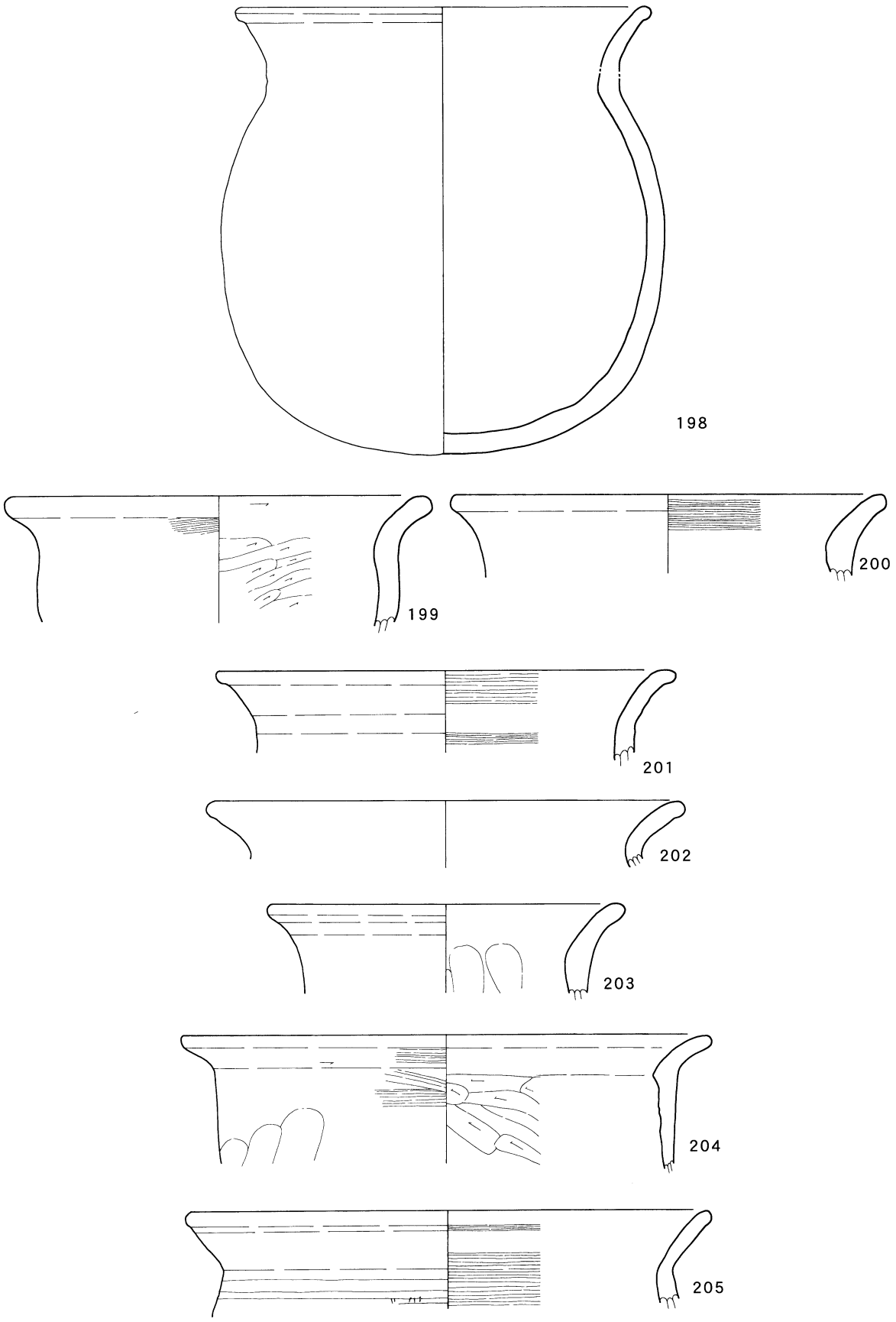
261と262は紡錘車と思われる土製品である。いずれも高台のない土師器底部の再利用と思われる。261はほぼ円形に近く，孔も中心近くを通っている。胎土は細かく，側面もなめらかに仕上げられている。径は6.3cmである。262は孔がはっきりせず，胎土も粗い。側面の摩耗が激しくややいびつな形状である。径は9.8cmである。

(5) 須恵器（第62図　263～267）

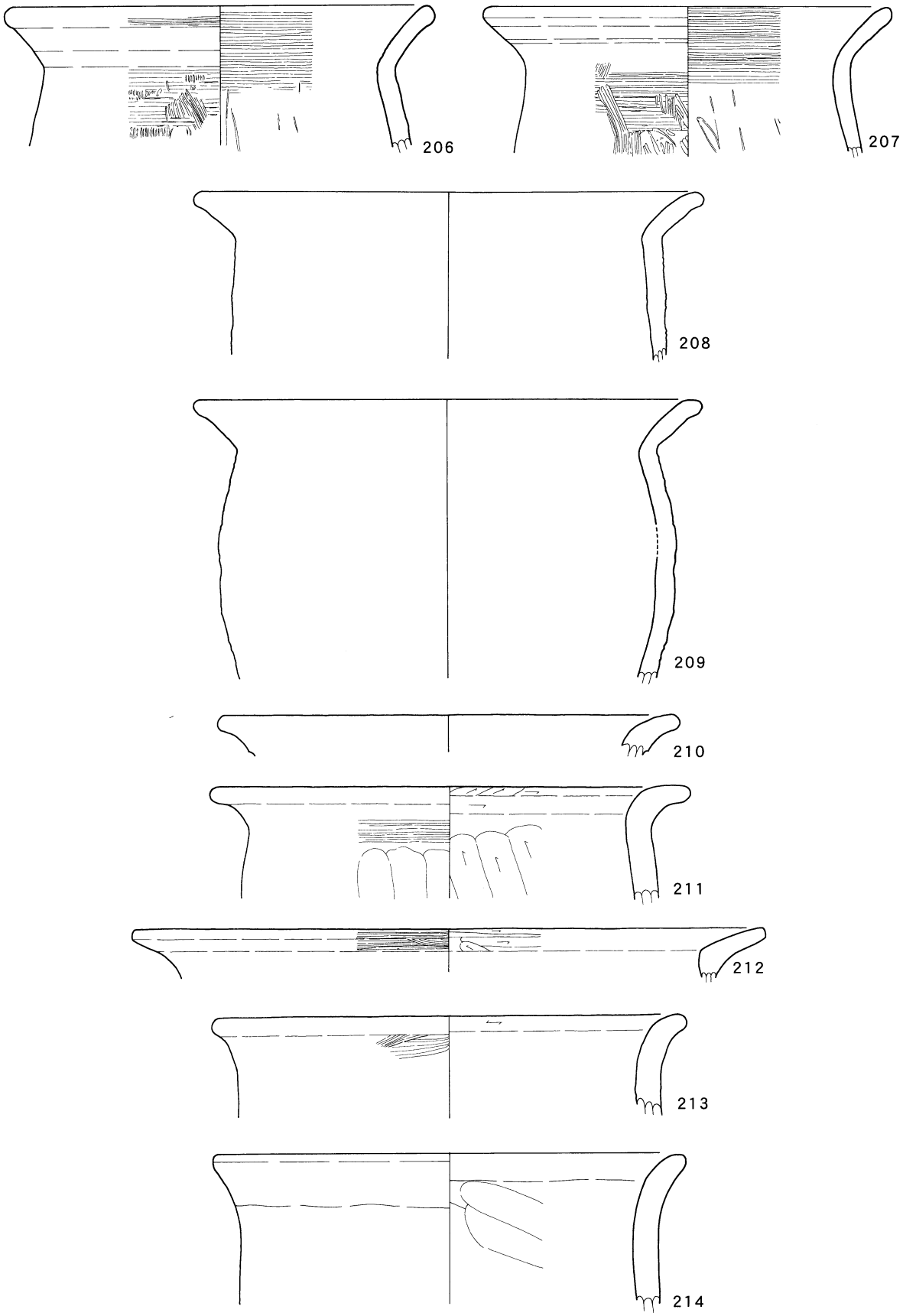
須恵器は破片での出土でほとんどが同一個体と思われるものであった。263・265・266の3点は胎土・色調・すすの付着などの様子から同一個体であると思われる。内面は同心円状のあて板痕跡が残り，外面は平行叩きを施している。267も器面調整はほとんど同じである。部位は胴部で剥離の状態等から最終的に穴をふさぐ部位と思われる。264は胎土が異なるが器面調整はほとんど同じである。小片のため部位については確認できない。

(6) その他（第62図　268）

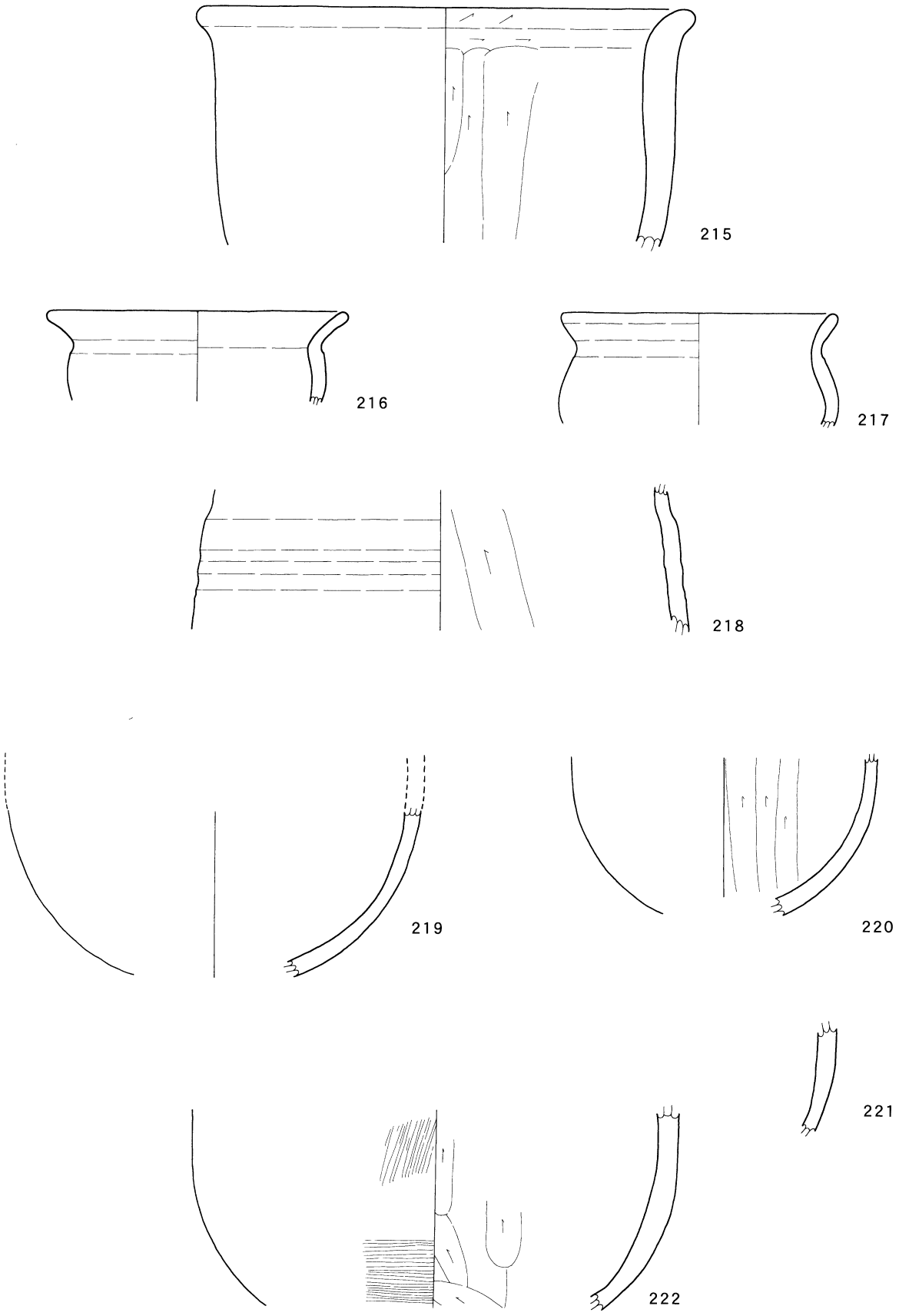
268はすり鉢である。中世の備前焼で胎土は粗く，12mmの小石が混入している。内面は櫛目条痕が見られる。厚さは約10mmで底部に近い部位である。



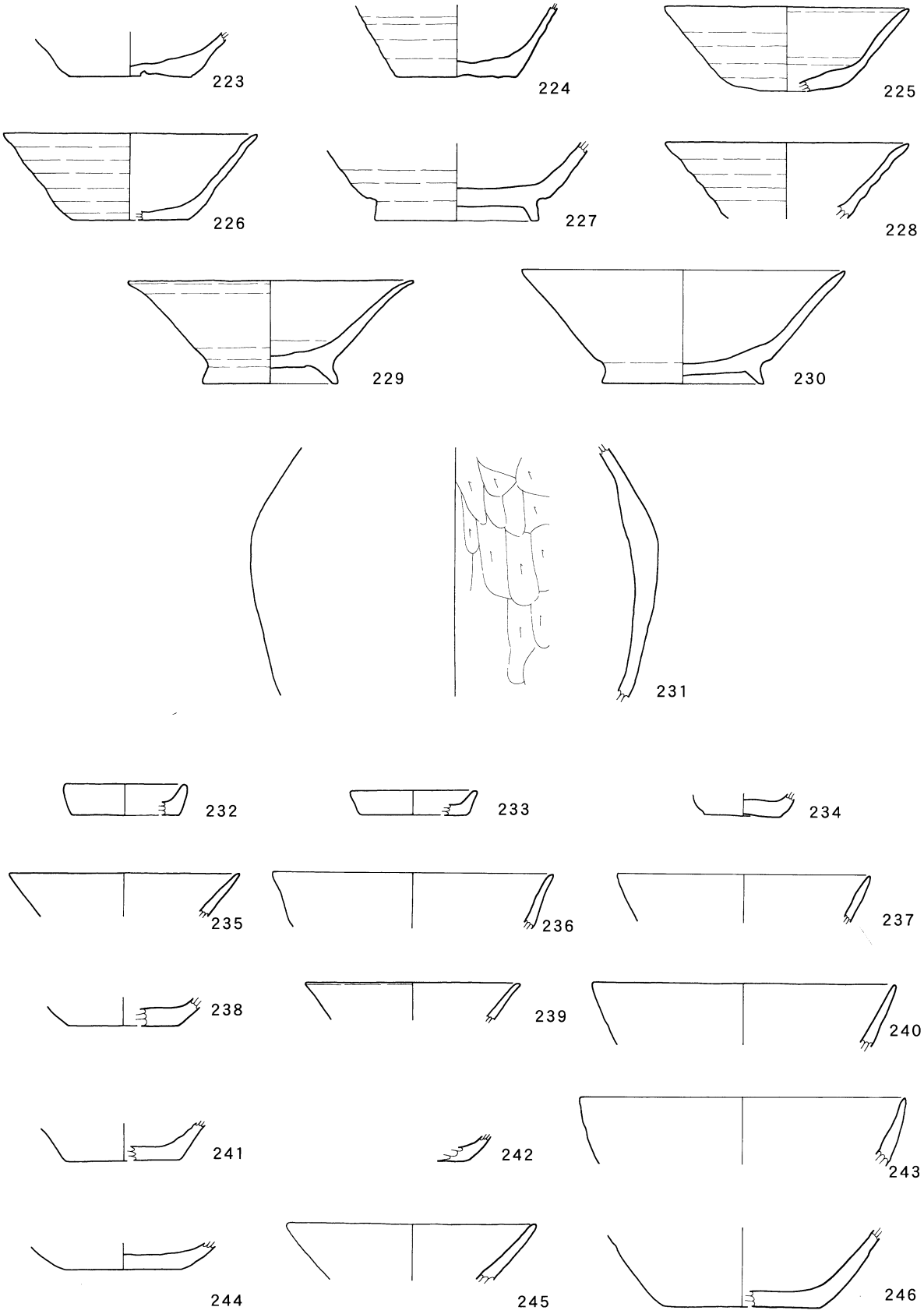
第58図　Ⅲ層出土土器(1)



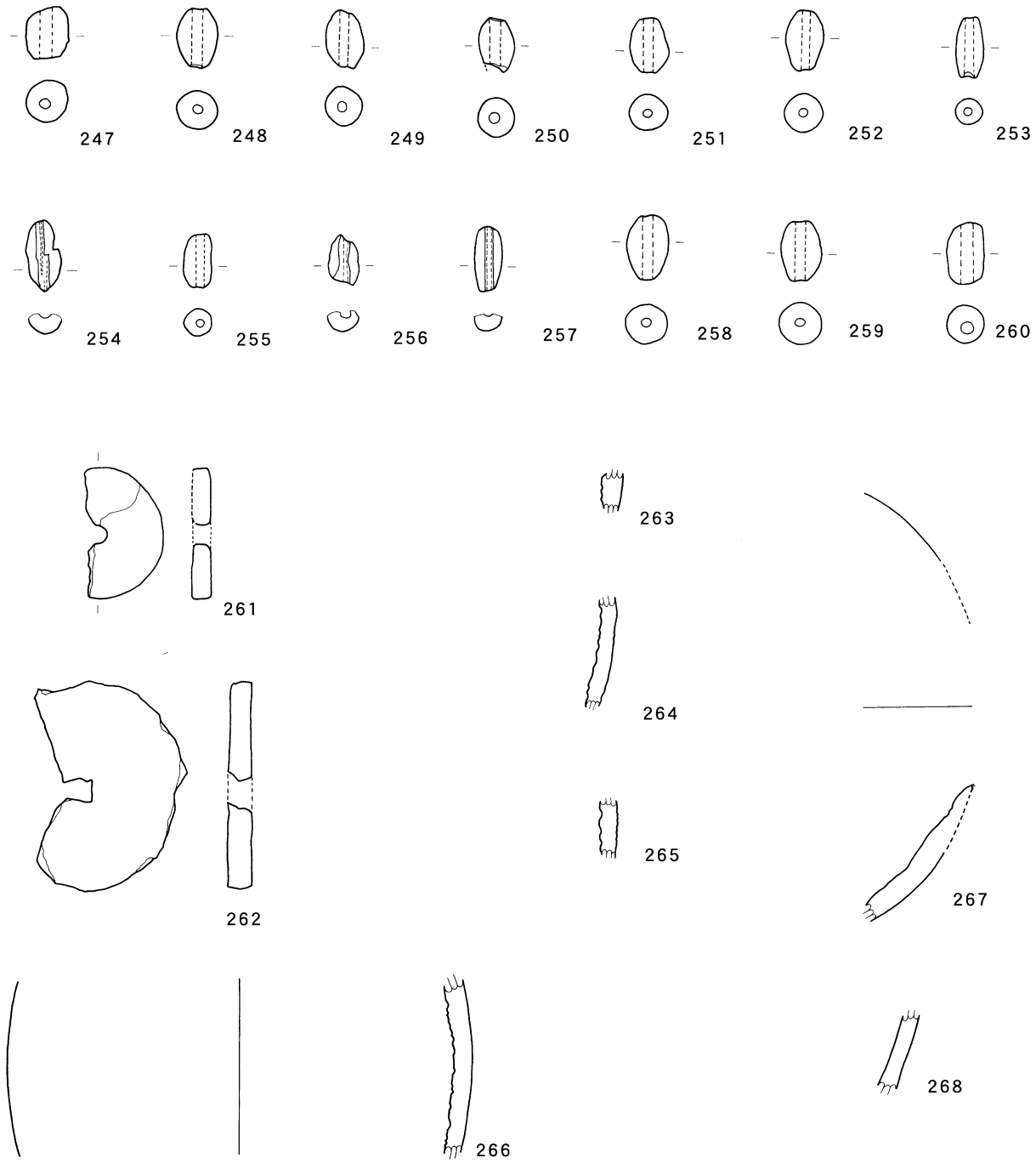
第59図　Ⅲ層出土土器(2)



第60図　Ⅲ層出土土器(3)



第61図　Ⅲ層出土土器(4)



第62図　Ⅲ層出土土器(5)

(7) 石器

ア　石鏃（第63図）

269～272の４点が出土した。269は基部が平基式で，270・272は基部の切れ込みが浅い凹基式，271が基部の切れ込みが深い凹基式で先端部及び片脚部が欠損している。石材はすべて異なり，269が黒曜石４類，270がチャート，271が玉髄，272が安山岩である。４点とも調整剥離が多く残されており，269と272は両面からの微調整剥離が見られる。270・271は片面からの剥離調整である。

イ　原礫（第63図）

273の１点が出土した。石材は玉髄である。側面に細かい剥離痕が残されている。

(8) その他の遺物

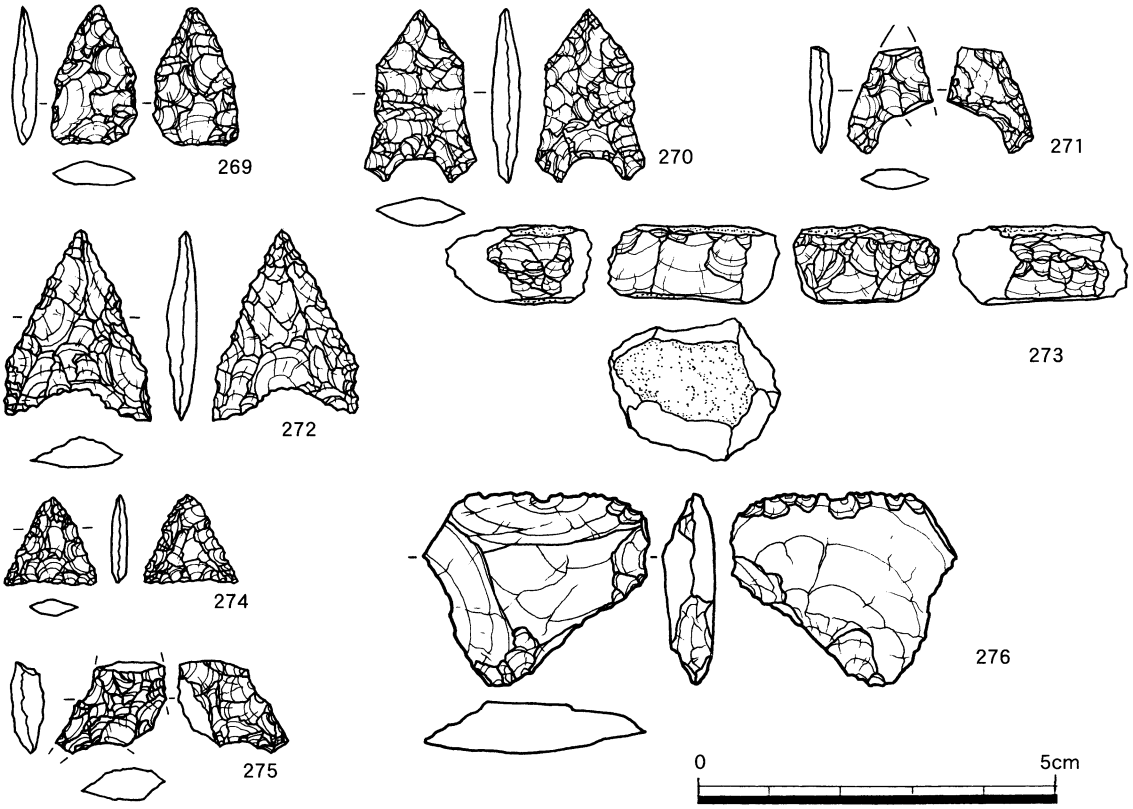
時期が特定できない石器が３点出土した。

ア　石鏃（第63図）

274・275の２点が出土した。274は表採で基部が平基式で両面からの微調整剥離が施されている。石材はチャートである。275は35号落し穴状遺構（Ⅴ層）の埋土から出土した。基部は切れ込みが浅い凹基式で先端部・脚部がいずれも欠損している。細かい調整剥離が見られる。石材は黒曜石６類である。

イ　二次加工のある剥片（第63図）

276の１点が溝状遺構下より出土した。片面からの微調整剥離が見られる。石材は頁岩である。



第63図　Ⅲ層出土石器及びその他の石器

第14表　Ⅲ層出土土器観察表(1)

番号	出土区	層位	部位	胎土	焼成	内面色調	外面色調	内面器面調整	外面器面調整	実測番号
瓶型										
198	F－6	Ⅲ		土師器	良	明赤褐色	橙色	ナデ　刷毛目調整	櫛目刷目　すす付着	223
199	E－7	Ⅲ	口縁部	土師器	良	にぶい褐色	にぶい赤橙色	ナデ　口縁部刷毛目調整 すす付着	外弯　ナデ　刷毛目調整　すす付着　口径23.2cm	223
200	F－5	Ⅲ	口縁部	土師器	良	橙色	明赤褐色	刷毛目調整	刷毛目調整　ナデ　口径23.2cm	200
201	F－4	Ⅲ	口縁部	土師器	良	にぶい赤橙色	橙色	ナデ　刷毛目調整	横ナデ　刷毛目調整口径24.8cm	204
202	F－5	Ⅲ	口縁部	土師器	良	橙色	橙色	口縁に平行に刷毛目 ナデ　すす付着	口径25.2cm　口唇部に条痕　口縁部に平行に条痕　すす付着　調整刷毛	131
203	F－5	Ⅲ	口縁部	土師器	良	明赤褐色	明赤褐色	口縁部ナデ　刷毛目調整	外弯　ナデ　刷毛目調整口径19.4cm	250
204	E－5	Ⅲ	口縁部	土師器	良	にぶい褐色	にぶい橙色	ナデ　刷毛目調整　すす付着	外弯　ナデ　口縁部刷毛目調整　すす付着口径28.8cm	221
205	F－5	Ⅲ	口縁部	土師器	良	明赤褐色	橙色	口縁部刷毛目調整　ナデ すす付着　頸部櫛目刷目	外弯　口縁部刷毛目調整　ナデ　すす付着　胴部櫛目刷目口径28.6cm	208
206	E－5	Ⅲ	口縁部	土師器	良	橙色	橙色	ナデ　口縁部刷毛目調整 頸部櫛目刷目	外弯　口縁部刷毛目調整　櫛目刷目　すす付着口径22.5cm	206
207	E－4	Ⅲ	口縁部	土師器	良	橙色	橙色	ナデ　刷毛目調整	外弯　ナデ　刷毛目調整　櫛目刷目　すす付着口径21.8cm	205
208	E－6	Ⅲ	口縁部	土師器	良	橙色	橙色	ナデ　ヘラケズリ	櫛目刷目（横位）すす付着　口縁部刷毛目調整　口唇部にも櫛目刷目　口径27cm	147
209	E－4	Ⅲ	胴部，口縁部	土師器	良	橙色	橙色	ナデ　口縁部刷毛目調整　すす付着	櫛目刷目（横位）　すす付着　口径27cm	146
210	E－4	Ⅲ	口縁部	土師器	良	にぶい橙色	橙色	刷毛目調整　すす付着	刷毛目調整　すす付着　口径24.6cm	201
211	E－4	Ⅲ	口縁部	土師器	良	橙色	橙色	刷毛目調整　ケズリ	ナデ　刷毛目調整　すす付着口径25.8cm	227
212	F－6	Ⅲ	口縁部	土師器	良	橙色	にぶい橙色	刷毛目調整　すす付着	刷毛目調整　すす付着口径34cm	226
213	E－4	Ⅲ	口縁部	土師器	良	橙色	橙色	口縁部刷毛目調整　ナデ　すす付着	口縁部刷毛目調整　外弯　すす付着口径24.2cm	224
214	E－5	Ⅲ	口縁部	土師器	良	褐灰色	にぶい橙色	口縁部刷毛目調整　ナデ　すす付着	外弯　ナデ　刷毛目調整　すす付着25.6cm	222
215	E－6	Ⅲ	口縁部	土師器	良	にぶい赤褐色	明赤褐色	胴部　口縁部ナデ 刷毛目調整　すす付着	ナデ　刷毛目調整口径25.8cm	249
216	E－6	Ⅲ	口縁部	土師器	良	橙色	にぶい橙色	ナデ　刷毛目調整　すす付着	ナデ　すす付着口径13.5cm	210
217	E－6	Ⅲ	口縁部	土師器	良	にぶい橙色	橙色	ナデ　刷毛目調整　すす付着	外弯　ナデ　すす付着口径15cm	209
218	F－6	Ⅲ	胴部上位	土師器	良	明赤褐色	赤褐色	ナデ　口縁部ナデ刷毛目調整	ナデ　口縁部ナデ刷毛目調整胴回り25.4cm口径30.8cm	262
219	F－5	Ⅲ	胴部	土師器	良	橙色	にぶい橙色	ナデ	櫛目刷目（方位多数），胴回り22.2cm	142
220	E－5	Ⅲ	胴部下位	土師器	良	にぶい橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ　胴回り16.4cm	265
221	E－4	Ⅲ	胴部	土師器	良	橙色	にぶい橙色	ナデ	条痕後ナデ	143,155,163
222	E－6	Ⅲ	胴部	土師器	良	橙色	にぶい橙色	ヘラケズリ	ナデ　刷毛目調整	225
碗類										
223	F－2	Ⅲ	底部	土師器	良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ　刷毛目調整	ナデ　刷毛目調整	232
224	E－6	Ⅲ	底部	土師器	良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ　刷毛目調整	ナデ　刷毛目調整底径6.6cm	233
225	F－5	Ⅲ	口縁部，底部	土師器	良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ　刷毛目調整	ナデ　刷毛目調整口径13cm	242
226	G－5	Ⅲ	口縁部，底部	土師器	良	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ　刷毛目調整	ナデ　刷毛目調整口径13.6cm	241
227	E－4	Ⅲ	口縁部，底部	土師器	良	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ナデ　刷毛目調整	ナデ　刷毛目調整　高台接合部工具あて底径8.6cm	230
228	G－5	Ⅲ	口縁部	土師器	良	浅黄橙色	橙色	ナデ　刷毛目調整	ナデ　刷毛目調整口径13cm	231
229	J－7	Ⅲ	口縁部，底部	土師器	良	橙色	浅黄橙色	ナデ　刷毛目調整	ナデ　刷毛目調整口径7.6cm　底径3.6cm　器高5.5cm	219
230	F－6	Ⅲ	口縁部，底部，胴部	土師器	良	浅黄橙色	淡橙色	ナデ	ナデ　すす付着　高台接合部工具あて口径17.2cm　底径8.6cm　器高6cm	217
壺型										
231	E－6	Ⅲ	胴部	土師器	良	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	ケズリ	ケズリ　ナデ胴回り21.6cm	229
小皿型										
232	G－11	Ⅲ	口縁部，底部	土師器	良	橙色	黄橙色	ナデ	ナデ口径6.3cm　底径5.7cm　器高1.7cm	218
233	G－11	Ⅲ	口縁部，底部	土師器	良	灰白色	にぶい橙色	ナデ	ナデ　口径6.8cm　底径5.8cm　器高1.3cm	216
234		Ⅲ	底部	土師器	良	赤橙色	にぶい橙色	ナデ　すす付着	ナデ　すす付着底径4cm	234
235	E－4	Ⅲ	口縁部	土師器	良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ　刷毛目調整	ナデ　刷毛目調整口径12.2cm	247
236	E－5	Ⅲ	口縁部	土師器	良	橙色	橙色	ナデ　刷毛目調整	ナデ　刷毛目調整口径15cm	270
237	E－6	Ⅲ	口縁部	土師器	良	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ口径13.4cm	244
238	F－5	Ⅲ	底部	土師器	良	黄橙色	浅黄橙色	ナデ　刷毛目調整	ナデ　刷毛目調整底径6cm	237
239	G－6	Ⅲ	口縁部	土師器	良	橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ　刷毛目調整口径11.4cm	264
240	F－5	Ⅲ	口縁部	土師器	良	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ　刷毛目調整　すす付着	ナデ　刷毛目調整　すす付着口径16cm	243
241	G－6	Ⅳa	底部	土師器	良	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ底径6cm	239
242	F－5	Ⅲ	底部	土師器	良	灰色	灰色	ナデ　刷毛目調整	ナデ	61
243	D－20	Ⅲ	口縁部	土師器	良	橙色	にぶい橙色	ナデ　刷毛目調整	ナデ　刷毛目調整口径17.2cm	269

第15表　Ⅲ層出土土器観察表(2)

番号	出土区	層位	部位	胎土	焼成	内面色調	外面色調	内面器面調整	外面器面調整	実測番号
黒色土師器										
244	E－6	Ⅲ	底部	土師器	良		にぶい黄橙色	ナデ	ナデ　底径6.2cm	236
245	E－5	Ⅲ	口縁部	土師器	良		浅黄橙色	ナデ	ナデ　刷毛目調整口径13.2cm	238
246	F－6	Ⅲ	底部	土師器	良		黄橙色	ナデ	ナデ　刷毛目調整底径8.2cm	240
土錘										
247	E－6	Ⅲ		土錘	良		赤褐色		長さ2.6cm，径2.1cm，穴の径6㎜	285
248	E－5	Ⅲ		土錘	良		明赤褐色		長さ3cm，径2cm，穴の径5.5㎜	283
249	E－5	Ⅲ		土錘	良		赤褐色		長さ2.8cm，径1.9cm，穴の径5㎜	280
250	G－6	Ⅲ		土錘	良		明赤褐色		径1.8cm，穴の径5㎜	279
251	F－5	Ⅲ		土錘	良		にぶい赤褐色		長さ2.7cm，径1.9cm，穴の径4.5㎜	277
252	F－6	Ⅲ		土錘	良		明赤褐色		長さ3cm，径1.9cm，穴の径4㎜	276
253	F－6	Ⅲ		土錘	良		浅黄橙色		長さ3cm，径1.4cm，穴の径4㎜	275
254	E－7	Ⅲ		土錘	良		褐灰色		長さ3.5cm，径1.7cm，穴の径5㎜	286
255	E－6	Ⅲ		土錘	良		褐灰色		長さ2.7cm，径1.4cm，穴の径4㎜	287
256	E－6	Ⅲ		土錘	良		褐灰色		径1.4cm，穴の径4㎜	289
257	E－4	Ⅲ		土錘	良		にぶい黄橙色		長さ3.3cm，径1.5cm，穴の径5㎜	288
258		Ⅲ		土錘	良		にぶい黄橙色		長さ3.15cm，径2.1cm，穴の径4㎜	284
259	F－6	Ⅲ		土錘	良		にぶい黄橙色		長さ2.9cm，径2cm，穴の径5㎜	282
260	F－6	Ⅲ		土錘	良		にぶい黄橙色		長さ3cm，径1.8cm，穴の径6㎜	281
紡錘車										
261	E－6	Ⅲ		紡錘車	良	橙色	橙色		中心部穴けずり　ナデ　径6.3cm	261
262	E－5	Ⅲ		紡錘車	良	にぶい黄橙色	灰白色		径9.8cm　穴はっきりせず	235
須恵器										
263	E－5	Ⅲ		須恵器	良	にぶい橙色	灰白色	同心円文たたき	平行たたき	58
264	E－5	Ⅲ		須恵器	良	にぶい橙色	灰白色	同心円文たたき	平行たたき	57
265	E－5	Ⅲ		須恵器	良	にぶい黄橙色	灰オリーブ色	同心円文たたき	平行たたき	56
266	E－5	Ⅲ		須恵器	良	にぶい黄橙色	灰白色	同心円文たたき	平行たたき（右上）	55
267	E－5	Ⅲ		須恵器	良	にぶい橙色	明褐灰色	同心円文たたき	平行たたき	63
すり鉢										
268	F－10	Ⅲ	胴部	備前焼	良	褐灰色	暗赤褐色	櫛目条痕	小石混入　中世備前焼	53

第６章　自然科学分析報告

鹿児島県立埋蔵文化財センター

永磯遺跡・自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

永磯遺跡自然科学分析報告

＜目次＞

1．試料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.92
2．分析方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.92
3．結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.92

＜図表一覧＞

表１　植物珪酸体分析結果
図１　植物珪酸体組成

永磯遺跡自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．試料

分析試料は、当社技師１名が平成10年３月12日に実施した現地調査の際採取した、試料番号１～19の合計19点である。

2．方法

試料約５gについて、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理（80W, 250KHz, １分間）による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタングステン酸ナトリウム（比重2.5）による重液分離を順に行い、物理・化学処理で植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。その後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部（葉身と葉鞘）の短細胞に由来する植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、同定・計数する。なお、同定には、近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にした。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。

3．結果

結果を表１、図１に示す。全試料とも組成に大きな変化は見られない。機動細胞・短細胞ともにタケ亜科が多く検出され、イネ属、ヨシ属、ウシクサ族なども検出される。試料番号６以上でイネ属の珪酸体が検出される。

引用文献

ペドロジスト懇談会編（1984）『土壌調査ハンドブック』. 156p,. 博友社.

竹迫　紘（1990）土壌分析法. 浅海重夫編『土壌地理学』, 302p., 古今書院：p.122-147.

表1　植物珪酸体分析

種　類 / 試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
イネ科葉部短細胞珪酸体																			
イネ族イネ属	7	10	5	3	3	6	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ節	9	15	9	8	10	8	5	10	2	4	-	-	-	4	-	-	1	2	4
タケ亜科	156	142	156	183	140	183	150	188	159	170	169	175	185	170	169	175	159	150	170
ヨシ属	2	6	2	1	5	1	3	3	-	-	1	2	1	-	1	2	-	3	-
ウシクサ族ススキ属	20	21	20	27	22	27	24	33	18	21	24	32	14	21	24	32	22	17	21
イチゴツナギ亜科	3	4	3	2	4	2	7	6	2	4	8	11	1	4	8	11	6	9	4
不明キビ型	27	30	27	23	30	23	35	53	21	32	38	46	11	32	38	46	17	40	32
不明ヒゲシバ型	30	37	30	27	37	27	22	27	11	17	29	33	15	17	29	33	11	27	17
不明ダンチク型	6	16	6	4	16	4	5	13	7	7	11	13	1	7	11	13	9	12	7
イネ科葉身機動細胞珪酸体																			
イネ族イネ属	9	9	8	5	2	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ節	8	6	5	6	8	7	9	5	6	8	7	5	4	8	7	5	7	7	8
タケ亜科	39	53	45	41	50	55	62	61	62	62	59	65	65	62	59	65	50	51	62
ヨシ属	5	4	3	-	2	4	-	2	-	-	2	2	4	-	2	2	-	3	-
ウシクサ族	24	22	22	25	23	25	21	19	24	20	15	13	16	20	15	13	20	14	20
不明	22	25	25	23	25	18	12	15	34	17	19	28	27	17	19	28	27	25	17
合　計																			
イネ科葉部短細胞珪酸体	260	281	258	278	267	281	253	335	220	255	280	312	228	255	280	312	225	260	255
イネ科葉身機動細胞珪酸体	107	119	108	100	110	110	104	103	126	107	102	113	116	107	102	113	104	100	107
総　計	367	400	366	378	377	391	357	438	346	362	382	425	344	362	382	425	329	360	362

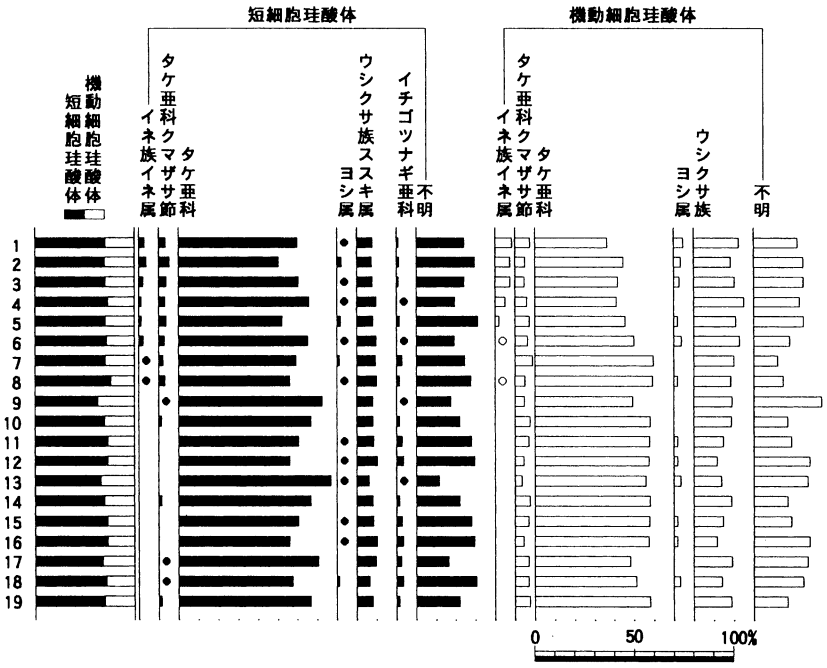


図1　植物珪酸体組成
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満の種類を示す。

第７章　まとめ

永磯遺跡の位置する地域は，福山町内奥の地にあり傾斜したシラス台地上にある。前原和田遺跡や城ヶ尾遺跡，供養之元遺跡等の旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が集中していることから，人々の活動拠点として古くから開けていたと思われる。

第１節　旧石器時代

XV層から３基，XII・XI層から各１基の礫群遺構とXV層・XII・XI層から各１基ずつ土坑を検出した。遺物は少ないがXV～XI層の各層から出土している。遺構・土坑は遺跡全体に散らばっており，掘り込み等の確認ができたものもなかった。埋土も複雑に形成し，特徴をつかむまでに至らなかった。石器は三稜尖頭器・ナイフ型石器・台形石器等が出土し，比較的加工痕の残ったものが多かった。また，XI層からは細石刃が出土したことから不定形剥片素材の台形石器から縦長剥片素材の石器へ移行したとも考えられるが，出土遺物が少なく資料不足のため十分な確認ができなかった。

第２節　縄文時代

１　遺構について

大きく分けて早期と前・中期を中心に遺物が出土した。集石遺構のほとんどが早期に集中し，IX～VI層まで18基が検出された。いくつかは同じグリッド若しくは隣接するグリッドで検出されているが，掘り込みが確認できるものが少なく礫が散在した形態を呈するものが多い。また，熱変色した礫や炭化物がみられたものもあったが焼土の確認はできなかった。このことから推測の域を出ないが住居跡遺構が検出されなかったことや狩猟具としての機能を持つ石鏃等の石器が多く出土したことから早期時代の本遺跡は，主に動物を狩猟する場として利用した可能性が高いと思われる。

前・中期には，落し穴状遺構のみ12基が検出された。埋土は全体的にアカホヤ二次堆積土がみられることから鬼界カルデラ噴出物堆積の時期（約6,300年前）前後のものではないかと推測される。ただ，検出プランの形態は必ずしも似ているとは言い難い点が気になるが，ほぼ同時期に設置された落とし穴と考えられる。また，早期と同じく住居跡遺構は検出されなかった。早期と異なる点としては，土器や石器の遺物の出土がほとんどないところである。このことから，この時期の本遺跡は縄文早期の時代とは様相を異にし，落し穴を設置し，動物捕獲の場として利用していたが，人々があまり立ち入らなかった時期が続いたものと考えられる。

後・晩期には，集石遺構が１基，落し穴状遺構が２基検出された。遺物も石鏃等が少し出土しただけでこの時期の本遺跡の性格はつかめきれなかった。

２　土器について

縄文時代早期を主体とした，下剥峰・桑ノ丸３類・手向山・塞ノ神Ａ・塞ノ神Ｂ等の土器が出土する。ただ，すべてVII・VI層からの出土で集石遺構すべてと時期を同一するものではない。出土数は少なく，さらに接合後完全に復元できたものが下剥峰式土器１点だけである。またこれ以外にこの形式の土器は出土していない。種類としては押型文，撚糸文，貝殻条痕文が多く，押型

文は楕円形と山形に区分できる。塞ノ神式土器はほぼ同じ層からA式・B式とも出土していることから，型式の変遷については本遺跡では確認することができなかった。

第3節　古代・中世・近世

Ⅲ層及びⅣ層上面から溝状遺構が検出された。かなりの広範囲に広がっていたが，削平された部分がほとんどで全容や詳細な時期等の資料となるべき情報がつかめなかった。遺物はほとんどが土師器で他に須恵器や黒色土器，紡錘車，土錘，備前焼片等が出土した。いずれも点数は少なくこの時期の本遺跡の特徴を十分に示すものは得られなかった。住居跡や焼土等の生活及び生業に関わる遺構がほとんどみられなかったことから，この時代の本遺跡は生活基盤の地に全くかからない場所かその隣接地にあったものと推測される。

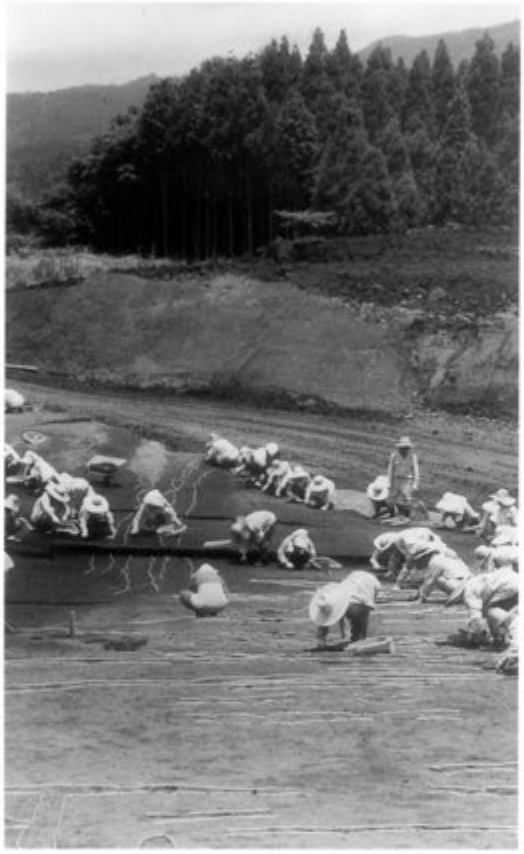
《参考文献》

1　鹿児島県教育委員会　『九日田遺跡・供養之元遺跡・前原和田遺跡』　2002年
2　福山町役場　『福山町郷土誌』　1979年
3　福山町教育委員会　『新原段遺跡・中尾立遺跡・籐兵衛坂段遺跡』　1992年
4　福山町教育委員会　『中尾立遺跡』　1994年
5　福山町教育委員会　『籐兵衛坂段遺跡』　1997年
6　鹿児島県教育委員会　『小牧3A遺跡・岩本遺跡』　1996年

図　　版

図版　1

調査風景(1)



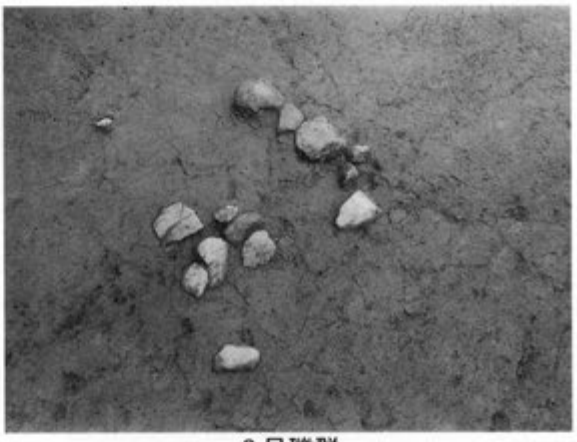
調査風景(2)

土層断面（10Ｔ）

図版　2

1号土坑

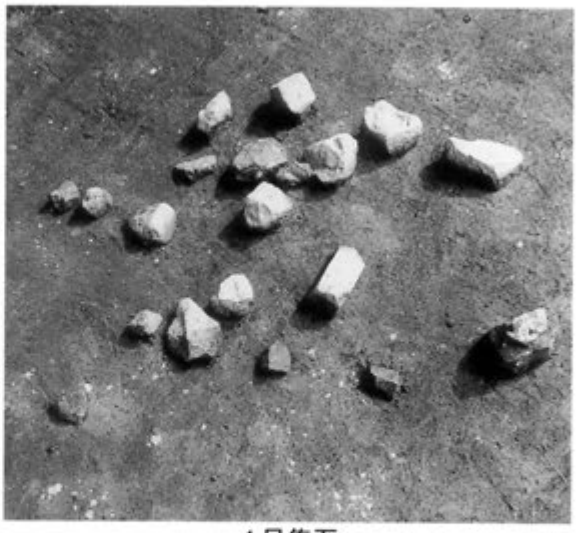
1号礫群



3号礫群

3号土坑

1号集石



4号集石

5号集石

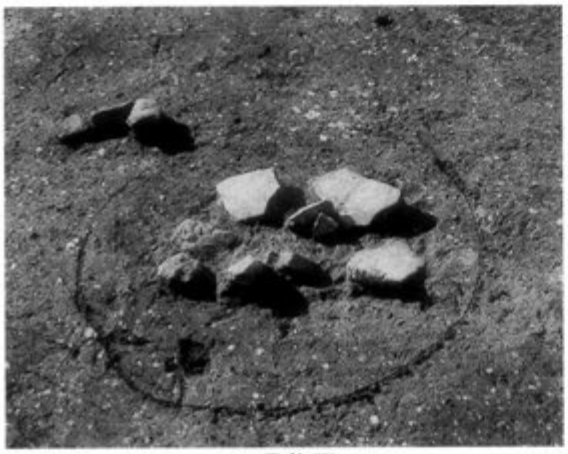
6号集石

3号集石

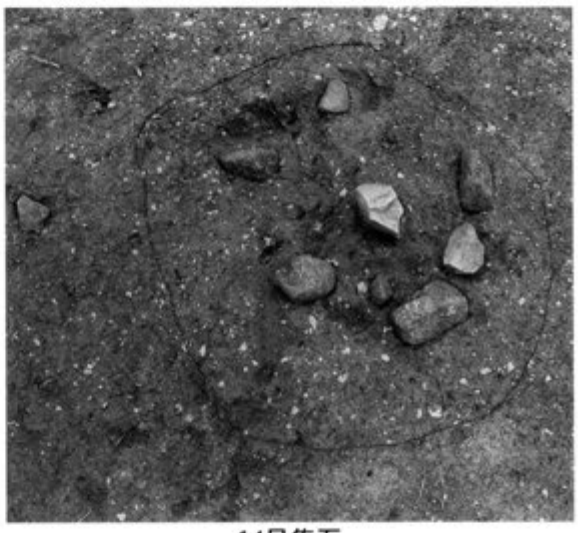
図版　4

9号集石

11号集石

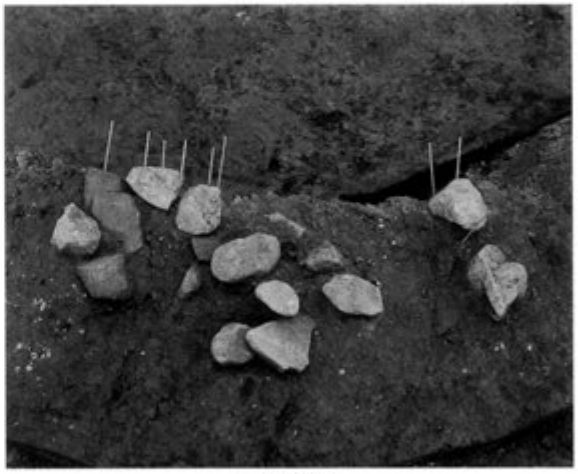


13号集石



14号集石

15号集石

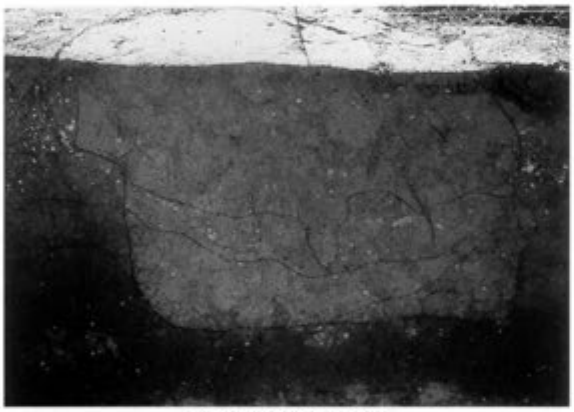


16号集石

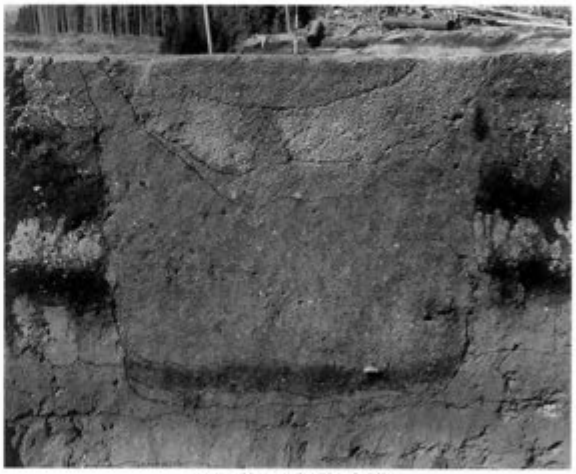
10号落し穴状遺構

6号落し穴状遺構

14号落し穴状遺構



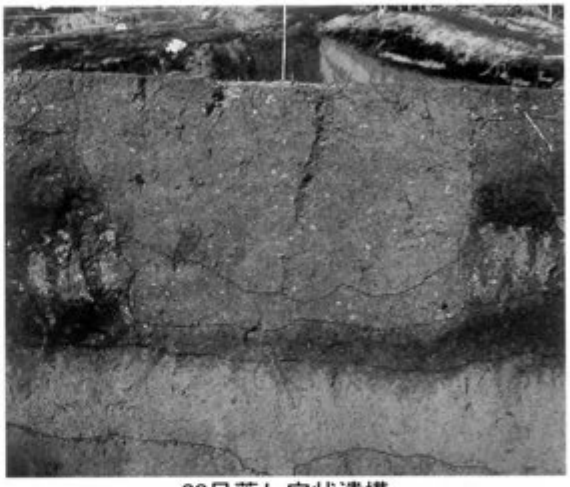
17号落し穴状遺構



18号落し穴状遺構

図版　6

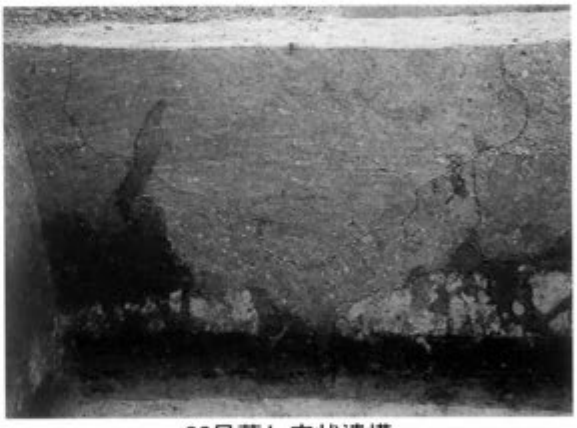
22号落し穴状遺構



23号落し穴状遺構

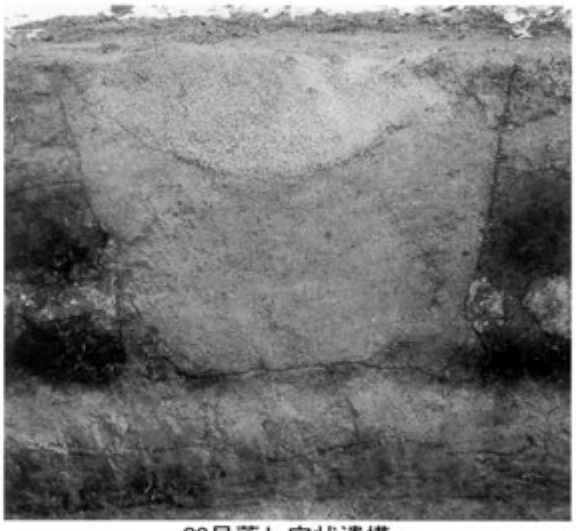
24号落し穴状遺構

25号落し穴状遺構



26号落し穴状遺構

27号落し穴状遺構



29号落し穴状遺構

36号落し穴状遺構

近代土坑断面

近代土坑完掘状況

図版　8

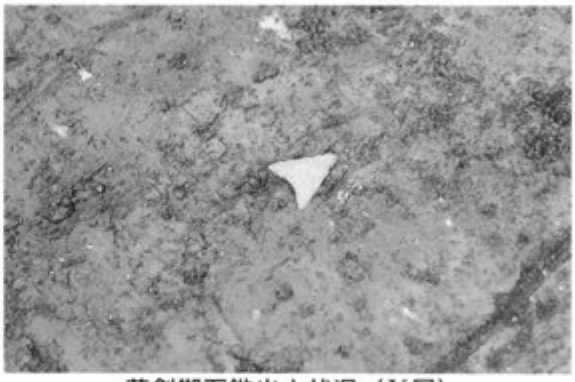
遺物出土状況（Ⅶ層）

遺物出土状況（ⅩⅠ，ⅩⅡ層）

溝状遺構

遺物出土状況（Ⅵ層）

旧石器時代　石器出土状況（XIV層）



草創期石鏃出土状況（X層）

草創期石鏃出土状況（X層）

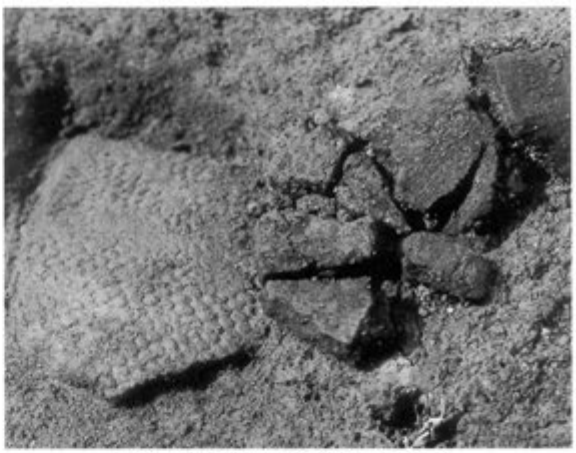
早期磨石出土状況（VII層）

早期磨製石斧出土状況（VII層）

図版　10

Ⅲ類土器出土状況（Ⅶ層）

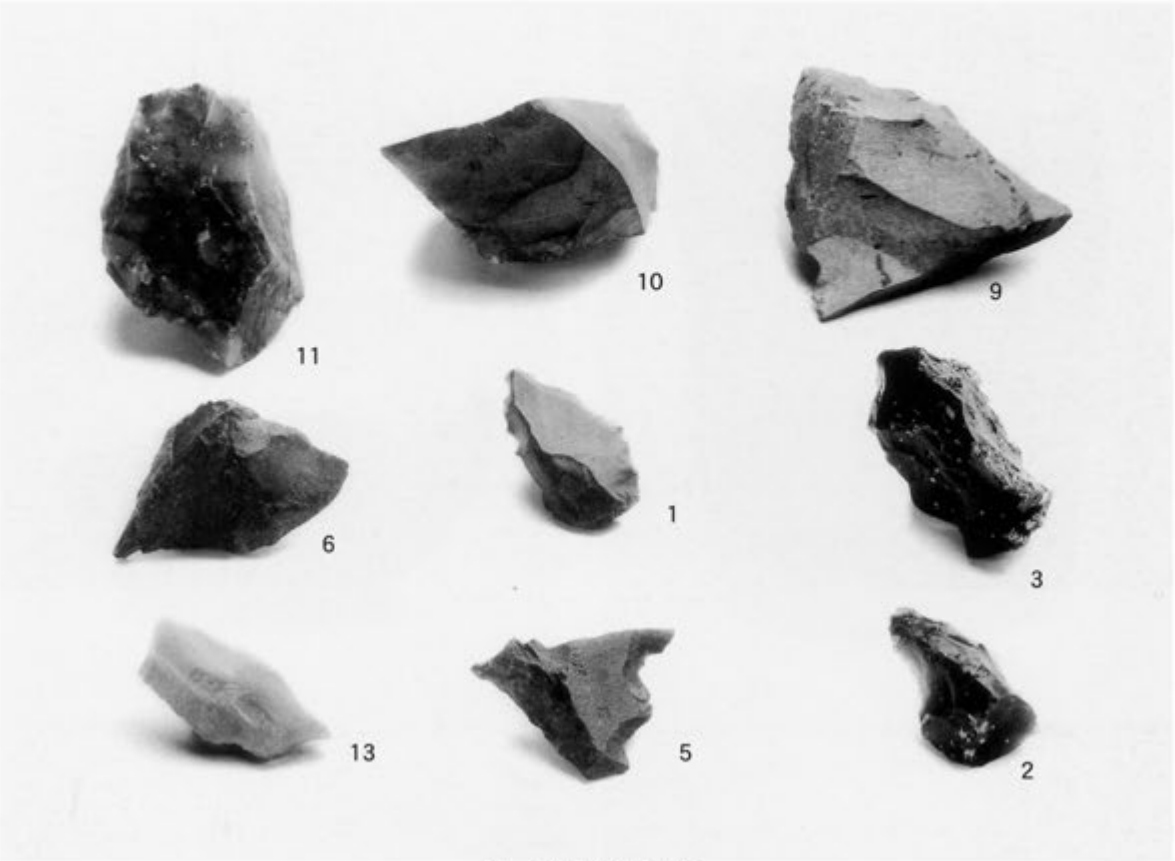
Ⅱ類土器出土状況（Ⅶ層）



Ⅳ類土器２出土状況（Ⅶ層）

Ⅵ類土器１出土状況（Ⅶ層）

土師器出土状況（Ⅲ層）



XII～XIV層出土土器

VI・VII層出土土器(1)

図版　12

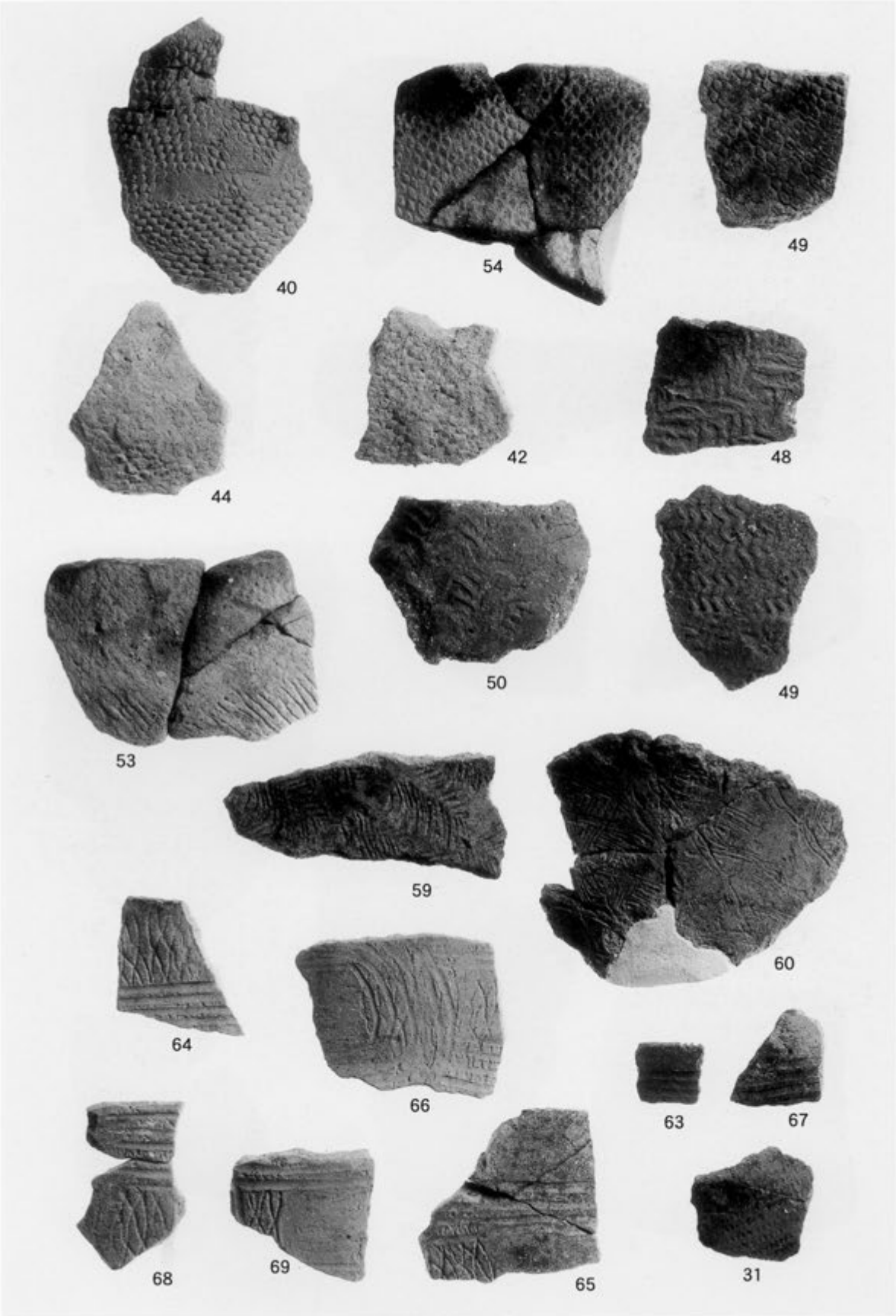
35

51

79

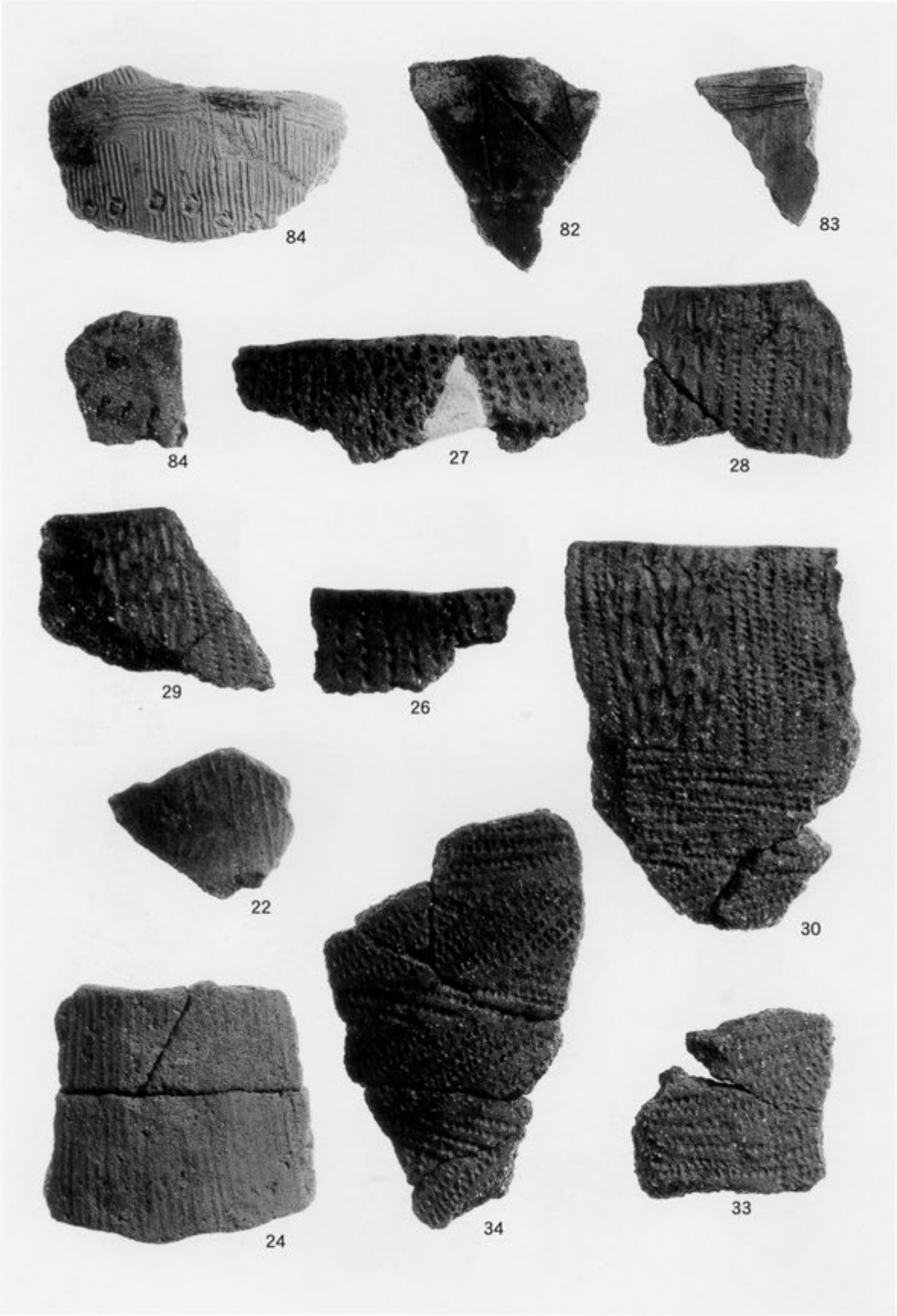
85

Ⅵ・Ⅶ層出土土器(2)

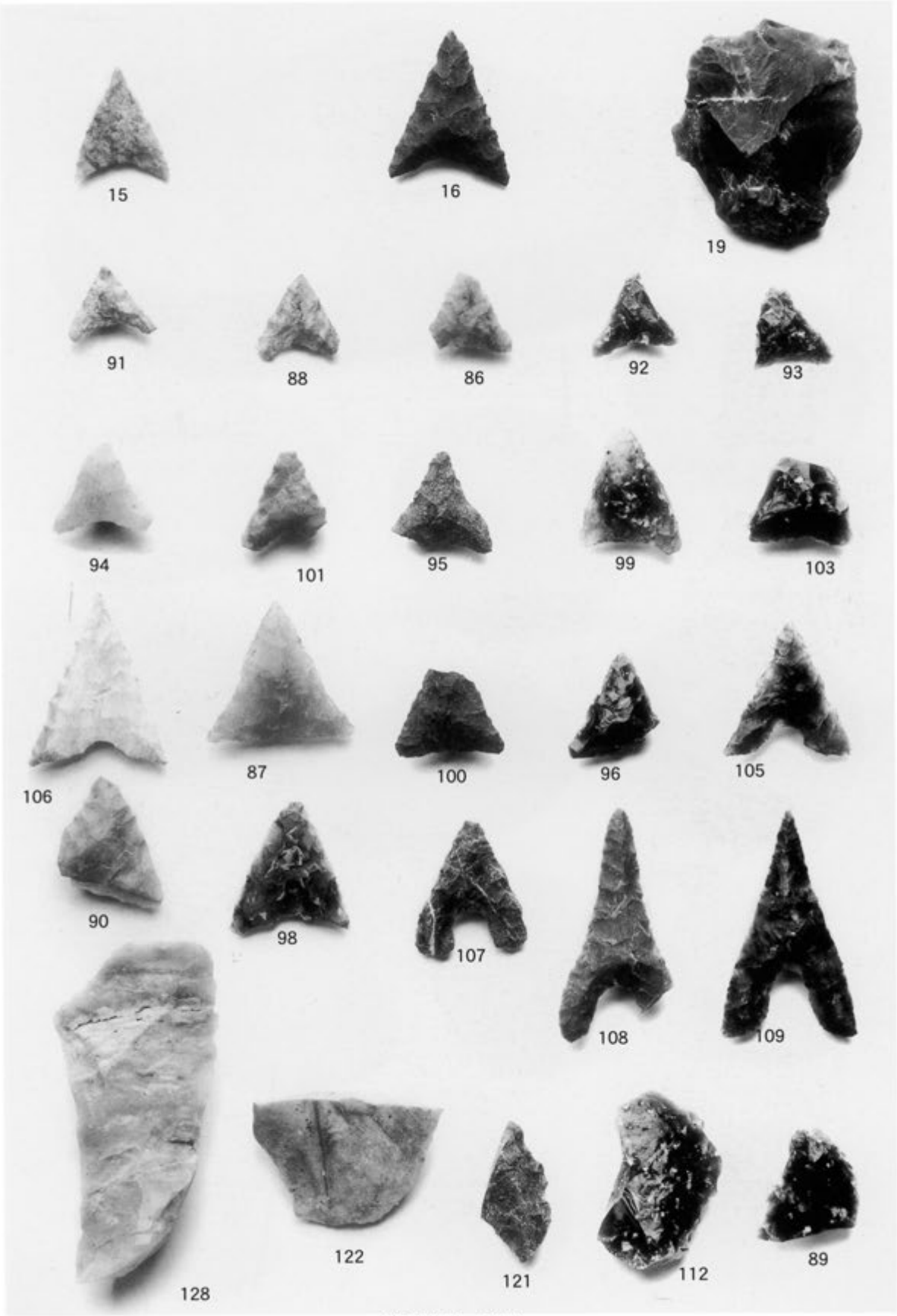


Ⅵ・Ⅶ層出土土器(3)

図版　14

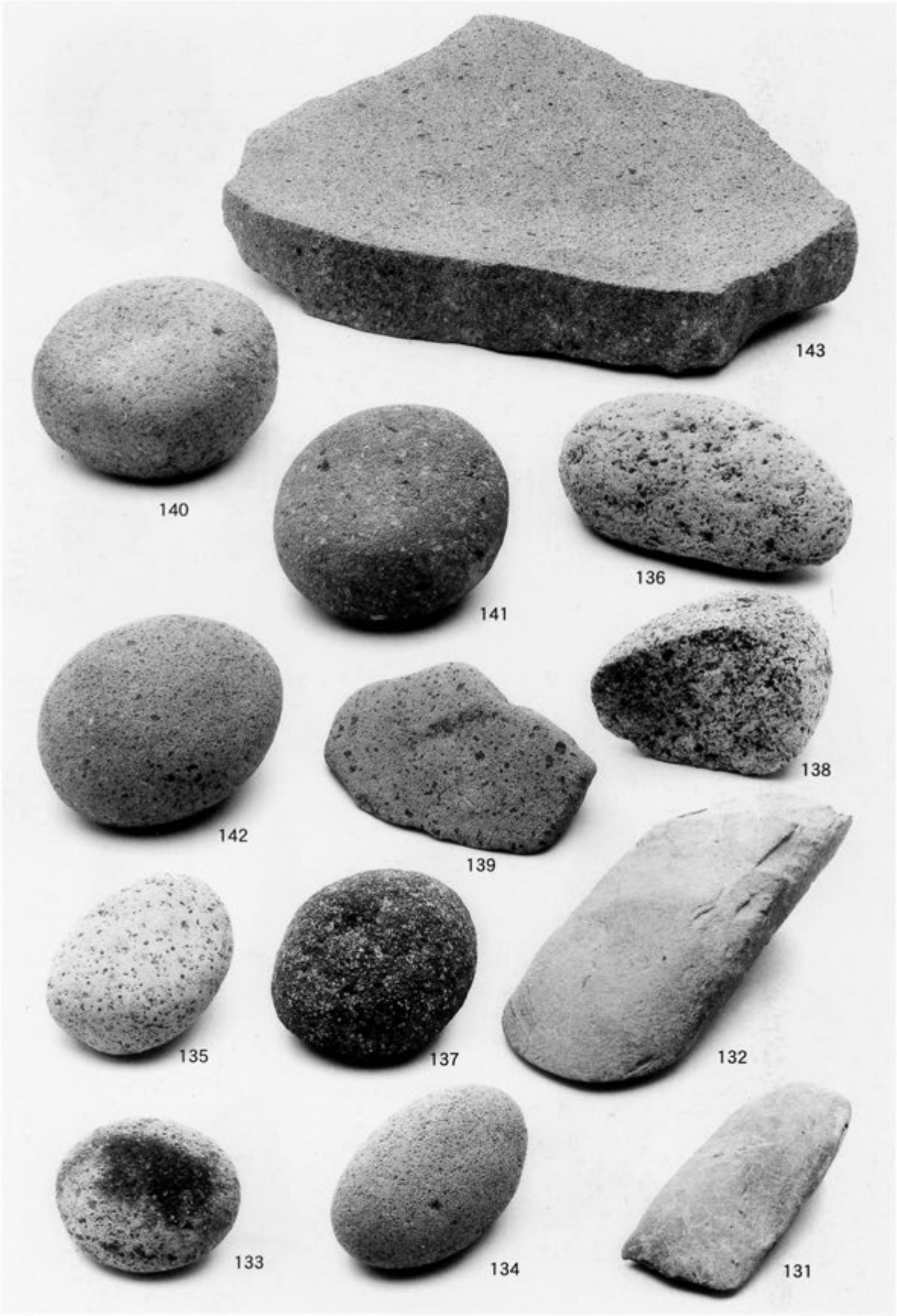


Ⅵ・Ⅶ層出土土器(4)

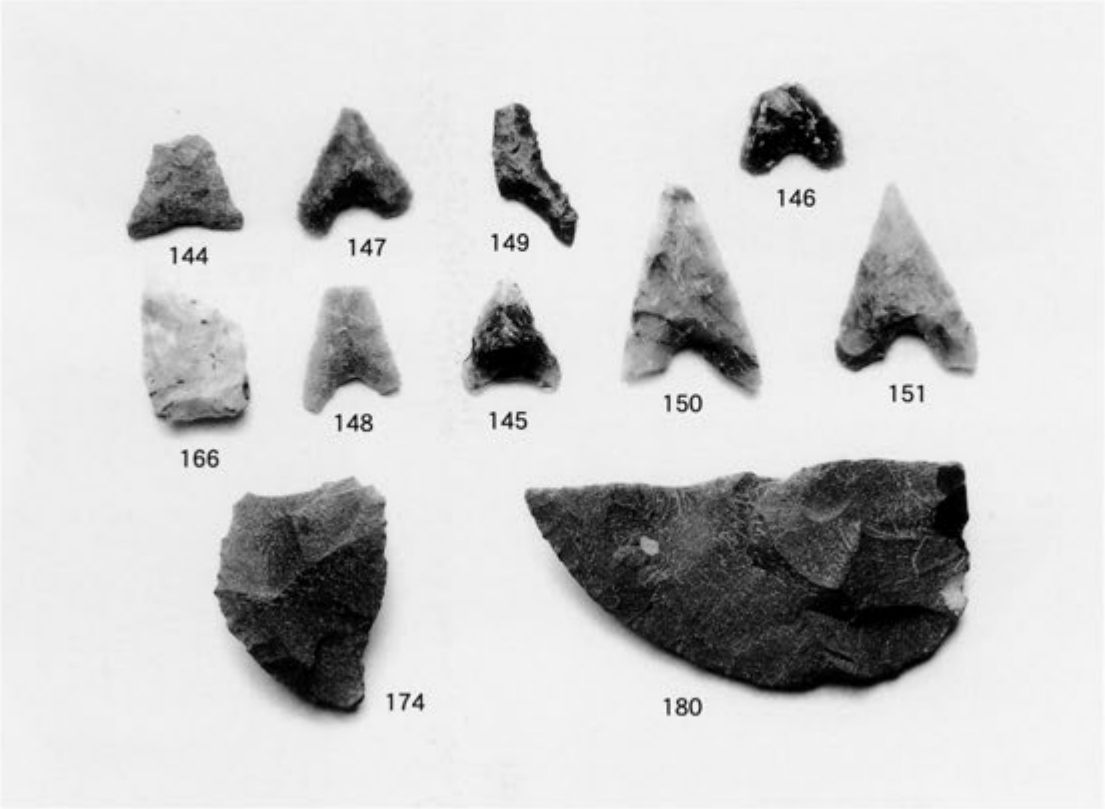

15
16
19
91
88
86
92
93
94
101
95
99
103
106
87
100
96
105
90
98
107
108
109
128
122
121
112
89

Ⅶ層出土石器(1)

図版 16



Ⅶ層出土石器(2)



V・VI層出土石器

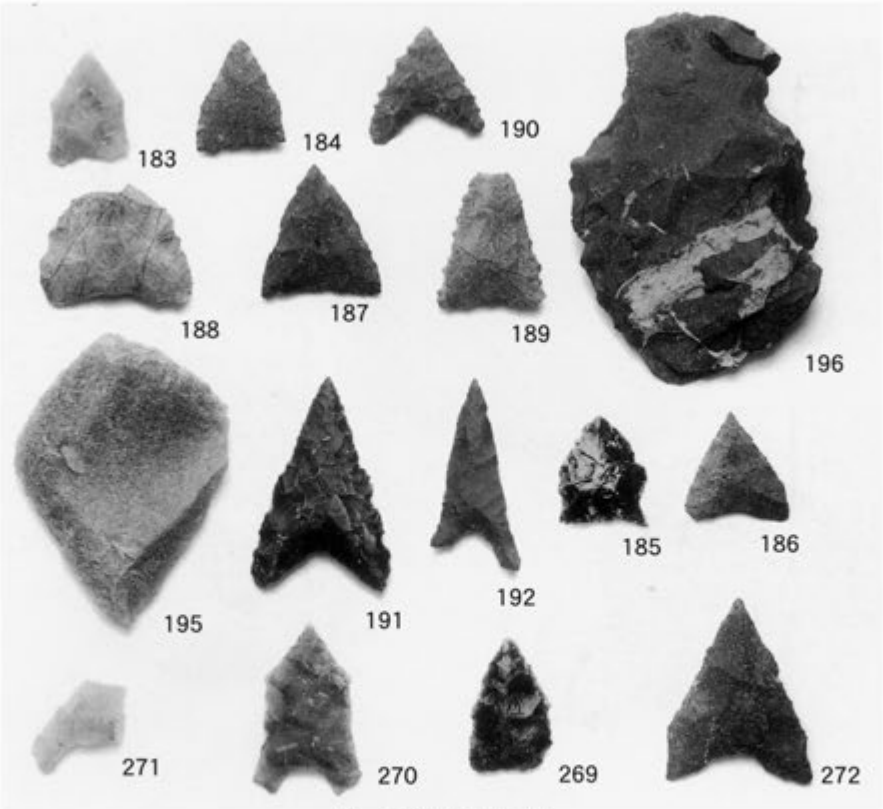
図版　18

Ⅳ層出土石器

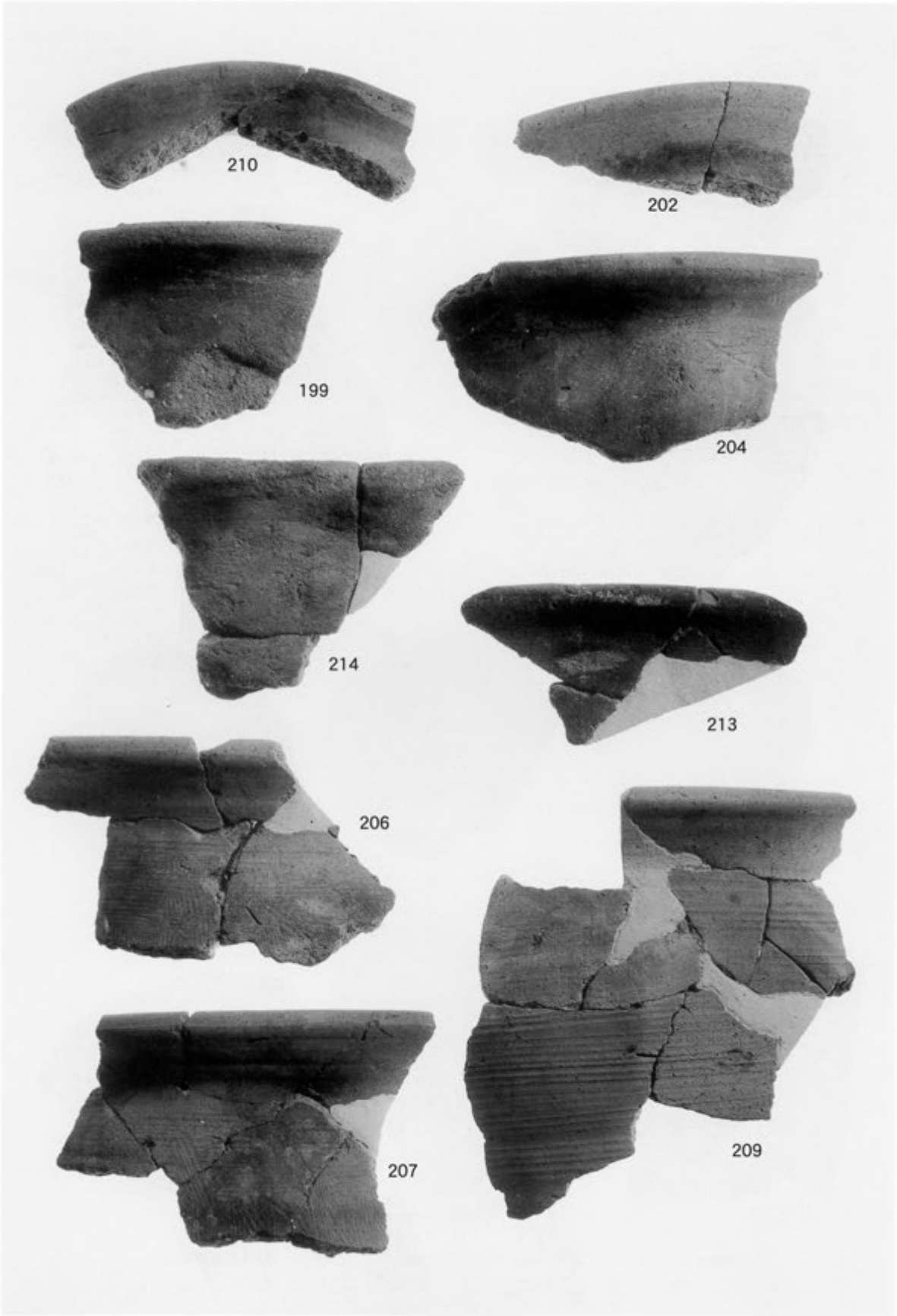
Ⅳ層出土土器

Ⅲ層出土土器(1)

Ⅲ層出土土器(2)

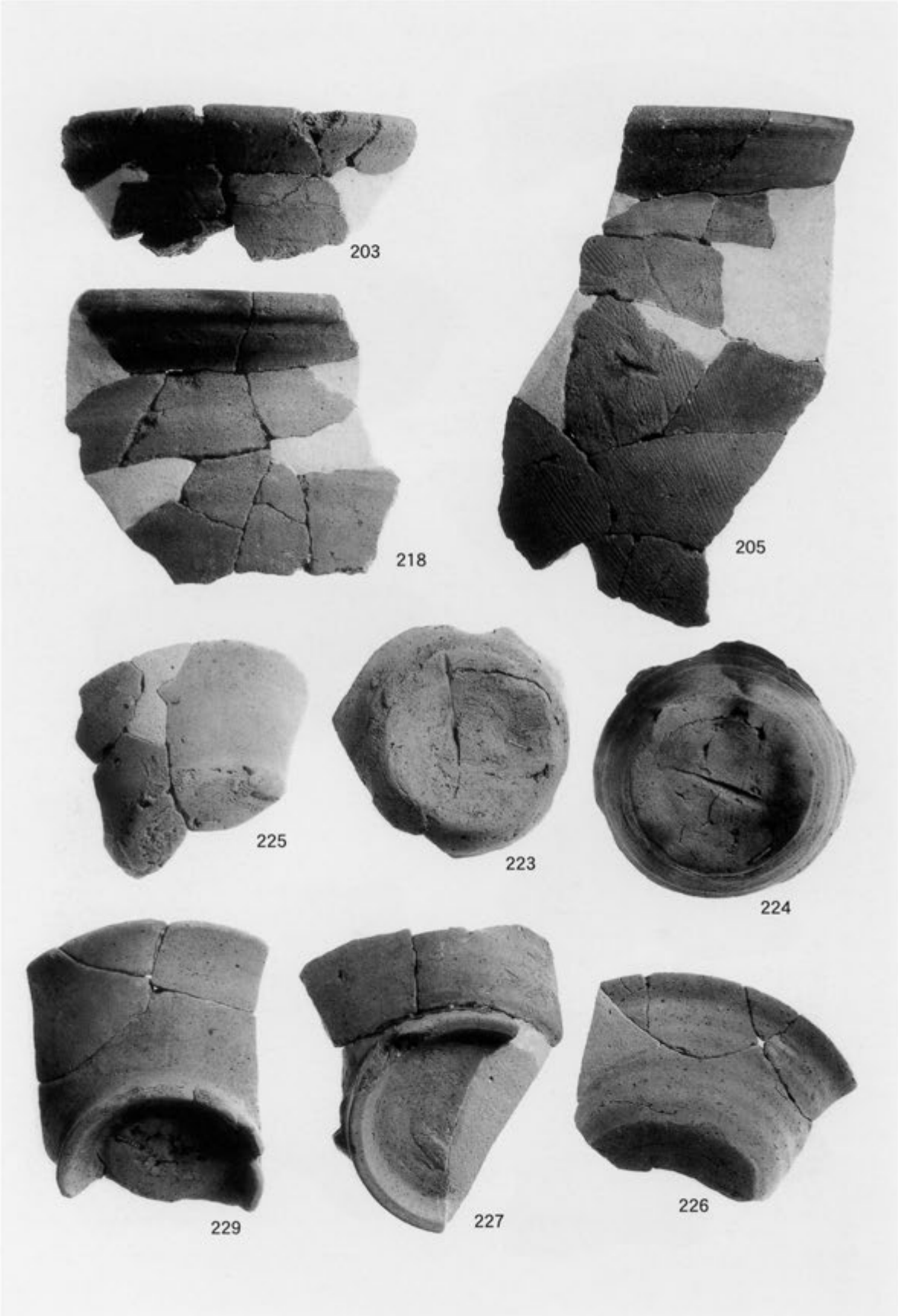


Ⅲ・Ⅳ層出土石器

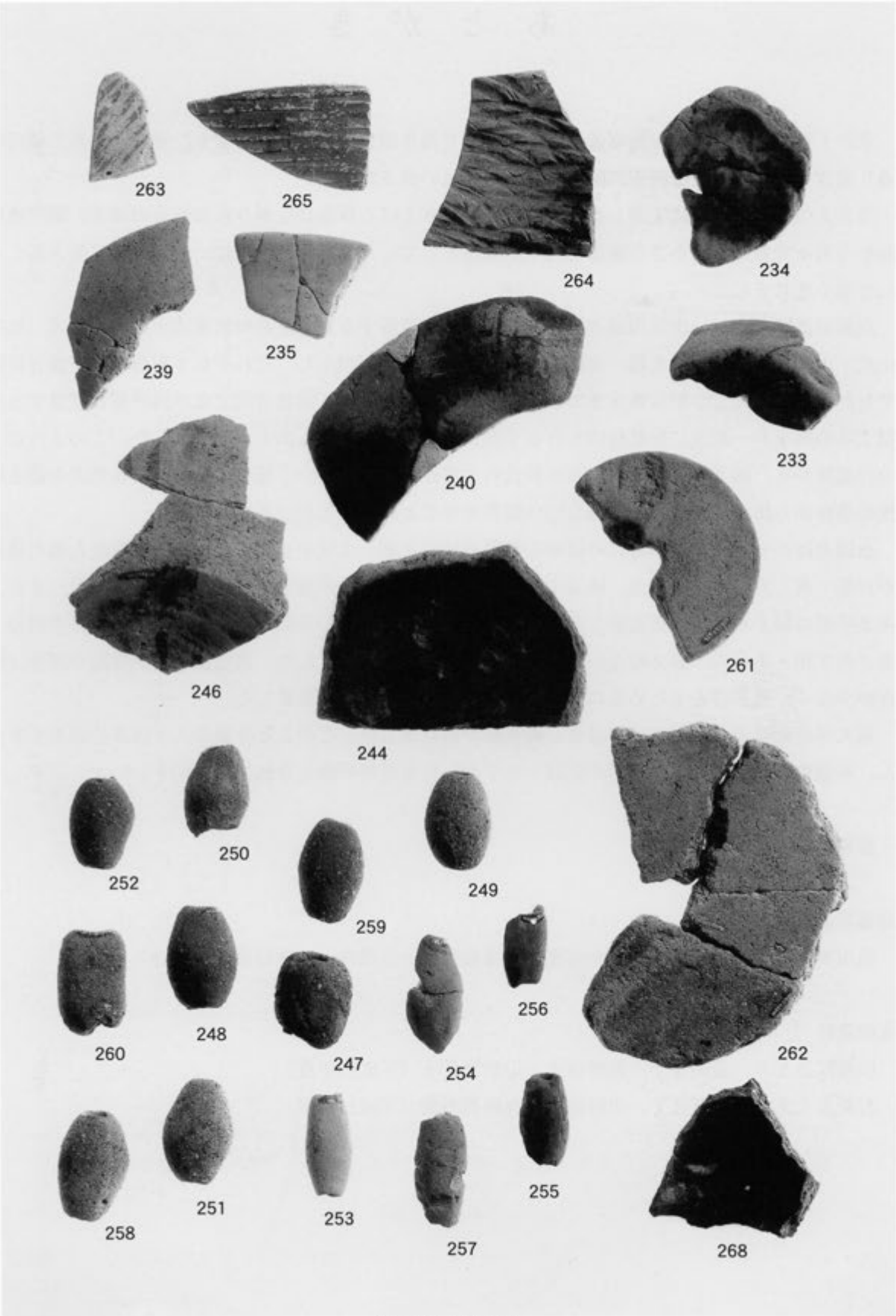


Ⅲ層出土土器(3)

図版　20



Ⅲ層出土土器(4)


263
265
264
234
239
235
240
233
246
261
244
252
250
249
259
260
248
247
254
256
262
258
251
253
257
255
268

Ⅲ層出土土器(5)

あ と が き

末吉ＩＣからはじまる自動車道は，山間を切り開き国分平野を目指します。見覚えのある場所を通り過ぎるたびに，発掘調査に関わった日々が思い出されます。

湧き立つ雲を眺めては実測した集石，谷から吹き上げる砂塵に圧倒されながらの調査。調査地に向かう道々で目にした小さな集落と人々。見落としていたちいさな光景に，大地と共に生きるくらしを強く感じました。

高篠坂遺跡からは，南九州地方縄文文化の早期に位置する貝殻文系の岩本式土器・知覧式（加栗山式・小牧３Ａタイプ）土器・吉田式土器・石坂式土器が出土し，それぞれ１個体ずつが復元可能でした。また，残念ながら復元まではいたりませんでしたが，同地方同文化の同時期に位置する押型文系の終末の一形式に位置付けられる手向山式土器の土器片も出土いたしました。このように１つの遺跡から，縄文早期を代表する５形式の土器が出土するという好機に恵まれ，各形式や過去に他の遺跡から出土した遺物と比較しつつ報告書をまとめることができました。

永磯遺跡からは，旧石器時代の層から礫群遺構が５基・土坑が３基，縄文早期の層から集石遺構が18基・落し穴状遺構が26基，縄文中・後期の層から落し穴状遺構が12基検出されました。また，縄文早期の層からは高篠坂遺跡と同様，南九州地方縄文文化の早期に位置する貝殻文系の下剥峰・桑ノ丸３類・手向山・塞ノ神といった４形式の土器も出土しました。遺構数が多い遺跡の調査は機会が少なく，報告書をまとめるに当たって大変貴重な経験となりました。

東九州自動車道の走る大地には多くの遺跡がありました。このことを知る人々は多くはありません。本報告書が先人たちの生活の記録として少しでも有用の書となれば幸いです。

・整理作業に携わった人々

高篠坂遺跡

猿川美和子，瀬戸口良子，枦山理恵子，宮原美子，川畑淳子，熊谷郁子，鮫島みどり

永磯遺跡

伊集院ひとみ，迫間洋子，島津佳子，山形貴世子（平成13年度）

石坂きくえ，大王美代子，川野高子，高岡眞由美（平成14年度）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（61）

東九州自動車道（末吉ＩＣ～国分ＩＣ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

高篠坂遺跡
永磯遺跡

発　行　　平成15年３月24日

発行所　　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4461 鹿児島県国分市上之段1175番地１
ＴＥＬ（0995）48－5811

印刷所　　株式会社あすなろ印刷
〒899－0041　鹿児島市城西2－2－36
ＴＥＬ（099）250－7033